岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター文化財調査報告書第107集

堀切・竹林遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

堀切・竹林遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県は縄文時代の遺跡を中心として、県内各地に数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、昭和60年度末の岩手県教育委員会のまとめでは7000箇所を越えております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは我々県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本県は広大な面積を有し、その大部分が山地であります。現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特にもその基幹となる道路など交通網整備もまた県民の切実な願いであります。このように、保護・保存と開発という相容れない要素をもつ事業の調和のとれた施策が今日的課題となってきております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して、昭和60年度に発掘調査した二戸郡一戸町堀切遺跡及び竹林遺跡の調査結果をまとめたものであります。両遺跡は馬淵川左岸の谷あいにあり、堀切遺跡では縄文時代後・晩期の住居跡など、竹林遺跡では縄文時代後期と平安時代の住居跡が発見されました。

この報告書が研究者のみならず広く活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護の一助になれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にあたり、ご援助・ご協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、一戸町、一戸町教育委員会をはじめ関係各位に感謝するとともに、今後のご指導・ご協力をお願いいたします。

昭和61年5月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　中　村　　直

例　　言

1．本報告書は、岩手県二戸郡一戸町鳥越字堀切17他に所在する堀切遺跡と、同町鳥越字竹林２－１他に位置する竹林遺跡の発掘調査結果を集録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に係るもので、調査は岩手県教育委員会事務局と日本道路公団仙台建設局との協議を経て、㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3．調査担当者は以下のとおりである。

文化財専門調査員　長沼　彬　　文化財専門調査員　高橋与右ェ門

4．発掘調査で検出された遺構は次のとおりである。

(1)　堀切遺跡

1）住居跡－６　2）土坑－14　3）焼土遺構－１　4）土器埋設遺構－１

(2)　竹林遺跡

1）住居跡－２　2）沢跡－１

5．出土した遺物の中から、本報告書には以下の点数を掲載した。

(1)　堀切遺跡

1）土　器――総数273点

○縄文土器－174点　○弥生土器－87点　○土師器－７点　○陶磁器－５点

2）石　器――総数48点

○石鏃－５点　○石槍－１点　○石匙－３点　○掻器－６点

○使用痕をもつ剝片－６点　○磨製石斧－２点　○凹み石－３点

○磨石－11点　○叩き石－４点　10石錘－２点　○石皿－１点

○石製品類－４点

(2)　竹林遺跡

1）土　器――総数53点

○縄文土器－47点　○弥生土器－３点　土師器－３点

2）石　器――総数28点

6．本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

Ⅰ．調査に至る経過　　近藤宗光

Ⅱ．位置と立地及び環境　高橋与右ェ門

Ⅲ．堀切遺跡　　高橋与右ェ門

Ⅳ．竹林遺跡　　遺物は高橋与右ェ門、他は長沼　彬

Ⅴ．むすび　　高橋与右ェ門

7．分析や鑑定は次の方々に依頼した。（敬称略）

①石質鑑定　　佐藤二郎　（佐藤地質工学研究所）

②火山灰の同定分析　　三辻利一　（奈良教育大学）

8．遺跡地内の基準点測量成果値は日本道路公団が測定した中心杭の成果値を利用した。

ＳＴＡ 236　Ｘ＝24916.77m　Ｙ＝37339.65m　Ｈ＝222,844m

ＳＴＡ 237　Ｘ＝24947.25m　Ｙ＝37434.88m　Ｈ＝199.603m

9．本遺跡の発掘調査に際し、次の方からご協力を頂いた。（敬称略）

○一戸町教育委員会　　○高田和徳

10．現地調査においては沢内市郎氏をはじめとする一戸町の方々30名、室内整理では室内整理作業員４名のご協力を頂いた。

11．本遺跡の調査によって得られた一切の資料は岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

12．本報告書の編集・レイアウト・校正は高橋与右ェ門が担当した。

本　文　目　次

序

例　言

Ⅰ．調査に至る経過……1

Ⅱ．位置と立地及び環境……3

1．位置と環境……3

2．地　形……4

3．火山灰の様相……7

Ⅲ．堀切遺跡……9

1．調査方法……13

2．基本層序……16

3．検出遺構と出土遺物……21

(1)　住居跡……21

(2)　土　坑……33

(3)　焼土遺構……45

(4)　埋設土器遺構……45

(5)　遺構外の遺物……47

4．まとめ……73

Ⅳ．竹林遺跡……107

1．調査方法……110

2．基本層序……111

3．検出遺構と出土遺物……113

(1)　住居跡……113

(2)　遺構外の遺物……121

4．まとめ……129

Ⅴ．むすび……142

Ⅵ．付編　堀切遺跡の火山灰……143

図版・写真目次

堀切遺跡

第1図　遺跡の位置……2

第2図　地形面区分……5

第3図　周辺の地形とグリット配置図……11

第4図　基本層序……17

第5図　遺構配置図……19

第6図　C－17住居跡－1

C－17住居跡－2……22

第7図　F－23住居跡……23

第8図　H－11住居跡……25

第9図　H－11住居跡出土遺物(1)……26

第10図　H－11住居跡出土遺物(2)……27

第11図　Q－10住居跡……28

第12図　Q－10住居跡出土遺物……29

第13図　U－8住居跡……31

第14図　U－8住居跡出土遺物……32

第15図　B－8土坑……34

第16図　D－21土坑……35

第17図　F－14土坑……35

第18図　G－11土坑……37

第19図　K－15土坑……37

第20図　K－27土坑……37

第21図　R－7土坑……39

第22図　U－7土坑……40

第23図　U－5土坑……40

第24図　Ｖ－16土坑……41
第25図　Ｗ－18土坑……42
第26図　Ｗ－22土坑……43
第27図　Ｘ－20土坑……44
第28図　Ｙ－29土坑……44
第29図　Ｃ－７焼土……45
第30図　Ｄ－11埋設土器……46
第31図　遺構外の遺物（縄文土器１）……48
第32図　遺構外の遺物（縄文土器２）……49
第33図　遺構外の遺物（縄文土器３）……50
第34図　遺構外の遺物（縄文土器４）……51
第35図　遺構外の遺物（縄文土器５）……52
第36図　遺構外の遺物（縄文土器６）……53
第37図　遺構外の遺物（縄文土器７）……54
第38図　遺構外の遺物（縄文土器８）……55
第39図　遺構外の遺物（縄文土器９）……56
第40図　遺構外の遺物（縄文土器10）……57
第41図　遺構外の遺物（縄文土器11）……58
第42図　遺構外の遺物（弥生土器１）……61
第43図　遺構外の遺物（弥生土器２）……62
第44図　遺構外の遺物（弥生土器３）……63
第45図　遺構外の遺物（土師器）……65
第46図　遺構外の遺物
（陶磁器・泥人形・貨幣）……66
第47図　遺構外の遺物（石器１）……68
第48図　遺構外の遺物（石器２）……70
第49図　遺構外の遺物（石器３）……71

ＰＬ１　調査後の全景……77
ＰＬ２　調査前の近景……78
ＰＬ３　調査後の全・遠景……79
ＰＬ４　粗掘りと基本層序……80
ＰＬ５　住居跡(1)……81
ＰＬ６　住居跡(2)……82
ＰＬ７　住居跡(3)……83
ＰＬ８　住居跡(4)……84
ＰＬ９　住居跡(5)……85
ＰＬ10　土坑(1)……86
ＰＬ11　土坑(2)……87
ＰＬ12　土坑(3)……88
ＰＬ13　土坑(4)……89
ＰＬ14　土坑(5)……90
ＰＬ15　土坑(6)　焼土……91
ＰＬ16　遺構内の土器(1)……92
ＰＬ17　遺構内の土器(2)……93
ＰＬ18　遺構内の土器(3)……94
ＰＬ19　遺構外の遺物（縄文土器１）……94
ＰＬ20　遺構外の遺物（縄文土器２）……95
ＰＬ21　遺構外の遺物（縄文土器３）……96
ＰＬ22　遺構外の遺物（縄文土器４）……97
ＰＬ23　遺構外の遺物（縄文土器５）……98
ＰＬ24　遺構外の遺物（縄文土器６）……99
ＰＬ25　遺構外の遺物
（縄文土器７・弥生土器１）…100
ＰＬ26　遺構外の遺物（弥生土器２）…101
ＰＬ27　遺構外の遺物（土師器・その他）
……102
ＰＬ28　遺構外の遺物（石器１）……103
ＰＬ29　遺構内・外の遺物（石器２）…104
ＰＬ30　遺構内・外の遺物（石器３）…105
ＰＬ31　遺構内・外の遺物（石器４）…106

竹林遺跡

第１図　周辺の地形とグリット配置図 …109
第２図　基本層序 ……111
第３図　遺構配置図 ……112
第４図　Ｉ－３住居跡 ……114
第５図　Ｉ－３住居跡出土遺物(1) ……115
第６図　Ｉ－３住居跡出土遺物(2) ……116
第７図　Ｆ－５住居跡 ……118
第８図　Ｆ－５住居跡出土遺物 ……119
第９図　Ｆ－２埋没谷 ……120
第10図　遺構外の遺物(1) ……122
第11図　遺構外の遺物(2) ……123
第12図　遺構外の遺物(3) ……124
第13図　遺構外の遺物(4) ……126
第14図　遺構外の遺物(5) ……127

ＰＬ１　調査後の全景 ……133
ＰＬ２　調査前・後の近景 ……134
ＰＬ３　Ｉ－３住居跡 ……135
ＰＬ４　Ｆ－５住居跡とＦ－２埋没谷 …136
ＰＬ５　出土遺物（土器１） ……137
ＰＬ６　出土遺物（土器２・土製品） …138
ＰＬ７　出土遺物（石器１） ……139
ＰＬ８　出土遺物（石器２） ……140
ＰＬ９　出土遺物（石器３） ……141

Ⅰ　調査に至る経過

東北自動車道八戸線は、二戸郡安代町で青森線と分岐し、青森県八戸市に至る約68kmの高速自動車道であり、本県にかかるのは第７次施行命令区間約27.6kmと第８次施行命令区間26.7kmである。このうち第７次施行命令区間に所在する遺跡の発掘調査は、昭和58年で終了している。

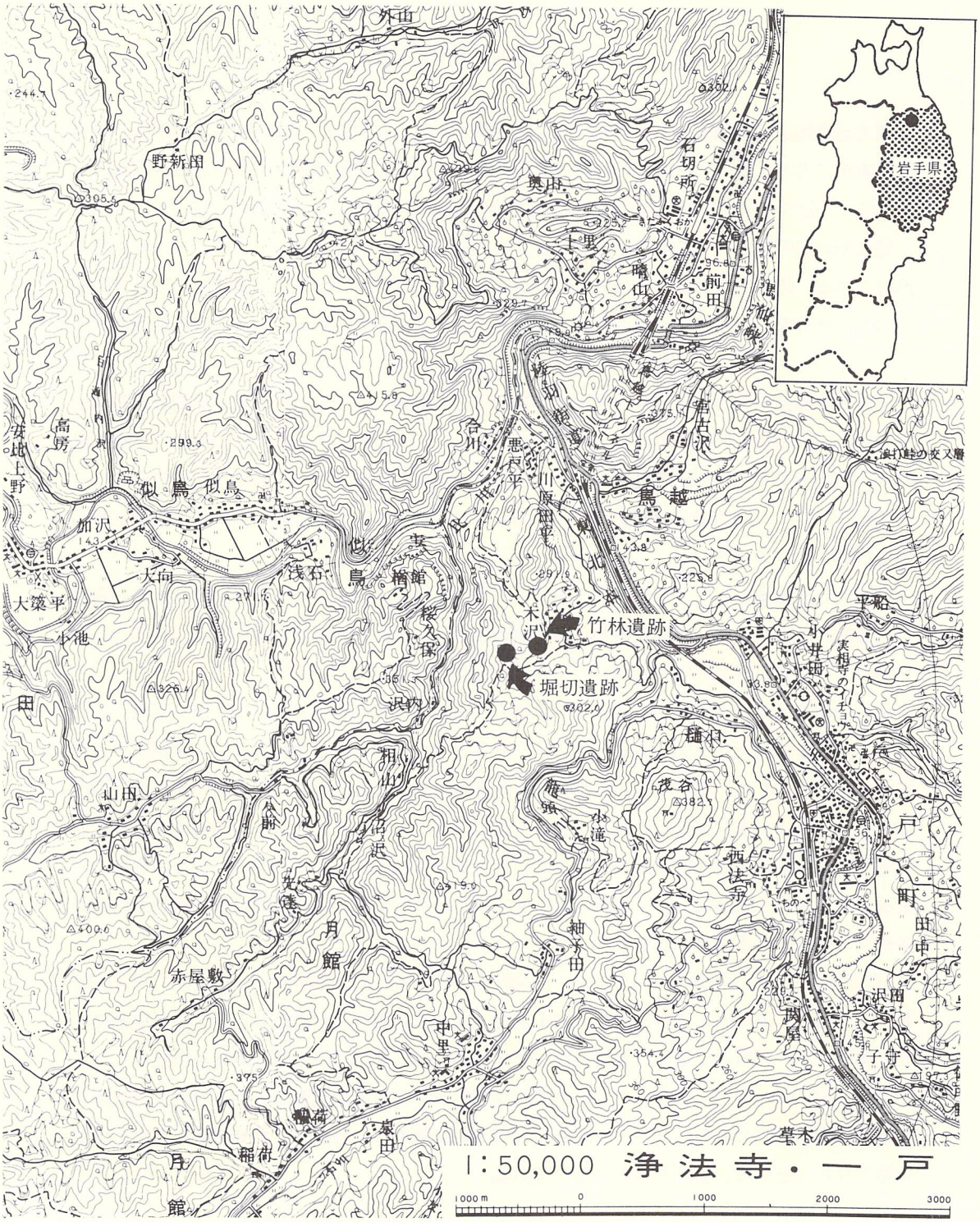
昭和53年11月第８次施行命令が出された。二戸郡安代町、浄法寺町、二戸市、一戸町を通る路線である。岩手県教育委員会はその区間の埋蔵文化財包蔵地について日本道路公団と協議を重ねた。そのなかで、浄法寺町には天台宗の古刹である天台寺が所在し、天台寺緑地保全区域となっていることから、路線はこの地を避けて設定されることになった。

県教育委員会事務局文化課は、昭和54年10月に日本道路公団の協力を得て、実施計画路線沿いを500m幅で埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、その結果をもとにさらに両者で協議を重ねた。昭和56年５月には路線発表があり、文化課は路線敷地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、約30遺跡を確認した。昭和57年には安代町内の５遺跡について発掘調査範囲確認調査を行っている。

昭和58年度事業として、安代町に所在する４遺跡の発掘調査が当センターに委託され、湯の沢Ⅲ遺跡、繋沢Ⅱ遺跡、石神Ⅱ遺跡の発掘調査と関沢口遺跡の粗掘遺構確認調査を行った。文化課はこの年度に浄法寺町内12遺跡の発掘調査確認調査を行っている。

昭和59年度には、安代町内の関沢口・水神の２遺跡、浄法寺町内の柿ノ木平Ⅲ・五庵Ⅰ・五庵Ⅱ・海上Ⅰ・海上Ⅱ・大久保Ⅰ・沼久保・桂平・飛鳥台地Ⅰの９遺跡について発掘調査が委託された。このうち、関沢口遺跡は昭和58年度からの継続調査であり、沼久保・桂平・飛鳥台地Ⅰの各遺跡は工事用道路分の調査である。文化課はこの年度に二戸市・一戸町所在のそれぞれ６遺跡の発掘調査範囲確認調査を行っている。またその際、新たに発見された浄法寺町内の五庵Ⅲ・広沖の２遺跡についても確認を行っている。その結果、東北縦貫自動車道関連の浄法寺町内に所在する遺跡は14箇所となった。

昭和60年度には、浄法寺町の８遺跡、田余内Ⅰ遺跡、田余内Ⅱ遺跡、五庵Ⅲ遺跡、沼久保遺跡、桂平遺跡、安比内Ⅰ遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡、広沖遺跡及び二戸市の２遺跡、西久保遺跡、大久保遺跡、一戸町の３遺跡、堀切遺跡、竹林遺跡、親久保Ⅲ遺跡の発掘調査が委託された。このうち沼久保・桂平・飛鳥台地Ⅰの各遺跡は昭和59年度の継続調査であり、親久保Ⅲ遺跡は粗掘遺構確認調査である。また、本報告の堀切遺跡は隧道口にあたり、竹林遺跡はその工事用道路となることから、調査を早めたものである。



第１図　遺跡の位置

II 位置と立地

1 位置と環境

〔位置〕

本遺跡は岩手県二戸郡一戸町鳥越字堀切17ほかに所在し、国鉄東北本線一戸駅の北西3km、一戸町役場の北西2.8kmに位置する。二戸郡一戸町は岩手県の北端部、二戸郡の中では南部に位置し、南は岩手郡葛巻町・岩手町、西は二戸郡浄法寺町、北は二戸市、東は九戸郡九戸村に四周を囲まれ、総面積298.58km²、人口21,600人余の町である。遺跡の所在する鳥越字堀切は二戸市境に近接した北西端にあり、岩手郡葛巻町の樺森を水源とする馬淵川の西方1.1kmに、約10,000m²の広がりをもって所在する。

県都盛岡市から国道4号を北上し、北上川上流域の岩手郡滝沢村、玉山村、岩手町を通過し、当町の南にある標高458mの中山峠（十三本木峠）を越えて馬淵川沿いをさらに北行する。約65km北上して当町の中心街「一戸」地区を通りすぎて約3km進むとバス路線「野月内館」停車場に到着し、西方を北流する馬淵川に架かる「八木沢橋」を渡って八木沢の集落が立地する八木沢沿いに約900m入った所に竹林遺跡が、ここからさらに200mの地点が堀切遺跡である。

〔環境〕

当町と二戸市を貫流し遺跡の立地に密接な関連をもつ馬淵川は、岩手郡葛巻町の東端に近い北上山地北半の葛巻町樺森（1,207m）に流れをおこし、葛巻町から当町小鳥谷地区まではほぼ北々西に向かって流れ、そこで北に向きを変えて当町の中心部「一戸」地区から鳥越地区を経て二戸市を貫流し、青森県三戸町から八戸湾に至る延長142km、流域面積2,050km²を有する岩手県北～青森県大平洋側地方では最大の河川である。

以上のように大規模な河川ではあるが、流域のうち青森県三戸町以南の全体的な地形は山地や丘陵地が多く、平野部の形成が悪く、特に上流部ほどこの傾向が顕著である。地形面分類については後述するが、起状の強い地形環境の中で、谷あいを開析する沢や湧水が合流しながら次第に大きな流れとなり、小鳥谷地区に入ると河岸段丘の形成がみられ、本町内では一戸地区から鳥越地区が最も良く発達している。また、馬淵川には多くの支流があり、本遺跡の南側を東流する八木沢もその一つで、近くにはさらに小滝川がある。

馬淵川は流路の浸蝕がはげしく、河岸低地はとにかくとして、いわゆる段丘面や農地と現在の河床とは10m以上の比高をもつ場合が多い。この状況が水田開発の妨げとなり、結果的に水利の良い河岸低地のみが水田となり、その他は畑として利用されている。当町の農業は畑作を

主とした経営型態である。

竹林・堀切の両遺跡はこうした一戸町にあって、馬淵川左岸の支流「八木沢」の900m と1.1㎞上流の左岸に立地することは既述したが、遺跡の周辺に限定して環境を記すことにする。

両遺跡の南側を東流する八木沢は、馬淵川の西方１㎞～２㎞に連なる丘陵地群を開析し常時流水を伴うＶ字谷状の沢である。西方の丘陵地群は標高250m～400m の高さがある。

堀切遺跡は、そのような標高約300m の丘陵から東方に張り出す尾根の東面や南面する山腹斜面部から裾野緩斜面にかけて約10,000m の広がりをもって立地している。水平に近い平坦面は全く存在せず、やや起伏のある地形である。八木沢を挟んだ南側も標高300m 位の丘陵地が続いている。遺跡地内の標高は205m～227m で、馬淵川の河床とは最高位で約100m の比高差がある。

竹林遺跡は、堀切遺跡の北側を東に延びる尾根の東端裾野に立地するが、立地する地形面は小規模な段丘面と推定される扇状地的な東面する緩斜面の東端崖縁（段丘崖?）を占めている。遺跡の北方は八木沢の支流で無名の沢が東流し、遺跡はこの沢と八木沢の合流点の50m 上流にある。遺跡の標高は185m～191m で、馬淵川とは約70m の比高がある。

２　地　　形

当町内の馬淵川沿いは、南は小姓堂から子守、北は小井田付近までの約４㎞間に最大幅１㎞位の谷底平野が形成され、鳥越地区から二戸市石切所地区にかけての峡さく部にせばめられた盆地状を呈している。この間の馬淵川はやや大きく蛇行して北西に流れている。

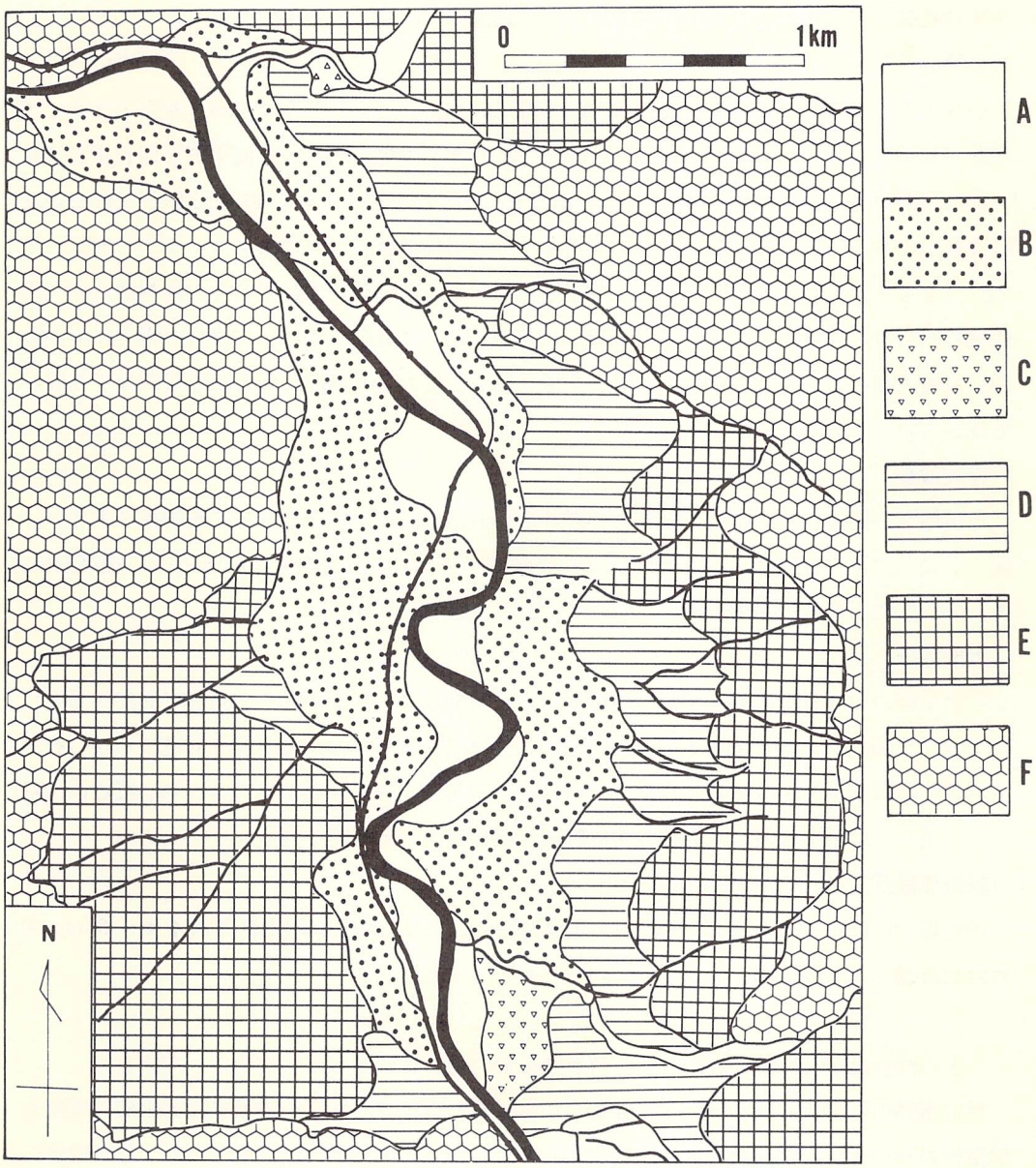
このような流路の両岸には河岸段丘が形成されるものの、左岸と右岸で若干異なる様相を示している。たとえば、右岸に広く分布する一戸段丘が左岸では小範囲にのみ観察されること等である。

以下に、当地域の馬淵川流域で観察される河岸段丘の概略を松山力氏の報告（松山力1981）から記し、堀切遺跡と竹林遺跡の地形上の立地を理解する一助としたい。

本地域での段丘面には、上位から岩館段丘、一戸段丘、福岡段丘、沢田段丘、越田橋段丘の５面があり、そのなかの上位３段丘が洪積世面、下位の２段丘が沖積世面とされている。

〔岩館段丘〕

当地域では最も高位の標高210m～220m 以上の段丘面で、開析が進んでいるため、起状・傾斜ともやや大きい丘陵状の地形を示し、二戸市地域の仁左平段丘に対比される。馬淵川東方の標高300m～400m の山地急斜面に続く岩館付近から田中の北側にかけての地域と、馬淵川西方の西方寺から関屋までの地域に分布する。砂礫を主とする構成層がみられ、二戸市地域の仁左



A．越田橋段丘　B．沢田段丘　C．福岡段丘　D．一戸段丘

E．岩館段丘　F．山地

第２図　地形面区分

平面に比較して開析がすすみ、平坦面に乏しく馬淵川への傾斜もやや大きい。

〔一戸段丘〕

谷底平野の岩館段丘に挟まれた地域で、馬淵川の右岸には広く分布するが、左岸ではあまり発達が顕著でない。本段丘面の標高は170m～206m とやや幅があり、谷底平野と段丘崖は20m～25m、岩館段丘とは10m～20m の比高がある。谷底平野に向って緩く傾斜し、緩起状のある丘陵性段丘である。この段丘の最も大きな特徴が、火山灰流凝灰岩の堆積するシラス台地としての性格をもち、この特徴から従来は二戸市地域の福岡段丘に対比されていた。福岡段丘の火山灰流凝灰岩は八戸浮石流凝灰岩（12,700±260年 B.P.）に連続するが、本段丘の場合は大不動浮石流凝灰岩（25,560±1,020年 B.P.）を構成層としており、本段丘の方が福岡段丘より段丘形成が古いことを示している。

〔福岡段丘〕

鳥越地区の馬淵川右岸に広く分布する以外は、沢田地区の南に観察されるが規模は小さい。明らかに八戸浮石流凝灰岩が堆積し、二戸市地域の福岡段丘に連続するであろう。標高140m～150m 位で、下位の沢田段丘面とは 3 m～10m の比高がみられる。

〔沢田段丘〕

谷底平野の大部分を占め、馬淵川の現河床とは20m 前後の比高があり、地域（沢田～田中）によっては30m 以上の比高をもつ。段丘面の中では均一な平坦面が最も良く発達するが、馬淵川右岸では極く緩やかな傾斜をもつ。2 m 以上の砂礫層とその上位のシルトや砂、あるいは粘土が堆積し、二戸市地域の米沢段丘か堀野段丘に相当すると推定される。

〔越田橋段丘〕

当地域では最底位の段丘で、馬淵川の現流路沿いに狭く分布し、現河床とは 4 m～ 6 m、中には11m 位の比高をもつ。

以上の段丘面がもつ特徴と、堀切・竹林遺跡の特徴と比較すると、次のようである。

堀切遺跡の場合は標高205m～227m で、中掫浮石や南部浮石らしい沖積世の火山灰の堆積と洪積世の八戸火山灰相当層の堆積が観察されることから、洪積世の地形面であることは間違いあるまい。しかし、いわゆる河岸段丘の一部と理解するには、面的な広がりがないことや傾斜が強すぎることから無理があると考えられる。まだ細部を検討する余地は残っているが、ここでは丘陵地裾野の緩斜面部に相当する地形面と考えられる。

竹林遺跡は標高185m～191m で、八戸火山灰相当と推定される黄橙色火山灰が堆積する特徴がある。また、馬淵川に向かって緩い傾斜を示すが大きな起状がなく、このことから考えれば小規模とはいえ段丘的である。しかし、火山灰流凝灰岩の堆積が観察されないことから、一戸

段丘や福岡段丘の特徴とは一致せず、本遺跡の標高が若干低いとはいえ岩館段丘の一部に相当する可能性がある。

3　火山灰の様相

岩手県北部から青森県南東部にかけては、表層中に各種の火山灰が堆積する場合が多くみられ、当遺跡の所在する一戸町もほぼ同様である。

〔南部浮石〕

二戸市では成層の堆積が確認されるが、当町では非常に稀である。当町北端の鳥越地区から小井田付近にかけて断続する堆積が認められ、この付近がほぼ分布の南限であろう。また、本遺跡でもこの浮石らしき浮石塊が数箇所で検出されており、八木沢周辺も分布域に入ることは確実である。

〔中掫浮石〕

南部浮石と同様、二戸市付近には層厚10cm～20cmで堆積するが、当町内では数cmの層厚で、それも断続する浮石塊として確認されるのみで、やはり分布の南限が当町内であることを示している。本遺跡の場合は窪地部分に堆積した成層を数地点で確認した以外は、本浮石が混入した暗褐色の砂質シルトとして堆積している。

〔十和田ｂ降下火山灰〕

二戸市や九戸郡軽米町では堆積が確認されているが、当町内での堆積例は報告されていない。当遺跡でも同様に、検出されていない。

〔十和田ａ降下火山灰〕

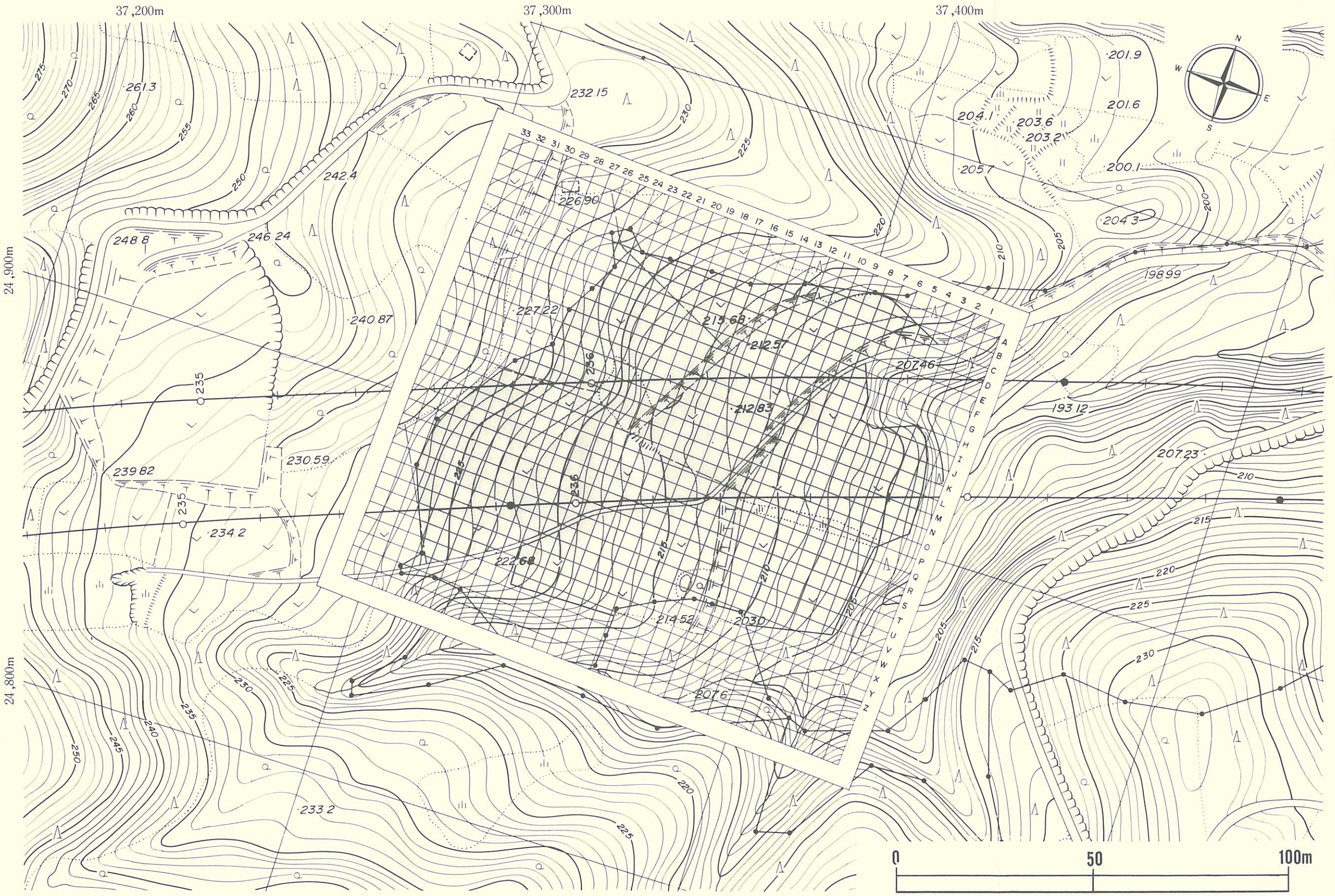
三辻（三辻利一1986）や町田（町田洋1981）の報告によれば、本火山灰は岩手県中部～南部までを分布域とする広範囲に降下・堆積した火山灰である。当町内でも古代の遺構や自然の窪地に堆積する本火山灰が多くの遺跡で確認さられている。その様相は当遺跡でも同様である。なお、一般に十和田ａ降下火水灰と認識されている火山灰には、秋田県鹿角市から二戸郡安代町・浄法寺町・一戸町に堆積する粒子の粗いものと、二戸市や九戸郡地方に分布する粒子の細かいものが含まれ、さらに、最近の分折結果（三辻利一1985）によればＡ・Ｂ・Ｃの３群に細分されるとも言われている。当遺跡は粗粒質の型である。

〔白頭山火山灰〕

北海道から岩手県北部にかけての地域に分布する。朝鮮半島の白頭山火山を噴出源とする火山灰で、二戸郡安代町・浄法寺町・久慈市に次いで当遺跡でも堆積が確認された。おそらく、岩手県北部が当火山灰の分布域南限であろう。

III 堀 切 遺 跡

1．所　　在　　地　　岩手県二戸郡一戸町鳥越字堀切17ほか
2．委　　託　　者　　日本道路公団仙台建設局　一戸工事事務所
3．発掘調査期間　　昭和60年6月3日～9月10日
4．調査対象面積　　8,590m²
5．発掘調査面積　　8,590m²
6．遺跡番号・略号　　ＪＥ19―1185・ＨＫ85
7．調 査 担 当 者　　長沼　彬・高橋与右ェ門
8．協　力　機　関　　一戸町教育委員会



第３図　周辺の地形とグリット配置図

1．調　査　方　法

(1)　野外調査

〔調査区の設定と遺構の呼称〕

調査区域は高速道路線の最大幅員90m、路線延長125m で、総面積8590m²である。調査区は、4 m×4 m を最小単位とし、調査範囲全域を対象とした総グリッドで設定した。グリッドの設定に使用した基準点は、日本道路公団が測定した下り線の中心杭ＳＴＡ236＋20（Ｘ＝24923.18 m，Ｙ＝37358.59m，Ｌ＝216.808m）と中心杭ＳＴＡ236＋30に対応する北側幅杭の２点を使用し、この２点を結ぶ直線を基準線とし、東西方向、南北方向が直交するように４ｍごとに区画した。グリッド区画線には東から西へ１．２．３……33まで命名し、南北は北からＡ．Ｂ．Ｃ……Ｚまで付し、グリッド名は区画線の名称を組み合わせ、Ａ１・Ｂ１等とし、北東隅の交点名をグリッド名とした。

遺構名は、その遺構の北東部が位置するグリッド名と遺構の種別名を組み合わせて、Ａ１住居跡、Ｂ３土坑等のように呼称した。また、１調査区に同種の遺構が複数ある場合は、Ａ１住居跡－１，Ａ１住居跡－２のように命名して区別した。

〔粗掘りと遺構検出〕

本遺跡の調査範囲は、そのほとんどが斜面をなし、加えて畑地として利用されており、場所によっては小砂礫の混入が多いことや地山が耕作土となっている地点も散見されることから、攪乱や削平が進んでいる可能性があると推定された。このことから、当初は原地形を明確に把握する必要があると考え、斜面最上位から沢への崖縁まで通した試掘溝による予備調査を行った。その結果、斜面上位や微高地は表層の堆積が薄く、斜面下位に流下し堆積したことが明らかとなり、Ｈ－11住居跡付近とＦ－14土坑の北側にみられる比高１ｍ～2.5m の段差がその好例であることも判明した。また、遺跡地内を東西に横断する農道を境にして南側の表土は15cm～30cmと層が薄く、逆に北側は30cm以上２ｍ位までの厚層であることが確認された。

以上の予備調査の結果をもとにして、次のような粗掘りの方法を採用した。表土の薄い農道の南側は全面積を手掘りとする。農道の北側については、遺物の表面分布が多い北西端部分については手掘りとするが、他の部分はバックホーによる表土除去をすることとし、この手順で計画どおり実施した。

遺構検出については、表層の薄い地点では表土を除去すると直接地山面が露出し、一度の遺構検出で遺構存在の有無は確認されたが、表土の厚い部分では各層ごとに行い、数回反復した地点も多い。

〔精　査〕

遺構の掘り上げは、住居跡を４分法、土坑を２分法で行った。埋土の除去や遺物の取り上げは層位を確認して行った。

遺構外から出土した遺物は、出土地点、層位を確認して一括で取り上げた。遺構内出土の遺物も同様であるが、埋土上位のものは層位ごとに一括し、床面出土の遺物は平面図に位置を記入し、写真撮影の後取り上げた。

〔記　録〕

実測図は、平面図・土層図・遺構断面図と、炉跡・焼土遺構・埋設土器では断ち割り断面図を作成した。各種実測図は縮尺１/20を基準としたが、細部や場合によっては縮尺１/10も使用し、適宜使い分けた。

平面図は調査区の区画線を基準とした１ｍ間隔の水糸を遺構全面に張り、それを測量基線とした。土層図や断面図は水平水糸を張り、それを基線として実測した。

基本層序は斜面上位から下位まで３本の畦畔を残して作成し、旧地形や層序区分の把握に活用した。なお、一部は深掘りをし、地山の観察をした。土層名は上層からⅠ・Ⅱ層とし、細分される場合はⅠａ層・Ⅰｂ層・Ⅱａ層・Ⅱｂ層とした。遺構の埋土は上位から１・２・３とし、基本層序の土層名と区別し、細分される場合は１ａ層・１ｂ層・２ａ層・２ｂ層として命名した。

埋土は上位から１・２・３とし、基本層序の土層名と区別した。

写真は、６cm×７cm版１台（モノクロ）と35mm版２台（モノクロ・カラーリバーサル）のカメラを一組みにして撮影した。実際の撮影は、埋土土層、完掘一次、完掘二次、炉や柱穴、副穴細部、遺物の出土状況等を対象として行った。ほかに、遺跡の近景、作業風景、調査後の遺跡全景等も記録として残した。なお、９月中旬には、航空機で空中から遺跡全景を撮影した。

⑵　室内整理

〔実測図関係〕

各種の実測図は、野外調査中に点検、修正、補記を終了していたが、再度点検の上報告書作成に必要な実測図を選択し、トレース用原図を作成した。

原図は遺構の種別ごとに整理した後、報告書に記載する遺構順に整理番号を付し、実測図登録台帳を作成した。

〔写真関係〕

撮影済のモノクロフィルムは35mm版、６cm×７cm版ともベタ焼きを作成し、一組みにしてネガアルバムに貼付し、遺構名や撮影場面等の必要事項を記入した。カラースライドはスライド

ファイルに挿入し、必要事項を記した。モノクロ、スライドとも連番を付し、整理台帳を作成した。

遺物の撮影は報告書に掲載するものに限定したが、遺物の登録番号順にベタ焼きとして整理した後、整理台帳を作成した。

〔遺物関係〕

出土した遺物は、野外調査中に水洗、ラベル記入とも終了し、報告書掲載用遺物の一次選択もほぼ終えて室内整理作業に入った。

最初に石器類の実測、引き続いて土器の実測、そして土器片の拓影図作成と作業を進め、それと並行して遺物出土点数の集計をした。これらの遺物は全て登録台帳を作成し、各項目の観察事項や石器の場合は法量値をも記入した。なお、トレースは外注した。

(3) 報　告

〔遺構関係〕

埋設土器、炉跡の一部、焼土遺構は1/10、その他は1/20縮尺で掲載したが、各図版に縮尺を明記した。また、図版中で使用した略号やスクリーントーンは次のことを示している。

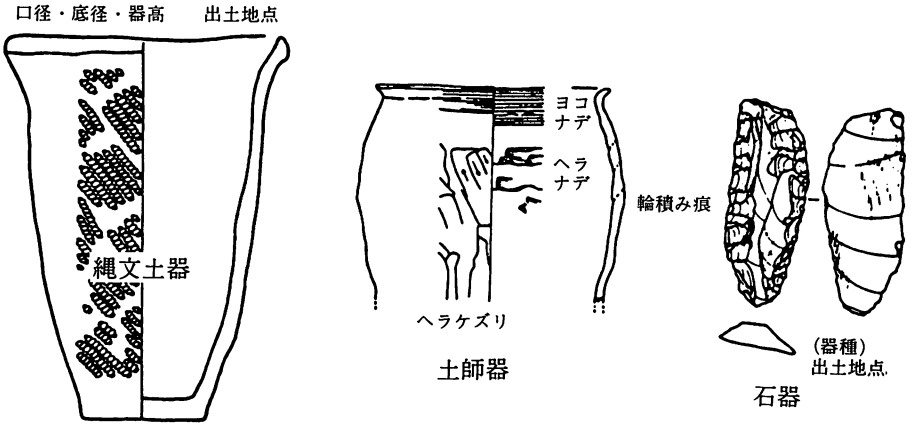
$P_1 \cdot P_2 \cdot P_3 \cdots P_n$ ── 遺構内部に付随する土坑

S ── 礫　　P o ── 土器

地山　焼土

〔遺物関係〕

縮尺は土器と石器の実測図ー1/2・1/3、土器拓影図ー1/2、金属製品ー実大・1/2、陶磁器ー1/2で掲載したが、各図版に明示した。また、土器の出土地点・層位・法量、土師器の調整技法、石器の器種と出土地点は下図のように示した。



〔写真関係〕

遺構の各種写真は全て縮尺不定である。遺物は種類別ごとに統一するように配慮したが、実測図と異なり、おおよそ次の縮尺率である。

○土器――実測図・拓影図とも１/２　　○陶磁器類――実測図・拓影図とも１/２

○石器――剝片石器と磨製石斧は１/２、礫器類は１/３、石製品は１/２・１/３

○貨幣――２/３　　○その他――１/２

２．基　本　層　序

本遺跡は南・西・北を標高300m～350mの尾根状低丘陵地に囲まれ、これらの低丘陵地群を開析して東流する「八木沢」の左岸に立地する。遺構の範囲は尾根の南向きや東向き斜面から裾部の緩斜面にかけての部分を占めている。したがって、各地点によって傾斜の勾配に違いがみられ、それがそのまま土層の堆積状況に差をもたらす結果となっている。また、調査範囲の地目は全て畑地であり、一部に削平造成や段々畑がみられることも一因であろう。以上のことを踏まえて、本遺跡全体を概観すると基本層序は以下のとおりである。

なお、土層名は上位からⅠ・Ⅱ‥‥Ⅶ層とし、細分される場合は上位からａ・ｂ・ｃとした。

Ⅰ　層：いわゆる表土である。遺跡全面を被うが、Ⅱ層以下の堆積の有無によって起源に差があるばかりでなく、地形によって層厚や性状に違いがみられることからａ～ｃに細分した。

ａ層：7.5ＹＲ２/３極暗褐色、現在の表土で耕作土として利用され、遺構全面を被う。若干の細礫と径１㎜位の砂粒を多く混入した砂質シルトで、僅かに粘性がある。層厚は15cm～20cmであるが、性状・色調・層厚は下位層との影響が強く一様ではない。全体的にみれば斜面部が薄く斜面下位が厚く堆積する崖錐性の堆積状況である。

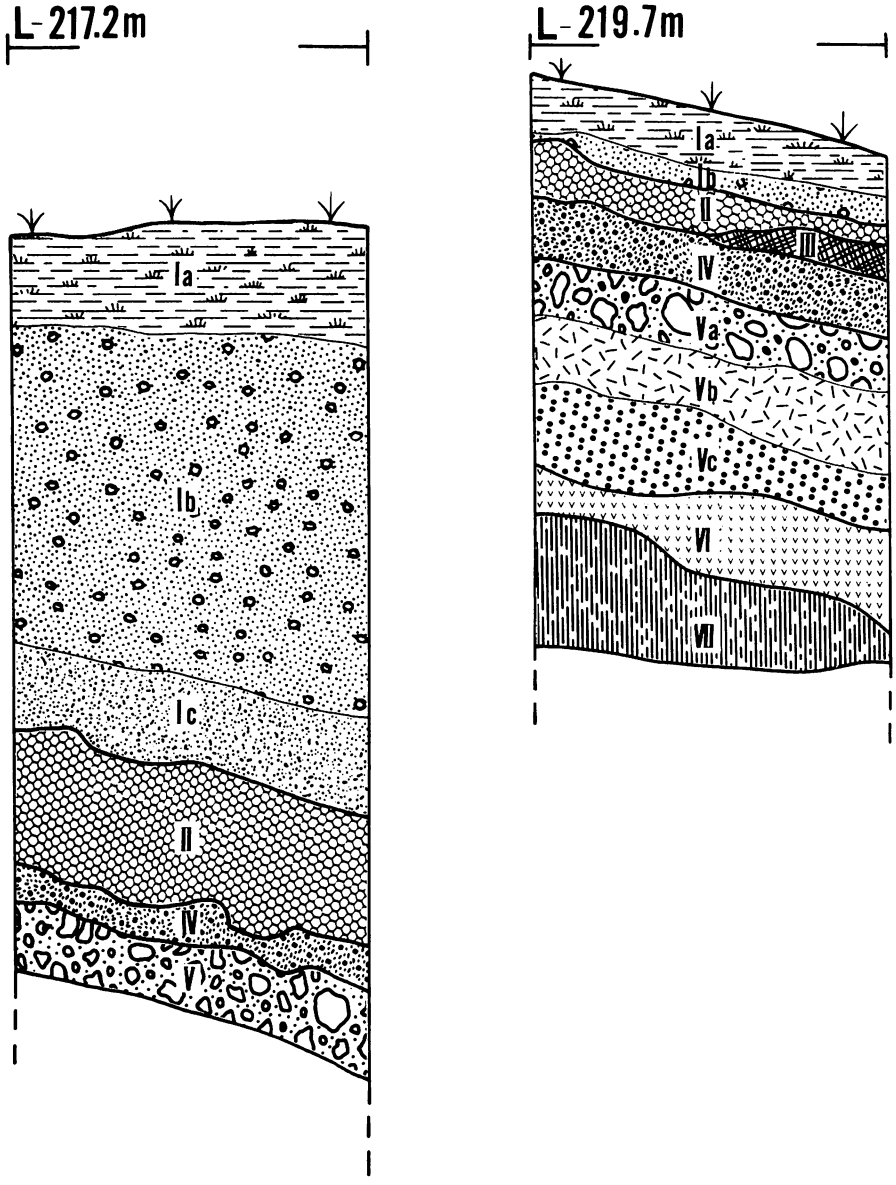
ｂ層：7.5ＹＲ３/２黒褐色、北側尾根の南向き斜面中位の畑地境にのみ堆積し、最大1.50mの層厚がある。おそらく斜面上位から流下して堆積した土壌であろう。性状はａ層とほぼ同様で砂粒や小礫が多く混入するが、粘性はほとんどなく、しまりが強い。斜面下位ほど層厚が厚い。

ｃ層：7.5ＹＲ２/２黒褐色、ｂ層の堆積する部分でのみ観察される。かつての地表面をなした土壌と推定される。ａ・ｂ層より若干黒味が強く、砂粒が若干混じったシルトで、あまり粘性がなくよくしまる。斜面下位ほど層厚が厚く０～30cmの幅がある。Ⅱ層起源の土壌であろう。

Ⅱ　層：7.5ＹＲ２/１～３/１黒色、Ⅰｃ層が表土であった時の起源となった土壌であろう。表層の厚く堆積する斜面下位や調査範囲西側の埋没谷に多く堆積し、層厚は０～25cm位まで

の範囲である。少量の砂粒が混入する粒子の細かいシルトで、粘性はなくしまりはややよい。

III　層：灰白色～灰褐色、十和田a降下火山灰層とその混合層である。層としては断続的で、大塊状に点在する場合が多い。本来は遺跡全面を被った火山灰であろうが、調査時には表層の厚い部分にのみ観察される。



第4図　基本層序

なお、本層の上位でII層の下位相当部で白頭山火山灰の堆積が確認された。

IV　層：7.5YR1.7/1黒色、本遺跡内の土壌では最も黒味の強い土で、風乾状態でも同様である。少量の白黄色浮石粒、砂粒の混入した比較的粒子の細かいシルトで、粘性はあるがしまりはあまり良くない。いわゆる「黒ボク土」に近い。本層上位で弥生時代、中～下位にかけて縄文時代晩期から中期中葉の土器が出土している。また、遺構も本層下部から下位のV層上部で検出されている。層厚は0～40cmまで幅がある。

V　層：いわゆる「中掫浮石層」に相当する土層でほぼ遺跡全面を被う。上位ほど黒味が強いことからa～cの3層に細分した。

a層：7.5YR2/2黒褐色、最上位で黒味も最も強い。黄橙色の小粒浮石が多く入り、若干粘性があるもののしまりはあまりない。植生による腐植の混入で黒変したものであろう。最大20cm位の層厚がある。中期初葉（円筒上層a式）の土器が出土している。

b層：7.5YR2/3極暗褐色、中位でa層より若干明色で、浮石粒が多量に入る。しまりは良いが粘性は全くない。砂質である。20cm位の層厚である。

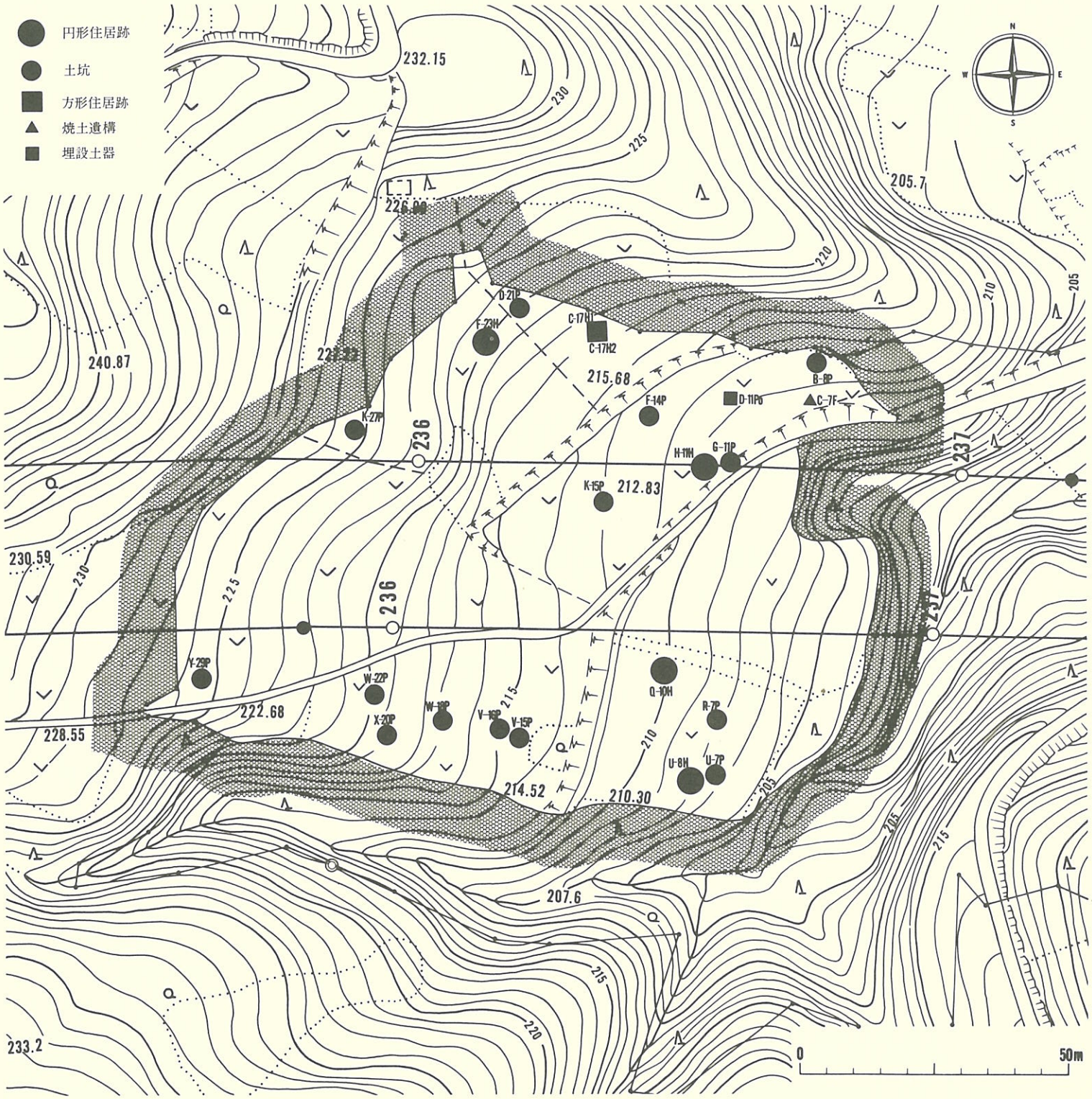
c層：7.5YR4/3暗褐色、下位でV層の基準をなす土層であるが、二戸市地域のような「粟砂」の成層はみられない。粒径2㎜以下を主とした黄橙色浮石粒を多量に含む粗粒質浮石層で、僅かのシルトを混入する。粘性は全くなくしまりは良好である。5cm～35cmの堆積である。

VI　層：7.5YR2/2黒褐色、全体として浮石質であるが、V層の浮石より粒子が大きい（径1㎜～15㎜）ことから南部浮石である可能性が大きい。しまり、粘性とも強い。V層とローム質火山灰の間に狭在する層で、本来は遺跡全面を被うと推定される。10cm～25cmの堆積である。無遺物層である。

VII　層：7.5YR5/6明褐色、浮石粒（粒径1㎜～10㎜）の混じったローム質火山灰である。非常に粘性が強く、硬くしまっている。無遺物層である。層厚は確認していない。

以上が本遺跡における基本層序の概要であるが、遺構や遺物に直接関連するのはV層のみである。I～IV層からも土器や石器の出土はあるが、遺構の検出が全くないことから考えて、これらの遺物は原位置を保っておらず、何らかの理由によって移動した可能性を強く示している。

本遺跡はI層～VI層が表層を構成するいわゆる沖積世に形成・堆積した土層であるが、この層が全て層理正しく堆積しているのは南向き斜面中位部分のみで、他の地点ではいずれかの層を欠いており、一部の地点ではI層を除去するとV層やVI層の上面が露出する部分もある。これは全て、本遺跡の立地する地形が全て急斜面～緩斜面であることと、基盤層であるVI層上面に大きな起伏がみられることに起因するものであろう。


円形住居跡
土坑
方形住居跡
焼土遺構
埋設土器
232.15
226.88
240.87
222.22
215.68
212.83
230.59
222.68
228.55
214.52
210.30
207.6
233.2
205.7
236
237
D-21P
F-23H
C-17H1
C-17H2
B-8P
F-14P
D-11P6
C-7F
K-27P
H-11H
G-11P
K-15P
Y-25P
W-22P
X-20P
W-18P
V-16P
V-15P
Q-10H
R-7P
U-8H
U-7P
0
50m

第５図　遺構配置図

3、検出遺構と出土遺物

本遺跡の発掘調査で検出された遺構は、(1)竪穴住居跡―6棟、(2)土坑―14基、(3)焼土遺構―1箇所、(4)埋設土器―1箇所の合計22遺構である。

出土遺物は遺構内外から縄文土器を主とする土器（完形・破片含む）―174点、陶磁器類―5点、石器を主とする石製品類―48点、金属製品―5点の総合計232点である。以下にその遺構と遺物の概要について記すことにする。

(1) 竪穴住居跡

調査範囲南側を東流する沢沿いの緩斜面に2棟、北側の尾根状丘陵地の南向き斜面中位～下位に4棟が立地し、この2地点に限定される。

1）C―17住居跡―1

〔遺構〕　（第6図、PL―5）

調査範囲の西端でグリッドC17・18にまたがって位置し、北側尾根の東向き斜面の中位に立地する。東側がC―17住居跡―2と重複し、本遺構が壊されている。また、北東部が斜面下位にかかるため遺存せず、南西隅相当部分が検出されたのみであるが、住居跡の一部であろう。

北東―南西1.60m、北西―南東1.00mが残存する規模で、最も深い南西壁で15cm位の壁高がある。検出された北西壁と南西壁はいずれも直線で、南西隅が丸味をもっていることから、全体の平面形は隅丸方形か隅丸長方形を示すものと推定される。床面には凹凸がないもののしまりがあまりなく、むしろ軟弱で全体が北東方向に軽く傾斜している。壁面にも凹凸がなく、僅かに外傾している。

南西隅寄りの床面で径35cm×35cm、深さ15cmの柱穴状小土坑が検出されているが、主柱穴をなすかは明らかではない。壁構・炉・貯蔵穴といった内部施設は検出されていない。

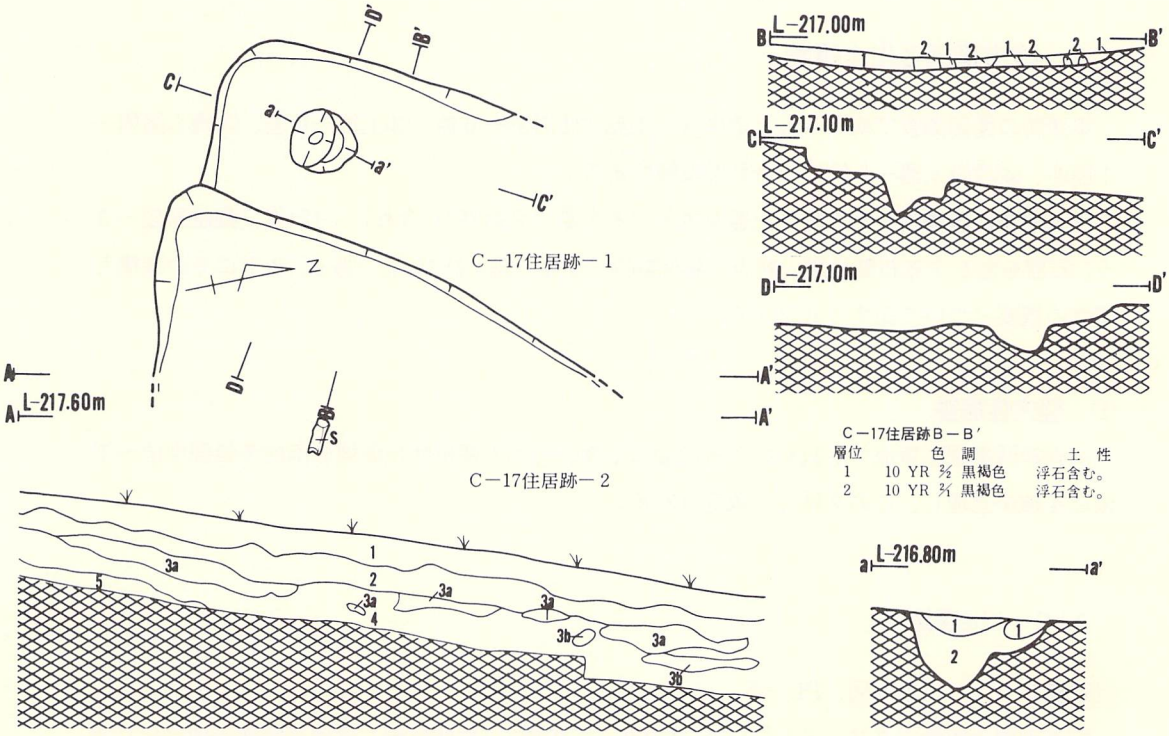
埋土は黒褐色を示すシルトの単層であるが、比較的しまりはあるが、粘性はほとんどない。若干浮石と地山粒を混入する。なお、本住居跡付近には十和田a降下火山灰と白頭山火山灰の自然堆積が確認されている。

〔遺物〕

遺構の周辺部から弥生時代の土器が出土しているが、住居跡内部からは出土していない。

〔遺構の時期〕

時期を確定する土器の出土がないので不明である。



C－17住居跡B－B′

層位	色調	土性
1	10 YR 3/2 黒褐色	浮石含む。
2	10 YR 3/1 黒褐色	浮石含む。

C－17住居跡A－A′

層位	色調	土性
1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト。基本層序Ⅰ層。
2	10 YR 3/1 黒色	〃 〃 Ⅱ層。浮石粒混入する。
3a	10 YR 3/1 黒色	白頭山火山灰ブロック状に含む。
3b	10 YR 3/1 黒色	十和田A火山灰ブロック状に含む。基本層序Ⅲ層。
4	10 YR 1/7 黒色	小粒の黄色浮石混入。基本層序Ⅳ層。
5		基本層序Ⅴ層(中堀浮石層)

C－17住居跡－2　a－a′

層位	色調	土性
1	10 YR 3/1 黒色	シルト。十和田A火山灰含む。
2		1層と基本層序Ⅴ層の混土。

第6図　C－17住居跡－1・C－17住居跡－2

2）C－17住居跡－2

〔遺構〕　（第6図、PL－6）

先のC—17住居跡－1と同様にグリッドC17・18にまたがって位置し、東向き斜面の中位に立地する。C—17住居跡の東側を壊して構築されている。また、斜面に立地するため大半は流亡して残存していない。

検出されたのは北西壁2.40m、南西壁1.00mのみである。検出された各壁が直線的で南西の隅が若干丸味をもっているが、本来は方形か長方形を示す住居跡と推定される。床面はほとん

ど起状がなく北東に向かって軽く傾斜している。床のしまりはほとんどなく、むしろ軟弱である。壁溝・柱穴・炉といった内部施設は検出されていない。

埋土の状況はC—17住居跡—1と同様である。

〔遺物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

C—17住居跡—1と同様に不明である。

3）F—23住居跡

〔遺構〕　　（第7図、PL—6）

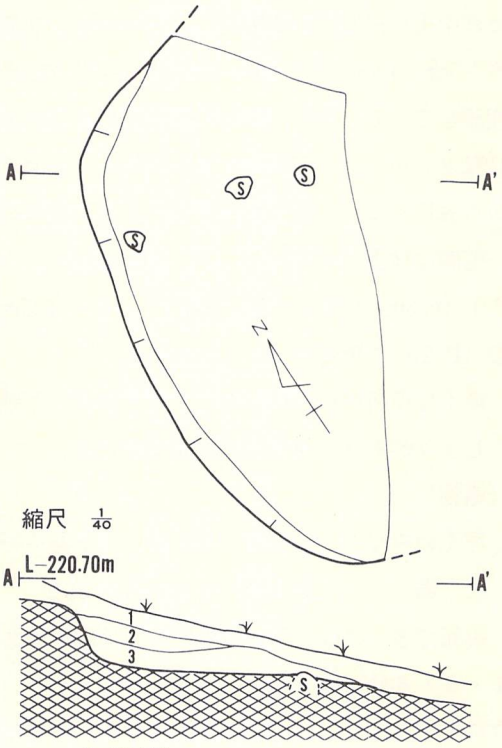
調査範囲の西端でグリッドE—23・F—23にまたがって位置し、北側尾根の東向き斜面に立地している。重複する遺構はないが、斜面に立地することから斜面下位にかかる北側は残存しない。

残存するのは南壁の延長3.50mと南北1.30mの床面のみである。残存する壁の状況から推定すると径4.40m位の円形と考えられる。最も深い南壁が0.20mの深さを持つ。床面には細波状の小起伏があるものの総じて平坦で、全体が北に向かって軽く傾斜している。貼床はなく、全面が非常に硬く、よくしまっている。壁面には起伏もなく平滑で、僅かに外傾している。壁溝・柱穴・炉とも検出されていない。

埋土はシルトが堆積し、2層に細分されている。1層は調査時点における表土である。2・3層とも黒色を呈し、若干粘性があり、3層には暗褐色土の混じりがある。

〔遺物〕

全く出土していない。



F—23住居跡

層位	色調	土性
1	10 YR 3/1 黒色	基本層序Ⅰ層。
2	10 YR 3/2 黒色	〃 Ⅱ層。
3	10 YR 3/2 黒色	明るい暗褐色の混じる。

第7図　F—23住居跡

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないため不明である。

4）H－11住居跡

〔遺構〕　　（第8図、PL－7）

調査範囲の北端に近いグリッドH11に位置し、北側尾根の東向き斜面裾部の緩斜面中位に立地している。他の遺構との重複はなく、本遺跡では最も保存状態が良く、全容を推定しうる唯一の住居跡である。

東西3.40m（推定）、南北3.40m、最も深い西壁で0.10mの規模をもち、平面形が円形を示す住居跡である。床面にはほとんど起状もなく平坦であるが、東に向かって全体が若干傾斜している。貼床はなく、全面が良くしまり硬い。壁高は低く、東側は明確にしえなかった。床面のほぼ中央に角礫を24個配列した石囲い炉が設置されている。礫の大きさは長さが10cm～25cm、厚さ5cm～10cm、高さ10cm～18cm位の範囲で、礫は床面から5cm位露出するような状態で床内に埋設している。また、礫は2重～3重で配列される部分が多い。なお、火床内には大型深鉢（第12図2）が正立で埋設されていたらしく、底部の部分約10cmが土中に埋まり、その上部は炉内から破片となって散乱状態で出土した。火床の焼土は強い焼成は受けていない。

壁溝は検出されていないが、西壁際からP1、東壁際からP2の柱穴状土坑が検出された。P1（径30cm×30cm、深さ26cm）、P2（径45cm×35cm、深さ20cm）の規模をもち、平面形は円形（P1）や楕円形（P2）を示す。

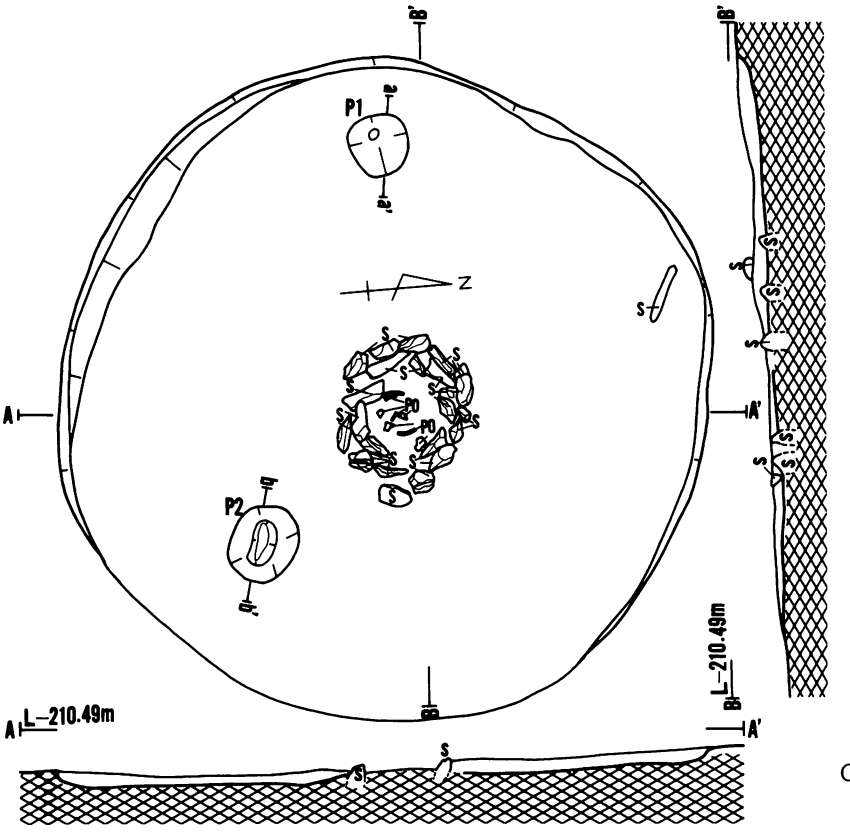
埋土は浮石粒や砂粒の混入でザラザラした感触のある黒色シルトの単層が堆積し、若干粘性としまりがあり、礫や炭化物粒も混じる。

〔遺物〕

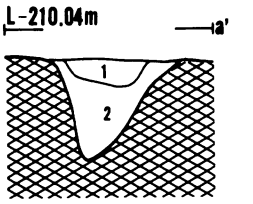
埋土のみならず床面直上や炉内から土器や石器が出土している。

土　器　　（第9図1～11、PL－16）

復元できたのは2個体のみで、他は破片である。1・5～7は床面直上からの出土である。1・5・6はほぼ同様の特徴をもつことからいずれも1に近い鉢形の土器であろう。外傾して立ち上がる体部は肩部に最大径をもち、頸部で窄んだ後口縁部が軽く外反する。口唇には小さな刻み目が入り一部に小突起をもつ。体部の縄文は原体LR横回転による単節の斜行縄文である。7は原体LR横回転の単節斜行縄文の付された器面を、沈線と隆帯で区画する口縁部破片である。2～4は炉内部から出土した土器である。2は大型の深鉢形土器である。底部から外傾して立ち上がる体部は体部上位に最大径をもって頸部で窄む。頸部は僅かに外反し6条の並行

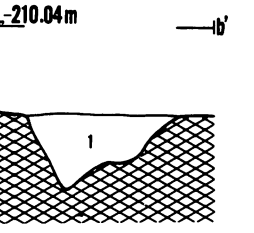


A．完掘平面図と土層図(縮尺 $\frac{1}{40}$)



H－11住居跡　P 1

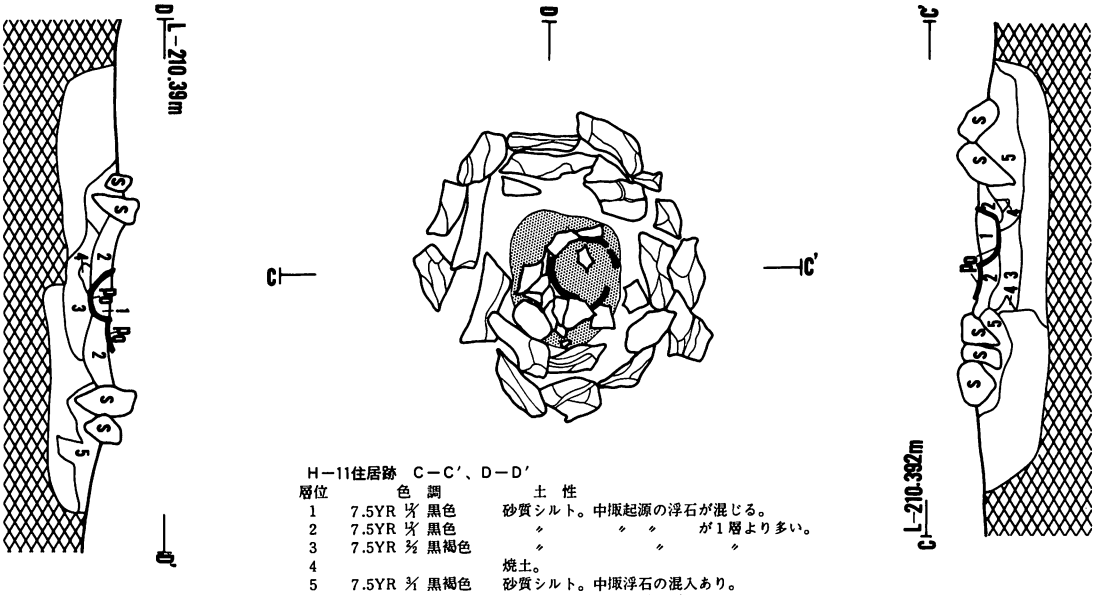
層位	色　調	土　性
1	7 YR 3/1 黒色	砂質シルト。浮石粒、炭化物が混じる。
2	7 YR 3/2 黒褐色	〃



H－11住居跡　P 2

層位	色　調	土　性
1	7 YR 3/1 黒色	砂質シルト。

C．柱穴状土坑断面(縮尺 $\frac{1}{20}$)

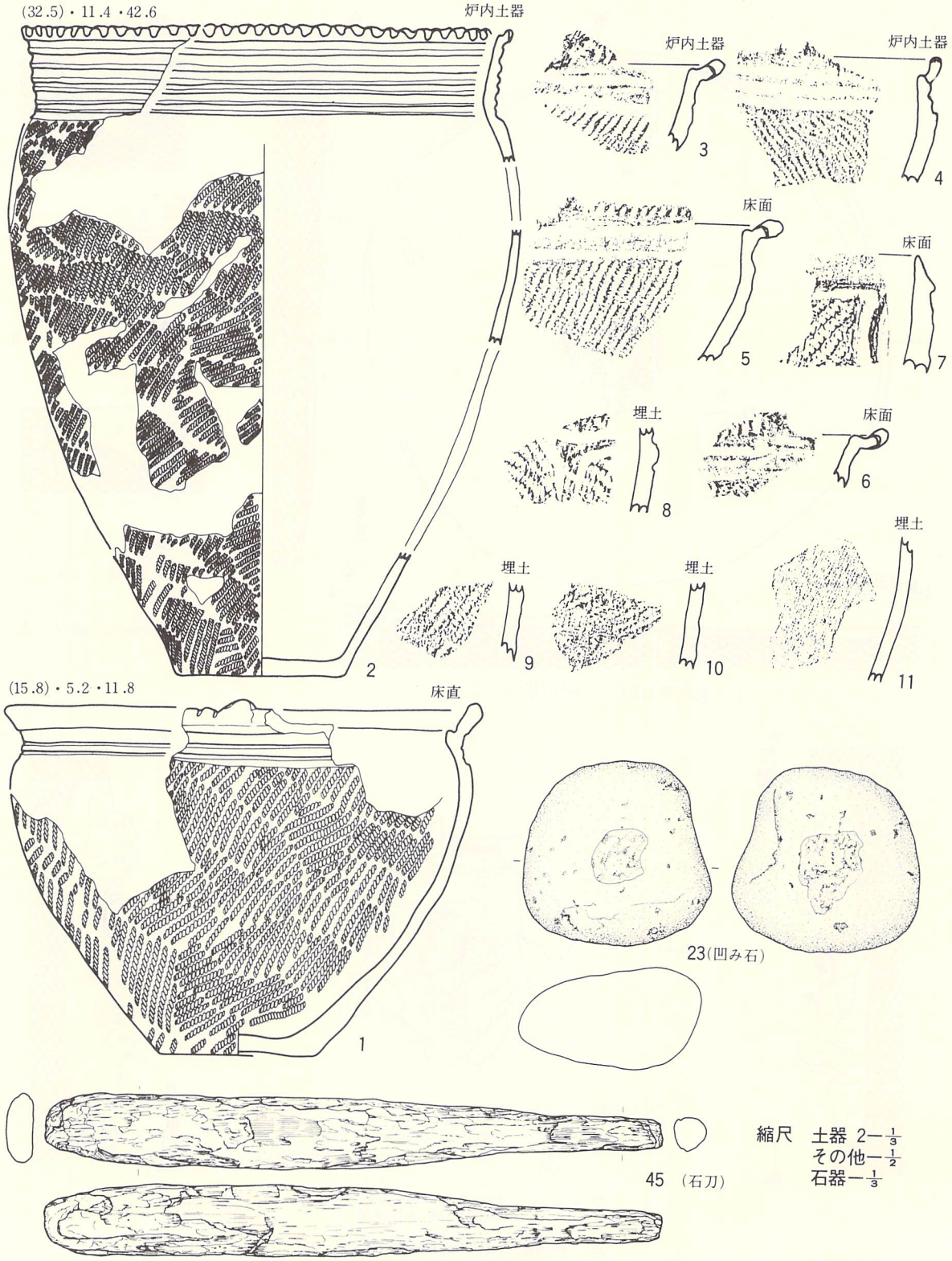


H－11住居跡　C－C′、D－D′

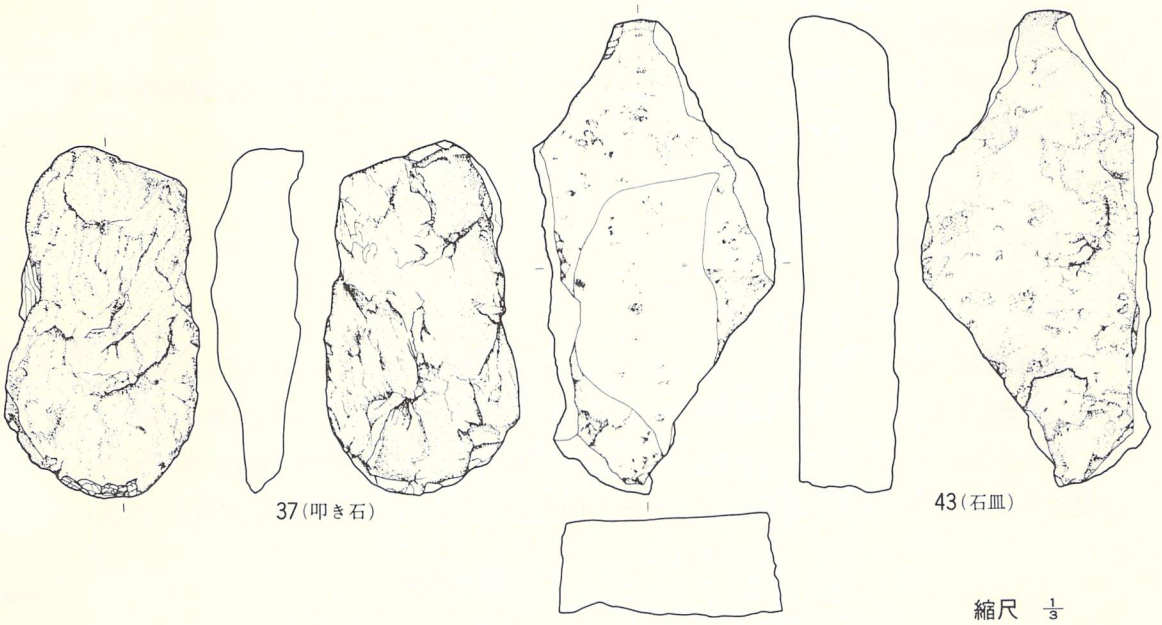
層位	色　調	土　性
1	7.5YR 3/1 黒色	砂質シルト。中軽起源の浮石が混じる。
2	7.5YR 3/1 黒色	〃　〃　〃　が1層より多い。
3	7.5YR 3/2 黒褐色	〃　〃　〃
4		焼土。
5	7.5YR 3/1 黒褐色	砂質シルト。中軽浮石の混入あり。
V		基本層序V層。中軽浮石層。

B．炉跡拡大平面図と断面図(縮尺 $\frac{1}{20}$)

第8図　H－11住居跡



第９図　Ｈ—11住居跡出土遺物(１)



第10図　H－11住居跡出土遺物(2)

沈線を全周させ、口縁端部はくの字状に軽く外反する。口唇には小波状となる刻みが付される。体部の縄文は原体LR横回転による単節斜行縄文である。3・4は1とほぼ同器形で、特徴も共通している。8～11は埋土内出土であるが、8は7と共通する特徴をもつが、他は縄文のみを付す土器片である。以上の諸特徴から7・8は第Ⅲ群、それ以外は第Ⅴ群に属する土器といえよう。

石　器　　(第9・10図23・37・43・45、PL—29)

ともに床面直上からの出土である。23は全長9.1cm、重さ510gあり、奥羽山地中新統新第三系産の輝石安山岩を使用した凹み石である。扁平な円礫を使用したもので、使用痕は両面にみられるがそれほど強いものではない。45は、全長30.6cm、重さ260gの細長い形状を示し、器種は石刀としたが石棒の可能性もある。表面が荒れてザラザラしているが、本来は研磨されていたものであろう。先端(実測図の左側)の断面は扁平、柄部(実測図の右側)は丸く仕上げられ、先端は幅3.6cm、柄部が1.6cmである。石材は北上山地古生界産のチャートである。37は平面楕円形で断面扁平な北上山地古生界産の粘板岩を使用した叩き石である。大きさは全長13.7cm、幅7.8cm、厚さ3.2cm、重さ450gである。先端部に使用時のものと考えられる敲打剝離痕を残している。43は奥羽山地中新統新第三系産の輝石安山岩を使用した石皿である。細長い不定形な形状を示す扁平な礫で、片面のみ使用面を残す。

〔遺構の時期〕

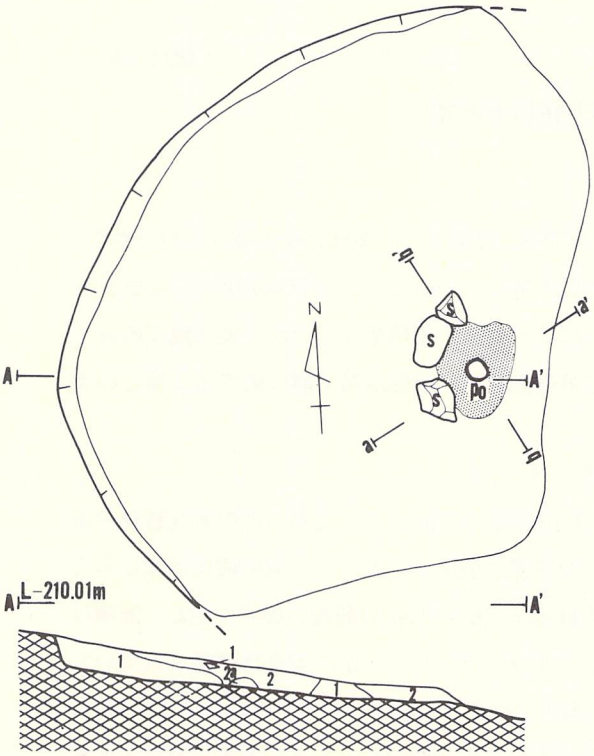
床面直上から出土した土器１や炉内出土の土器２～４の所属時期から考えて、縄文時代晩期中葉の後半に位置づけられるであろう。

５）Ｑ－10住居跡

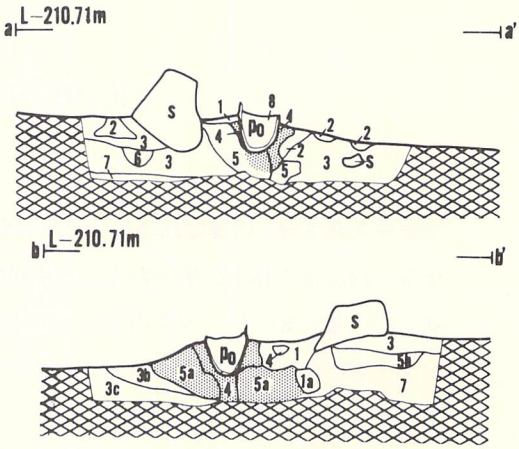
〔遺構〕　　（第11図、PL－８）

調査範囲の北東端に近いグリッドＱ９・10に位置し、北東向き緩斜面の下位に立地している。他の遺構との重複はないが、傾斜地に立地するため、斜面下位にかかる部分は残存しない。

残存する部分は北西－南東3.60m、北東－南西2.50m、最も高い南壁で0.16m の規模をもち、壁のカーブから推定すると本来は径3.80m～3.90m の円形を示す住居跡と考えられる。床面に



A．完掘平面図と土層図(縮尺　$\frac{1}{40}$)



B．炉跡断面図(縮尺　$\frac{1}{20}$)

Ｑ－10住居跡

層位	土色	土性
1	10 YR 2/1 黒色	砂質シルト。細粒浮石含む。
2	10 YR 1/2 黒色	細粒浮石１層より多い。
2a		２層より黒っぽい浮石含む。

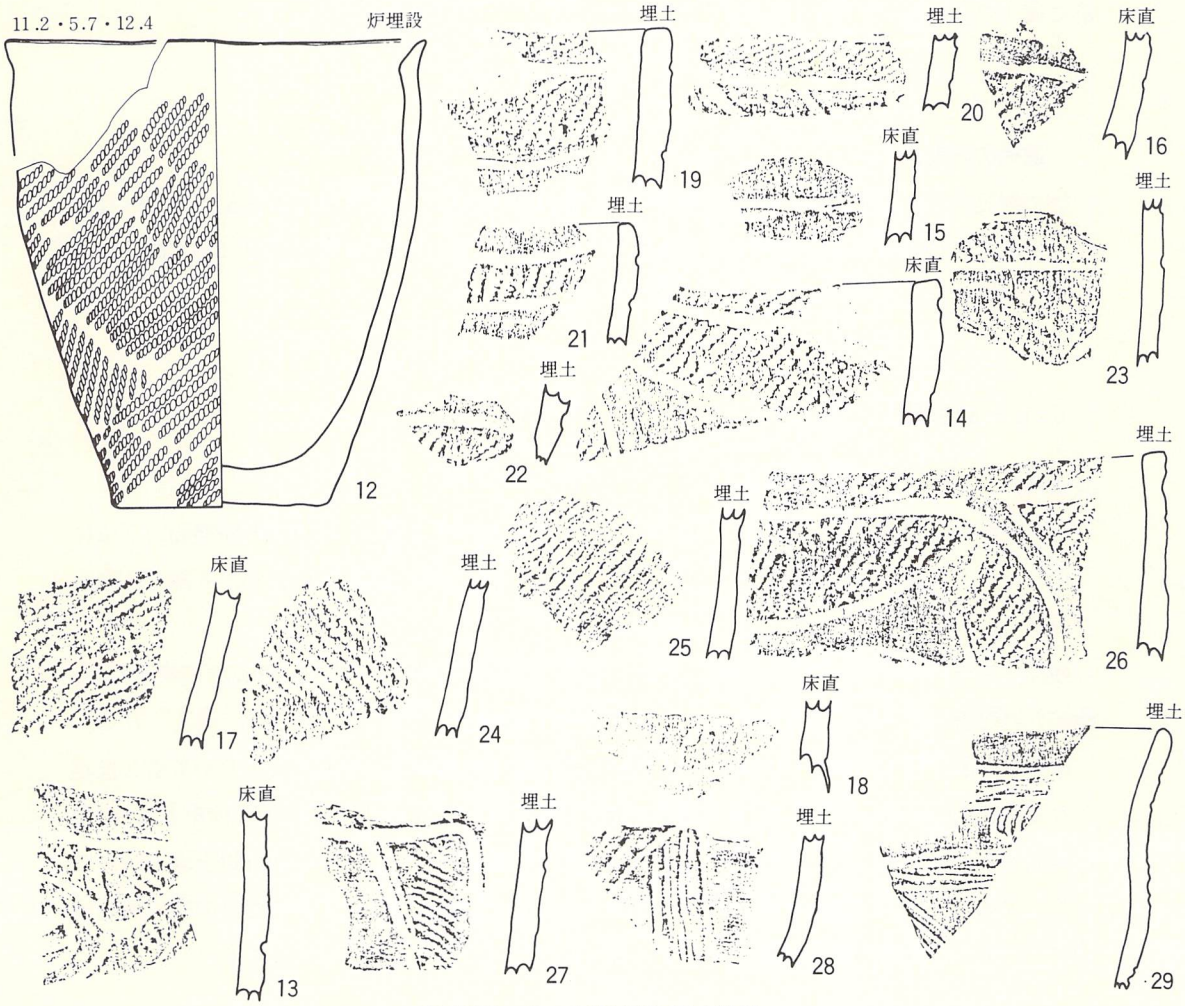
Ｑ－10住居跡　炉　a－a′、b－b′

層位	色調	土性
1a	10 YR 2/1 黒色	焼土混じる。
1b		浮石含む。
2	10 YR 1/2 黒色	砂っぽい。
3a	10 YR 2/3 黒褐色	黒10YR1/2のブロック含む。
3b		浮石多く含む。
3c		3b層より明るい。浮石含む。
4	5 YR 4/6 赤褐色	褐色7.5YR4/6に近い。
5a		焼土含む。
5b		浮石含む。
6	10 YR 5/6 黄褐色	中|厚浮石含む。
7	10 YR 3/3 暗褐色	浮石含む。
8	10 YR 2/1 黒色	〃

第11図　Ｑ－10住居跡

は凹凸もなくほぼ平坦であるが、斜面下位の北東に向かって全体が若干傾斜している。壁にも凹凸がなく軽く外傾している。床面のほぼ中央と推定される南壁の約2.00m北に、火床に小型の鉢形土器を埋設し、周囲に3個の礫を配置した石囲い炉が検出されている。炉石は南側にのみ残存し、3個のうち中央の一個は地上部を欠失し、地中部だけが残っていた。西側は径20cm、高さ10cm位のチャート質の亜角礫を使い、東側は径25cm・高さ20cmのスレート質粘板岩の亜角礫で、ともに床内に5cm～10cm埋め込んで配置している。中心部の土器は口縁部まで完全に埋め込み、その周囲の焼土は層厚5cm位あり、長時間使用されたと推定される。壁溝と柱穴は検出されていない。

埋土は2層に大別され、2層はさらに細分されているが、ともに黒色シルトの堆積である。1層には細粒の浮石を含む砂質で、若干粘性がある。2層は浮石の混入が1層より少なく、2′



第12図　Q－10住居跡出土遺物

は２層より僅かに黒味が強い。

〔遺物〕

炉内や床面直上、埋土内から縄文土器が出土している。

土　器　　（第12図12～29、PL－16）

12だけが完形土器で他は破片である。12は炉に埋設された土器で、器表に原体LR横回転による単節斜行縄文の付された粗製の小型鉢形土器である。13～18は床面直上から出土の破片で、このうち14は口縁部破片である。13～16は原体LRやRLの横回転や縦回転による単節斜行縄文の付された器面を沈線で区画し、その部分の縄文を磨消する特徴をもつ。16は縄文だけを付し、18は無文の破片である。19～29は埋土内からの出土であるが、19～26は床面出土の13～16の土器と同様の特徴をもつ。27もほぼ同様と推定される。28・29は無文の器面に多条の並行沈線のみで文様を付す土器である。以上の諸特徴から、12・17・24・25は第VI群、その他は第IV群に属する。

石　器

出土していない。

〔遺構の時期〕

炉に埋設された土器12では時期を決定することはできないが、床面直上から出土の13～16、埋土内出土の19～26はほぼ共通する要素をもつ土器であることから、本住居跡は縄文時代後期後葉に位置づけられることを示すものであろう。

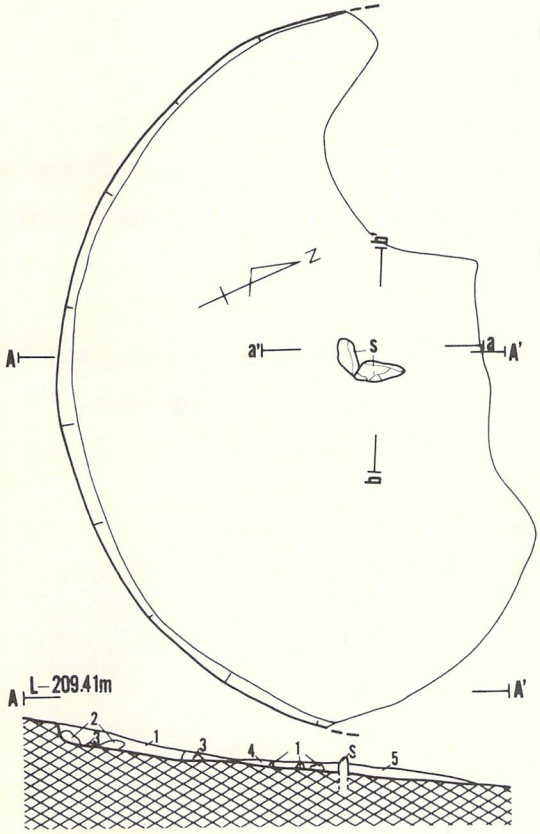
６）Ｕ－８住居跡

〔遺構〕　　（第13図、PL－９）

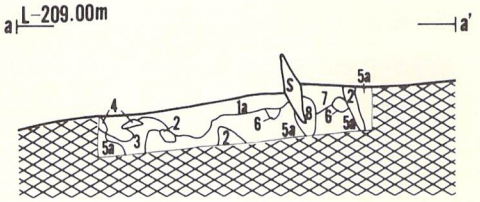
調査範囲の北東端に近いグリッドＵ８、Ｖ８にまたがって位置し、北東向き緩斜面の下位に立地している。重複する遺構はないが、斜面に立地することから斜面下位にかかる部分は残っていない。

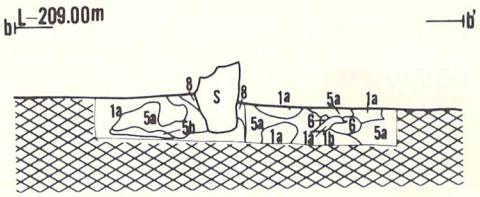
残存する部分は北西－南東3.80m、北東－南西2.30m、最も深い南壁で0.12mの規模をもち、検出された壁のカーブから推定すると、本来は径4.00m位の円形を示す住居跡と考えられる。

床面は凹凸もなく平坦で、良くしまり硬い。壁は若干外傾する。床面中央よりやや南と推定される南壁の北1.7mの床面で、２個扁平な礫をＬの字形に埋設した石囲い炉が検出された。礫は南側と東側に配置され、大きさは長さ20cm・25cm、高さ20cmで、ともに10cm以上埋め込んでいる。火床には表面に僅かな焼成の痕跡を残すのみで、層として図化できるだけの強い焼成は受けていない。壁溝や柱穴は検出されていない。



A．完掘平面図と土層図（縮尺　$\frac{1}{40}$）





B．炉跡断面図（縮尺　$\frac{1}{20}$）

U－8住居跡、炉、a－a′、b－b′

層位	色調	土性
1a	10 YR 3/2 黒褐色	地山、中堀浮石。
1b		1a層よりうすい色。
2	10 YR 3/1 黒色	地山、中堀浮石。
3	10 YR 4/6 褐色	〃　〃
4	7.5YR 4/6 褐色	〃　〃
5a	10 YR 3/3 黒褐色	〃　〃
5b		5a層より暗い。
6	10 YR 4/3 にぶい黄褐色	地山、中堀浮石。
7	10 YR 3/1 黒褐色	〃　〃
8	10 YR 1.7/1 黒色	石を埋めた時の埋土。

U－8住居跡

層位	色調	土性
1	10 YR 3/2 黒褐色	浮石、炭化物含む。
2	10 YR 3/2 黒褐色	浮石含む。
3	10 YR 3/3 黒褐色	〃
4	10 YR 3/1 黒褐色	〃
5	10 YR 3/1 黒色	粘性わずかある。

第13図　U－8住居跡

埋土は全てシルトの堆積であるが、僅かの違いによって5層に細分される。いずれもしまりと粘性があり、浮石を含む。色調には黒褐色と黒色がある。

〔遺物〕

埋土内から土器片と石器が出土している。

土　器　　（第14図30～36、PL－17）

30～32は器面に網目状撚糸文の付された大型の深鉢形土器の体部破片と推定され、3点は同一個体の可能性が強い。33は器面に原体LR横回転による単節斜行縄文を付した後、並行沈線を横走させる口縁部破片である。34・35は器面に縄文だけをもつ体部破片である。36は器面が荒

れているため定かでないが、縄文が付されるらしい。

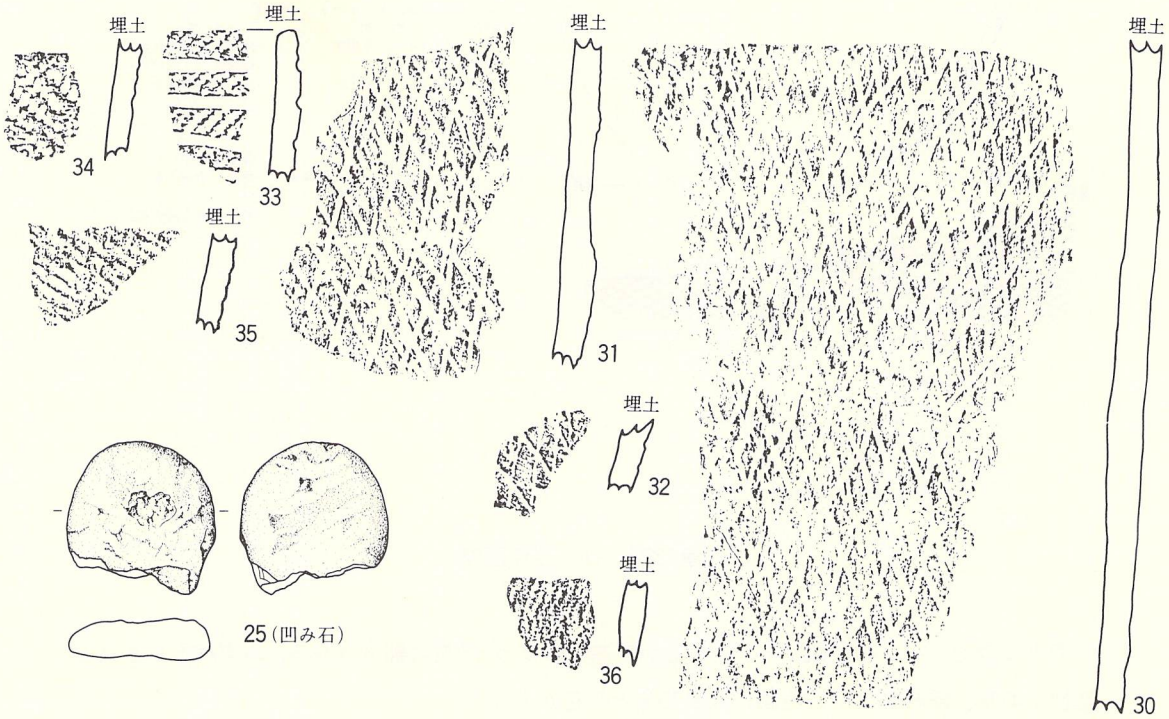
以上から33は第IV群、その他は第VI群に位置づけられる。

石　器　　（第14図25、PL—29）

25は北上山地古生界産の粘板岩を使用した凹み石である。大きさは全長5.2cm、幅5.8cm、厚み1.3cm、重さ70g で、実測図の下端を欠失するが本来は平面がほぼ円形、断面が扁平な形状を示す。片面にのみ使用部をもつがそれほど強いものではない。

〔遺構の時期〕

時期を確定し得る様な土器の出土状況ではないが、30〜32は後期前葉に多用される縄文であり、33は後期後葉頃の特徴であることから、縄文時代後期に属することは確実であろう。



第14図　U－8住居跡出土遺物

(2) 土　坑

検出された14基は調査範囲南側を東流する沢の左岸沿いに９基が位置し、その他の５基は調査範囲全域に点在する在り方を示している。

１）Ｂ－８土坑

〔遺　構〕　　（第15図、PL－10）

調査範囲の北北西端グリッドＢ８に位置し、北側を東に延びる尾根の南向き斜面裾部に立地する。重複する遺構はない。

開口部径0.88m×0.75m、底面径1.15m×1.10m、深さが最も深い西壁で1.00mの規模をもち、平面形は開口部が北北西一南南東に長軸をもつ楕円形、底面形がほぼ円形をなす土坑である。断面形は底面の上位0.70mに径0.60m×0.35mの楕円形を示す頸部をもつフラスコ形であり、頸部の上位は開口部に向かって外反する。壁面の内傾角度が不揃いで一部には凹凸が多い。開口部の位置が底面の中央に位置していないのが内傾角度が不揃いであることの結果である。底面は中央部が最も低く、壁寄りとは５cm～10cmの比高がある。

埋土はシルトや基本層序Ｖ層相当の火山灰質土が堆積するものの、色調には褐色・暗褐色・黒褐色等の差がある。いずれの層もしまりが良くて硬く、下位層ほど粘性が強くなる傾向がある。また、１層には炭化物、その他の層には基本層序Ｖ層の中掫浮石の混入が多く観察される。５～８層は平面的な堆積状況を示してはいるが、自然状態で埋没した土坑であろう。

〔遺　物〕

北壁際の底面から完形の浅鉢形土器が１点と、底面の中央15cm上位から円礫が２点出土した。

土　器　　（第15図37、PL－17）

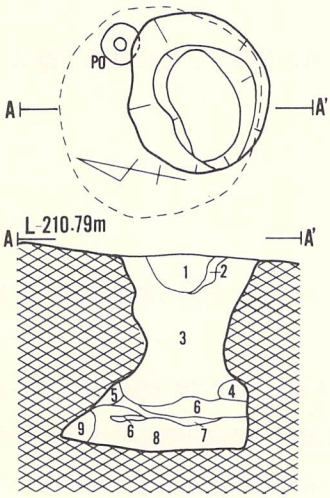
37は北壁際の底面直上に伏せた状態で出土した浅鉢形の土器である。大きさは口縁部径20.9cm、底部径6.0cm、器高9.3cmで体部は大きく外傾し、肩部に最大径をもって頸部で小さく窄み、口縁端部は外反している。肩部上端と頸部上端に並行沈線を全周させ無文としている。口縁部は２個一対の小突起が５箇所付され、口唇には縄文がつく。体部には原体LR横回転による単節斜行縄文が施される。以上の特徴から第Ｖ群に属する土器といえよう。

石　器

円礫が２点出土したが、使用の痕跡は残っていない。石器は出土していない。

〔遺構の時期〕

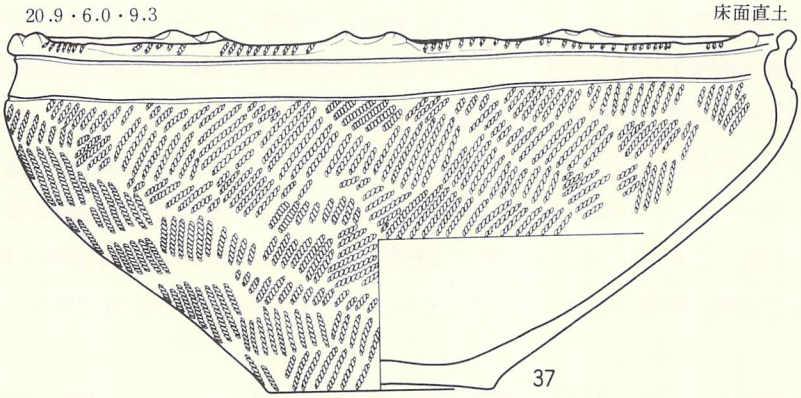
出土した土器は頸部の沈線等弥生土器に類似する点もあるが、確たる根拠もないので、ここでは縄文晩期終末の土器と理解し、本土坑もその頃と位置づけておく。



B－8土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 2/2 黒褐色	炭化物含む。基本層序Ⅴ層の火山灰含む。
2	10 YR 3/4 褐色	黒褐色混じる。
3	10 YR 2/2 黒褐色	基本層序Ⅴ層。中振火山灰含む。
4	10 YR 3/4 暗褐色	粘土質。
5	7.5YR 5/6 褐色	黒褐色混じる。
6	7.5YR 3/4 暗褐色	基本層序Ⅴ層。中振火山灰含む。
7	10 YR 2/3 黒褐色	締りあり、粘性ある。
8	10 YR 2/2 黒褐色	中振浮石含む。
9	10 YR 2/2 黒褐色	8層よりやわらかい。

縮尺　遺構　1/40
　　遺物　1/2



第15図　B－8土坑

2）D－21土坑

〔遺　構〕　　（第16図、PL－10）

調査範囲の西端でグリッドD21・22、E21・22に位置し、北側尾根の南向き斜面の中位に立地する。他の遺構と重複関係はない。

開口部径1.15m×1.10m、底部径0.98m×0.90m、深さは最も深い南西壁で0.40mの規模をもち、平面形が開口部・底部ともほぼ円形、断面形が浅いビーカー形の形状を示す土坑である。

底面の中央が壁際より10cm位低く、さらに全体が北北東に比高10cmで傾斜している。壁面にはほとんど凹凸がなくいずれも軽く外傾する。

埋土は5層に細分されているが、いずれもシルトが堆積し、色調が暗褐色・黒褐色・黒色と若干差がある。しまりがよく、全体にやや粘性があり下位層ほど強くなる。2層と4層には浮

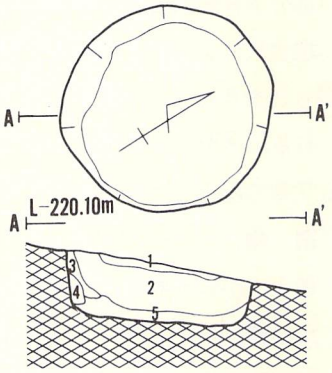
石粒が多く混入する。自然埋没した土坑であろう。

〔遺　物〕

全く出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土から最近の遺構とは考えられない。この付近は弥生土器が多く出土した地点であることから、弥生時代か縄文時代の土坑と推定される。



層位	土　色	土　性
1	10 YR 2/1 黒色	シルト。基本層序Ⅱ層。
2	10 YR 3/1 黒色	〃　浮石含む。
3	10 YR 3/2 黒褐色	〃
4	10 YR 3/4 暗褐色	基本層序Ⅴ層。
5	10 YR 3/1 黒褐色	3層と同じ。

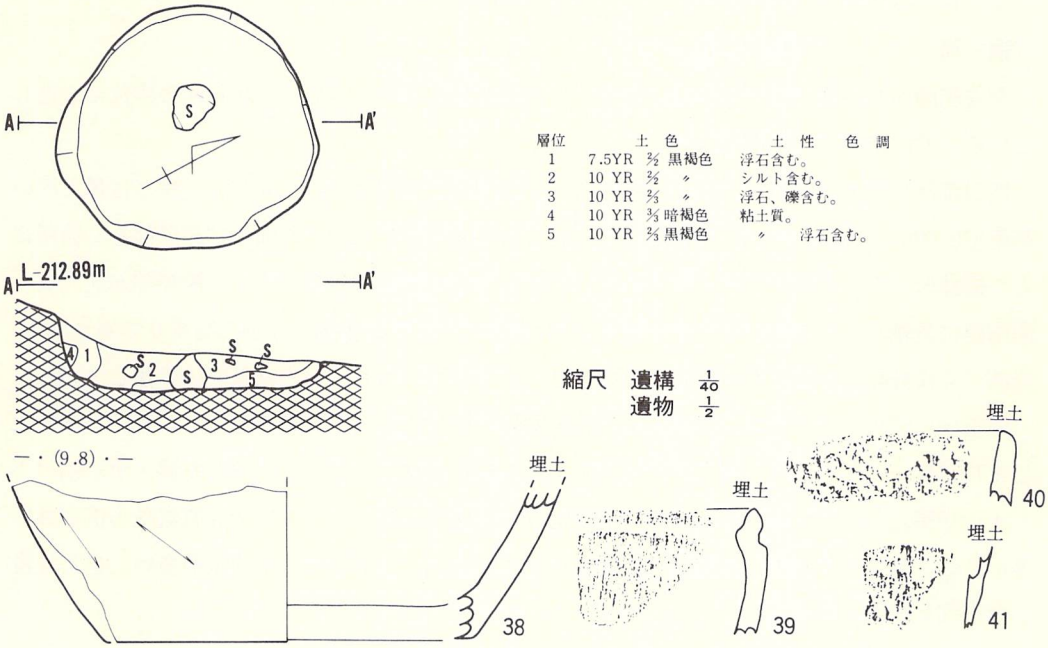
第16図　D－21土坑

3）F－14土坑

〔遺　構〕　　（第17図，PL－11）

調査範囲の北西寄りグリッドF14・15、G14・15にまたがって位置し、北側尾根の南向き斜面裾部緩斜面奥部に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.35m×1.30m、底部径1.25m×1.20m、深さは最も深い西壁で0.40mの規模をもち、平面形は若干歪んでいるがほぼ円形、断面形が皿形の形状を示す土坑である。底面には僅かの凹凸があり、中央部が低く壁際ほど高くなっている。壁面にも若干凹凸がみられ、全体的に不規則な部分が多い。壁の立ち上り角度は、ほぼ垂直に近



層位	土　色	土　性　色　調
1	7.5YR 3/2 黒褐色	浮石含む。
2	10 YR 3/2 〃	シルト含む。
3	10 YR 3/3 〃	浮石、礫含む。
4	10 YR 3/3 暗褐色	粘土質。
5	10 YR 3/3 黒褐色	〃　浮石含む。

第17図　F－14土坑

い部分もみられるが、外傾もしくは外傾気味を示す部分が多い。

埋土にはシルトと粘土質土が堆積し５層に細分され、色調には暗褐色と黒褐色がある。どの層もしまりが良くて硬く、全て粘性をもつ。浮石や粗砂等を混入する例（１・３・５層）もみられる。また、底面中央のやや西寄りに長径25cm，短径20cm，高さ20cmの亜角礫が底面に接する状態で出土している。おそらく、自然堆積で埋没した土坑であろう。

〔遺　物〕

埋土内から土器が出土している。

土　器　　（第17図38～41、PL－19）

38は体部下端に底部を僅かに残す無文の破片である。39は無文の口縁部破片である。40・41は器表に原体RL横回転による単節斜行縄文を付し、40は口縁部、41は体部の破片である。

以上からいずれも第VI群に属する。

石　器

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土した土器の内、39は無文ではあるが口縁部内側にも沈線が付されることから縄文晩期後葉に位置づけられると推定されるので、本土坑も縄文晩期後葉に属するであろう。

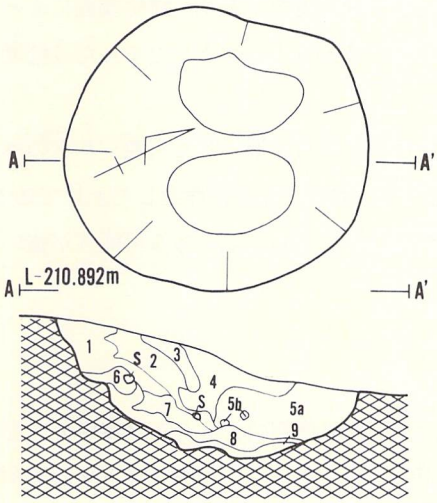
４）Ｇ－11土坑

〔遺　構〕　　（第18図、PL－11）

調査範囲の北西部グリッドＧ11に位置し、北側尾根の南向き斜面裾部緩斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.60m×1.60m、底部の東側0.70m×0.45m、西側0.65m×0.35m、深さは最も深い南壁で0.69mの規模をもち、平面形は若干歪んでいるがほぼ円形、断面形は最深部を二箇所にもつ擂鉢形に近い形状を示す土坑である。底面に平担な部分が観察されず、最深部が北北東－南南西に長軸をもつ楕円形を示す二箇所に分れ、その間は比高４cm～５cmの高まりで画される。壁面にも幾分起伏があり必らずしも良好とはいえないが、おおむね内湾気味に外傾している。

埋土はいずれもシルトで、色調や混入物・粘性の多少によって９層に細分される。全体的にしまりが良くて硬く、下位層ほど粘性が強く、１層にはほとんどない。浮石を混入する例（１～４）や褐色のシルト粒（火山灰の可能性あり）の混じる例（５・８）や砂質気味の例（９）等がある。色調には褐色・暗褐色・黒褐色・黒色があり、全体として黒色系が多い。自然埋没した土坑と推定される。



G－11土坑

層位	色　調	土　性
1	10 YR 3/2 黒褐色	浮石含む。褐色土混じる。
2	10 YR 3/3 暗褐色	浮石、礫含む。
3	10 YR 3/2 黒褐色	浮石多く含む。
4	10 YR 3/1 黒色	細粒浮石含む。
5a	10 YR 1/7 黒色	細粒浮石含む。
5b	10 YR 1/7 黒色	褐色混じりのブロック含む。
6	10 YR 3/2～3/3 黒褐色～暗褐色	汚れた色。
7	10 YR 3/4 褐色	黒褐色が混り汚れている。
8	10 YR 3/1 黒色	褐色土ブロック状に混入。
9	10 YR 3/4 褐色	砂質。

第18図　G－11土坑

〔遺　物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

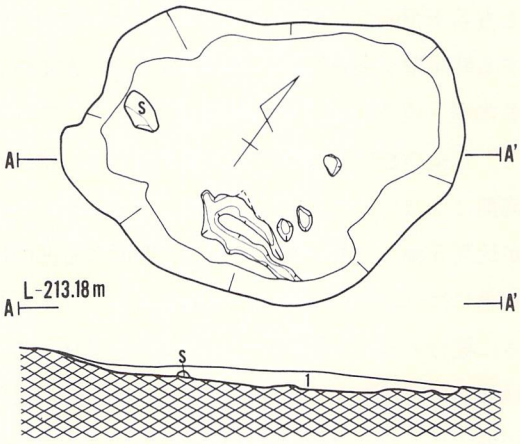
時期を決定する土器の出土はないが、形状や埋土の状況から考えて縄文時代の遺構と推定される。しかし、時期の特定はできない。

5）K－15土坑

〔遺　構〕　　（第19図，PL－11）

調査範囲の中央部寄からやや北西に寄ったグリッドK15に位置し、北側尾根南側裾部緩斜面の上位に立地するが、形状が不規則で人為的な遺構とするのに問題を残しているが、とりあえず遺構として記述する。他の遺構と重複関係はない。

開口部径2.15m×1.50m、底部径1.80m×1.30m、深さが最も深い西壁で10cmの規模をもち、平面形は北西－南東に長軸をもつ不整な楕円形、断面形が浅い皿形を示す土坑である。平面的な形状が不規則であ



K－15土坑

層位	色　調	土　性
1	10 YR 3/1 黒色	砂質シルト。十和田A火山灰含む。

第19図　K－15土坑

ることは既述したが、底面も凹凸が著しく、さらに酸化鉄の集積があり、銹化凝固によって底面が厚さ1cm～1.5cmが層状に硬くなっている。このことはある一時期水がたまったり乾燥したりした結果を示すものであろう。

埋土は十和田a降下火山灰と推定される汚れた白色粗粒浮石が混入した黒色シルトの単層である。若干砂質であるが、しまり良く僅かに粘性をもつ。おそらく自然埋没した土坑であろう。

以上のことから、人為的な土坑とするには問題があり、自然の窪地である可能性が強い。

〔遺　物〕

出土していない。

〔遺物の時期〕

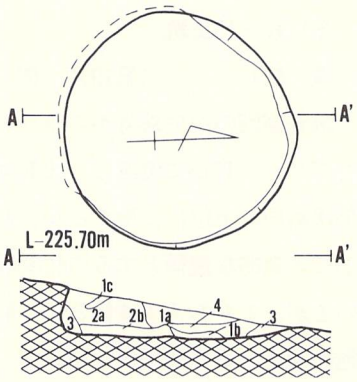
遺構とするには問題があるものの、遺物の出土がないため何時頃できたかは特定できない。しかし、本土坑に水を流し込む南側に隣接する小規模な埋没谷には十和田a降下火山灰が堆積し、さらに平安時代の土師器（甕）が出土していることから、本土坑は平安時代頃に形成された可能性が強い。

6）K－27土坑

〔遺　構〕　　（第20図，PL－12）

調査範囲の南西端に近いグリッドK27に位置し、北東向き斜面の中位に立地する。重複する遺構はない。

開口部径1.30m×1.25m、底部径1.20m×1.15m、最も深い南壁で0.24mの規模をもち、平面形が開口部・底部とも若干歪んだ円形を示す土坑である。斜面下位に位置する北東壁が遺存しないため詳細不明であるが、遺存する南壁～西壁は強く内傾する状況を示していることから、本来の断面形はフラスコ形であろうと推定される。底面にはほとんど凹凸はないが、中央部がやや低く壁際が比高5cm位で高くなっている。壁面にも凹凸はない。埋土にはシルトが堆積し、4層に大別され1・2層はさらに細分されている。いずれも良くしまり、3・4層には僅かに粘性をもつ。また、1層には小礫や褐色シルトが混入し、2a層にも地山粒子の混じりが多い。色調は褐色と黒褐色である。自然堆積とするには不自然とも考えられる。



K－27土坑

層位	土　色	土　性
1a	10 YR 3/4 褐色	礫含む。
1b	10 YR 3/4 褐色	
1c		黒褐色混じる。
2a	10 YR 3/2 黒褐色	礫含む。
2b	10 YR 2/2 黒褐色	地山褐色土が混じる。
3	10 YR　黒褐色	
4	10 YR 3/1 黒褐色	締りある。粘性ある。

第20図　K－27土坑

〔遺　物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので確定的でないが、形状や埋土の状況から考えて縄文時代の土坑と推定される。

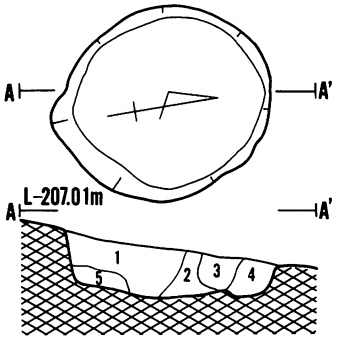
7）R－7土坑

〔遺　構〕　　（第21図、PL—12）

調査範囲の北東端でグリッドR7・8、S7・8にまたがって位置し、西側尾根の北東向き斜面裾部緩斜面下位に立地する。他の遺構と重複関係はない。

開口部径1.10m×1.05m、底部径1.00m×0.90m、最も深い南壁で0.35mの規模をもち、平面形が開口部・底部とも南北に長軸をもつ楕円形を示す土坑である。南壁の壁面が一部内傾するが、他はほぼ直立かやや外傾気味であることから、本来は断面形がフラスコ形であった可能性が強い。底面、壁面ともに若干の凹凸があり、特に底面の中央が壁際より10cm位低くなっている。

埋土は5層に分けられ、そのほとんどは砂質シルトの堆積である。1～3層には浮石粒が含まれ、4層には黒褐色、5層には暗褐色のシルトが塊状に混入している。色調は黒褐色と黒色である。自然埋没とするには不自然な堆積状況である。



R－7土坑

層位	色　調	土　性
1	10 YR 3/1 黒色	細粒浮石含む。
2	10 YR 3/2～3/1 黒褐色	砂質シルト。浮石含む。
3	10 YR 3/2 黒褐色	〃　〃
4	10 YR 3/1 黒色	〃　〃 黒褐色ブロック含む。
5	10 YR 3/1 黒色	〃　〃 暗褐色のブロック含む。

第21図　R－7土坑

〔遺　物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土はないが、形状や埋土から縄文時代の遺構と推定される。

8）U－7土坑

〔遺　構〕　　（第22図、PL—12）

調査範囲の北東端でグリッドU7に位置し、東流する沢の左岸で南東面する緩斜面の下位に立地する。重複する遺構はない。

開口部径1.15m×1.10m、底部径0.85m×0.80m、最も深い南壁で0.51mの規模をもち、平面

形が開口部はほぼ円形、底部が不整円形を示す土坑である。断面形はボール形に近似し、底部の中央部に径30cm×25cmの楕円形で、10cmの深さをもつ副穴がある。壁面には軽い凹凸があり、やや不規則である。

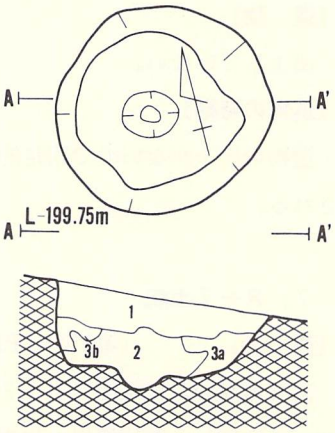
埋土は3層に大別され、3層はさらに細分されている。いずれの層もシルトの堆積であるが、全体が砂質がかり、1・2層には炭化物が混入し、3層には細礫が混じっている。しまりが良くて硬く、粘性がある。おおむね自然堆積と理解される。

〔遺　物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から縄文時代の土坑と推定されるが、遺物の出土がないため時期は特定できない。



U－7土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 3/4 黒色	砂質シルト、浮石含む。炭化物少量含む。
2	10 YR 3/2 黒褐色	〃　〃　〃
3a	10 YR 3/3 暗褐色	〃　、細粒の礫含む。
3b	10 YR 3/3 暗褐色	3aと同じ。明るい色混じる。

第22図　U－7土坑

9）V－15土坑

〔遺　構〕　　（第23図、PL－13）

調査範囲東端のグリッドV15に位置し、東流する沢の左岸沿いで北東面する緩斜面の下位に立地している。他遺構との重複はない。

開口部径0.80m×0.75m、底部径0.70m×0.65m、最も深い南壁で0.61mの規模をもち、平面形は開口部・底部ともほぼ円形を示す土坑である。壁面が直立か外傾しており、断面形は浅い皿形である。壁面、底面とも凹凸がなく平滑であるが、底面は壁際に比較すると中央部が僅か低くなっている。

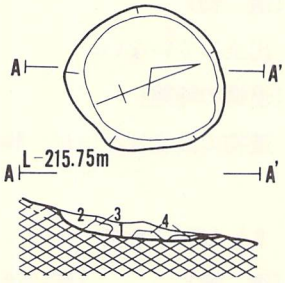
埋土は4層に細分されるが、いずれもシルトの堆積である。しまりが良く粘性をもち、1層～3層には浮石の混入がある。4層は地山の塊状混入である。自然埋没による堆積であろうか。

〔遺　物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から考えて、縄文時代の土坑と推定される。



V－15土坑

層位	色調	土性
1	10 YR 3/2 黒褐色	浮石含む。
2	10 YR 3/2 黒褐色	〃
3	10 YR 3/4 暗褐色	砂っぽい浮石含む。
4	10 YR 5/6 褐色	硬く締り粘性ある。

第23図　V－15土坑

10）Ｖ－16土坑

〔遺　構〕　　（第24図、PL－13）

調査範囲の東端でグリッドＶ15・16にまたがって位置し、東側を北流する沢の左岸沿いで北東面する緩斜面の下位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径0.80m×0.75m、底部径0.70m×0.65m、最も深い南端で0.50mの規模をもち、平面形は開口部・底部とも円形を示す土坑である。底面の中央が壁際より10cm位低く、さらに壁面が内湾気味に外傾しており、断面形は半円形に近いボール形である。また、底面中央には径18cm×10cm、深さ10cmで平面形が東西に長軸をもつ楕円形の副穴がある。他は底面・壁面とも凹凸がなく平滑である。

埋土には浮石や炭化物（１・２層）、細礫（３層）、暗褐色シルト（４層）が混入したシルトが堆積し、４層に細分されている。全体的にしまりがあって硬く、１・２層には粘性がほとんどないが、下位の３・４層は粘質である。色調には暗褐色・黒褐色・黒色がある。自然堆積による埋没であろう。

〔遺　物〕

土器が１点出土している。

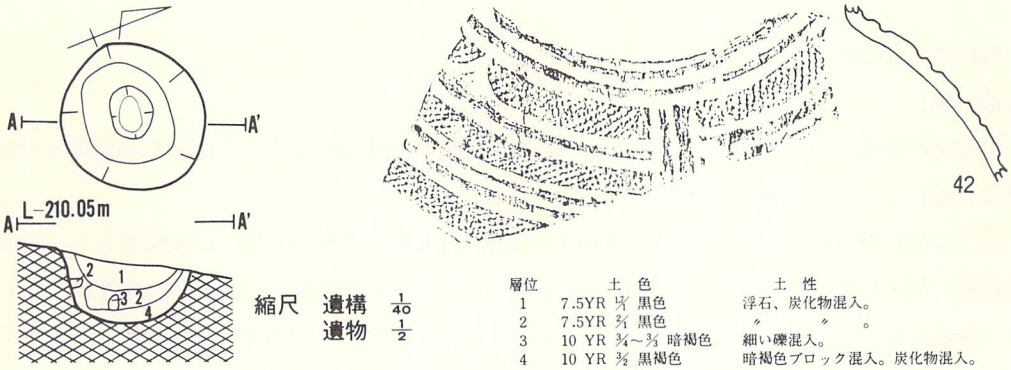
土　器　　（第24図42、PL－18）

埋土下部から出土した。原体LR横回転による単節斜行縄文を付した器面を直線的な並行沈線で区画し、一部の縄文を磨消する文様をもつ壺形土器の頸部～肩部を残す破片である。

以上の特徴から第Ｖ群に属するであろう。

〔遺構の時期〕

出土した土器の所属時期から考えて、縄文晩期後葉に位置づけられるであろう。



層位	土　色	土　性
1	7.5YR 1/2 黒色	浮石、炭化物混入。
2	7.5YR 2/1 黒色	〃　　〃　　。
3	10 YR 3/4～3/3 暗褐色	細い礫混入。
4	10 YR 3/2 黒褐色	暗褐色ブロック混入。炭化物混入。

第24図　Ｖ－16土坑

11）W－18土坑

〔遺　構〕　　（第25図、PL－14）

調査範囲の東端グリッドW18に位置し、東側を北流する沢の左岸沿いで北面する緩斜面の下位に立地する。他の遺構との重複はない。

開口部径0.95m×0.85m、底部径1.25m×1.15m 最も深い南壁で0.68m の規模をもち、平面形は開口部・底部ともほぼ円形を示す土坑である。壁面は底面の上位40cmまでは強く内傾し、その上位はほぼ直立することから、本来の断面形は頸部をもつフラスコ形と考えられる。底面に近い壁面は外方に軽く抉られ、底面とは直立気味に接続している。底面には大きな起伏もなくほとんど平坦である。

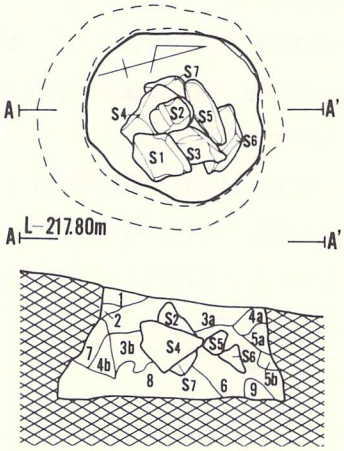
埋土は暗褐色・黒褐色・黒色を示すシルトが堆積し、9層に細分されている。2層以外は良くしまり、浮石や地山粒子がほぼ全層に混入している。また、埋土の中位には円礫1点、亜角礫5点の大型礫が積み重ねられており、人為的な投棄と推測された。土層にも乱れがみられることから人為的に埋め戻された可能性が大きい。

〔遺　物〕

多くの亜角礫や円礫が出土したものの、遺物の出土はなかった。

〔遺構の時期〕

形状や埋土の状況から考えて、縄文時代の土坑であろう。



W－18土坑

層位	色調	土性
1	10 YR ⅔ 黒褐色	地山の混入ある。
2	10 YR ¾ 暗褐色	浮石、礫を含む。
3 a	10 YR ⅔ 黒色	浮石含む。
3 b		〃　3a層より黒さがうすい。
4 a	10 YR ⅔ 黒褐色	〃
4 b	10 YR ⅔ 黒褐色	浮石多く含む。地山の混入ある。
5 a	10 YR ¾～⅔ 暗褐色	地山と暗褐色混じる。
5 b		5a層より黒っぽく混じる。
6	10 YR ⅔ 黒褐色	礫を含む。
7	10 YR ⅚～⅔ 褐色	暗褐色と地山の混じったもの含む。
8	10 YR ⅔ 褐色	浮石含む。地山のブロック含む。
9		暗褐色10YR¾と褐色⅚が混じったもの。

第25図　W－18土坑

12）W－22土坑

〔遺　構〕　　（第26図）

調査区の東端でグリッドW22に位置し、東側を東流する沢の左岸沿いで北面する緩斜面の中位に立地している。重複する遺構はない。

開口部径1.38m×0.96m、底部径1.00m×0.55m、最も深い南壁で0.52m の規模をもち、平面形が開口部・底部ともほぼ南北に長軸をもつ楕円形を示す土坑である。底面のうち南半分が4～5cm低くなるが、その他は凹凸もなくほぼ平坦である。壁面にも凹凸はなく平滑で、若干外傾し断面形は浅いビーカー形に近い形状を示す。

埋土には暗褐色・黒褐色・黒色を示すシルトが堆積し、12層に細分される。全体的に浮石が

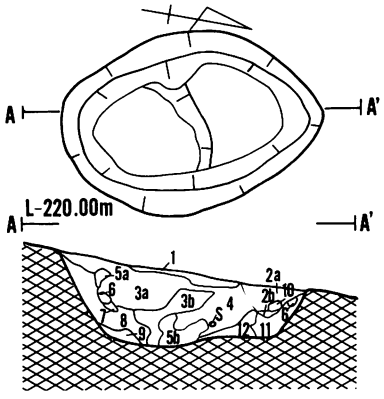
多く混入し、良くしまっている。粘性が比較的強く、下位層ほど顕著である。人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺　物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので断定できないが、形状や埋土の状況から縄文時代の遺構であろう。



W－22土坑

層位	色　調	土　性
1	10 YR ⅓ 黒色	浮石含む。
2 a	10 YR ⅔ 黒色	白色浮石含む。
2 b		浮石２層より含まない。
3 a	10 YR ⅔ 黒褐色	浮石多く含む。
3 b	10 YR ⅔ 黒褐色	浮石少量含む。
4	10 YR ⅔ 黒褐色	浮石含む。
5 a	10 YR ⅔～¾ 暗褐色	細粒浮石含む。
5 b		
6	10 YR ¾ 暗褐色	極細粒浮石含む。
7	10 YR ⅔ 暗褐色	浮石多く含む。
8	10 YR ⅔ 暗褐色	〃　〃　７層より明るい。
9	10 YR ⅔ 暗褐色	〃　〃　８層　〃
10		２層と５層の混じり。浮石含む。
11	10 YR ⅔ 黒褐色	〃　４層より明るい。
12	10 YR ⅔ 暗褐色	〃

第26図　W－22土坑

13）X－20土坑

〔遺　構〕　　（第27図　PL－14）

調査範囲の東端でグリッドX20・21にまたがって位置し、東側を北流する沢の左岸沿いで北面する緩斜面の中位に位置している。他の遺構との重複関係はない。

開口部径1.54m×1.20m、底部径1.30m×1.05m、最も深い南壁で0.50mの規模をもち、平面形が開口部・底部とも隅丸長方形気味の楕円形をなす土坑である。底面の中央は壁際より幾分低いが凹凸はなく、壁面も同様に平滑で僅かに外傾し、断面形は浅いビーカー形に近い。

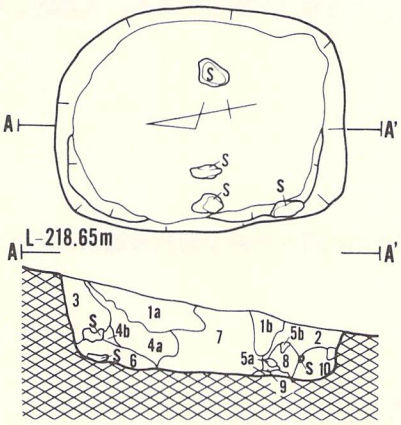
埋土は10層に細分されているがいずれも近似しており、大差のないシルトが堆積している。浮石や砂粒が多く混入し、全体的に良くしまり硬い。また、比較的粘性が強く、この傾向は下位層ほど顕著である。色調には暗褐色・黒褐色・黒色等がある。土層に乱れが観察されることから、人為的に埋め戻された可能性がある。

〔遺　物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

出土遺物はないが、形状・埋土は縄文時代の土坑であることを示す。



X－20土坑

層位	色調調	土　性
1a	10 YR 3/1 黒色	浮石含む。
1b	10 YR 3/1 黒色	〃
2	10 YR 3/1 黒色	〃　炭化物少量含む。
3	10 YR 3/2 黒褐色	細粒浮石含む。
4a	10 YR 3/1 黒色	浮石含む。黒褐色ブロック含む。
4b		4a層より明るい。暗褐色と混じる。
5a	10 YR 3/4 暗褐色	浮石含む。
5b		黒色混じる。
6	10 YR 3/3 黒褐色	浮石含む。
7	10 YR 3/2 黒褐色	〃
8	10 YR 3/1 黒色	〃
9		黒色と暗褐色混じる。
10	10 YR 3/4 暗褐色	浮石含む。

第27図　X－20土坑

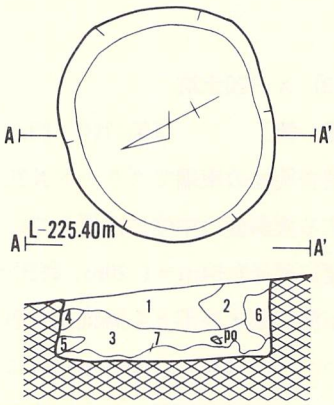
14）Y－29土坑

〔遺　構〕　　（第28図、PL－15）

調査範囲の南東端でグリッドY29・30にまたがって位置し、東側を北流する沢の左岸に沿った北東緩斜面の中位に立地している。他の遺構との重複はない。

開口部径1.25m×1.10m、底部径1.10m×0.94m、最も深い南壁で0.48mの規模をもち、平面形が開口部・底部径とも円形を示す土坑である。底面には若干起伏があるもののほぼ平坦で、壁面も同様である。壁面はやや内傾気味の部分もみられたが、全体的には外傾する部分が多くみられた。断面形は本来はフラスコ形の可能性も考えられる。

埋土は砂質シルトで、色調によって7層に細分される。比較的しまりが良く、若干粘性をもつ。砂粒や浮石粒が多く混入し、色調には暗褐色・極暗褐色・黒褐色・黒色等がある。おそらく、自然堆積で埋没した土坑であろう。



Y－29土坑

層位	土　色	土　性
1	7.5YR 3/1 黒色	砂質シルト。浮石粒の混入あり。
2	7.5YR 3/1 黒褐色	〃　〃
3	7.5YR 3/2 黒褐色	〃　〃
4	7.5YR 3/3 極暗褐色	〃　〃
5	7.5YR 3/3 暗褐色	〃　〃
6	4層と同じ	基本層序V層に近い中堀浮石層。
7	7.5YR 3/3 極暗褐色	砂質シルト。砂粒の混入が多い。

第28図　Y－29土坑

〔遺　物〕

出土はない。

〔遺構の時期〕

縄文時代の土坑とは考えられるが、遺物の出土がないので定かでない。

(3) 焼土遺構

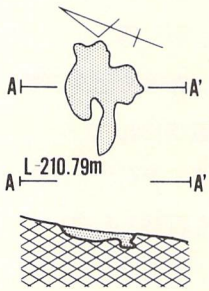
本遺跡から検出された焼土遺構は１箇所のみである。

１） Ｃ－７焼土遺構

〔遺　構〕　　（第29図、PL—15）

調査範囲の北西端でグリッドＣ－７に位置し、北側尾根の南東向き斜面の中位に立地する。他の遺構との重複はない。

基本層序第Ｖｃ層の上面が焼成を受けた焼土で、長径0.60m、短径0.40mの不整形な広がりをもつ。層厚６cmほどで色調は赤褐色を示す。中央部が最も強い焼成を受け、周辺部は焼成が弱く、層厚も薄い。おそらく焚き火跡であろう。



第29図　Ｃ－７焼土

〔遺　物〕

出土していない。

〔遺構の時期〕

遺物の出土がないので定かでないが、周辺の同位層から縄文時代中期初葉の円筒上層ｂ式土器が出土しており、縄文時代中期頃の焼土である可能性が大きい。

(4) 埋設土器

埋設土器とするには若干問題があるものの横転状態で出土した土器の中から磨石が２点出土したことから、とりあえず埋設土器として認定した。

１） Ｄ—11埋設土器

〔遺　構〕　　（PL—15）

調査範囲の北端に近いグリッドＤ11に位置し、北側尾根の東向き斜面裾部の緩斜面上位に立地している。他の遺構と重複はない。

本遺構は基本層序Ｖａ層中に横転し、潰れていた鉢形の土器であるが、土器の内部に赤色と白色を示す磨製の円礫各１個の２個が入っていた。

土器は口縁部を南に向けて横転し、内部に先の円礫２個と若干の土を入れたまま土圧で潰れていた。なお、土器を埋設する際の掘り方は確認されていない。

〔遺　物〕

土器１点と石器２点からなる。

土　器　　（第36図43、PL—18）

口縁部径16.7cm、底部径5.5cm、器高14.2cmの鉢形土器の完形である。底部から外傾する体部は肩部に最大径をもって頸部で窄み、口縁部は外反する器形を示す。口縁部には5箇所に三角形に尖る突起を有し、口唇部には小さな刻目を付す。頸部には3条の並行沈線を全周させ、無文としている。体部の器表には原体LR横回転による単節斜行縄文を全面に施す。

第V群に属する。

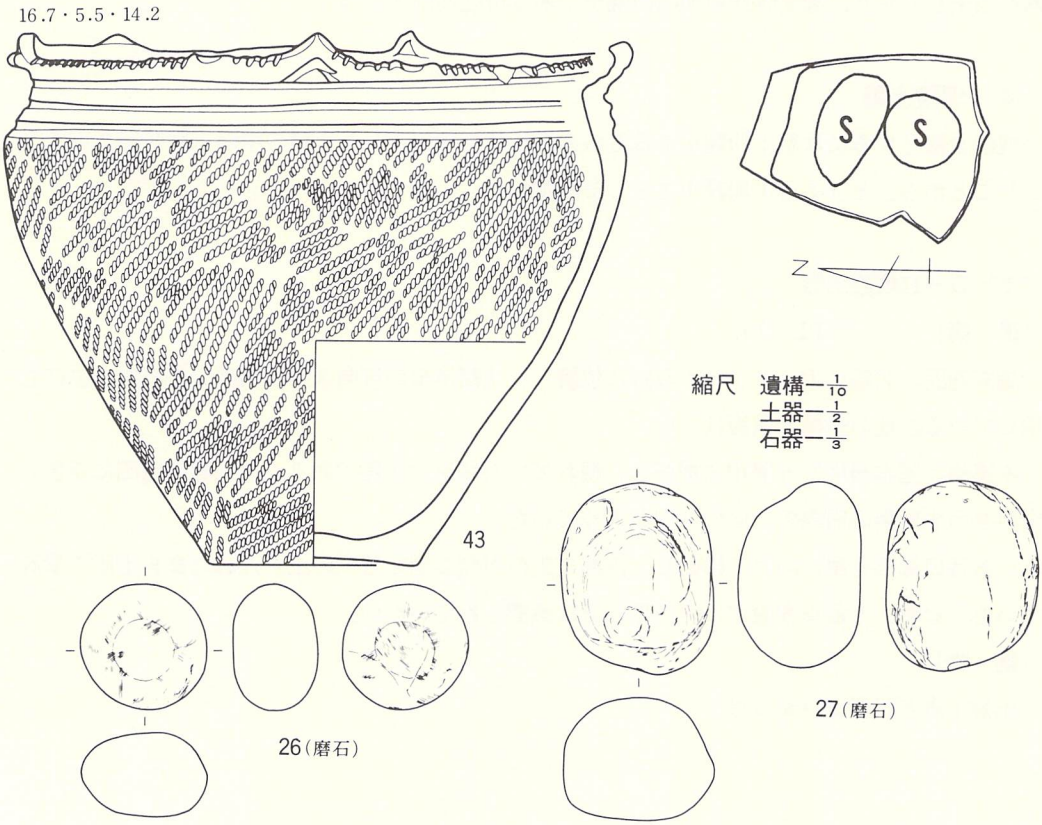
石　器　　（第32図29、PL—29）

26は全面を研磨し平面円形、断面楕円形状扁平に仕上げた磨石である。径5.0cm、厚さ3.0cm重さ130gであり、北上山地古生界産のチャートを石材としている。27は一部に僅かな研磨痕を残す磨石で、長径7.4cm、短径6.0cm、厚さ5.0cm、重さ340gあり、北上山地古生界産のチャートを石材としている。

以上の2点は磨石として分類したが、本来「玉」的な使われ方があったのではないかと推測している。色調も26は灰白色、27は鉄銹色に近いくすんだ淡い赤褐色を示し、あたかも「紅白の玉」を土器の中に納めていた様子を連想することができる。

〔遺構の時期〕

出土した土器は縄文晩期後葉に属することから、本遺構もその頃に埋設されたものであろう。



第30図　D—11埋設土器

(5) 遺構外の遺物

遺構外から出土した遺物には縄文土器、弥生土器、陶磁器類、石器と石製品、金属製品の各種がある。しかし、量的には縄文土器が最も多く、次いで弥生土器、石器類と続き、その他は各数点の出土である。本項ではそれらを各種類ごとに分類し、その概要について記することにする。なお、所属する時代は縄文・弥生・中世以降現代までであるが、文章記述の中で所属時期を明記することとする。

1)縄文土器

本遺跡から出土した遺物の中で、縄文土器が最も多く、全体の95%以上を占めている。この縄文土器には早期、前期、中期、後期、晩期の各時期に位置づけられるものが混在し、晩期が85%以上を占めている以外は、僅かの出土量である。ここでは時期別に細分し、その内容について記することとする。

〔第Ⅰ群土器〕　　(第31図1～3、PL—19)

早期に属する土器である。出土量は掲載した点数が全てである。出土地点は、南側を東流する八木沢の左岸沿いで、1は第Ⅵ層上面、2・3は攪乱を受けた表土層中から出土した。

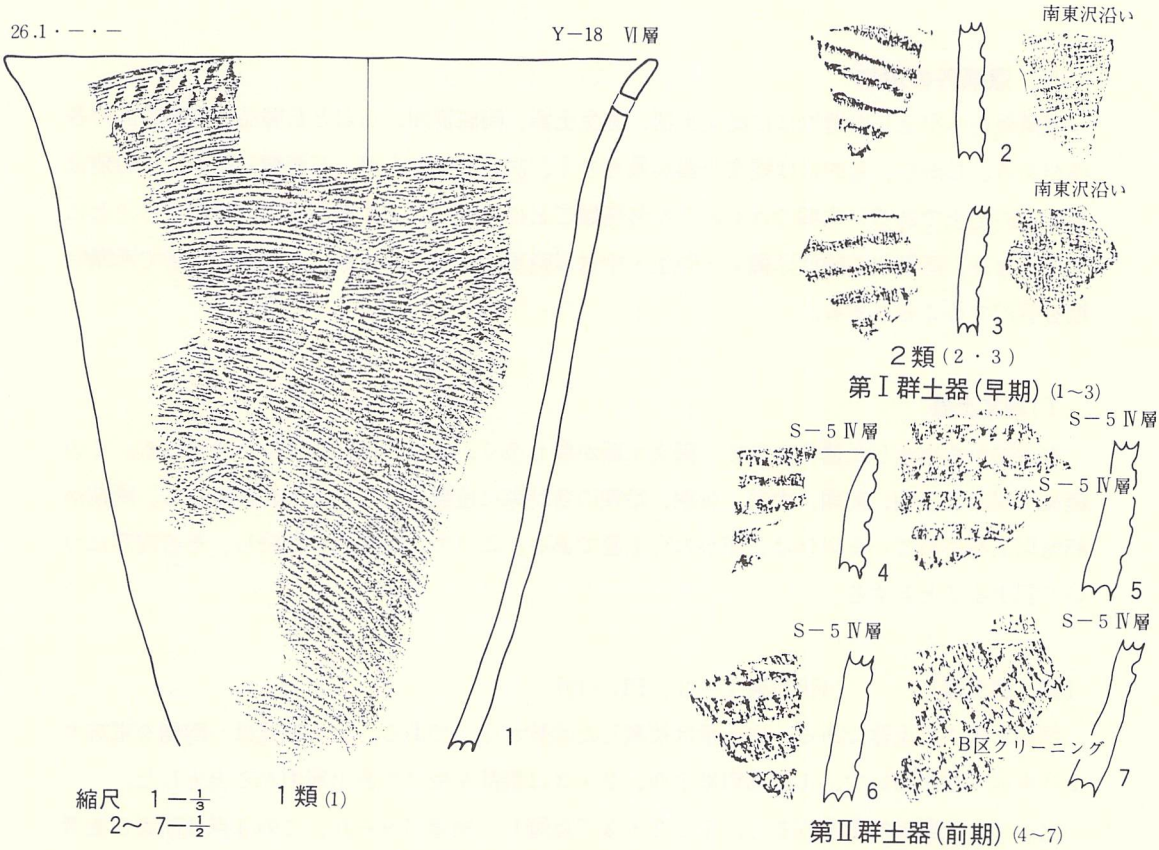
出土した土器の特徴をみると，1と2・3では著しい相違がみられ、この3点は前者と後者に細分される様相を示している。

1　類　　(1)

口縁部から体部下位までを連続して残存する破片で、口縁部が外反する尖底深鉢となる器種と推定される。器表全面に貝殻条痕文が横方向～斜方向に付され、口縁部には右傾する擬似爪形文が、箆先による左側からの斜位刺突の引き起しによって付されている。内面は一部ザラッとした調整もみられるが、ほとんどは丹念に仕上げられ、光沢をもつ部分が多い。器壁は7㎜～8㎜とやや厚く作られ、口縁端部が若干薄くなり口唇は丸くおさまる。胎土には砂粒の混入が多く、さらに僅かの繊維も混じる。焼成は非常に良好である。以上から白浜式に属する。

2　類　　(2・3)

体部の小破片であるため詳細は定かでないが、器表に幅3㎜～4㎜の条線を横方向や斜方向に付し、内面には横方向の貝殻条痕文をもつ土器である。器壁の厚さは5㎜～7㎜位で、胎土は緻密な粘土を使用し、砂粒の混入、繊維の混入ともほとんどない。器面の調整は、光沢をもつほどではないにしても入念である。内面は条痕文を付したため、ザラッとしている。焼成は非常に良好である。小破片のための器形も定かでないが、このような特徴から考えて、一般にムシリⅠ式と呼んでいる土器に相当するであろう。



第31図　遺構外の遺物(縄文土器－1)

〔第Ⅱ群土器〕　　(第31図4～7、PL－19)

前期に属する土器である。小破片であるため全体的なことは不明であるが、器表に0段多条による原体LR横回転による単節斜行縄文が付され、さらに、縄文を付す器面に横方向の幅3㎜位の沈線を入れている。器壁は3㎜～7㎜とバラツキが大きく、器面調整も粗雑である。胎土には少量の砂粒と多量の繊維が混入している。以上のような文様をもつ土器は、春日町式土器として理解されていることから、この土器も同様であろう。

〔第Ⅲ群土器〕　　(第32～34図8～33、PL－19～20)

中期に位置づけられる土器であるが、この中に大木式土器と円筒上層式土器が混在していることから、この両者を細分した。量的にはいずれも少なく出土地点も若干異なっている。大木式土器は遺跡のほぼ中央付近、円筒式土器は北東端から出土している。

1　類　　(8～17)

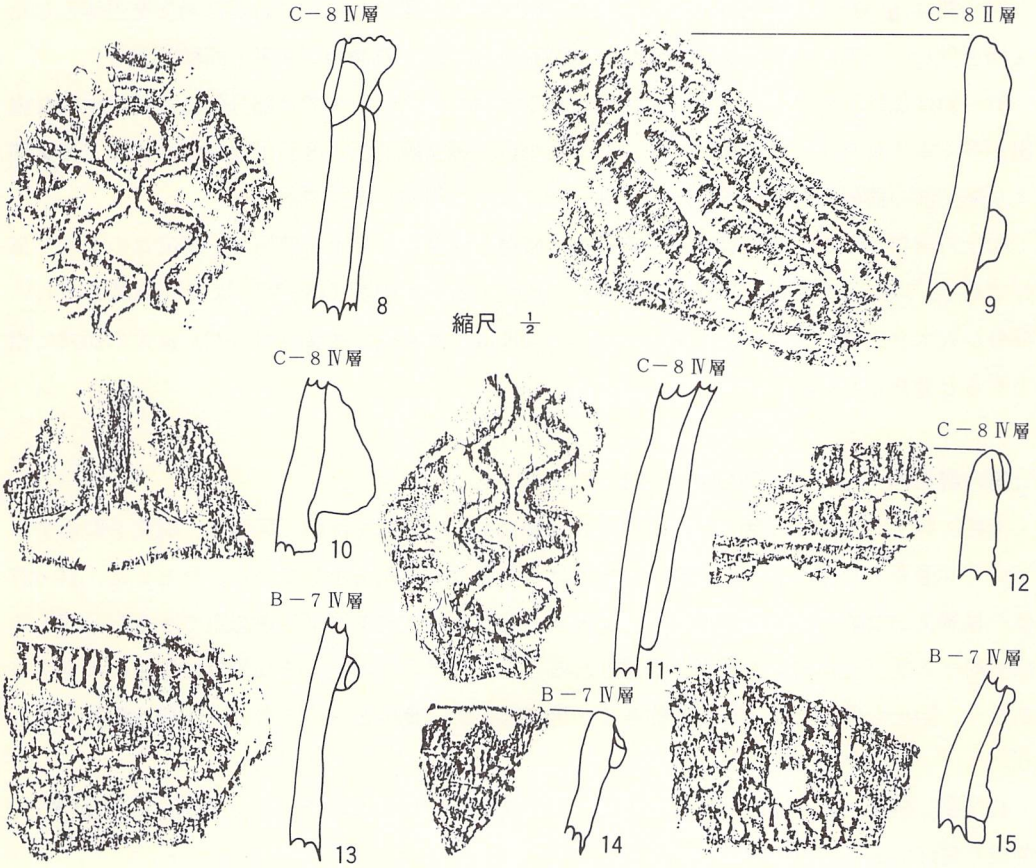
円筒上層式に属する土器を一括したが、この中には施文技法の異なる二種類の土器がある。

8～15は、粘土紐の貼付による隆起帯と縄文原体の側面圧痕によって文様を付す土器である。器面を調整した後粘土紐を貼り付け、その上面にも原体側面を直線的または曲線的に押圧し、さらに頸部～口縁端部は直接原体の側面を押圧して文様を付している。体部の器表には原体RL縦回転による単節の斜行縄文を施文しており、内面は光沢をもつほどに研磨された無文である。

16・17は、粘土紐の貼付による隆起帯の加飾であることは前者と同様であるが、縄文原体の側面押圧による文様でなく、箆先の刺突による方形や長方形状の刺突痕で文様を付すという違いがある。体部の縄文は原体の撚り方向と回転方向に差があるものの、単節の斜行縄文である。

両者とも比較的荒れた器面をもつ土器で、全体としてもろい。胎土にはやや多めの砂粒が混入し、焼成もさほど良好とはいえない。器種は深鉢のみである。

このように文様の違いは時期差を示すとともに、土器型式の違いをも表している。現在一般



1類（8～15）

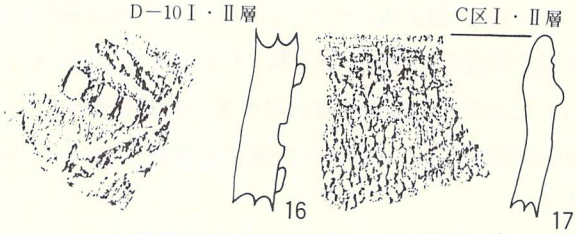
第Ⅲ群土器（中期）

第32図　遺構外の遺物（縄文土器－2）

にいわれている円筒式土器の編年に従えば、前者の中でも9・12以外は円筒上層a式、9・12は同b式、16・17は同c式に相当するものと考えられる。

2　類　　(18～33)

大木式土器に入るものを一括したが、文様と施文技法からみると18～23、24～30、31～33に細分される。器種はいずれも深鉢と推定され、大小がありそうである。



第Ⅲ群(中期)　1類(16・17)　縮尺　$\frac{1}{2}$
第33図　遺構外の遺物(縄文土器－3)

18～23は、縄文の付された器面を沈線で区画し、縄文を磨消する土器である。文様の区画を判断できる状況ではないが、23の文様をみると、口縁部から縦方向を基本として区画し、さらに横方向に区切る様相を示している。縄文磨消部は良く研磨され、光沢をもつ。体部の縄文は、原体LR縦回転による単節斜行縄文である。

24～30は、いわゆる隆沈線によって器面を区画する土器である。この類は渦文を主体とした文様を付し、一部（26）に沈線を伴わない例もある。縄文の様相は前者と同様である。

31～33は沈線のみによって器面が区画される土器である。前者では部分的に並行沈線的な表出が多くみられたが、この類には全く含まれない。縄文磨消部の区画帯は幅広く、縄文施文部より無文部の器面が低くなる。縄文は縦回転による単節斜行縄文である。

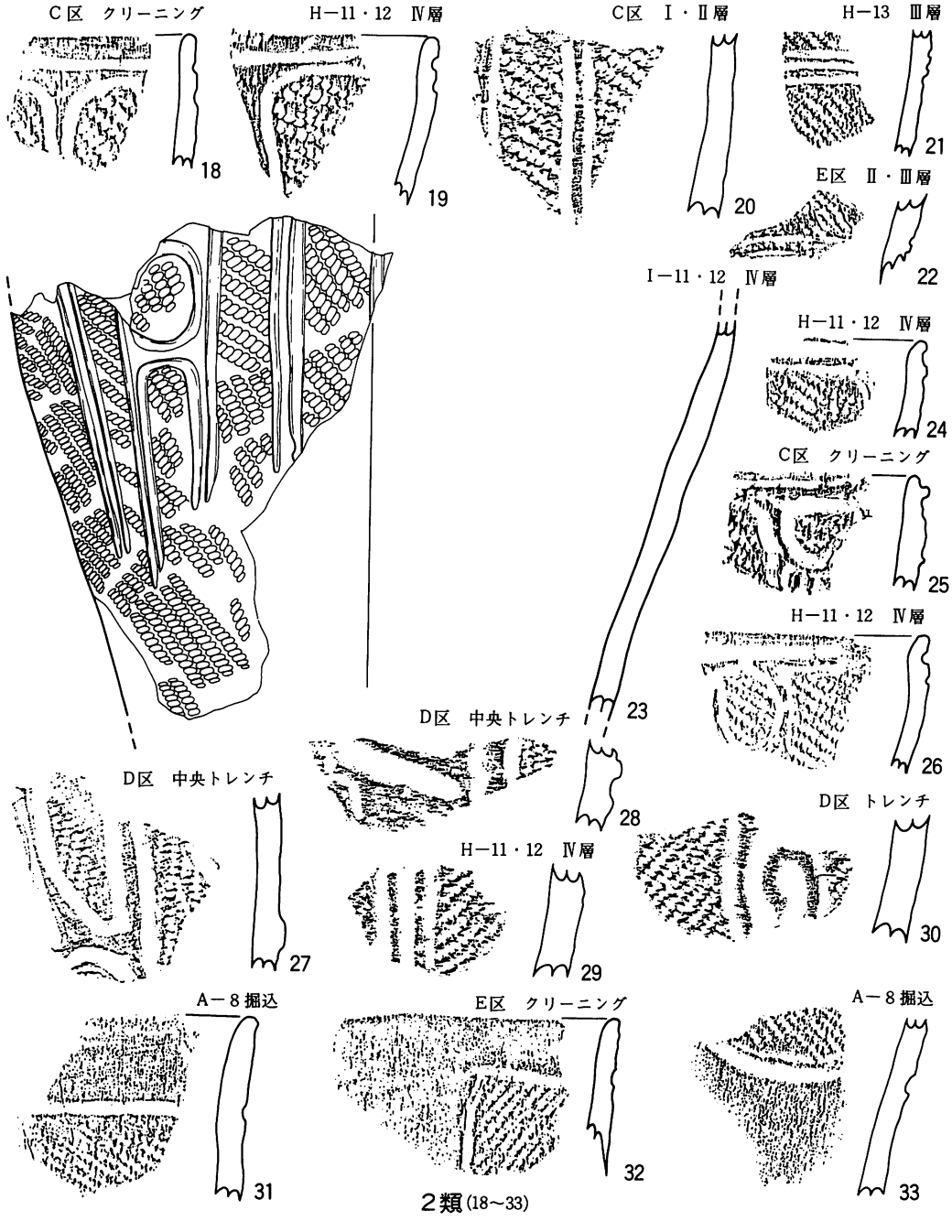
胎土の調整はほとんぼ差がなく、若干の小砂粒を混合した粘土を使用し、焼成はいずれも良好である。以上の特徴を大木式土器のそれに比較すると、前者（18～23）は大木8b式の新しい部分か大木9式の古い部分、中者（24～30）はほぼ大木9式、後者（31～33）は大木10式に相当すると考えられる。

〔第Ⅳ群土器〕　　(第35図34～41、PL－21)

後期に属する土器を一括したが、34～40は縄文を付す器面を沈線で区画し、縄文を磨消するという共通要素をもつが、区画帯の構成では若干異なる様相を示している。たとえば、34・37は一見渦文的な幅の狭い区画帯とし、35・36・38は入組文的な区画帯を想定できるし、39・40は全周する並行沈線による区画と予想されるといった具合である。それ以外の様相には全く差がなく、胎土も砂粒の混入が比較的多く、焼成はあまり良いとはいえない。器種は深鉢であろう。

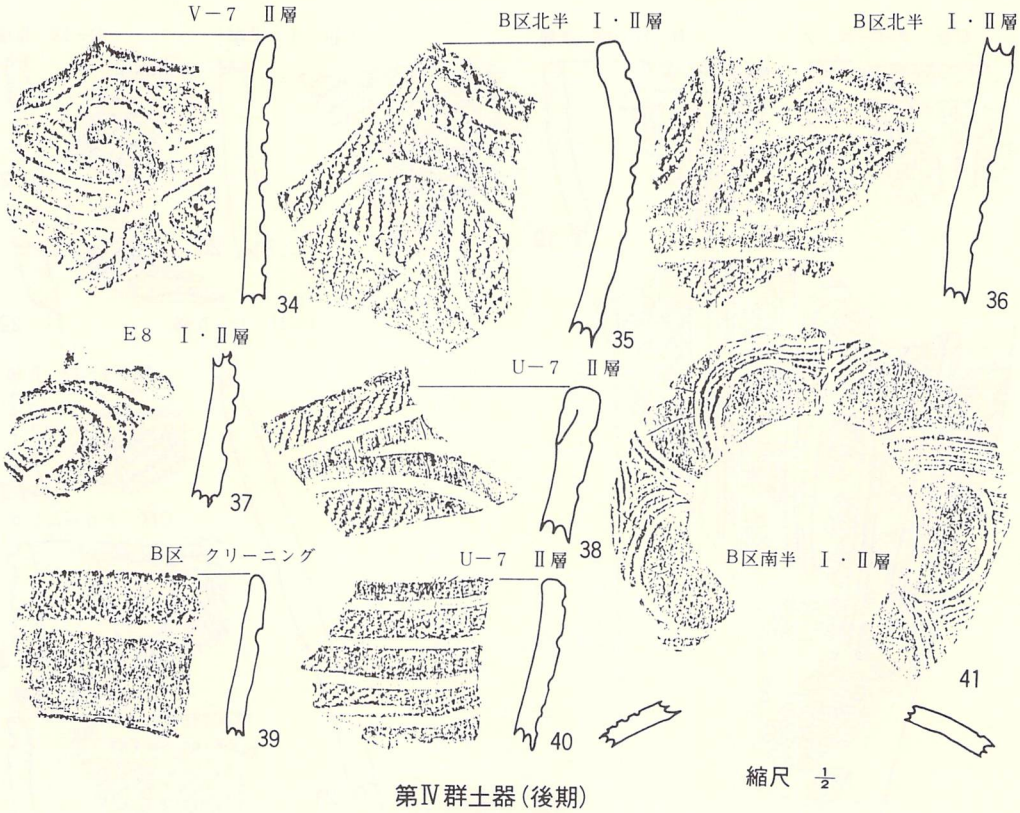
41は良く研磨された器面に沈線のみによって文様を付した土器で、胎土に砂粒の混入が多く、焼成も良好である。器種は壺であろう。

以上の特徴から考えて、34・37・41は後期前葉の大湯式や堀の内II式に関連する土器、その



第Ⅲ群土期(中期)　縮尺 $\frac{1}{2}$

第34図　遺構外の遺物(縄文土器　4)



第Ⅳ群土器（後期）

第35図　遺構外の遺物（縄文土器－5）

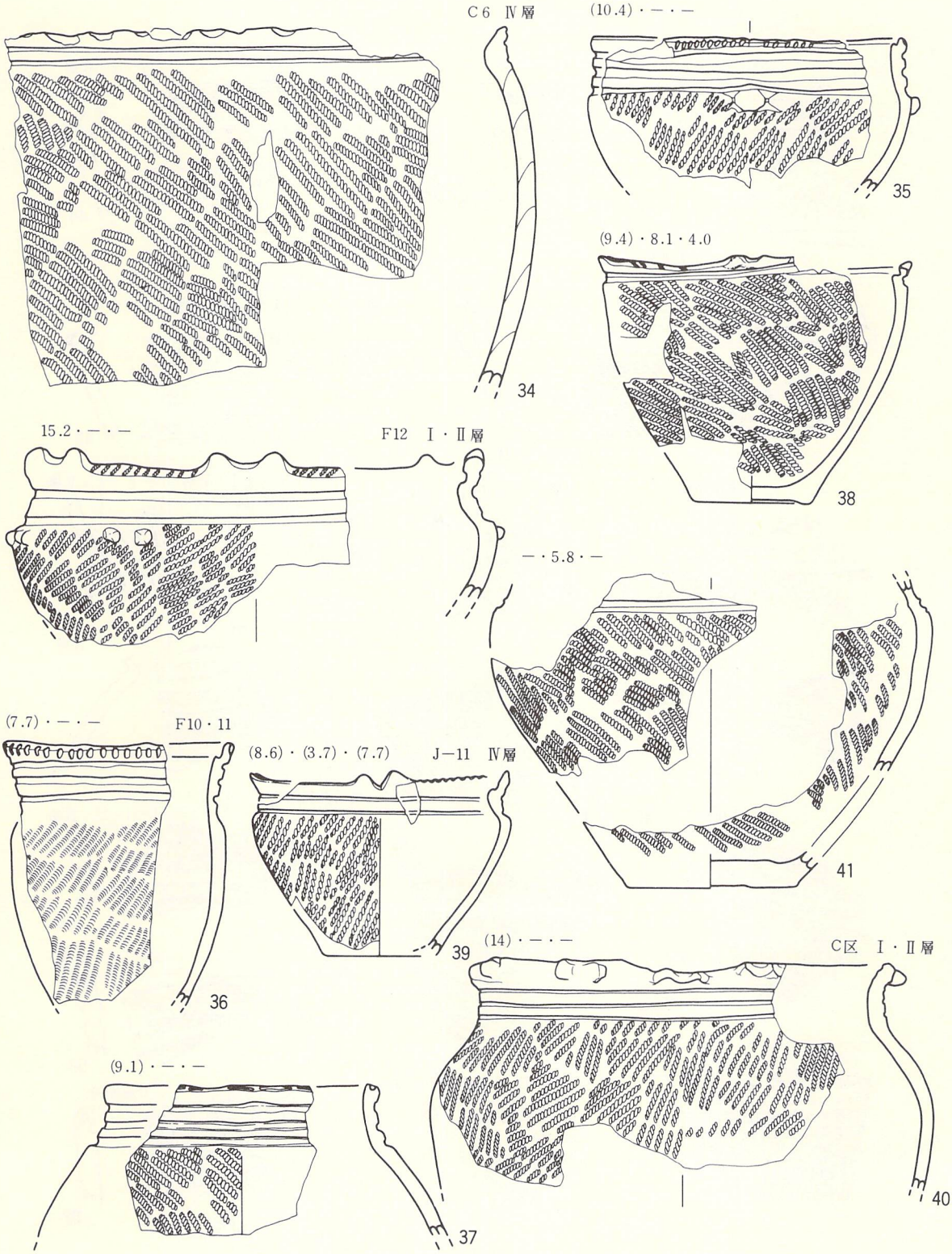
他は同中葉～後葉の宝ケ峰式や十腰内Ⅲ式等に近似した土器と理解することができよう。

〔第Ⅴ群土器〕　（第36～38図34～75、PL—22～23）

晩期に位置づけられる土器を一括したが、文様や施文技法等で以下に細分される。

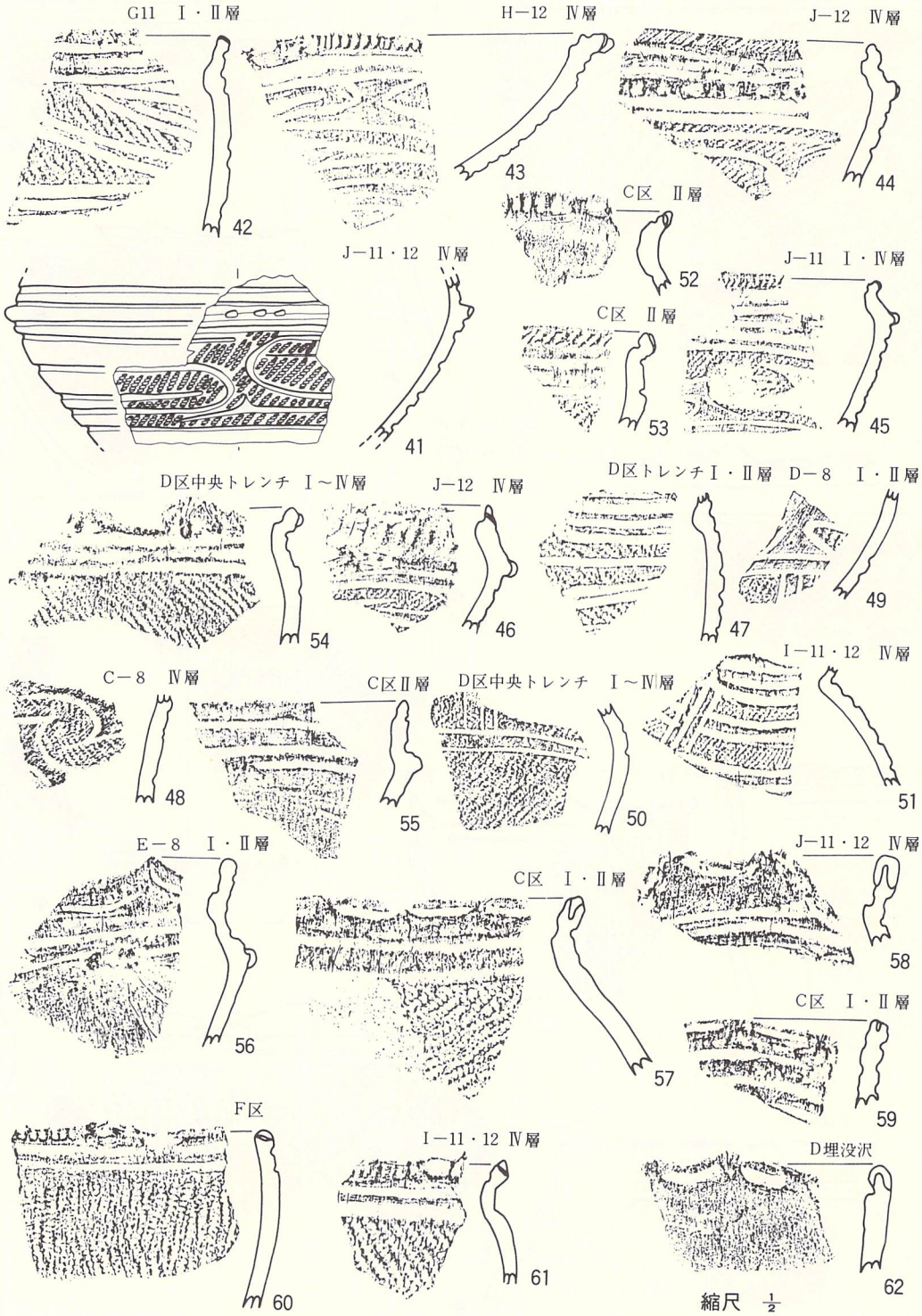
41～51は口縁部だけではなく体部にも施文する土器である。文様の全体を知るような大型破片がないので明確ではないが、斜めや横方向の並行沈線を主体とした文様（42•43）、雲形文的な文様（44～47）、蛇行沈線による文様（41）、横方向と縦方向の並行沈線の組み合わせた文様（49～51）等の種類が含まれている。しかし、口縁部を残存する42～45は、口縁端部に箆先刺突による刻目を付すという共通点がある。また、文様施文部の縄文を一部磨消するもの（43～51）と全く磨消しないもの（41・42）がある。器種は、43が浅鉢、51は壺と推定されるが、他は鉢もしくは小型の深鉢と考えられる。肩部に突帯が全周し、その上面に刺突文を付す例もある（41・44）。体部の縄文は原体 LR や RL の縦・横回転による単節の斜行縄文である。

34～50、52～70は、無文の頸部に並行沈線を全周させる土器で、体部には縄文以外の文様を



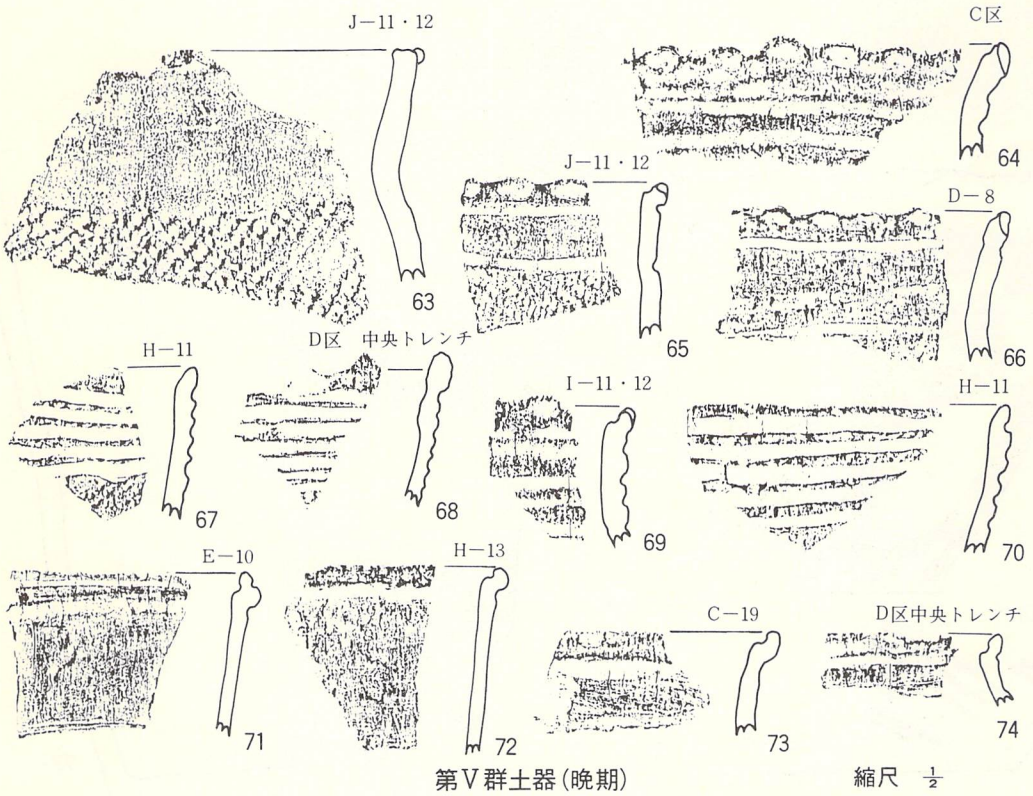
第Ⅴ群土器(晩期)　　縮尺 $\frac{1}{2}$

第36図　遺構外の遺物(縄文土器－6)



第Ⅴ群土器(晩期)

第37図 遺構外の遺物(縄文土器−7)

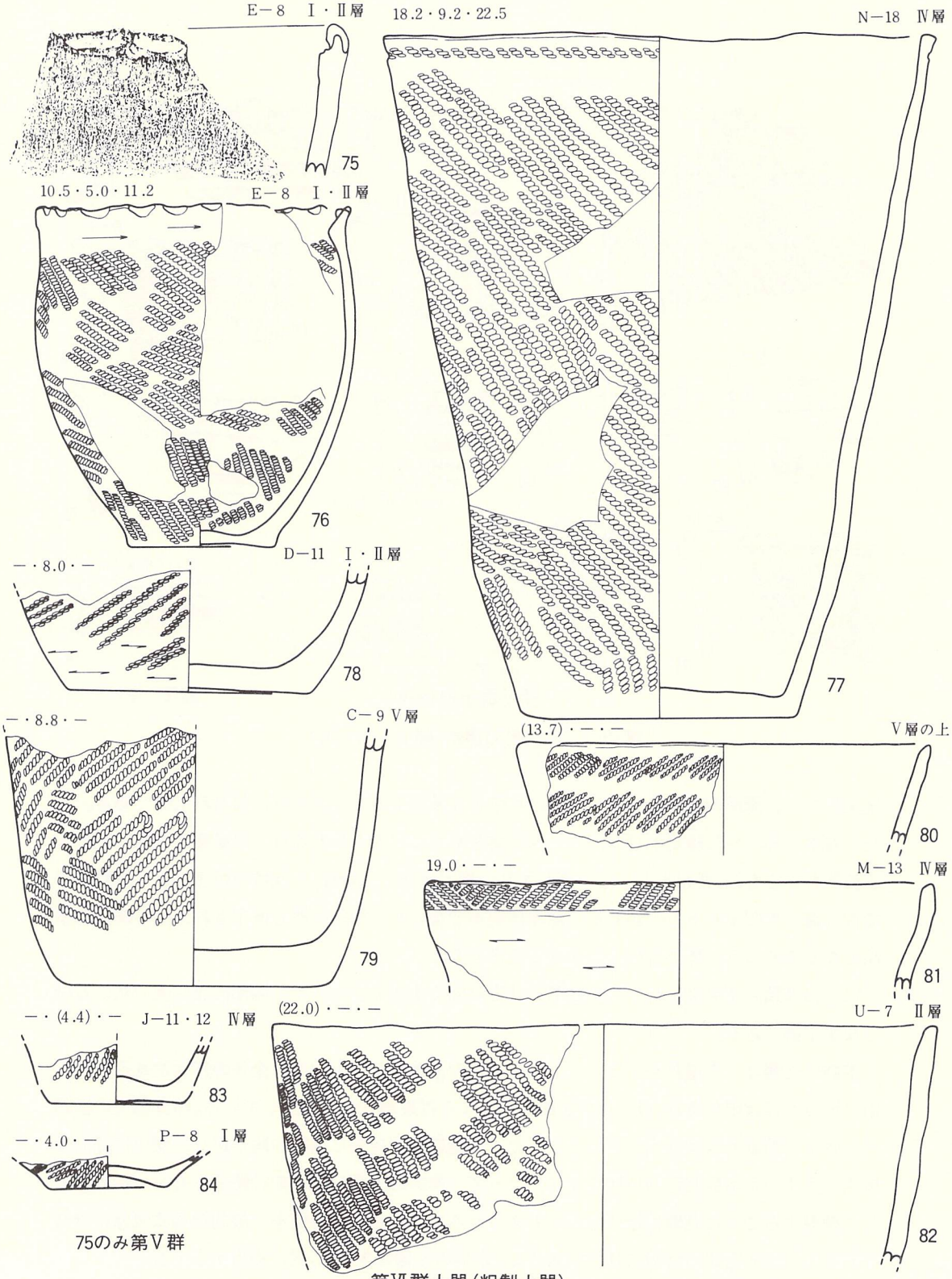


第38図　遺構外の遺物（縄文土器－8）

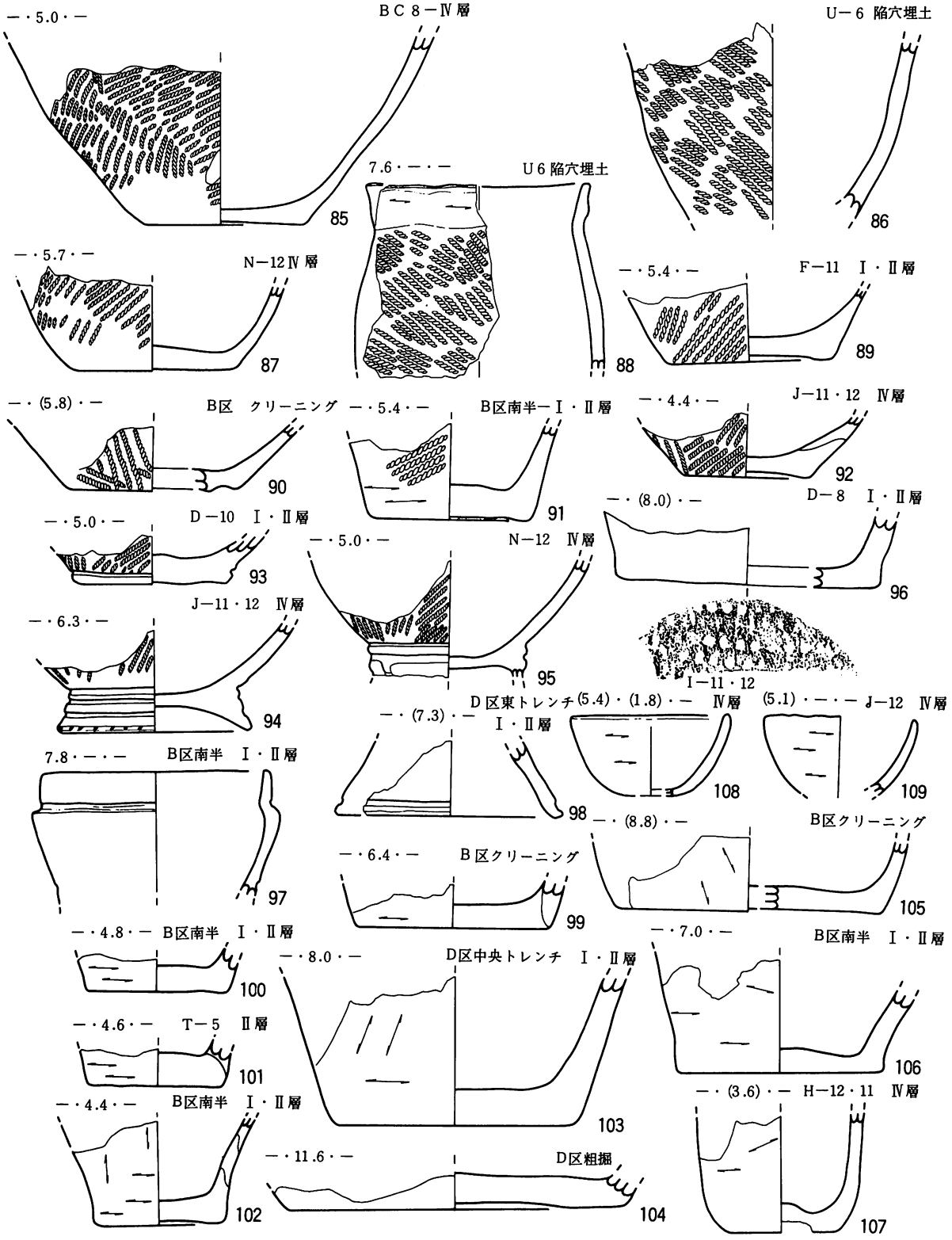
施文しない。頸部の沈線は2条～3条のものと5条以上のものがあり、前者が主体である。また、肩部（56）や口縁端部（54）に小さな瘤を貼りつけるものもある。口縁部は平縁のものと小波状となるもの、突起をもつもの等があり一様ではなく、口唇にも沈線を付すものと指頭（？）で押し潰して凹ませるものがある。器種は定かでないが、深鉢か鉢と推定され、63～66は大型品となるであろう。体部の縄文は前種と同様である。

71～74は頸部を無文とし、口縁端部を外方に強く小さく屈曲させ、端部内面を受口状の有段となす土器である。

本群の土器は、本遺跡から出土した縄文土器の主体をなす土器で、全体の70%位を占める。出土地点もほぼ限定され、H−11住居跡が占地する付近からのみ出土している。体部縄文の種類や、胎土の調整もほぼ共通している。また、口縁端部の内面に沈線や段が巡り、受口口縁的な様相を示すのも本群共通の特徴である。よって、本群の土器はほぼ並行関係をもつ一括土器として理解することに問題はないものと考えられる。これらの諸特徴を一般的な型式概念に符合させると、大洞C_2式の特徴にほぼ一致する。本群の土器は大洞C_2式に相当する土器として大過

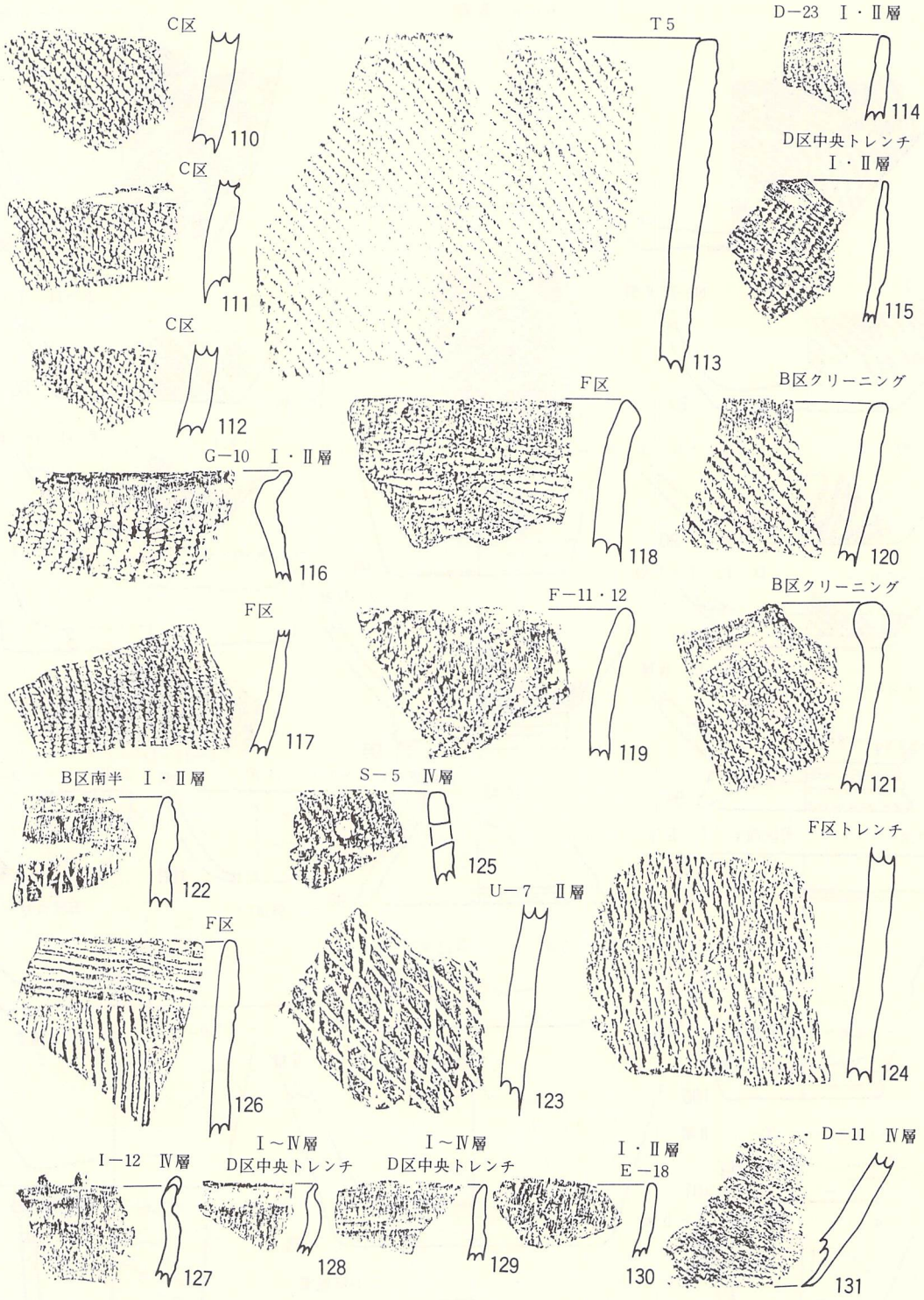


第39図　遺構外の遺物（縄文土器－9）



第Ⅵ群土器(粗製土器)　縮尺 $\frac{1}{2}$

第40図　遺構外の遺物(縄文土器—10)



第41図　遺構外の遺物（縄文土器−11）

ないであろう。

〔第Ⅵ群土器〕　　（第39～41図76～131、PL—23～25）

縄文以外の文様をもたない粗製土器と縄文を施文しない無文土器を一括した。本群の土器は単独で時期を明確にすることが困難であるという共通の特徴をもっている。

粗製土器には76～96・110～126が該当するが、この中には各種の縄文を施す土器が混在し、さらに、体部下位～底部を残存するため口縁部文様の有無が不明なものも含めている（一部は文様をもつと推定されるものもある（93～95等）。器種にも種々あるが、大型深鉢（77・79・82）、鉢（76・88等）、台付鉢（94・95・98）が主である。体部の縄文は、原体LR・RLの縦や横回転による単節斜行縄文が最も多く、他に羽状縄文(81)、単軸絡条体縦回転による網目状撚糸文や一般的な撚糸文がある。胎土の調整はⅤ群に比較して砂粒の混合割合が多く、全体として粗い粘土である。その中で、90・93～95・98は砂粒の混入も少量で、粗製土器の粘土とは異なっている。おそらく、この5点は精製土器であろうと推定される。

96～107・127～131は器面に全く文様をもたない無文土器である。器種は深鉢・鉢・台付鉢といった鉢形の土器のみである。胎土の調整は粗製土器のそれとほぼ同様である。器面調整には非常に良く光沢をもつもの、一般的な程度のもの、不良なもの等雑多である。

既述のとおり、本群の土器はこれ単独では時期を決定づけるのは困難であるが、明示し得るものについて触れておく。81・88・121～126までは施文技法や縄文の種類と器形から考えて後期に属するであろう。110～112は胎土に繊維を混入することや縄文の種類からみて前期の中でも古い時期の土器であろう。76・93～95・97～98は晩期の土器と考えられる。その他無文土器は後期～晩期に多く使用されることから、ほぼこの時期に相当するであろう。

2）弥生土器

本遺跡から出土した弥生土器は、遺跡北側を東に延びる尾根状丘陵地の南面する傾斜面からのみ出土した。出土層はⅠ層とした表土からもみられるが、主にその下位のⅡ層からの出土である。出土した土器を観察すると、文様に何種類かがみられることから、それを基準にして若干細分して記述することとする。

〔変形工字文的な蛇行沈線文を付す土器〕　　（第42図1・2、PL—25～26）

2条並行する蛇行沈線によって変形工字文的な文様を付す土器である。2点の破片の出土であるため詳細は不明である。1の器面には、沈線文を付す前に原体RL斜回転による縦位の単節縄文を付すが、2にはない。胎土には少量の砂粒が混入し、焼成は良好である。

〔多条並行沈線によって文様を付す土器〕　　（第42～43図３～68、PL―25・26）

２条またはそれ以上並行する沈線によって鋸歯状山形文（３～27）や菱形文（28～41）、単純な直線的並行沈線文（42～58）、振幅の小さい山形文（64）、太い沈線で不整山形文を付す（60～63・65～68）等の文様を付す土器である。小破片のため器形が定かでないが、鉢や深鉢形の土器と推定される。胎土に砂粒の混入がやや多く、全体として粗雑な粘土を使用している。縄文は斜行や縦行する単節縄文であるが、原体が細く一部に０段多条がある。また、文様施文部は縄文を磨消して無文にするものと、磨消しないものがある。

〔無文または粗雑な条痕を付す土器〕　　（第44図69～77、PL―26）

器面を無文にしたり（69）、粗雑な撫で痕（70・74～76）や粗い条痕を残す（71～73・77）等の土器である。全体として器面調整が粗雑で、胎土にも砂粒の混入が多く、粗い粘土を使用している。器種は鉢と考えられる。

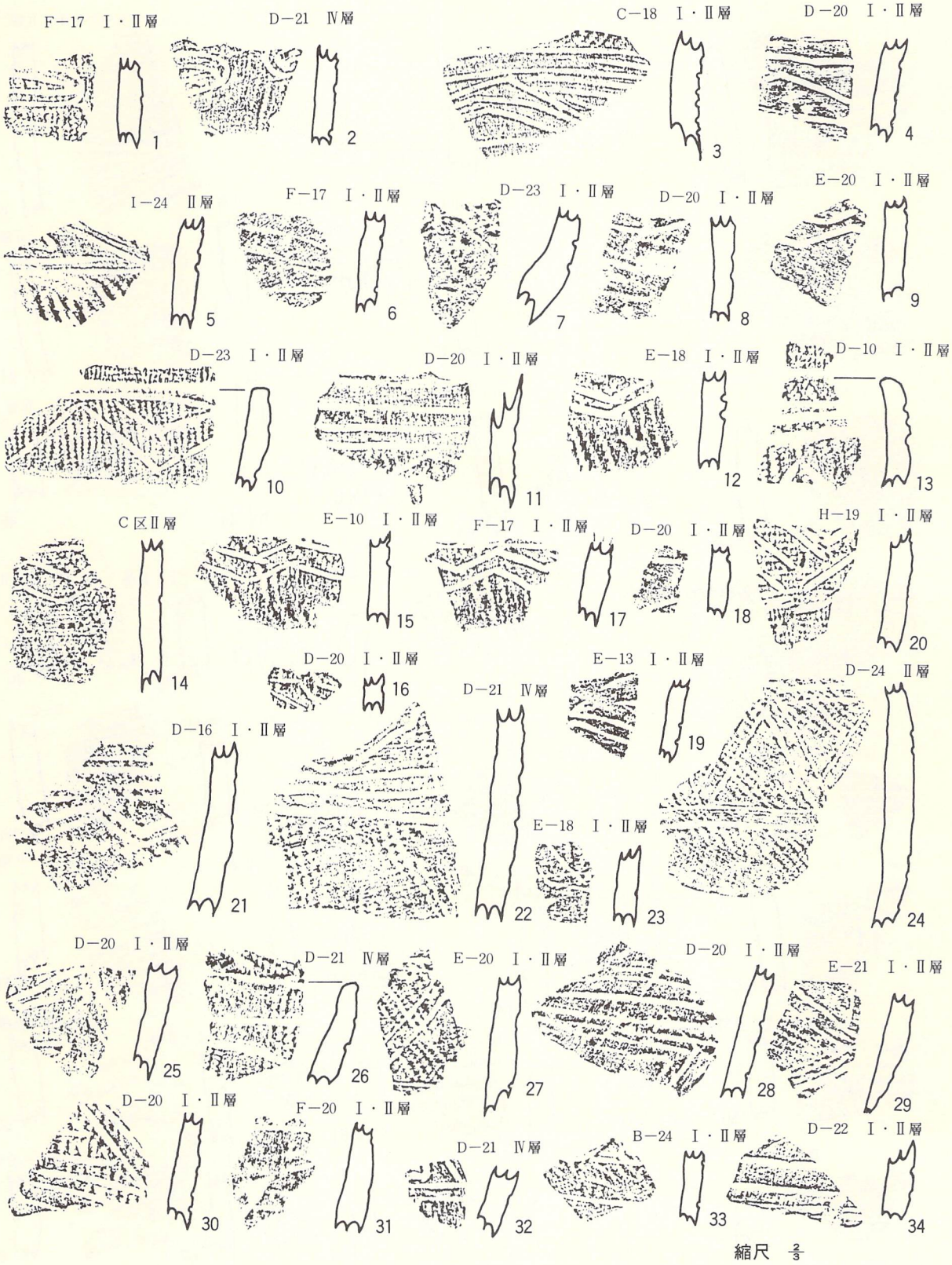
〔交互刺突による波状浮線文を付す土器〕　　（第44図78～82、PL―26）

頸部や口縁部に間隔の狭い並行する２条の沈線を引いて隆起帯状にし、次いでその隆起帯状部分を斜め上方と斜め下方の交互に刺突して結果的に波状浮線文に表出した文様を付す土器である。また、波状浮線文以外に並行沈線による鋸歯状山形文(78)、並行沈線による円弧文(81)、直線的に複数並行する沈線文（79・80・82）等も付され、81の場合は口唇にも縄文が付される。本遺跡から出土した弥生土器の中では量が少ない。体部の縄文は原体が０段多条による斜行や縦行とそれの組み合わせによる縄文を付している。胎土は沈線文を付す土器とほぼ同様である。

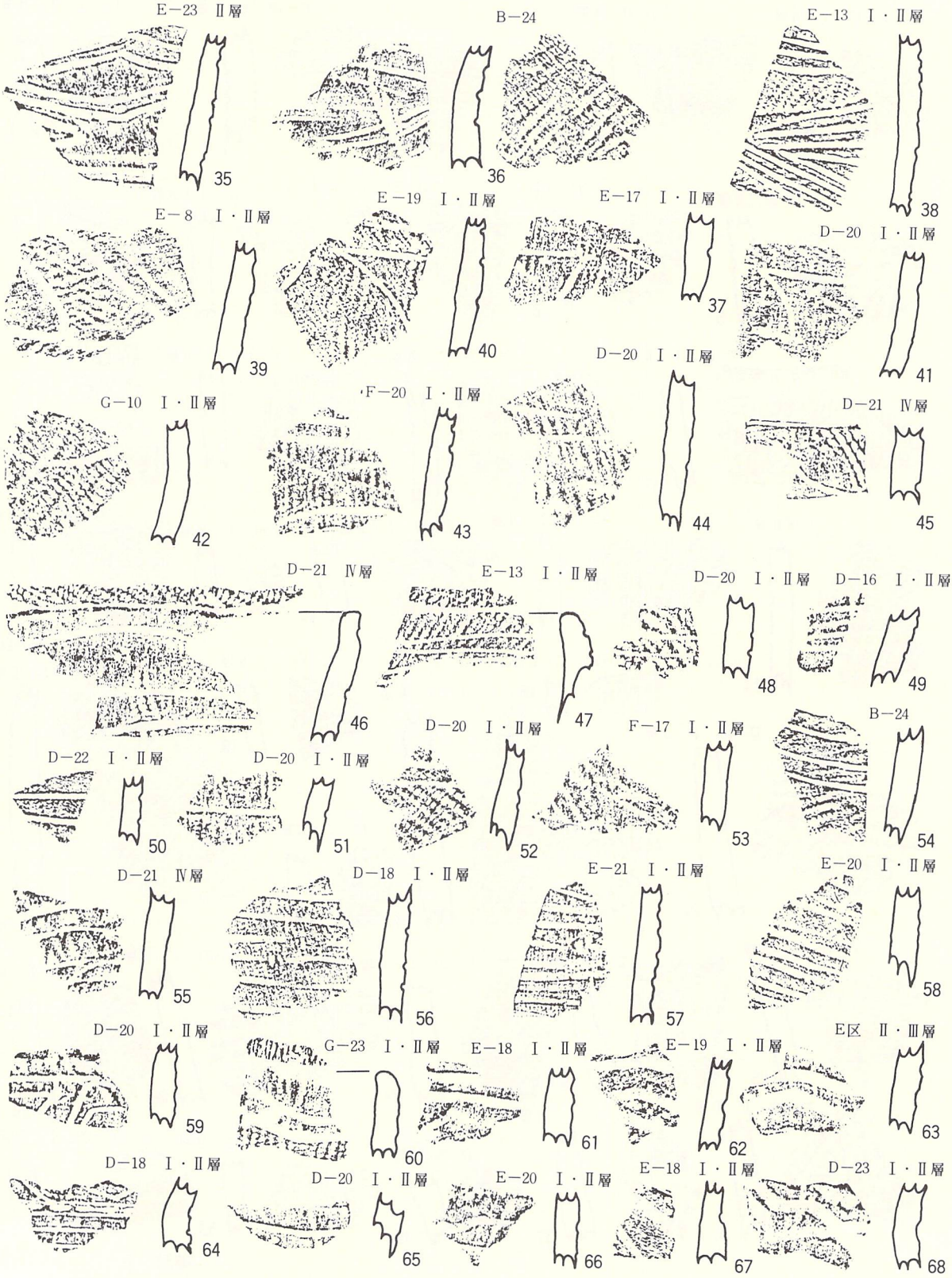
〔器面に縄文以外の文様をもたない土器〕　　（第44図83～87、PL―26）

いわゆる粗製土器である。器面に付されている縄文に撚糸文（83～86）、羽状縄文（87）があり、他に精製土器に付していた単節縄文も含まれる。原体には太いもの、細いものがあり、特に87の羽状縄文は太さの異なる２種類の原体を連結させて横回転している。器種は鉢か深鉢と推定される。胎土は他種のそれとほとんど差がない。

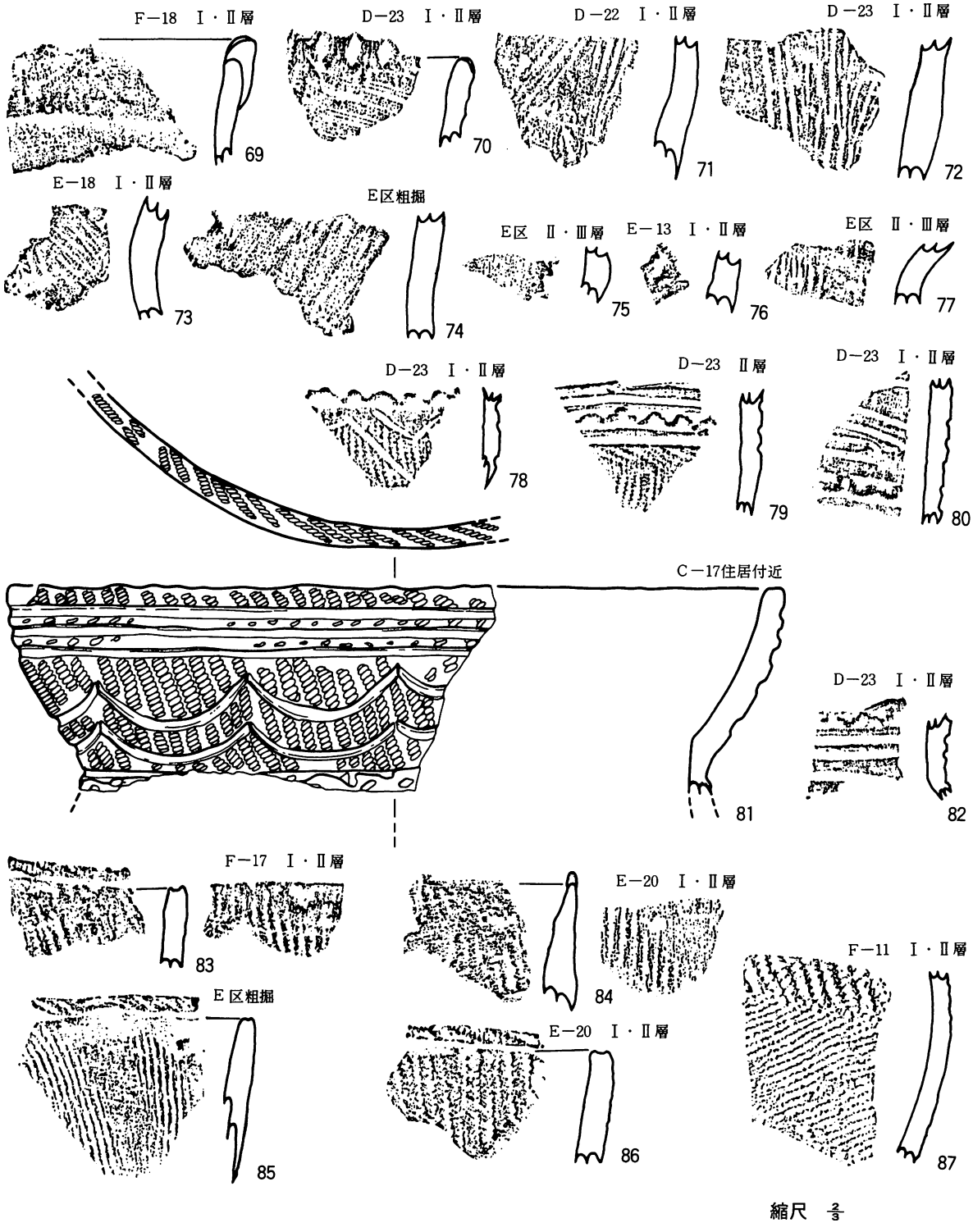
以上本遺跡から出土した弥生土器を文様の種類ごとに大別して記述したが、それらの土器の編年的位置づけについて若干記しておく。



第42図　遺構外の遺物（弥生土器 −1）



第43図　遺構外の遺物（弥生土器－２）　　縮尺 $\frac{2}{3}$



第44図　遺構外の遺物(弥生土器－3)

まず、1・2の土器であるが、付されている変形工字文的な文様は東北地方の弥生初期の土器に多用される。これから考えると、この時期と大差のない時期に位置づけられるであろう。

3～68は本遺跡から出土した弥生土器では量が最も多く、主体を占めている。このような文様を付す土器が盛行するのは後期頃で、特に青森県の田舎館式土器に多用される。本遺跡出土の土器もほぼ後期に属するであろう。

69～77は、単独で時期を決定するには不充分であるが、全体的な流れからみて後期以降に位置づけられるものと推定される。縄文以外の文様を付す他の土器と共伴するものであろう。

78～82は、末期に位置づけられる天王山式土器の特徴とほぼ一致していることから、天王山式土器に近い土器と理解して大過ないであろう。

83～87はこれ単独で時期を決定することは不可能である。おそらく、何らかの文様を付す土器と共伴するであろう。

3)土師器　　(第45図、PL—27)

少量出土している。出土地点は、調査区域中央にある埋没谷の埋土内からのみ出土した。遺物の観察では、成形技法と調整技法から2種類に細分されることから、以下にその概要を記すこととする。

1・2は器表が縦方向の刷毛目調整痕をもつ甕の体部破片である。2点は同一個体の破片である可能性が強く、いずれもロクロ未使用成形である。胎土は緻密な粘土に若干の砂粒を混入し、焼成も良好である。

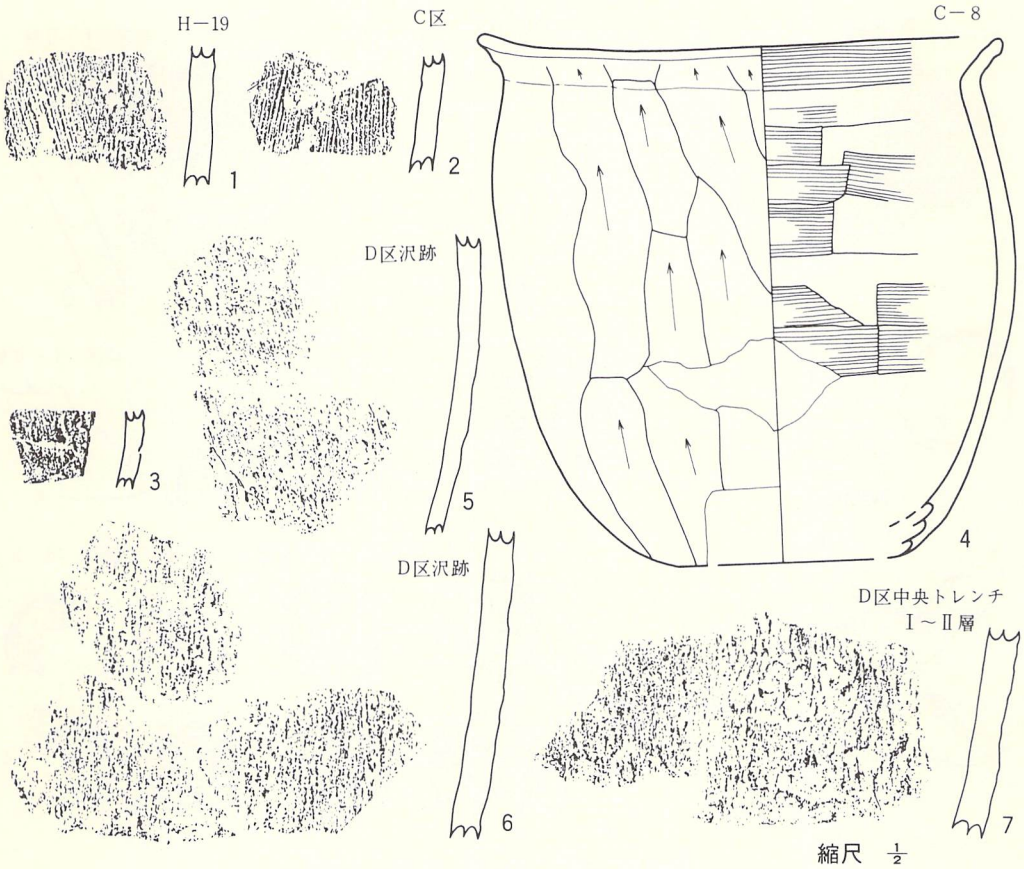
3はロクロ未使用成形された坏の小破片で、内面は黒色処理され、外面は撫で調整である。胎土は僅かの砂粒が混入した細かい粘土を使用し、焼成は良好である。

4～7はロクロ不使用成形された甕で、4以外は同一個体の可能性がある。4は体部中位に最大径をもち、頸部が軽く窄んで口縁部はくの字状に外反し、口唇は丸くおさまる。器表は体部下位から上位への箆削り調整されている。内面は体部が横方向の箆撫で調整、口縁部は横撫でである。他の破片もほぼ同様の様相を示している。胎土は、小砂礫も若干混入した粗い粘土を使用している。

時代的な関係をみると、1～3は奈良時代の土師器がもつ一般的な特徴とほぼ一致していることから、奈良時代の土師器と考えられる。4～7は、ロクロ使用成形ではないが、器形や器面調整から推定して平安時代に属すると考えられる。

4)陶磁器と泥人形　(第46図、PL—27)

陶器が同一個体の破片4点、磁器が1点出土している。出土地点はいずれも東端寄りである。

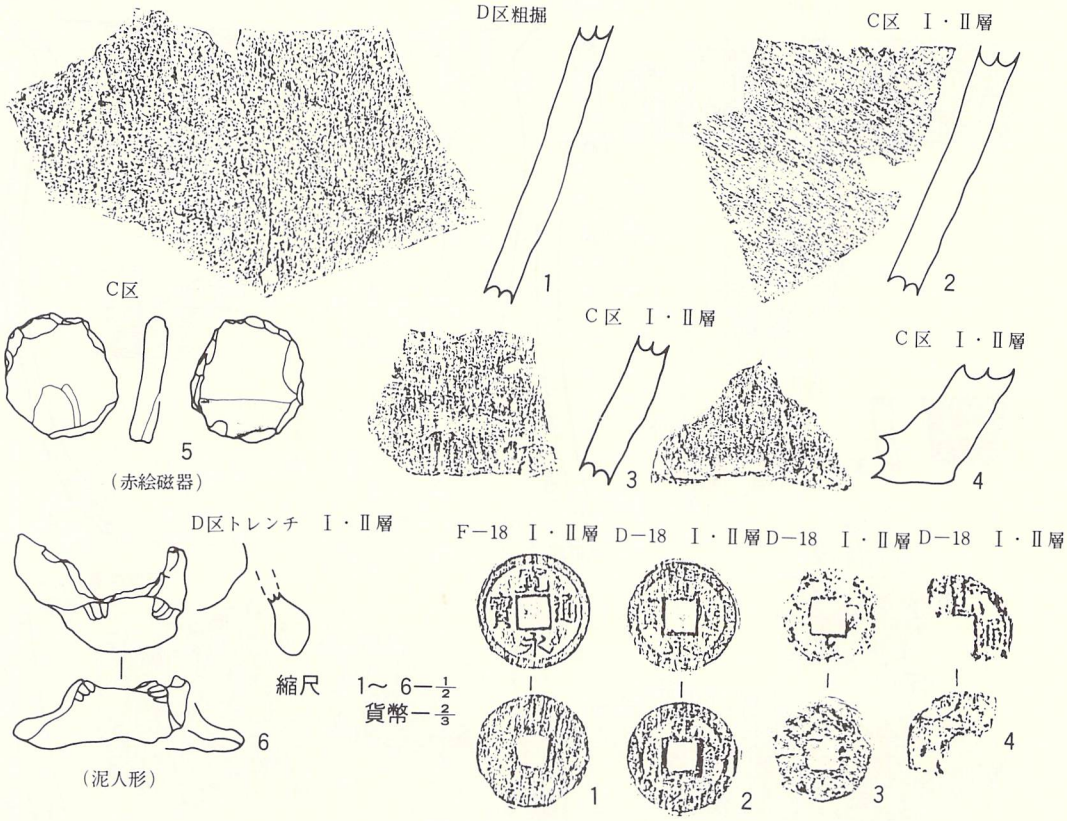


第45図　遺構外の遺物（土師器）

1～4は陶器で、器種は大甕か大壺の破片である。。4は体部下端から底部若干を残し、他はいずれも体部の破片である。体部の器表には淡い灰褐色をした釉がかけられ、内面は無釉である。胎土は黒色粒や白色粒が散在する比較的粗い土で、焼成は非常に堅緻で色調は淡い灰白色気味である。器面の調整は施釉によって定かでないが、内面には円形当て具痕と推定される軽い凹凸がある。

5は周囲を打ち欠いて楕円形状に面取りした磁器の破片で、本来の器種は定かでない。器表には上絵付による赤色の文様があり、いわゆる赤絵である。何の目的で面取りされたかは不明である。

6は泥人形の膝部の破片である。型抜きによって成形された人形で、振り袖を着て正座し、膝の上に手を置いた女性を表したものらしい。非常に細かい粘土を使用し、焼成も良好である。着色された痕跡はみられない。



第46図　遺構外の遺物（陶磁器・泥人形・貨幣）

以上の３種類が焼成された時期は、それを決定する資料が得られていないので断定できないが、５は江戸時代以降、６は近・現代？、１〜４は中世の可能性もある。

５）石器

本遺跡からは、石を素材とする広義の石器類が48点出土している。この中で遺構内から出土したのは７点のみで、他はいずれも粗掘り中や遺構検出作業中に遺構外から出土し、その中には以下のような器種と点数が含まれている。

１、石　鏃−５点　　２、石　槍−１点　　３、石　匙−３点　　４、掻　器−６点
５、使用痕をもつ剝片−６点　　６、磨製石斧−２点　　７、凹み石−３点
８、磨　石−11点　　９、叩き石−４点　　10、石　錘−２点　　11、石　皿−１点
12、石製品類−４点
以下に各器種別にその内容や特徴を概略的に記すこととする。

〔石鏃〕　　（第47図１～５．PL—28）

５点の出土であるが、この中に有茎型２点（１・３）、無茎円基型１点（５）、無茎凹基型２点（２・４）が含まれている。２点（３・５）は先端部を欠失しているため全体が不明であるが、茎部を含む全長が４cm以上３点、３cm以下２点と大型と小型のものがある。作り方は非常に丹念で、尖端部・両側縁・茎部とも表裏両面に入念な剝離調整がなされている。石材は奥羽山地新第三系産の凝灰質珪質泥岩（１・４）・珪質泥岩（２）や北上山地古生界産の粘板岩（３）、チャート（５）が使用されている。

〔石槍〕　　（第47図６、PL—28）

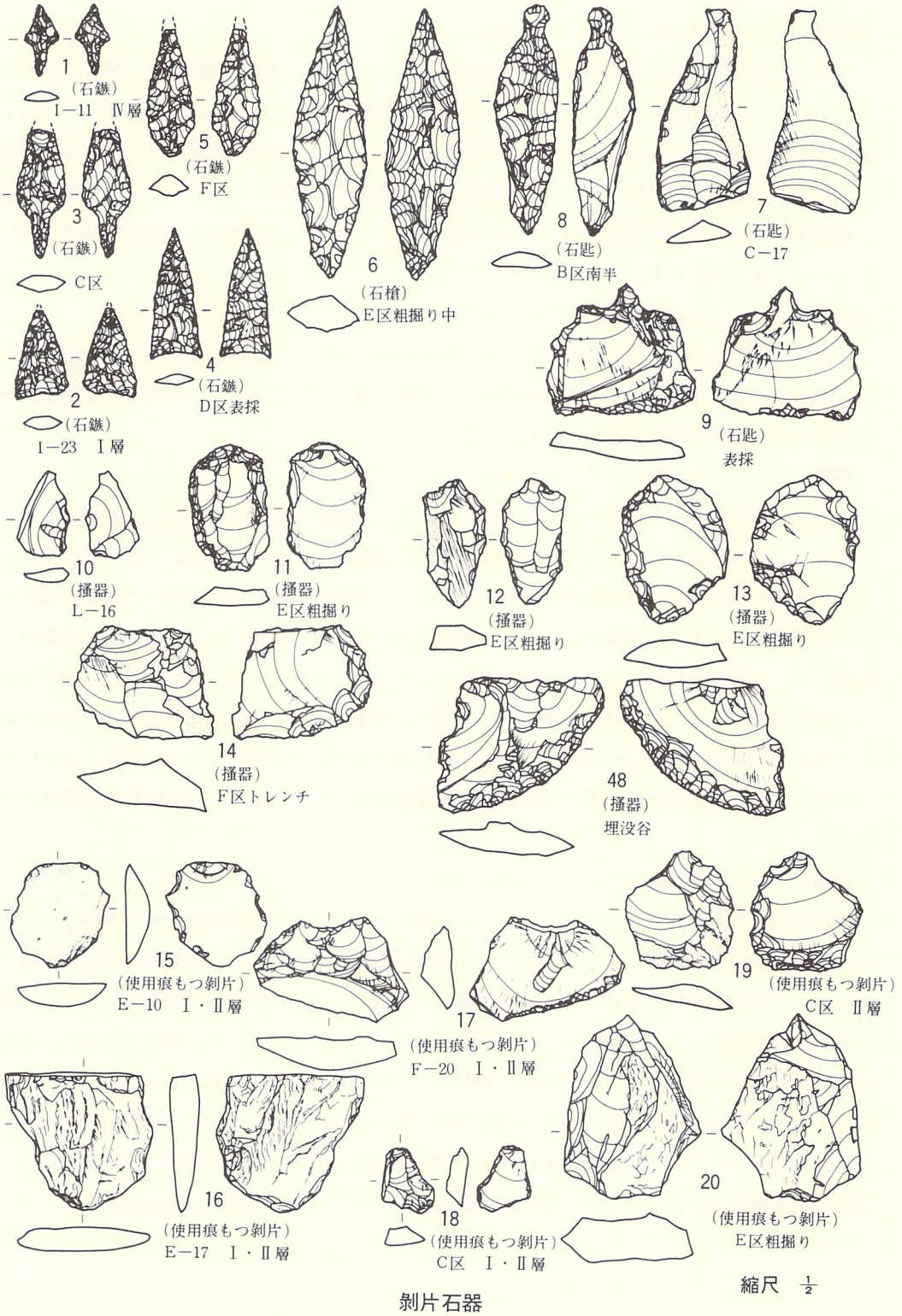
１点の出土である。全長8.4cm、幅2.3cm、厚さ1.0cm、重さ16.5g の大きさがあり、北上山地古生界産の粘板岩で作られている。側縁からの両面剝離によって作られ、横断面がほぼ菱形・平面形が平行四辺形気味に仕上げられている。

〔石匙〕　　（第47図７～９、PL—28）

３点の出土である。この中には縦形２点（７・８）と横形１点（９）がある。縦形の７・８は裏面に一次剝離面を残し、７では末端部、８は打点部を抓みとしている。７は断面三角形の中央に稜をもち右側に自然面を残す剝片を使用し、左側側縁に裏面から表面への簡単な剝離だけで刃部としている。８の場合は稜をもつ断面三角形状の剝片を素材とし、両側縁に裏面から表面への、抓み部は両面への剝離調整で作り出している。横形の９は、抓み部を打点とする横長の剝片を素材とし、全周辺部に裏面から表面への剝離で仕上げている。大きさは全長4.1cm～7.0cm、全幅3.0cm～4.6cm、厚さ0.5cm～0.6cm、重さ8.35g～14.55g であり、使用されている石材は、いずれも奥羽山系新第三系産の凝灰質珪質泥岩、珪質泥岩、流紋岩質極細粒凝灰岩である。

〔掻器〕　　（第47図10～14・48、PL—28）

16点の出土である。10～13は縦長、14はやや横に長く、48は三角形状の剝片を素材とし、その側縁部や先端部に裏面からの剝離によって刃部が調整されている。10は剝離が微細であるとともに、刃部の磨滅痕があることから本器種に一括した。12・14の調整は粗雑でいわゆる石器と認定するか疑問もあるが、とりあえず本種とした。11は裏面からのみの剝離であるが、48は両面への剝離であることから、典型的な掻器としては問題があるかも知れない。大小のバラツキが大きく、最小の10が全長2.6cm、全幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ9.5g で、最大が48で全長4.0cm、全幅4.2cm、厚さ0.7cm、重量35g である。石材は奥羽山地新第三系中新統産の珪質泥岩(11)、流紋岩質極細粒凝灰岩（12・48)、凝灰質珪質泥岩（14）と、北上山地古生界産のチャート（10・13）がある。



剝片石器

第47図　遺構外の遺物（石器－1）

〔使用痕のある剝片〕　　（第47図15～20、PL—28）

6点の出土である。いわゆる剝片ではあるが、先端部や側縁部に簡単で微細な剝離的な刃こぼれのある剝片を本種とした。17～19は実側図では削器的な調整にも見受けられるが、現物の剝離はあまりにも粗雑であるため、本種とした。形状も縦長のもの、楕円形的なもの、横長のものなど一定していない。大小もバラツキが大きく最小が18の全長1.8cm、全幅1.2cm、厚さ0.5cm、重さ2.2g、最大が20の全長5.6cm、全幅4.1cm、厚さ1.3cm、重.43.2gである。石材は奥羽山地第三系中新統産の流紋岩質極細粒凝灰岩（15）、凝灰質珪質泥岩（19）、珪質泥岩（19）と北上山地古生界産のチャート（16・20）、輝緑凝灰岩（18）が使用されている。

〔磨製石斧〕　　（第48図21・22、PL—29）

2点出土しているが、21は弥生時代特有の片刃の刃部をもつ磨製石斧、22は一般的な定角式の磨製石斧である。21は側縁、頭部の研磨調整の不充分な部分があるものの、横断面が台形状に仕上げられ、刃部は刃こぼれした後叩き石的使われ方をしているが、表面から裏面へ直線的に研磨されている。22は刃部付近1/2を残存する諸刃の磨製石斧で、刃部の両端が使い減りによって丸味をもっている。全面に研磨時の小擦痕をもち、刃部には僅かな使用痕が観察される。大きさは、21が長さ10.6cm、幅3.7cm、厚さ2.4cm、重さ43.2gあり、22は残存長5.5cm、幅4.0cm、厚さ1.6cm、重さ70gである。石材はいずれも北上山地古生界産の淡緑色凝灰岩である。

〔凹み石〕　　（第48図24、PL—29）

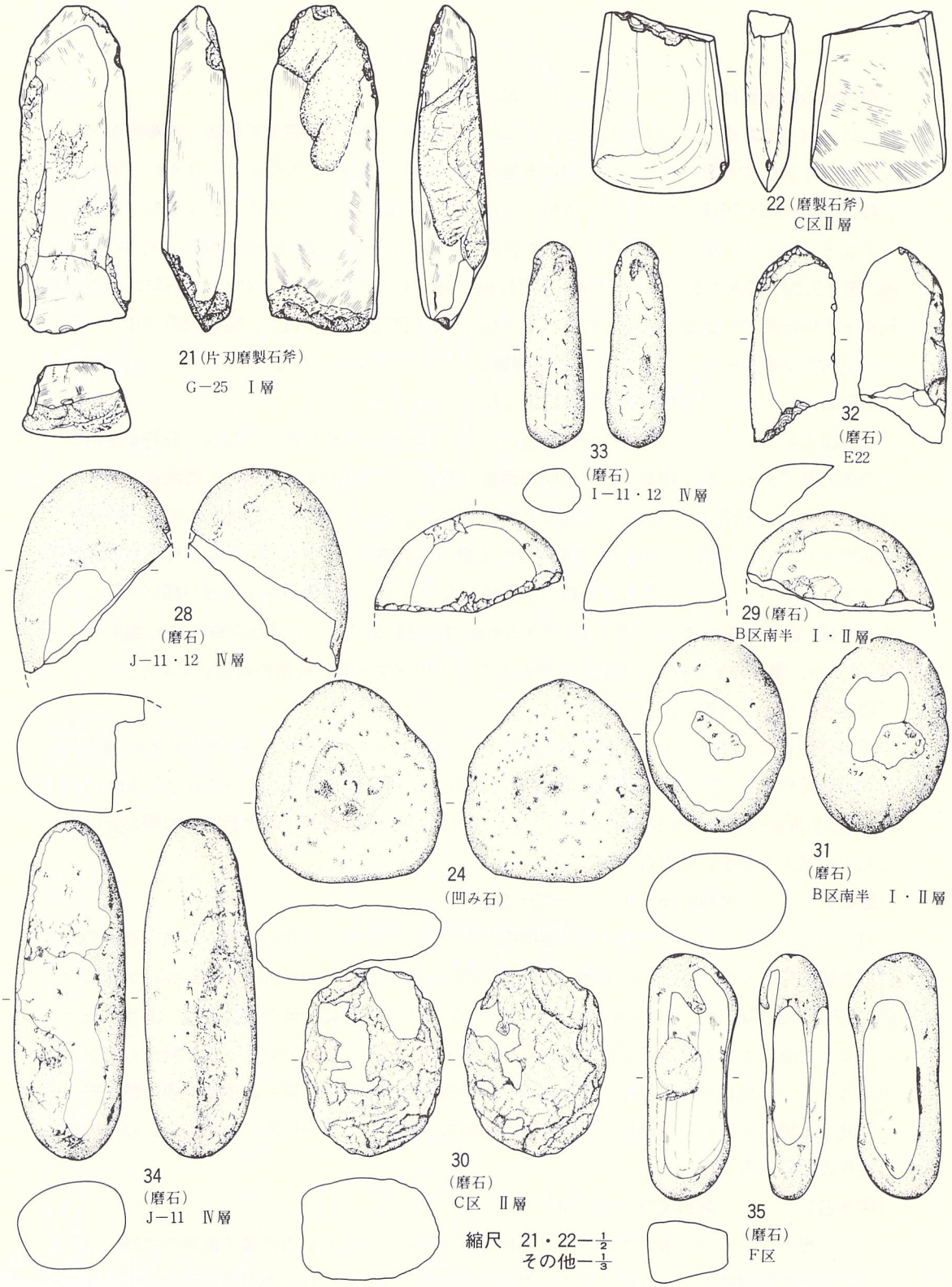
遺構外からは1点の出土で、遺構内を含めると3点である。いずれも円形や楕円形の扁平な自然石を素材とし、その平坦な両面か片面を凹み石として使用している。大きさは径5.2cm～9.9cm、厚さ1.3cm～4.6cm、重さ70g～510gである。石材は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩と北上山地古生界産の粘板岩である。

〔磨石〕　　（第48図28～36、PL—29～30）

11点の出土であるが、その内2点は遺構内からの出土である。形状が細長いもの（32～35）、円形や楕円形のもの（28～31）、台形状のもの（36）が含まれる。磨面も、剝落が多いがほぼ全面（30）、両面（29・31・35・36）、片面（32～33）であり、特に35は3面にもつ。35は磨石というよりは砥石とする方が妥当かも知れない。28・29・33は欠損している。大小関係もバラツキが大きく、一概に平均化することはできない。石材は奥羽山地新第三系中新統産の輝石安山岩や北上山地古生界産の粘板岩・角閃黒雲母花崗岩・硬砂岩・輝石玢岩が使用され、北上山地古生界産の石を多用している。

〔叩き石〕　　（第49図38～40、PL—30）

4点の出土であるが、遺構外からの出土は3点である。いずれも自然礫の側縁や先端に敲打による粗雑な剝離痕をもつものである。大きさは一様でない。石材は奥羽山地新第三系中新統



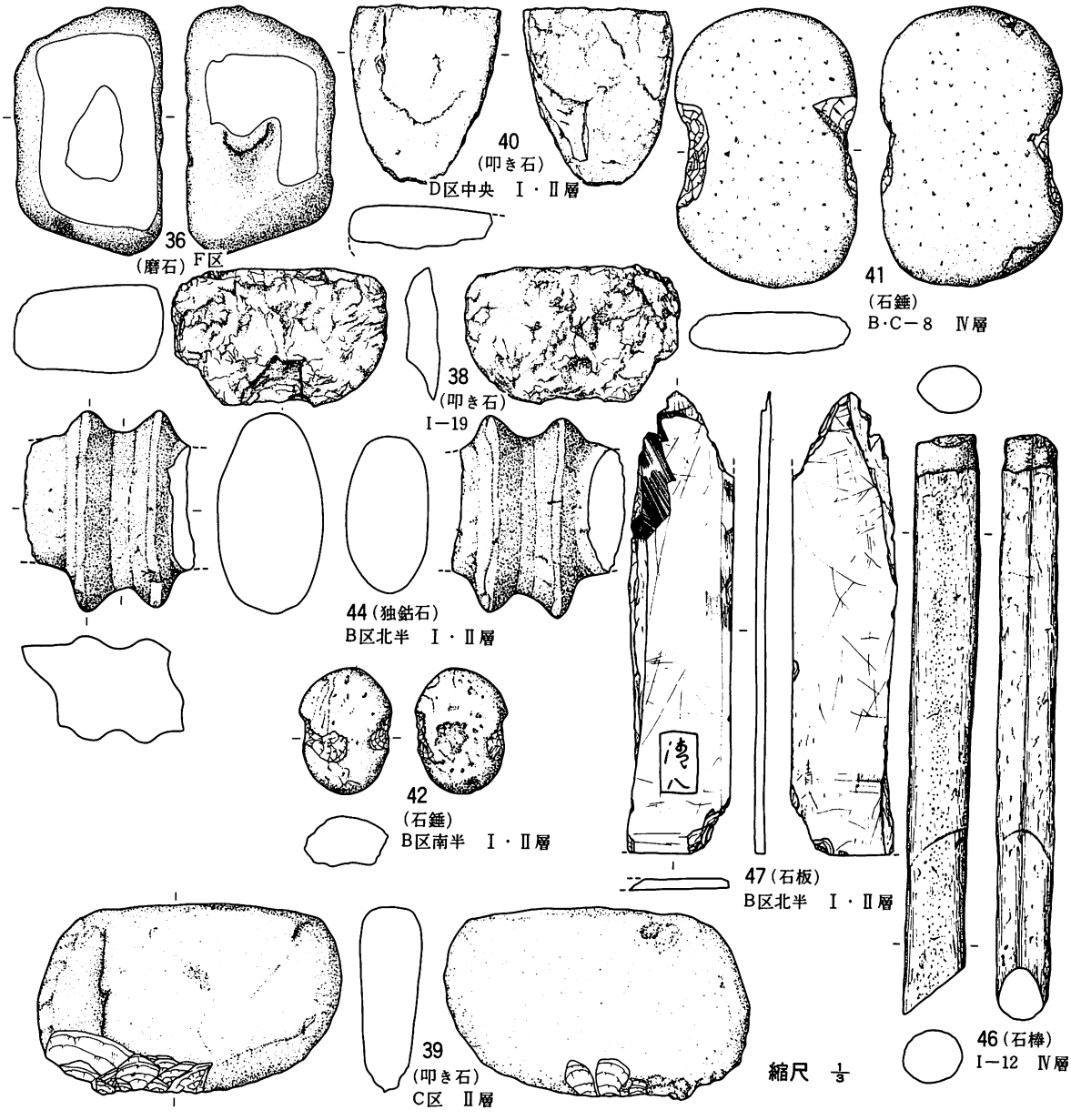
礫石器

第48図　遺構外の遺物（石器－2）

産の輝石安山岩、北上山地古生界産の粘板岩が使用されている。

〔石錘〕　　(第49図41・42、PL－31)

2点の出土である。扁平な自然礫の短軸両端に敲打による凹みをつけて紐掛りとした錘である。41は隅丸のやや長方形気味の礫を使用し、42は楕円形のものである。大きさには違いがあ



礫石器・石製品
第49図　遺構外の遺物(石器－3)

石器類一覧表

No	遺構名 グリッド名	出土層位	器種	石質	石材産地	法量 全長	全幅	厚み	重さ
						cm	cm	cm	g
1	I 11	IV層	石鏃	凝灰質珪質泥岩	新第三系中新統	2.2	1.1	0.3	0.4
2	I 23	I 層	〃	珪質泥岩	新第三系中新統	2.6	1.7	0.4	1.8
3	C区	II 層	〃	粘板岩	北上産地、古生界	4.0	1.5	0.5	2.65
4	D区表採		〃	凝灰質珪圭質泥岩	新第三系中新統	4.0	1.6	0.3	1.7
5	F区		〃	チャート	北上産地、古生界	3.9	1.3	0.6	3.6
6	E区粗掘	（コンポー）	石槍	粘板岩	北上産地、古生界	8.4	2.3	1.0	16.5
7	C—17	住居付近	石篦	凝灰質珪質泥岩	新第三系中新統	5.9	2.8	0.6	8.9
8	B区南半	I・II 層	〃	珪質泥岩	新第三系中新統	7.0	1.9	0.5	8.35
9	表採		〃	流紋岩質極細粒凝灰岩	新第三系中新統	4.1	4.3	0.6	14.55
10	L16	陥穴埋土	掻器	チャート	北上産地、古生界	2.6	1.5	0.3	9.5
11	E区粗掘	（コンポー）	〃	珪質	新第三系中新統	3.9	2.3	0.5	19.1
12	〃	〃	〃	流紋岩質極細粒凝灰岩	新第三系中新統	4.0	1.8	0.7	5.8
13	〃	〃	〃	チャート	北上産地、古生界	4.1	3.2	0.7	14.5
14	F区	トレンチ	〃	凝灰質珪質泥岩	新第三系中新統	3.3	4.0	1.2	22.45
15	E10	I、II 層	使用痕ある剝片	流紋岩質極細粒凝灰岩	新第三系中新統	3.2	2.7	0.7	8.5
16	E17	I、II 層	〃	チャート	北上産地、古生界	4.3	4.1	0.7	21.3
17	F20	I、II 層	〃	凝灰質珪質泥岩	新第三系中新統	3.0	4.3	0.9	13.65
18	C区	I、II 層	〃	輝緑凝灰岩	北上産地、古生界	1.8	1.2	0.5	2.2
19	C区	II 層	〃	珪質泥岩	新第三系中新統	3.9	3.6	0.5	1.55
20	E区粗掘	（コンポー）	〃	チャート	北上産地、古生界	5.6	4.1	1.3	43.2
21	G25		石斧	淡緑色凝灰岩	北上山地、古生界	10.6	3.7	2.4	160
22	C区	II 層	〃	〃 〃	〃 〃	5.5	4.0	1.6	70
23	H—11住	床直No44	凹み石	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統	9.1	9.1	4.6	510
24	B区北半	I、II 層	〃	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統	9.9	8.9	2.9	4.60
25	U—8住	埋土内	〃	粘板岩	北上産地　古生界	5.2	5.8	1.3	70
26	D—11内	土器内出シ	磨石	チャート	北上産地　古生界	5.0	5.0	3.3	130
27	〃	〃	〃	チャート	北上産地　古生界	7.4	6.0	5.0	340
28	J—11.12	IV層	〃	粘板岩	北上産地　古生界	8.1	6.1	5.8	400
29	B区南半	I、II 層	〃	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統	4.7	8.6	7.0	380
30	C区	II 層	〃	角閃黒雲母花崗岩	北上山地中生界	9.2	6.9	5.0	470
31	B区南半	I、II 層	〃	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統	9.5	6.9	4.7	450
32	E22		〃	硬砂岩	古生界	8.3	4.1	1.7	120
33	I—11,12	IV層	〃	粘板岩	北上山地　古生界	10.1	2.8	2.2	100
34	J—11	IV層	〃	輝石玢岩	北上山地　古生界	16.7	5.4	4.3	635
35	F区		〃	チャート	北上産地　古生界	12.0	3.8	3.0	220
36	〃		〃	輝石玢岩	北上産地　古生界	10.4	6.4	3.8	490
37	H—11住	床直No23	叩き石	粘板岩	北上産地　古生界	13.7	7.8	3.2	450
38	I—19		〃	粘板岩	北上産地　古生界	5.8	9.4	1.4	105
39	C区	II 層	〃	〃	〃 〃	8.3	13.2	2.4	510
40	D区中央トレンチ	I、II 層	〃	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統	5.7	6.3	1.7	120
41	B・C8	IV層	石錘	硬砂岩	古生界	12.1	6.9	1.8	300
42	B区南半	I、II 層	〃	チャート	北上産地　古生界	5.6	3.7	1.9	70
43	H—11住	床直No29	石皿	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統	18.9	8.9	3.7	990
44	B区北半	I、II 層	独鈷石	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統	8.7	7.1	4.6	345
45	H—11住	No42（石棒）	石刀	チャート	北上産地　古生界	30.6	3.5	1.6	260
46	I—12	IV層	石棒	粘板岩ホルンフェンス	北上産地　古生界	25.7	2.9	2.2	330
47	B区北半	I、II 層	石板	粘板岩	北上産地　古生界	20.2	4.4	0.4	90
48	D区沢跡	ベルト	掻器	凝灰質珪質泥岩	新第三系中新統	4.0	4.2	0.7	35.0

り、41は全長12.1cm、幅6.9cm、厚さ1.8cm、重さ300g、42は全長5.6cm、全幅3.7cm、厚さ1.9cm、重さ70gである。石材は北上山地古生界産の硬砂岩とチャートである。

〔石皿〕　　（第50図43、PL—31）

1点の出土であるが、遺構内からの出土であるため出土した遺構の項で既述した。

〔その他石製品類〕　　（第49図44・46・47、PL—31）

この中には独鈷石1点、石刃1点、石棒1点、石板1点の合わせて4点入るが、石刃は遺構内からの出土であるため、ここではそれ以外の種類を記述する。

44は独鈷石であるが、両先端部を欠失している。完形であれば20cmを越える大型品と推定される。縦断面形は楕円形で中央部と推定される部分に窄れをもち、その両側に鍔状の突帯が全周している。突帯部が径8.5cm×4.6cm、中央の窄み部が径6.8cm×3.6cmの楕円形に仕上げられている。全面が研磨による調整ではあるが、石質によるのか光沢をもつほどではなく、やや粗い感がある。石材は奥羽山地新第三系新統産の輝石安山岩が使用されている。

46は石棒であるが、先端（実測図の下方）を欠失している。全面が研磨によって仕上げられるが頭部には敲打痕を全周させている。横断面の形状は頭部付近が両側（長軸両端）に軽い稜をもつが、実測図下位ではほぼ円形に近く、稜も明瞭でない。大きさは残存長25.7cm、幅2.9cm、厚さ2.2cm、重さ330gである。石材は北上山地古生界産の粘板岩ホルンフェルスである。

47は大正～昭和10年代にかけて毛筆習字の習書練習に使用された石板の破片である。厚さが3mmの薄い石製の板で、沿りの部分は面取りがなされている。現状では両面に多くの擦痕を残すが、かつては奇麗に磨きあげられていたものとおもわれる。なお、両面に「清八」という刻名があることから「清八」という人物が使用したものであろう。北上山地古生界産の粘板岩製である。

6）金属製品　　（第46図1～4、PL—27）

古貨幣（1～4）4点と煙管（PL—27—5）1点が出土している。貨幣の4点はいずれも江戸時代中期に日本で鋳造した「寛永通寶」であるが、1・2は銅銭、3・4は鉄銭という違いがある。鉄銭の鋳造地は不明であるが、1は秋田佐竹藩鋳造、2は大阪高津で鋳造されたものである。いずれも江戸時代後、末期に通用した銭である。

煙管は実測図の作成は省略したが、羅宇の竹管は腐敗しているものの、吸口部と火皿部が残存している。吸口部は長さ8cm、径1.2cmの円形で1個の貫通孔をもつ。火皿部は長さ5.7cm、径1.2cmで、火皿の部分が上方を向くように曲ってある。

4．ま　と　め

本遺跡の発掘調査で検出された遺構は住居跡６棟、土坑14基、焼土遺構１箇所、土器埋設遺構１箇所の22遺構であるが、時期を明確にし得た遺構は住居跡３棟、土坑３基、土器埋設遺構１箇所のみで、他は遺物の共伴がないため明らかでない。

住居跡の時期は晩期１棟（H―11住居跡）と後期２棟（Q―11住居跡・U―８住居跡）に分けられるが、土坑はいずれも晩期に属する。調査地内での遺構の在り方をみると、いずれも集中することなく、散在する分布状況を示しており、この状況から判断すると周辺の近距離に大きな集落があることは考えられない。

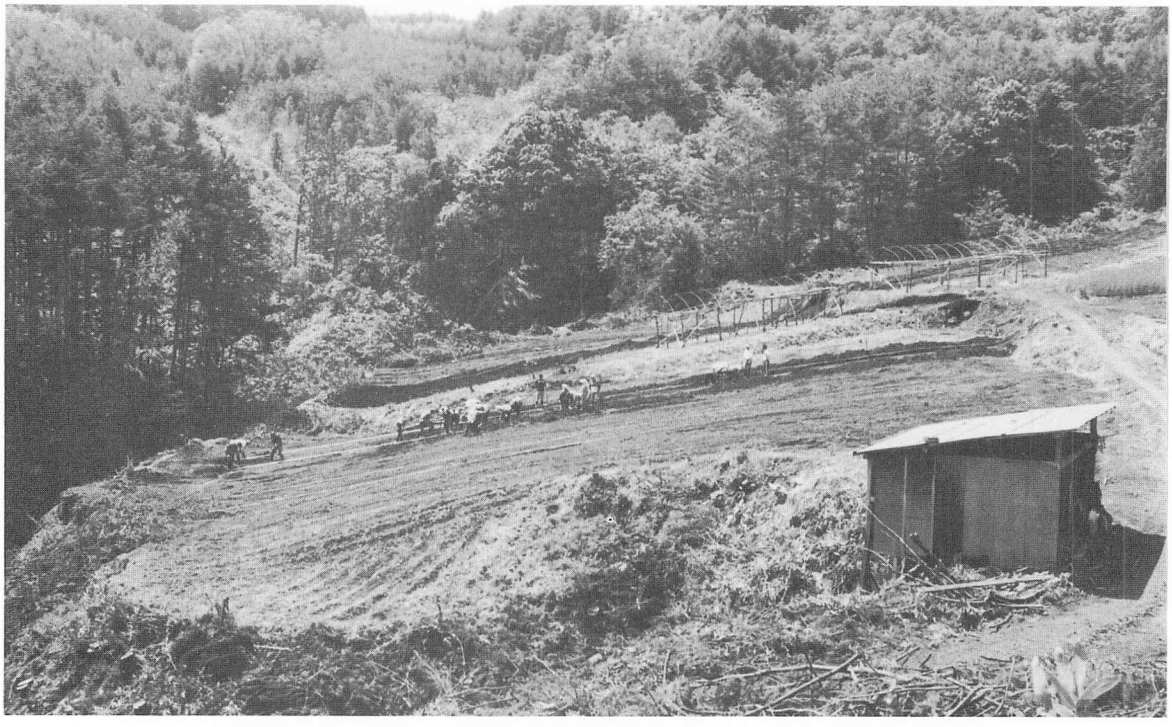
遺物は土器と石器が大方を占めるが、量はさほど多くない。土器片の全体数が5,000点強、石器と剝片類が120点弱、金属製品５点が実数に近い数字である。土器には縄文時代と弥生時代、古代、近現代のものがあり、さらに縄文時代には早期、前期、中期、後期、晩期のものが含まれている。

これらの遺構と遺物を含めて総体的に本遺跡の性格を考えると、縄文時代早期にはすでに縄文人が何らかの形でこの地域を活動の場として利用し、その後、縄文時代全体をとおしてその伝統を受け継いでいる。その間に、後期と晩期には小規模ではあるが集落が営まれ、縄文時代ではこの時期に最も活発に活動したと推定される。弥生時代になると最初の頃は無人であったらしく、生活の痕跡を残していないが、後半になるとまたこの付近に新しい弥生人が住みついたらしい。今回の調査では遺構の検出はなかったが、土器の出土がこれを裏付けている。おそらく、北側尾根の頂上部平坦面付近に集落が存在するであろう。古代では、古墳時代の様子は不明であるが、奈良時代、平安時代には再度、古代人が何らかの形でこの地を利用している。中世の状況は全く不明であるが、近世以降には農地として利用され今日に至ったと考えることができる。

写　真　図　版

ＰＬ－１　調査後の全景（空中から）

A　調査前の近景（北側半分）



B　調査前の近景（南側半分）

ＰＬ－２　調査前の近景

A　調査後の全景（南東から）

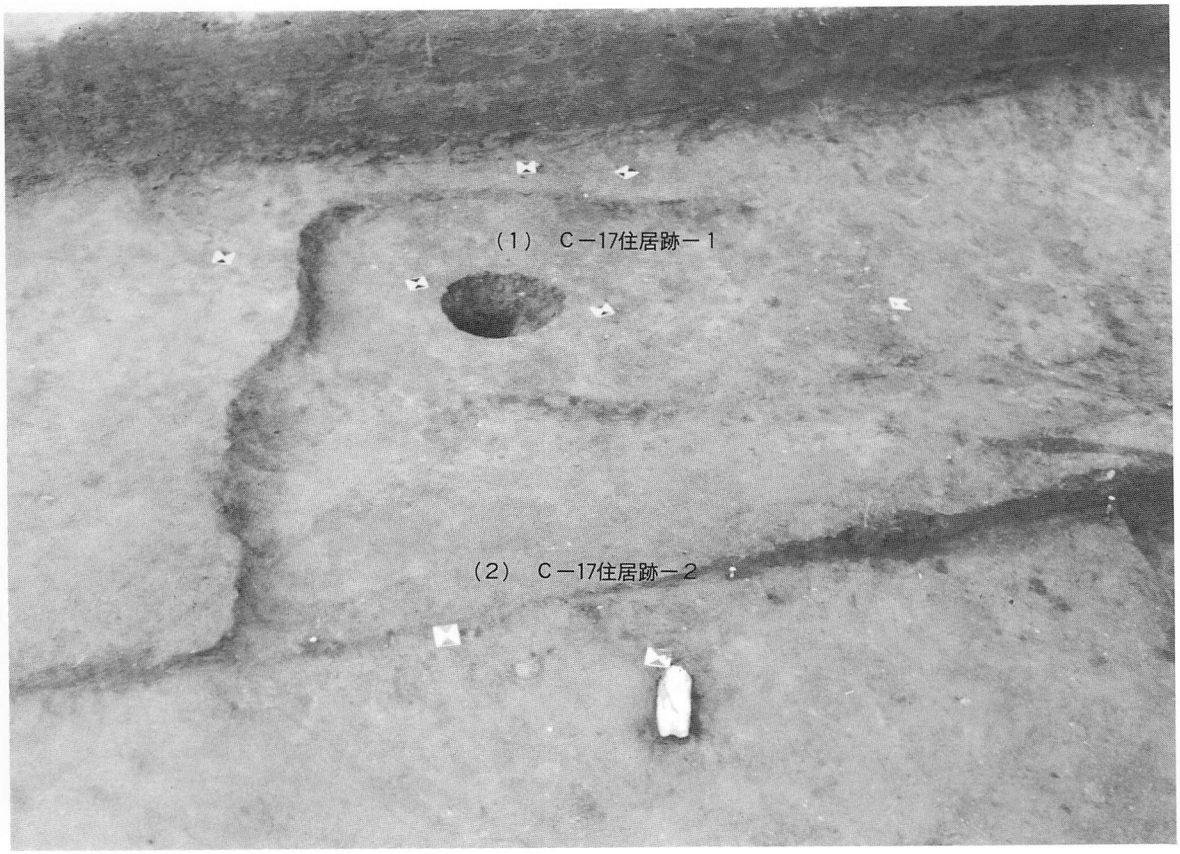
B　調査後の遠景（空中から）

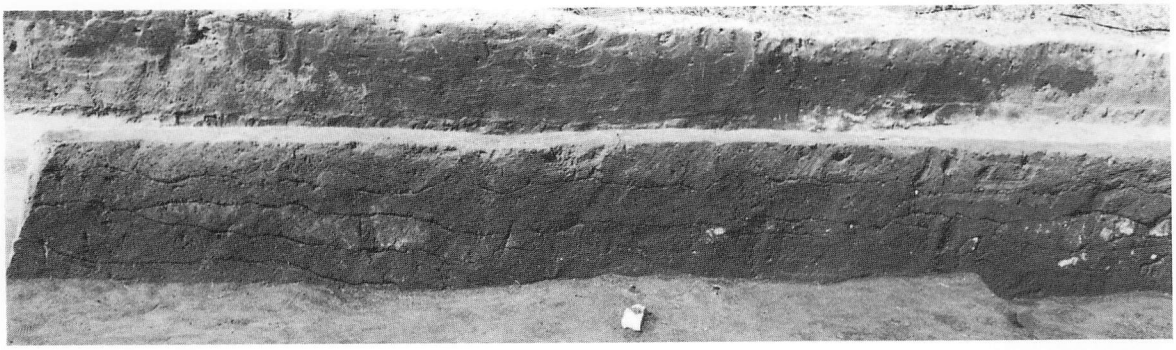
ＰＬ－３　調査後の全景

A　重機による粗掘り作業中

B　基本層序

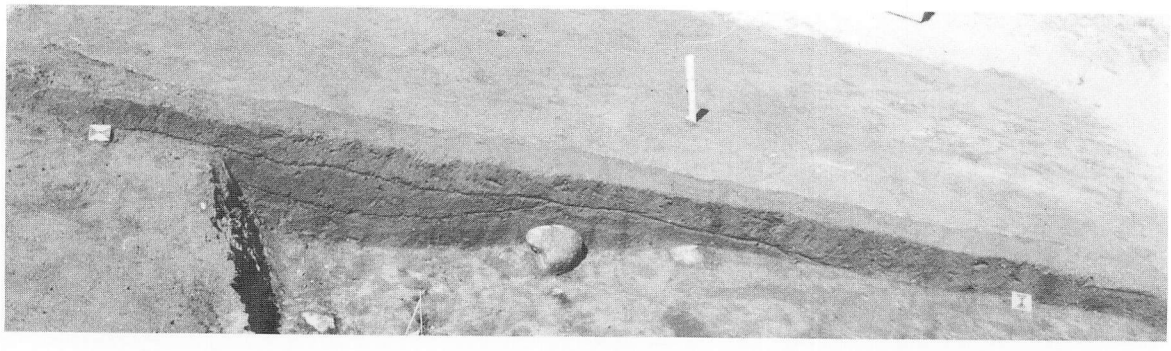
ＰＬ－４　粗掘と基本層序

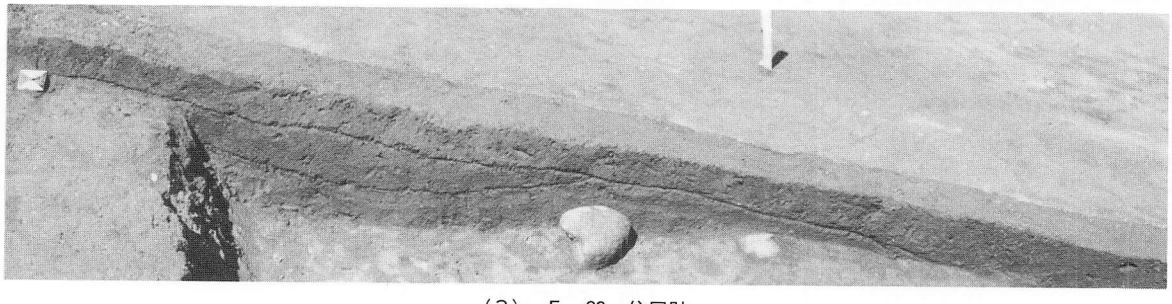




（1）　C－17－1
（2）　C－17－2

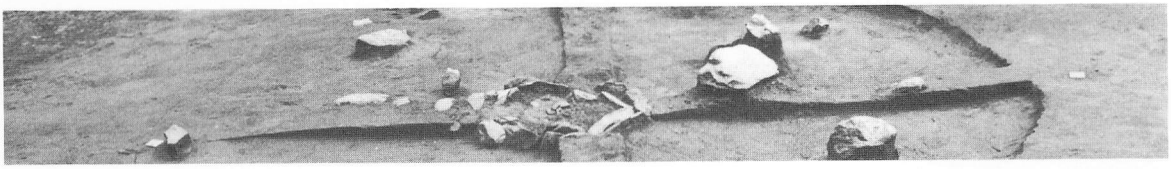
ＰＬ－５　住居跡－1

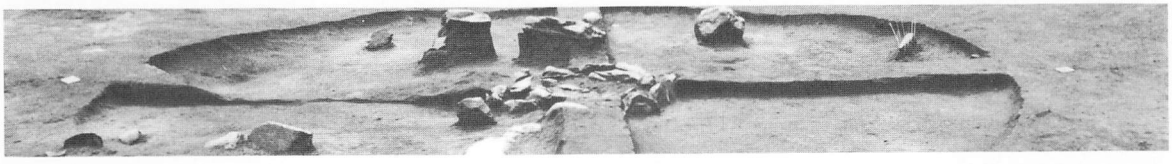


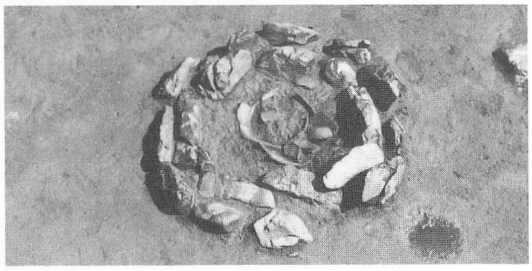


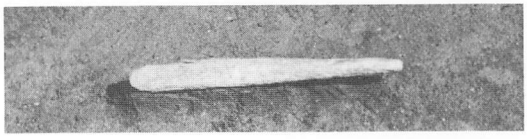
（3） F－23 住居跡

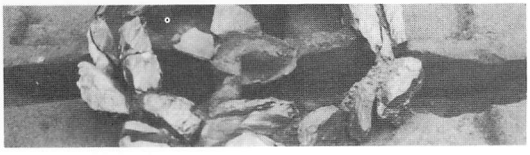
ＰＬ－６ 住居跡－２

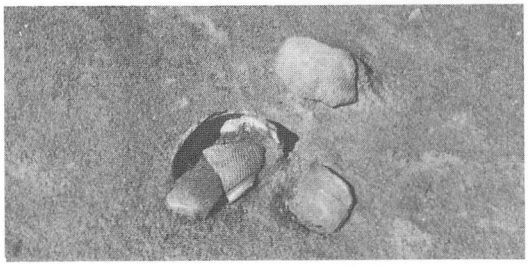






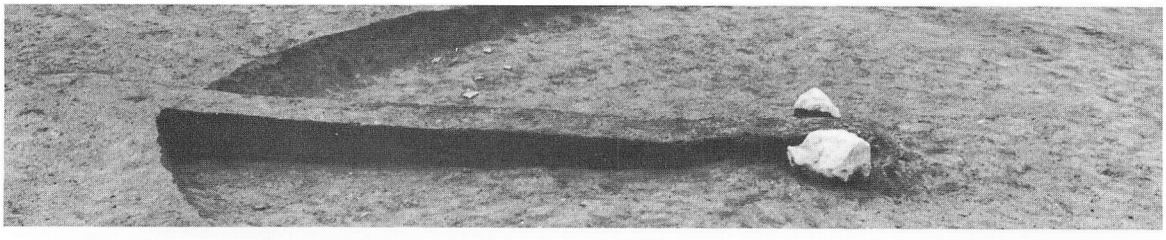


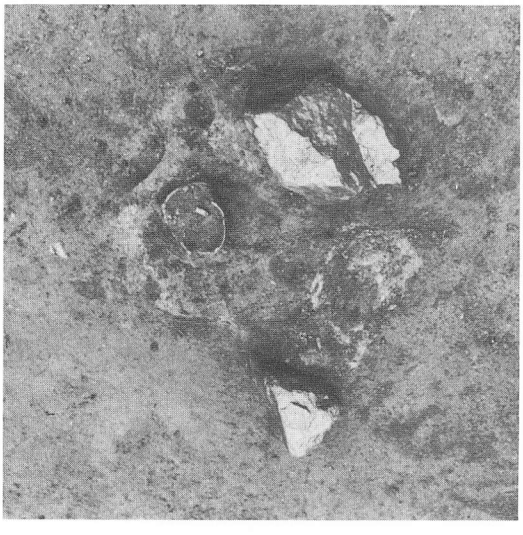


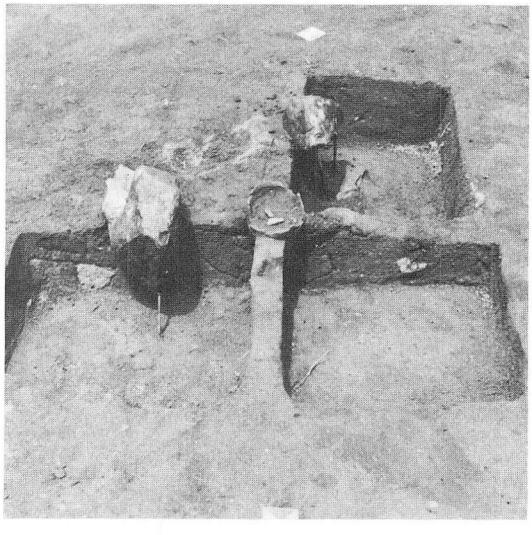


（4） H－11 住居跡

ＰＬ－７ 住居跡－３

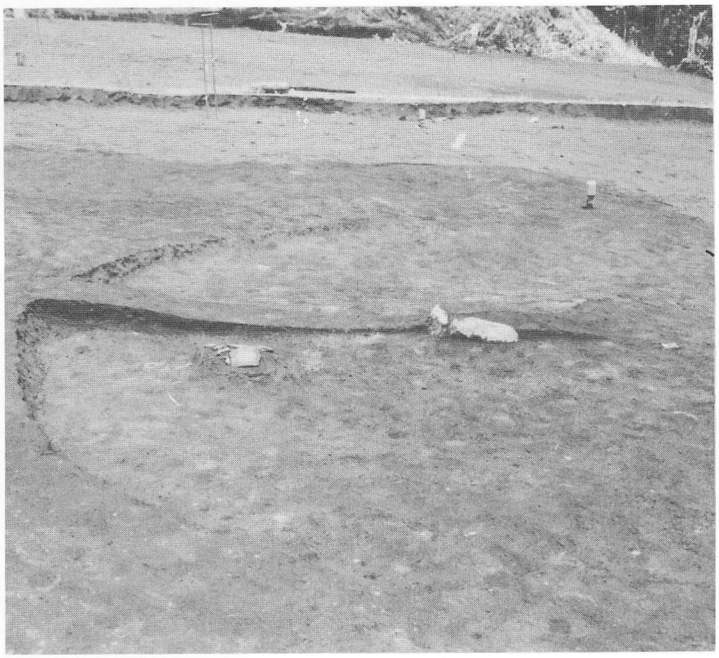






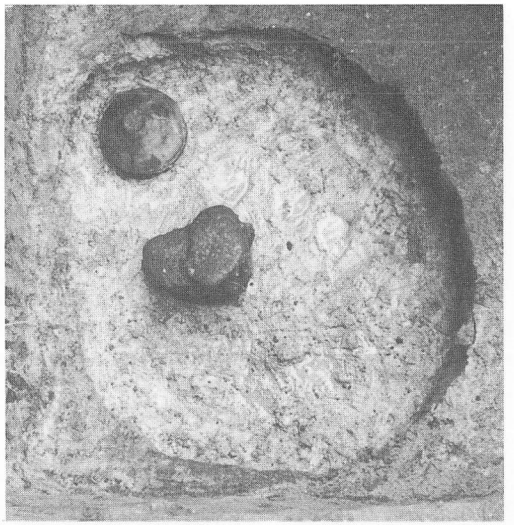
（5） Q－10 住居跡

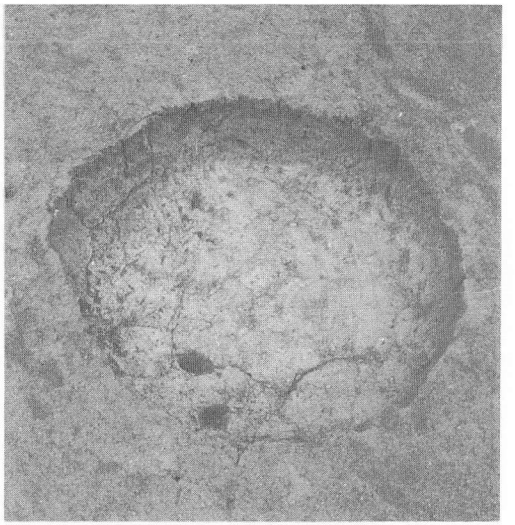
ＰＬ－８ 住居跡－４

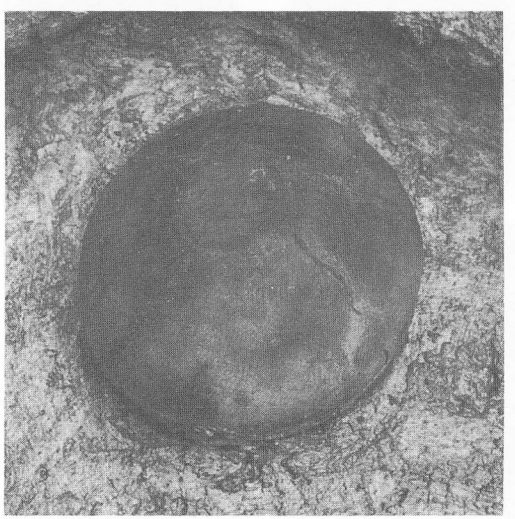


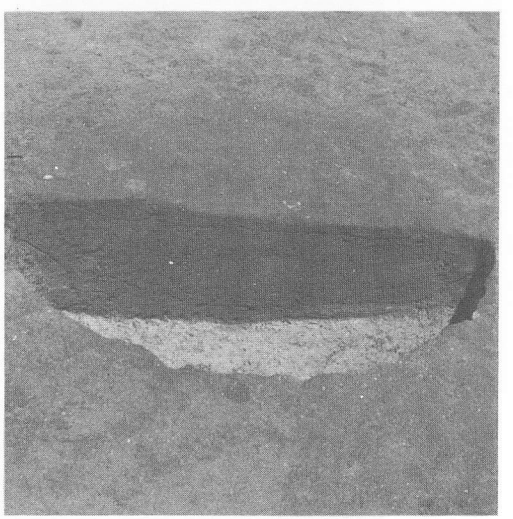
（6） U－8　住居跡

ＰＬ－９　住居跡－５





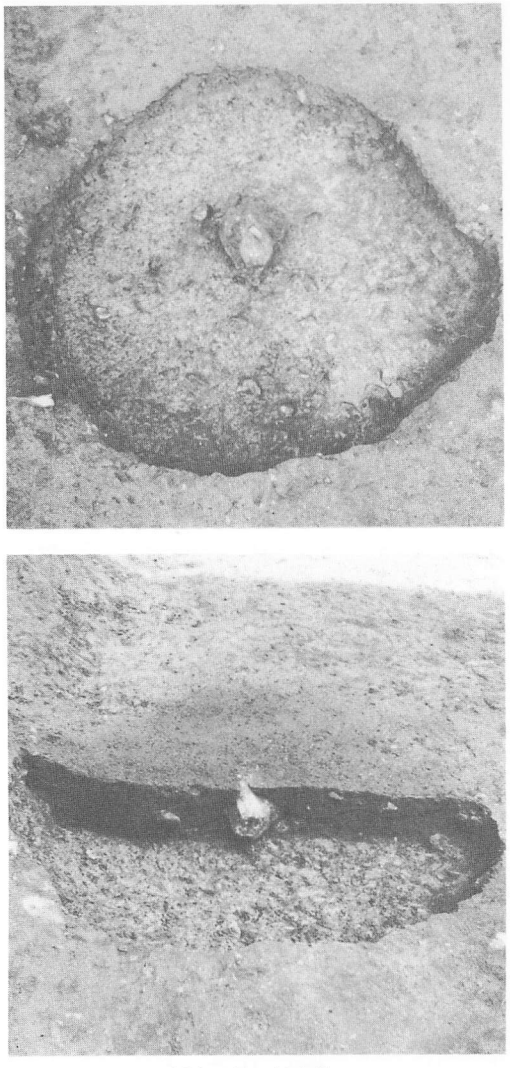




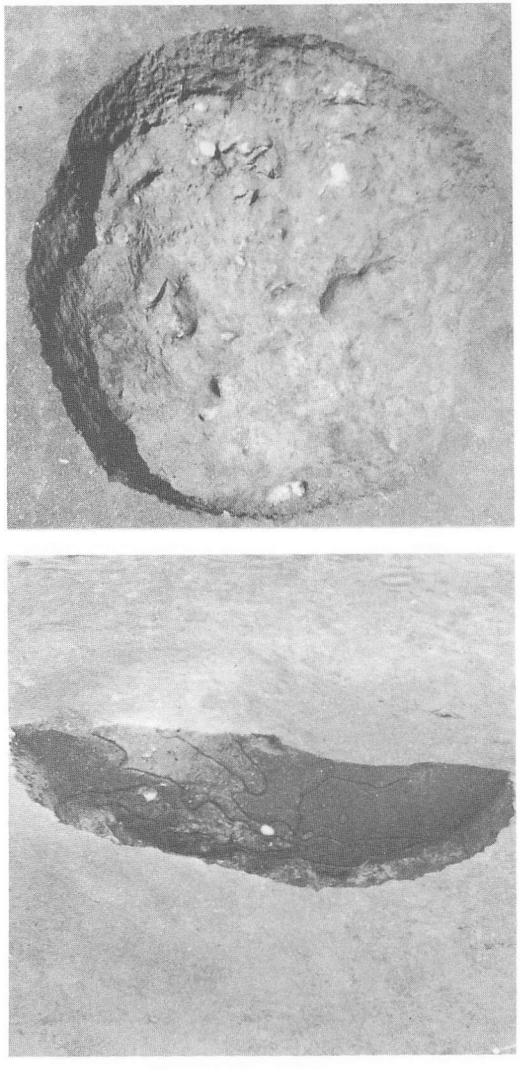
（1） B－8土坑

（2） D－21土坑

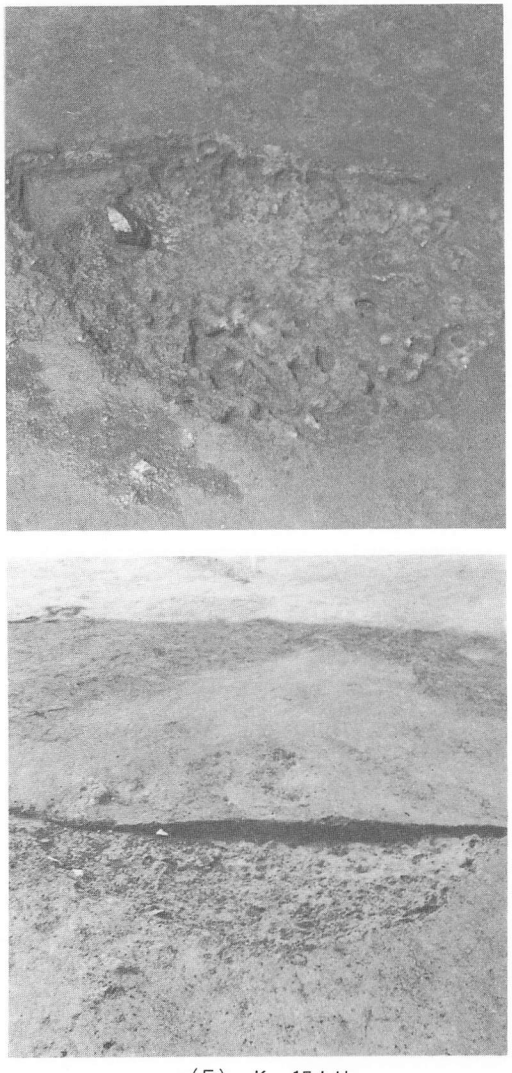
PL－10 土坑－1



（3） F－14土坑

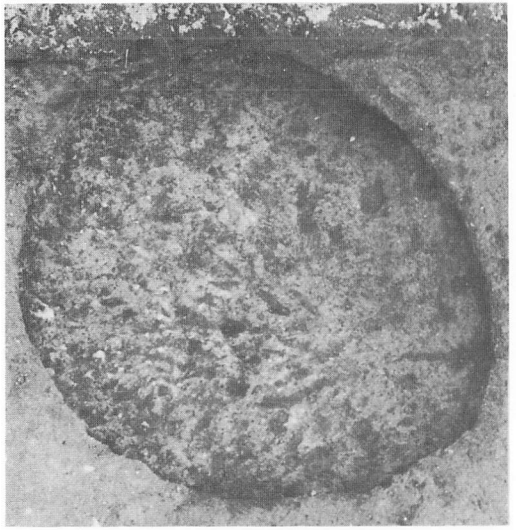


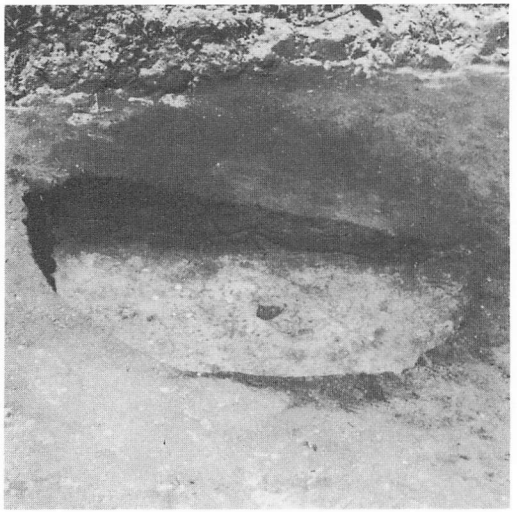
（4） G－11土坑



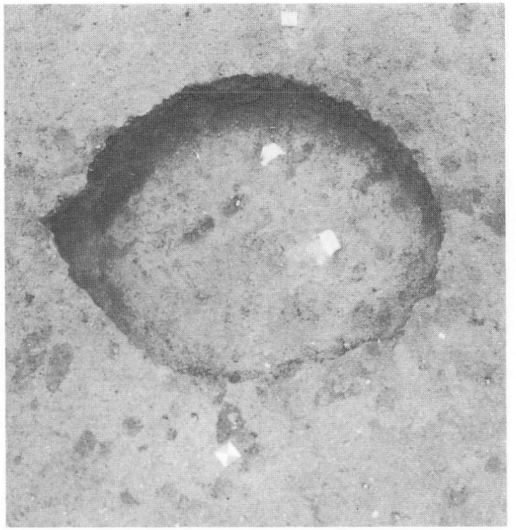
（5） K－15土坑

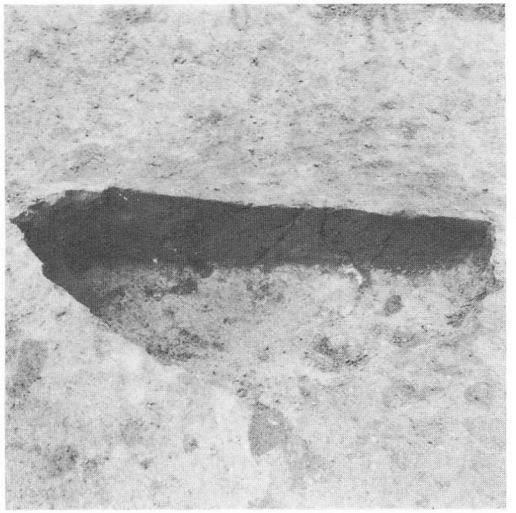
PL－11 土坑－2



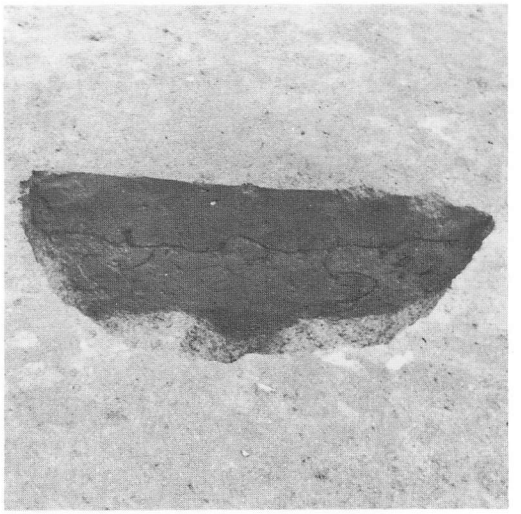


(6)　K－27土坑



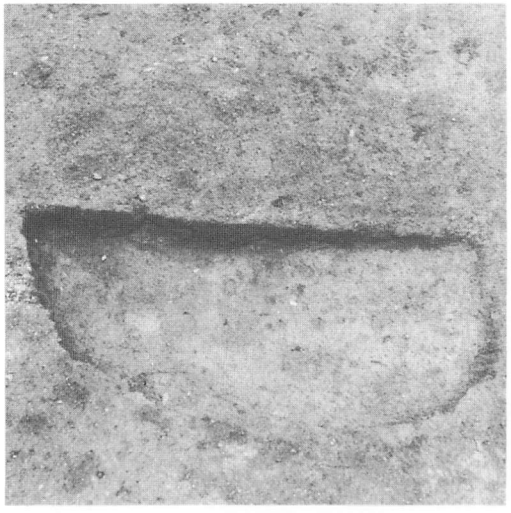


(7)　R－7土坑

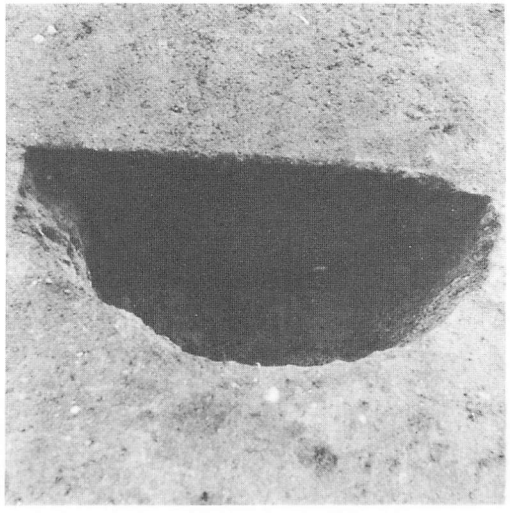


(8)　U－7土坑

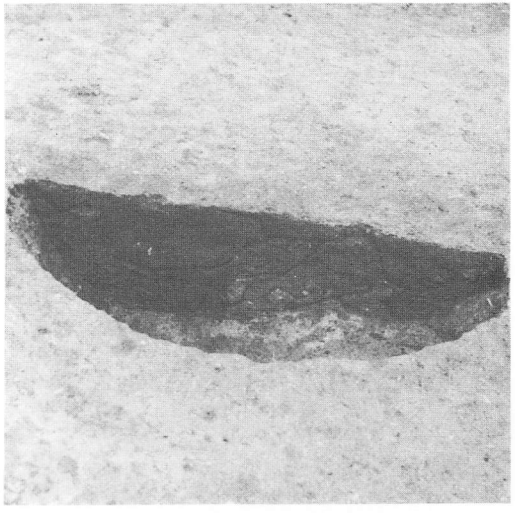
PL－12　土坑－3



(9)　V－15土坑



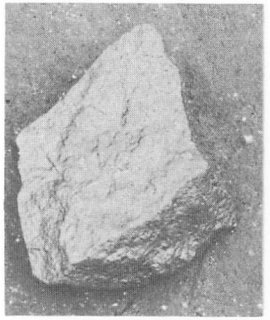
(10)　V－16土坑

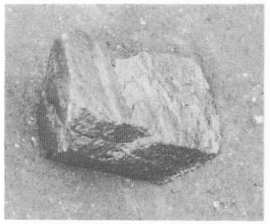


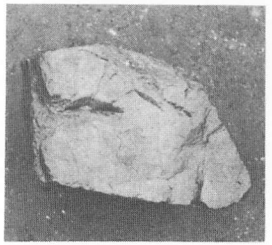
(11)　W－22土坑

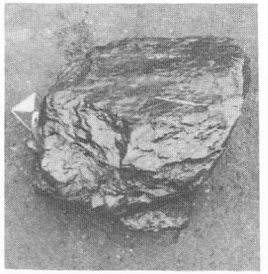
PL－13　土坑－4

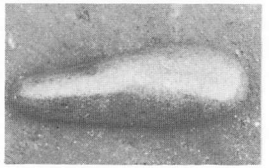
(12)　W－18土坑

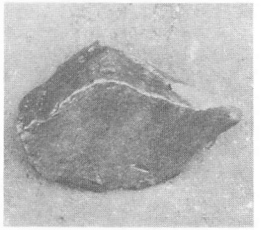


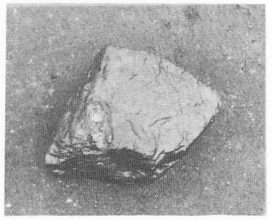






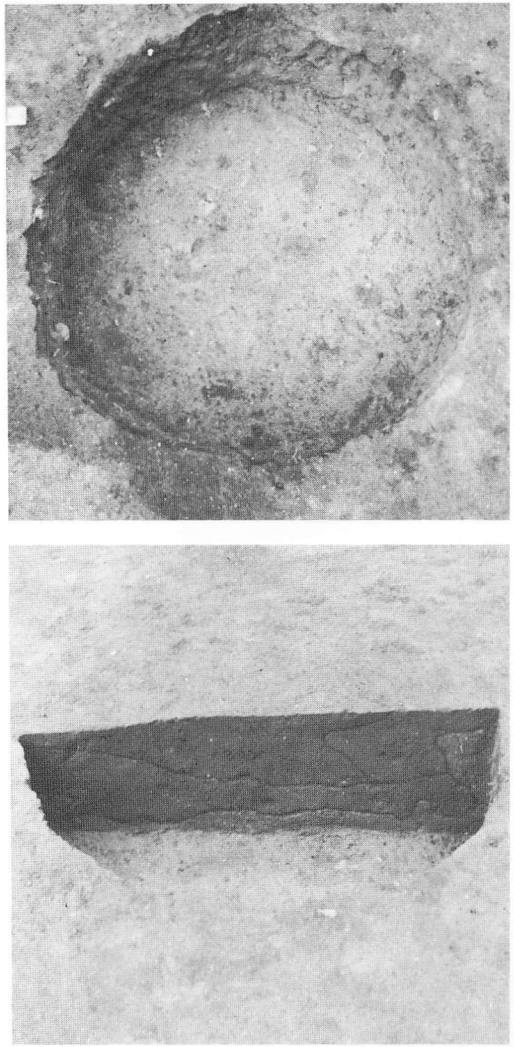




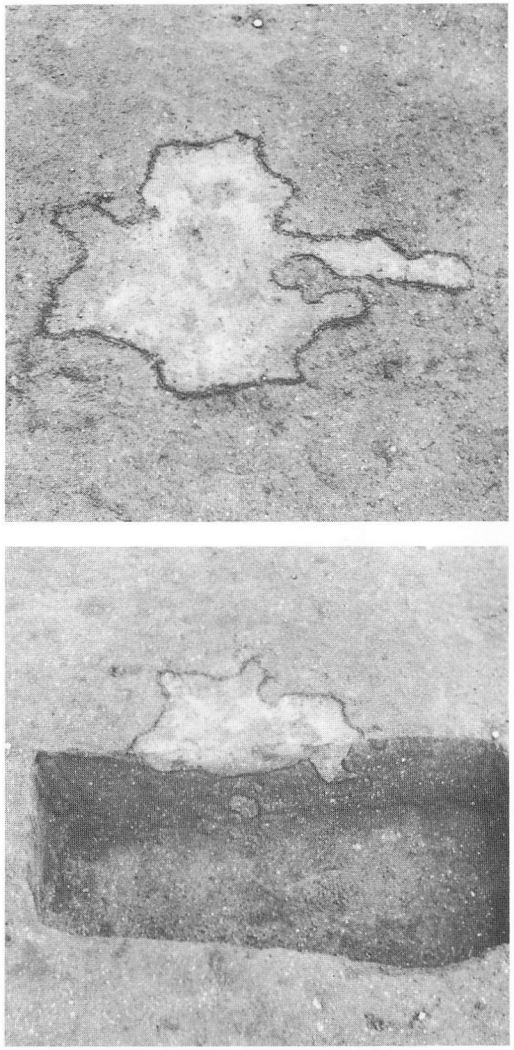


(13)　X－20土坑

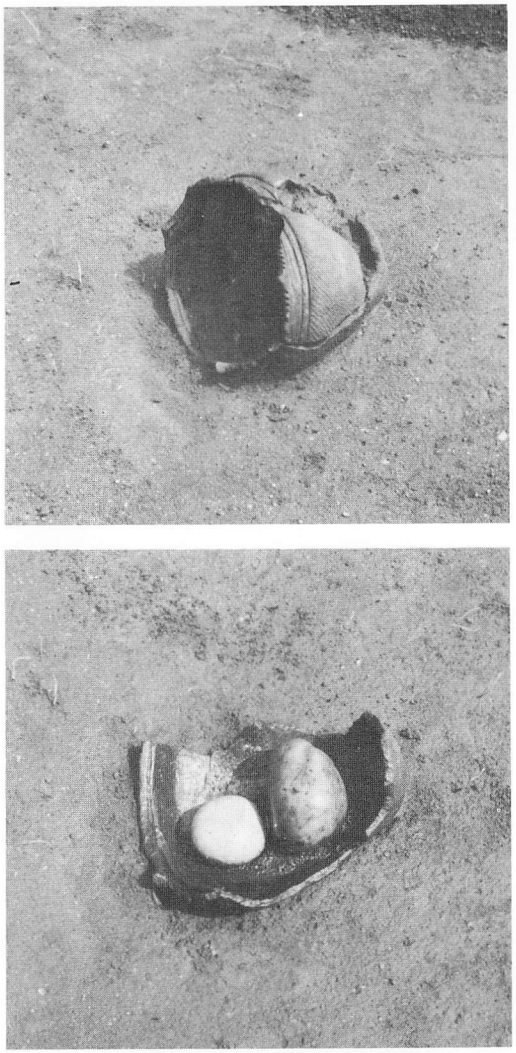
PL－14　土坑－5



(14)　Ｙ－29土坑

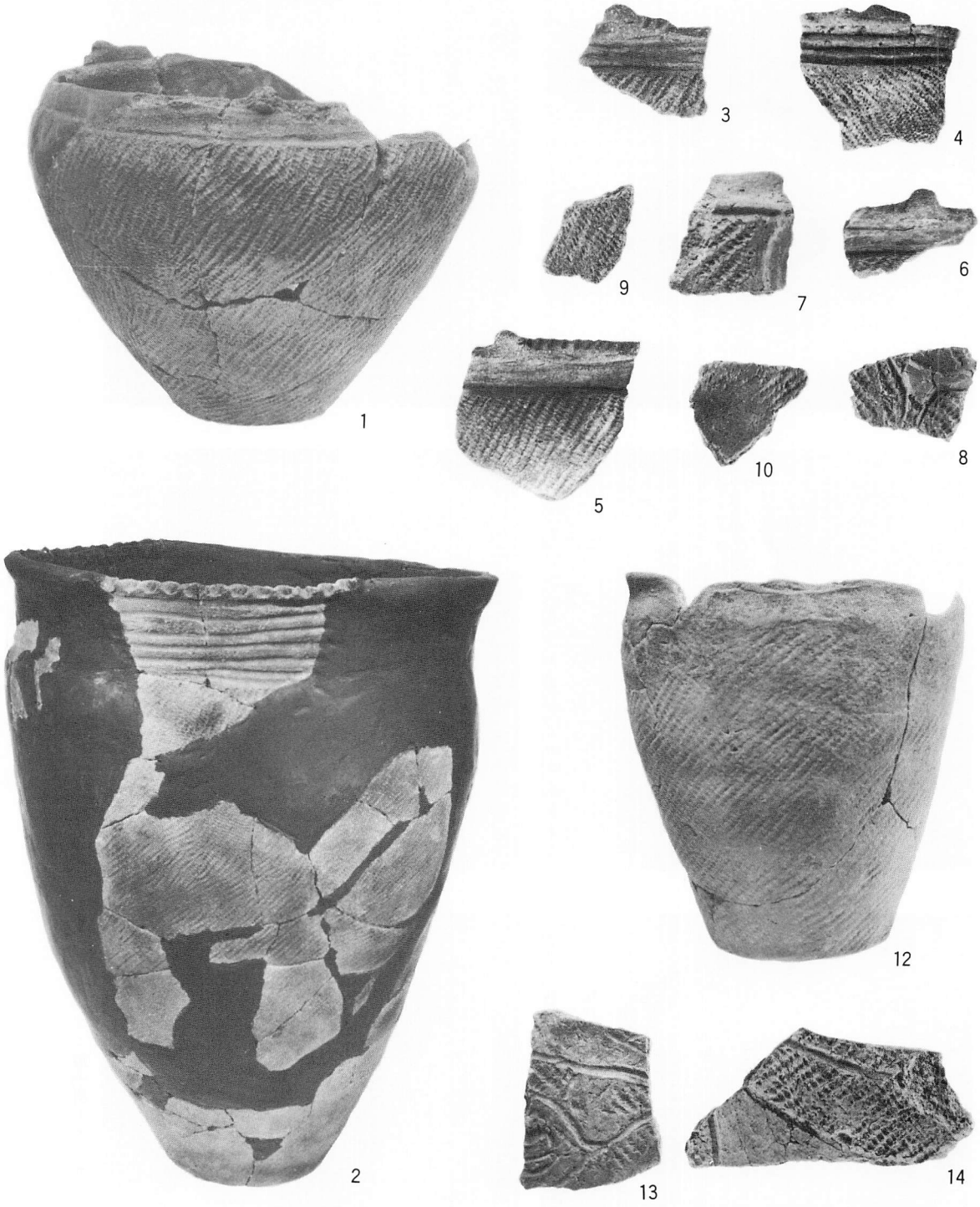


Ｃ－７焼土



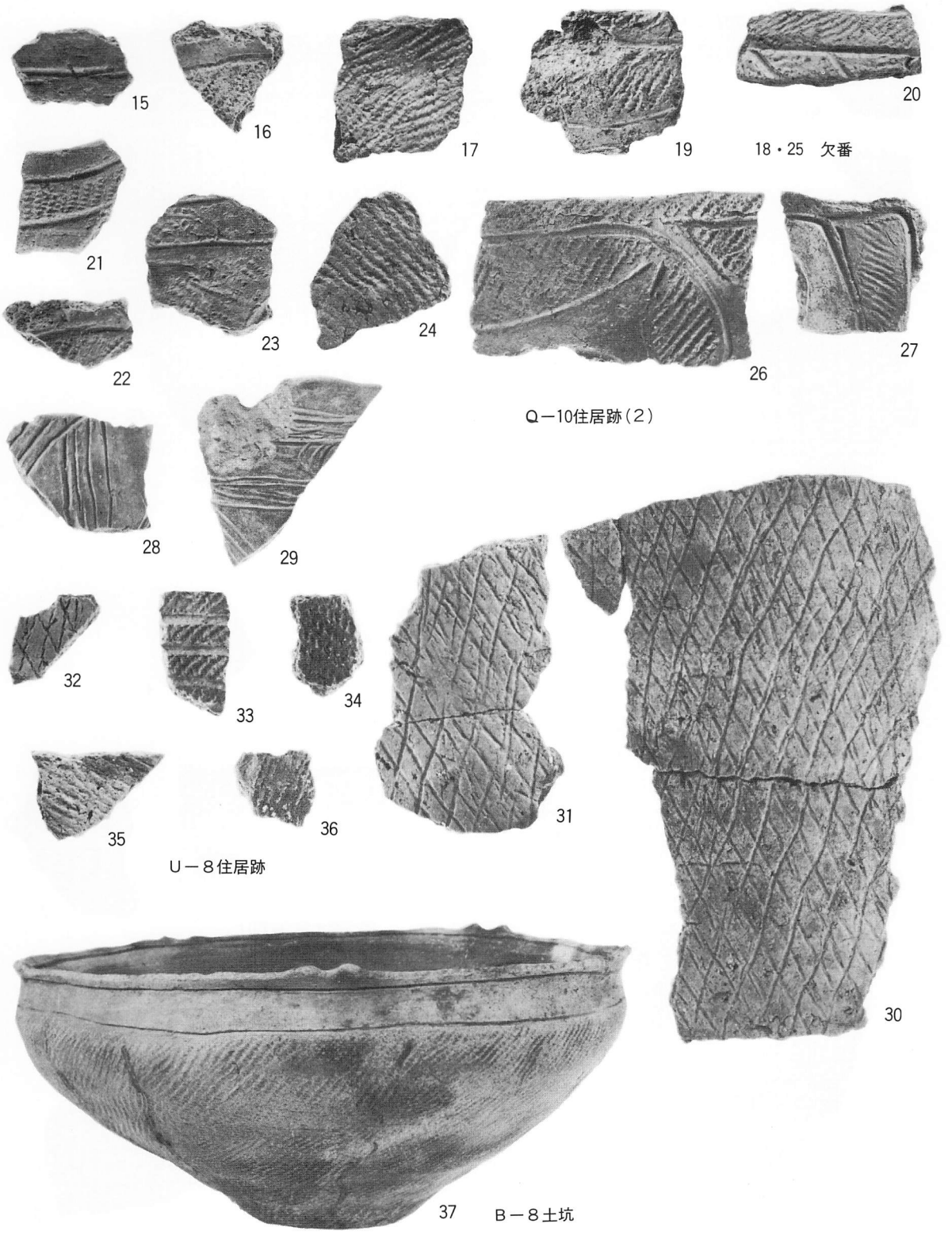
Ｄ－11土器

ＰＬ－15　土坑－６　焼土

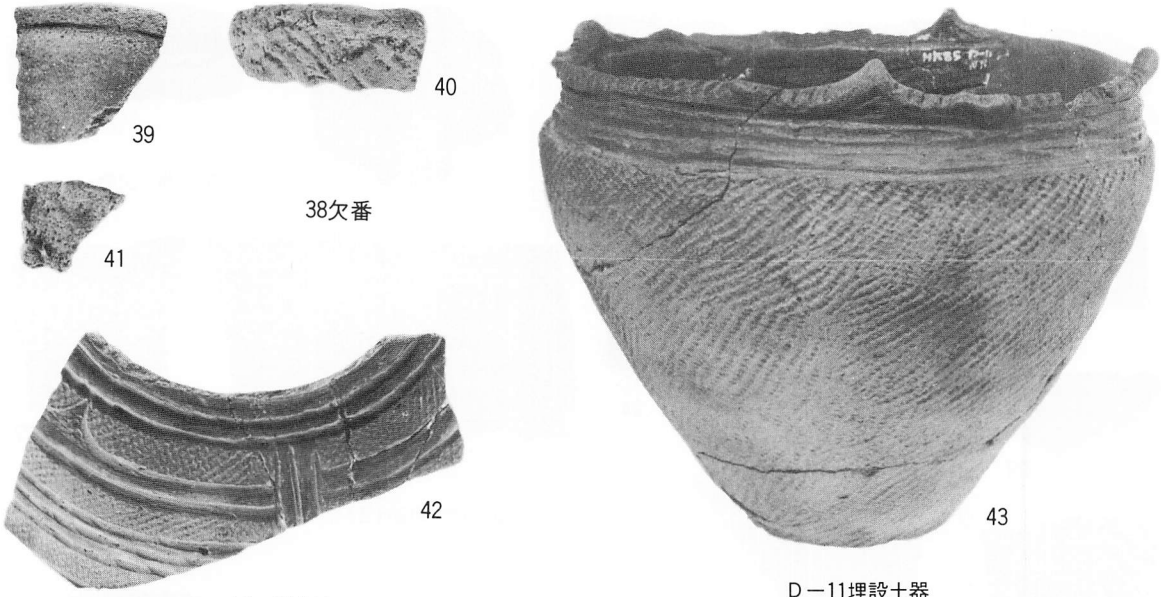


Ｈ－11住居跡　　Ｑ－10住居跡（１）

ＰＬ－16　遺構内の土器（１）



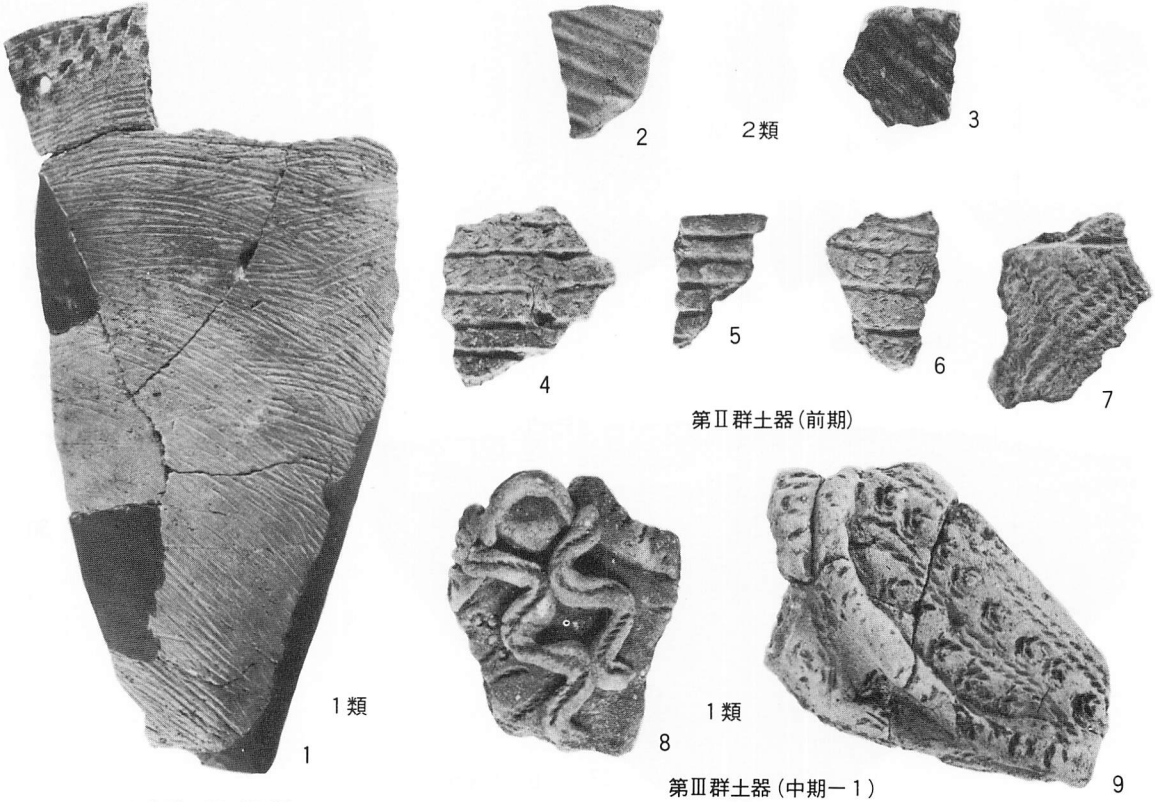
ＰＬ－17　遺構内の土器（2）



V－16土坑

D－11埋設土器

PL－18　遺構内の土器（3）

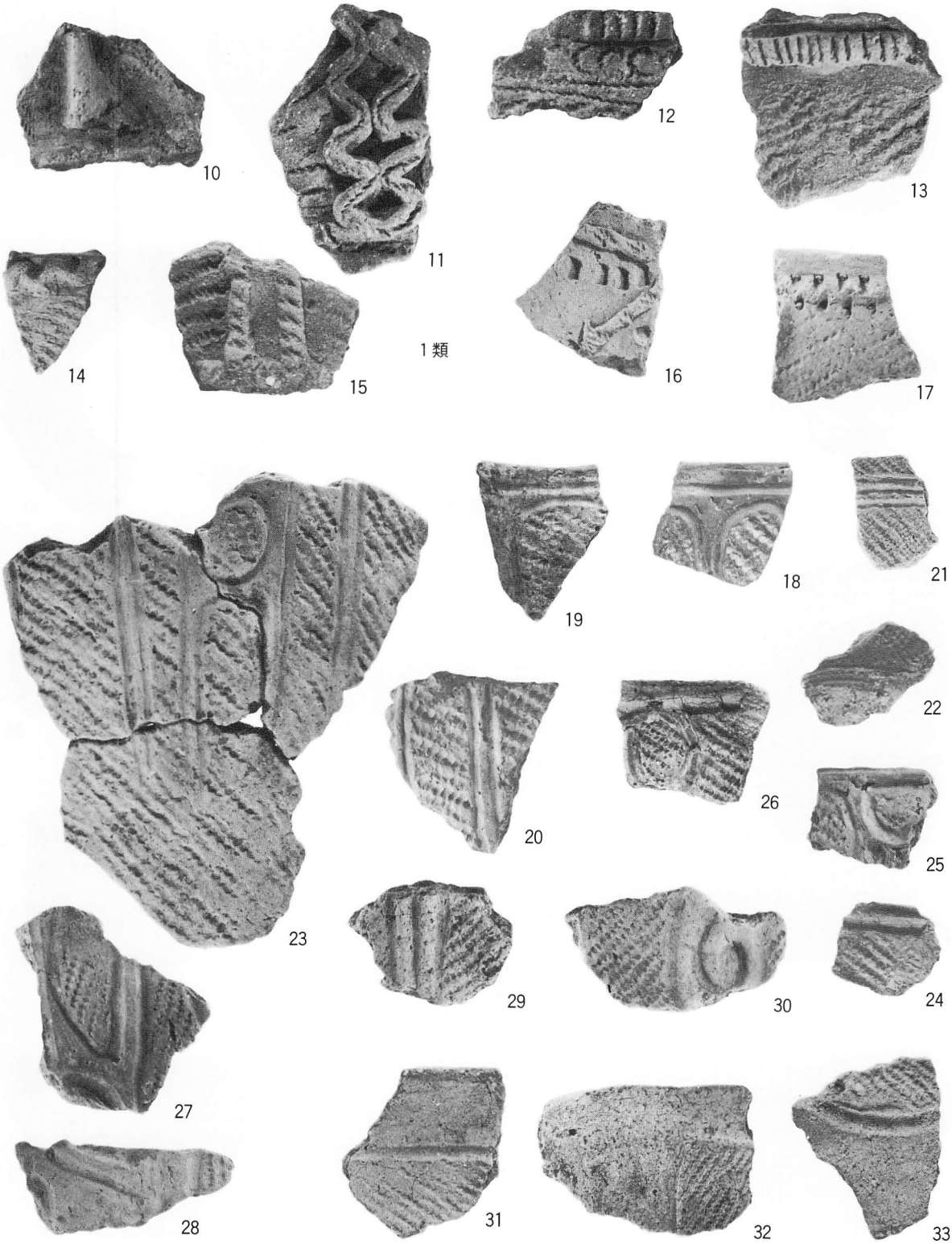


第Ⅱ群土器（前期）

第Ⅲ群土器（中期－1）

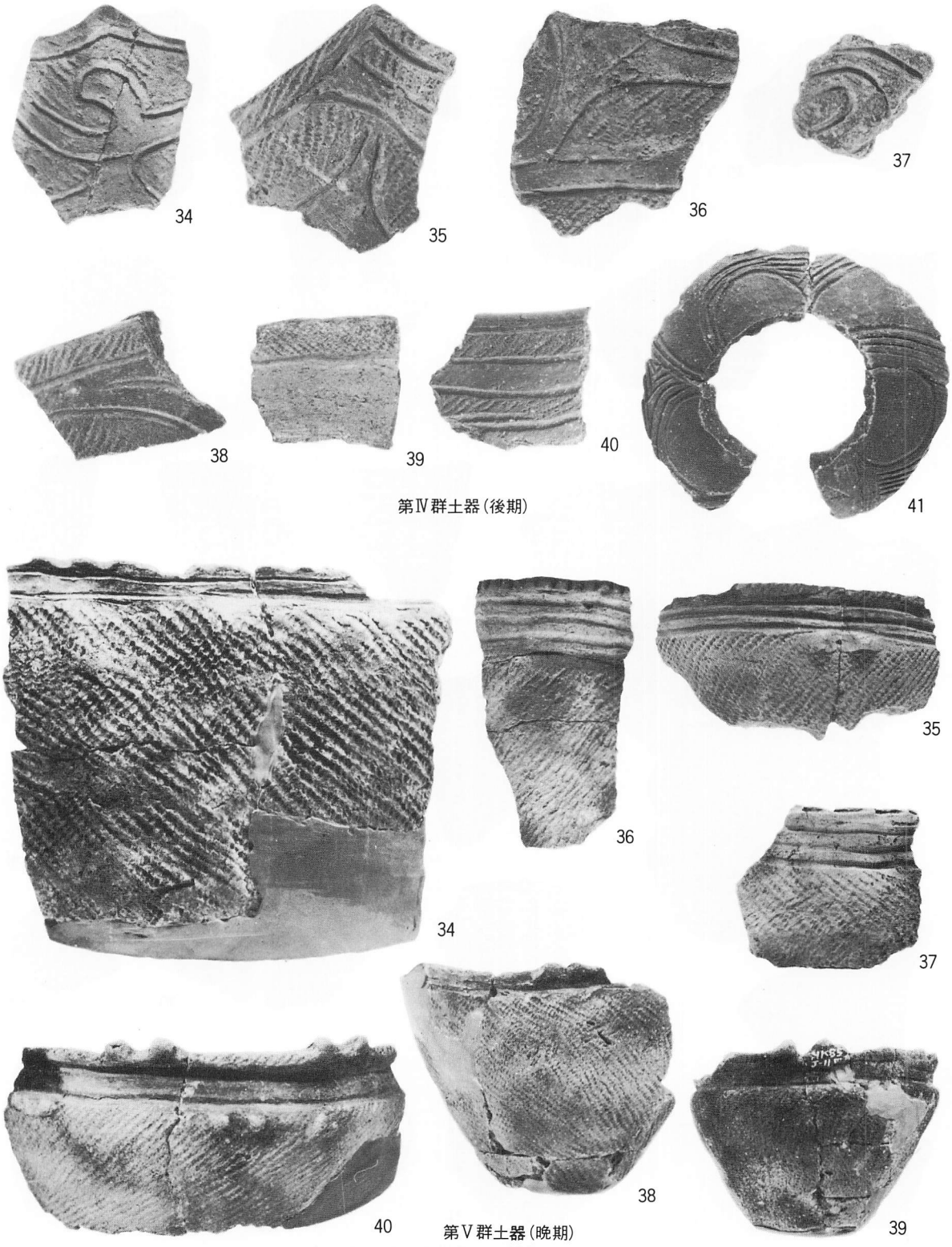
第Ⅰ群土器（早期）

PL－19　遺構外の遺物（縄文土器－1）

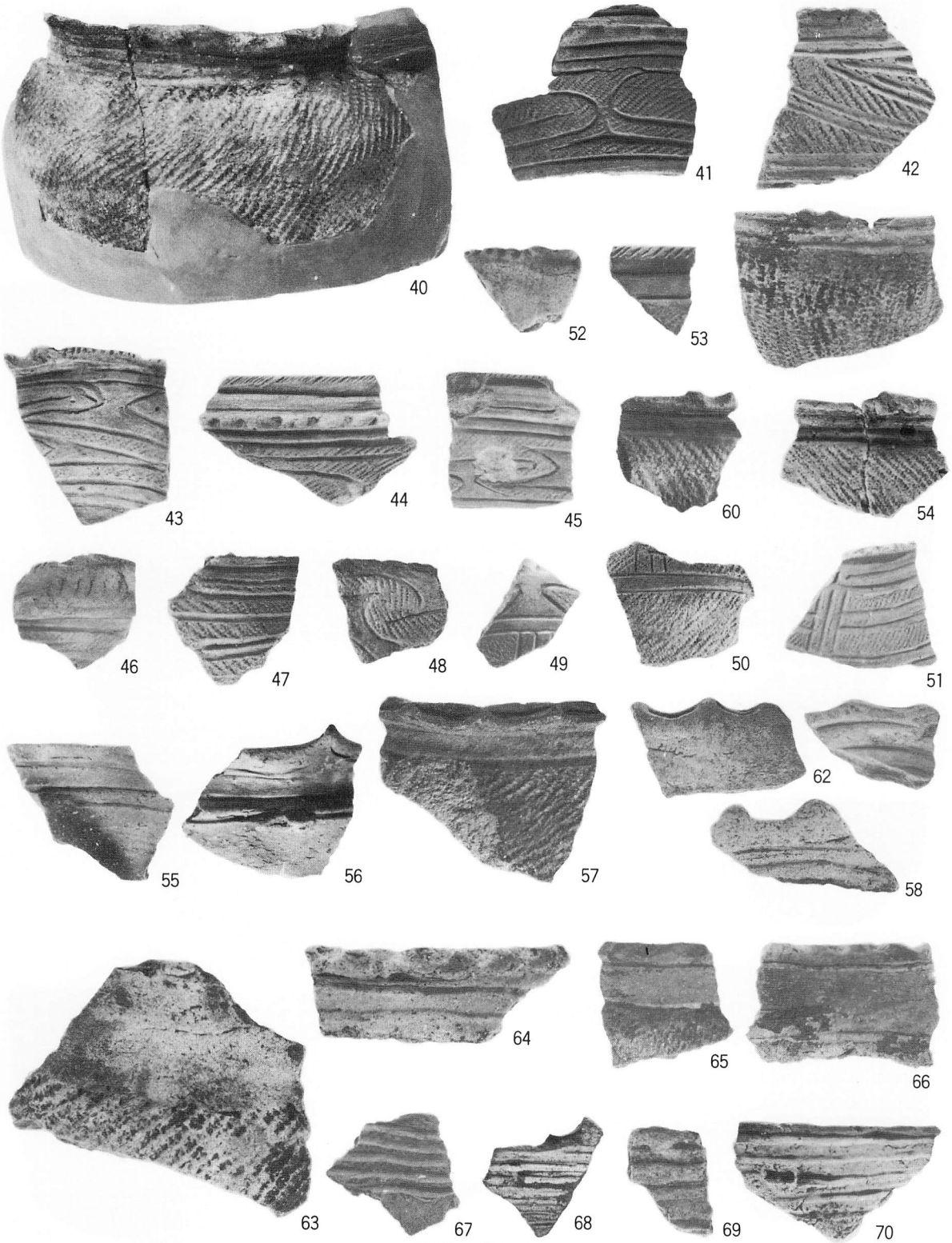


2類　　第Ⅲ群土器（中期－2）

ＰＬ－20　遺構外の遺物（縄文土器－2）

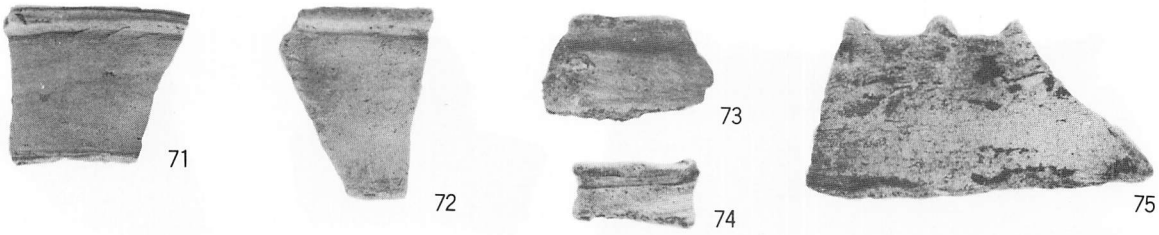


ＰＬ－21　遺構外の遺物（縄文土器－３）

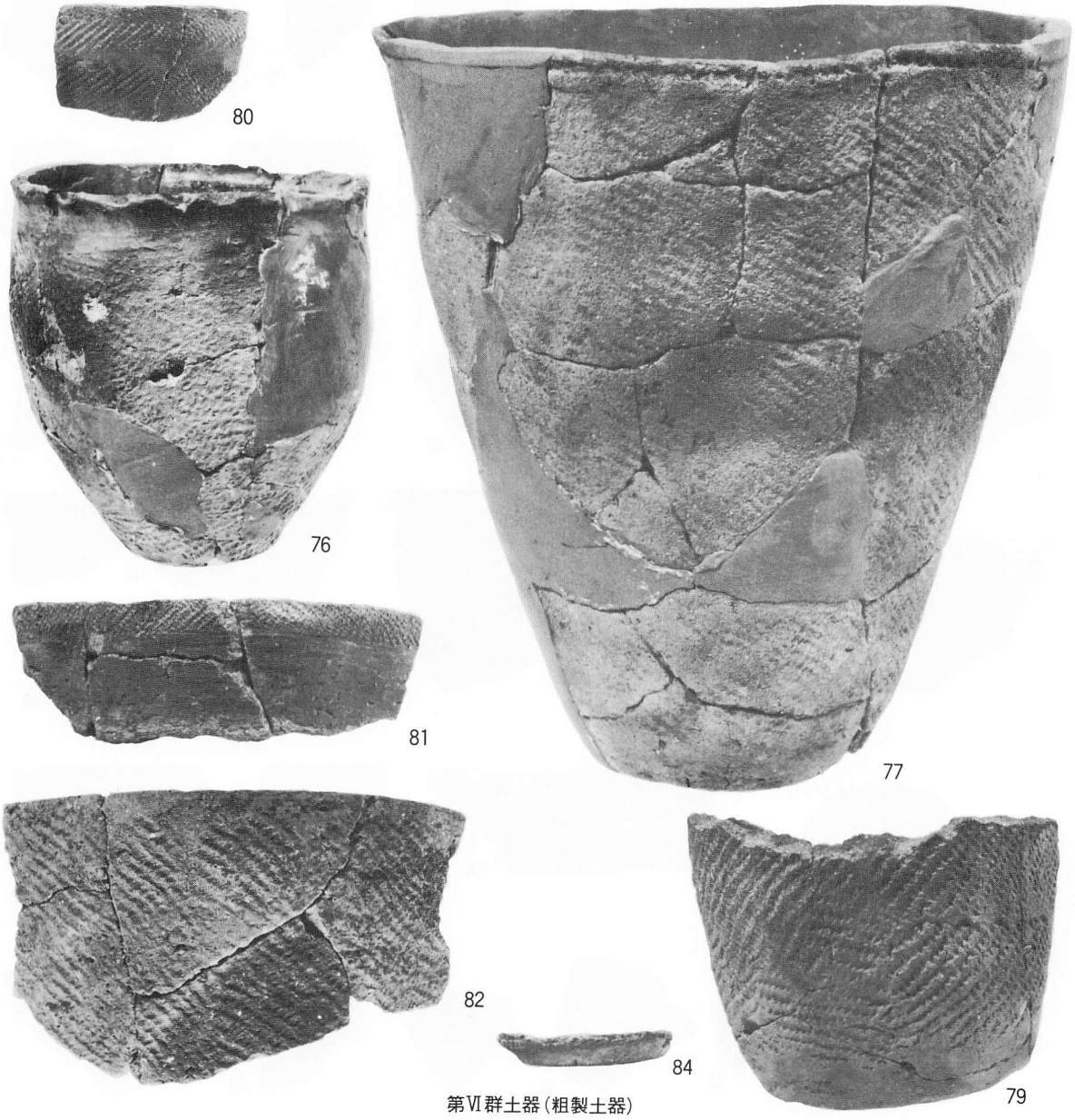


第Ⅴ群土器（晩期）

ＰＬ－22　遺構外の遺物（縄文土器－４）

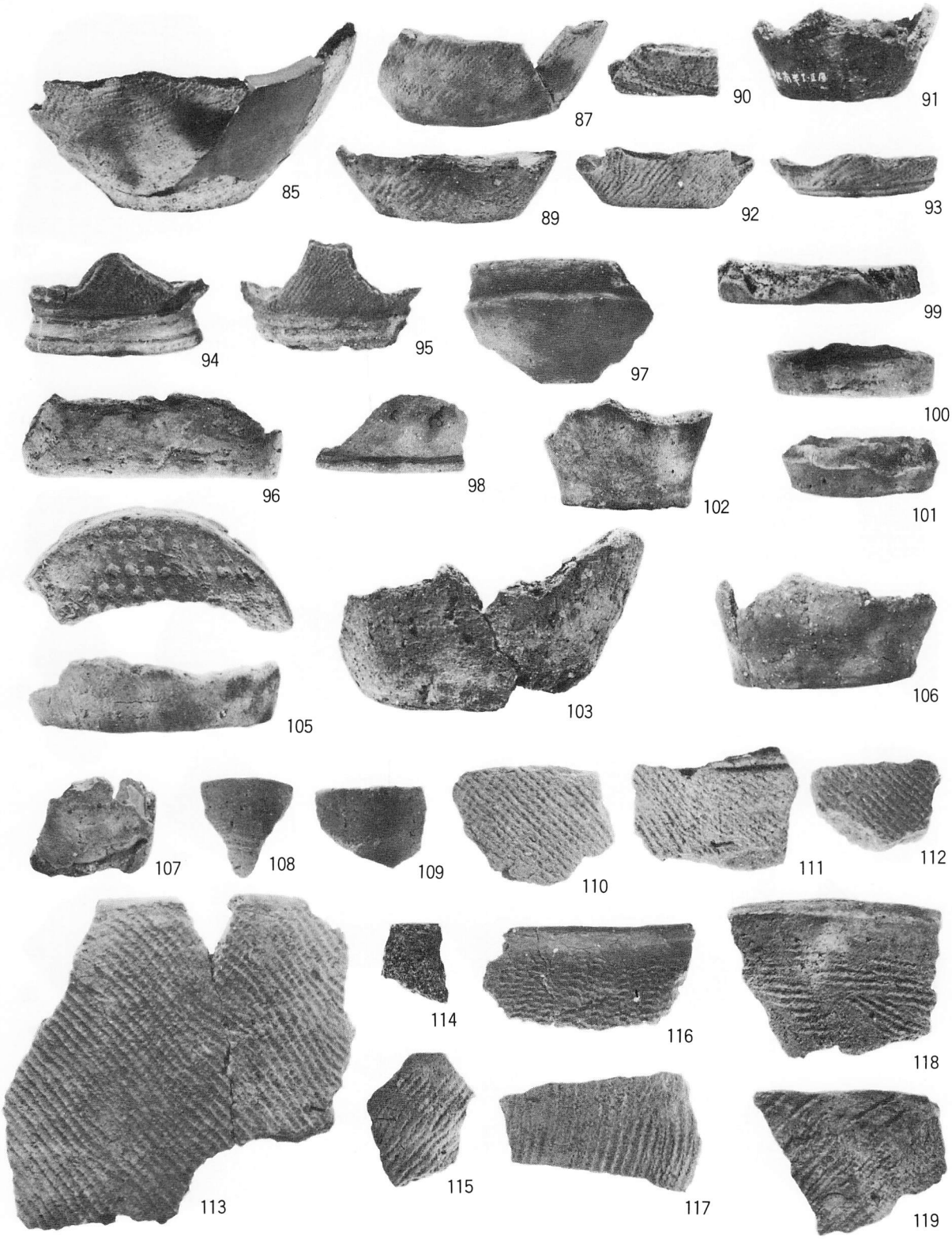


第Ⅴ群土器（晩期）

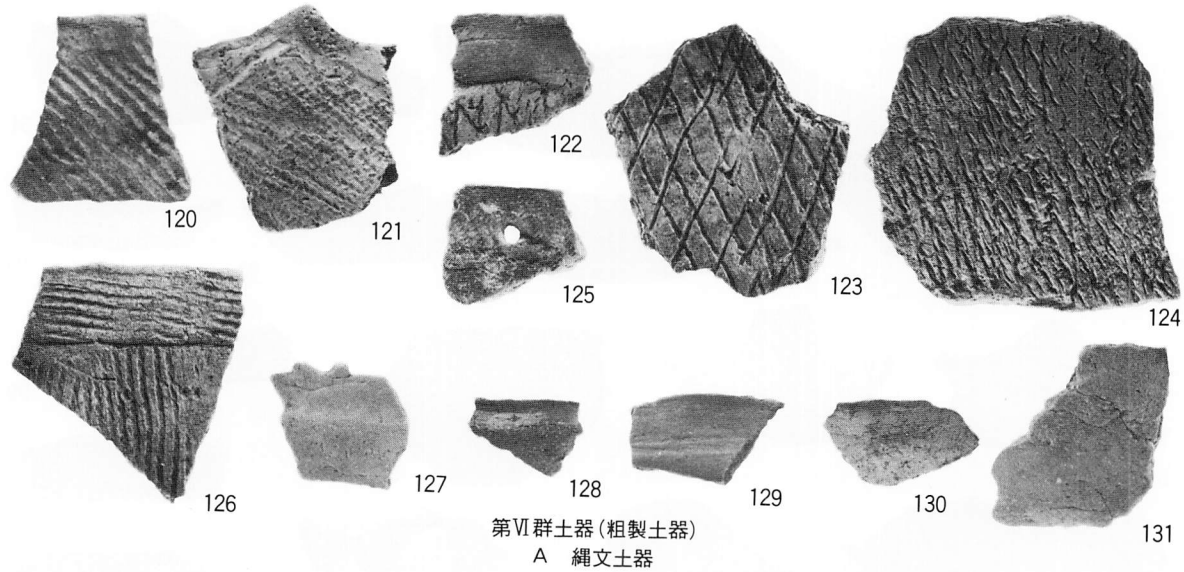


第Ⅵ群土器（粗製土器）

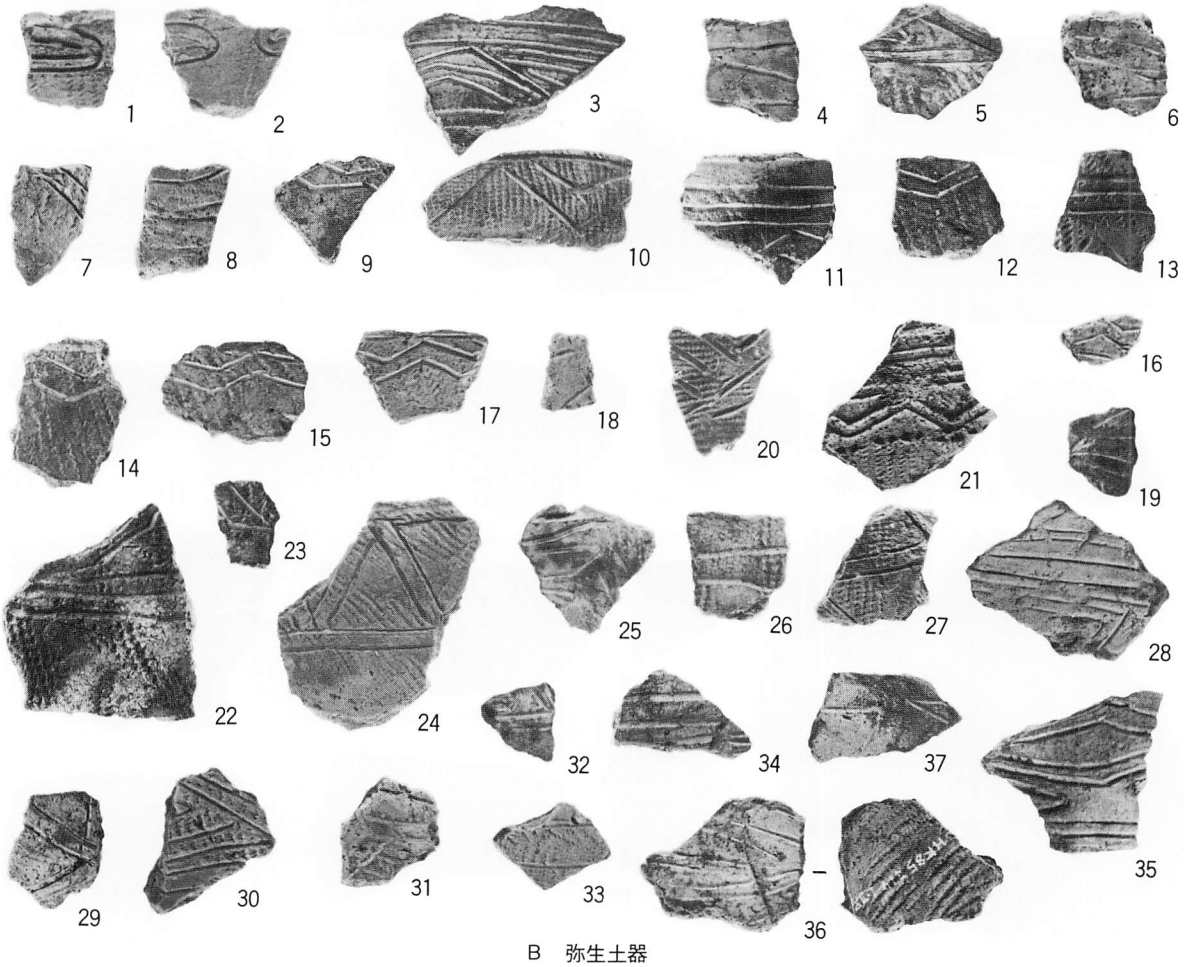
ＰＬ－23　遺構外の遺物（縄文土器－５）



ＰＬ－24　遺構外の遺物（縄文土器－６）

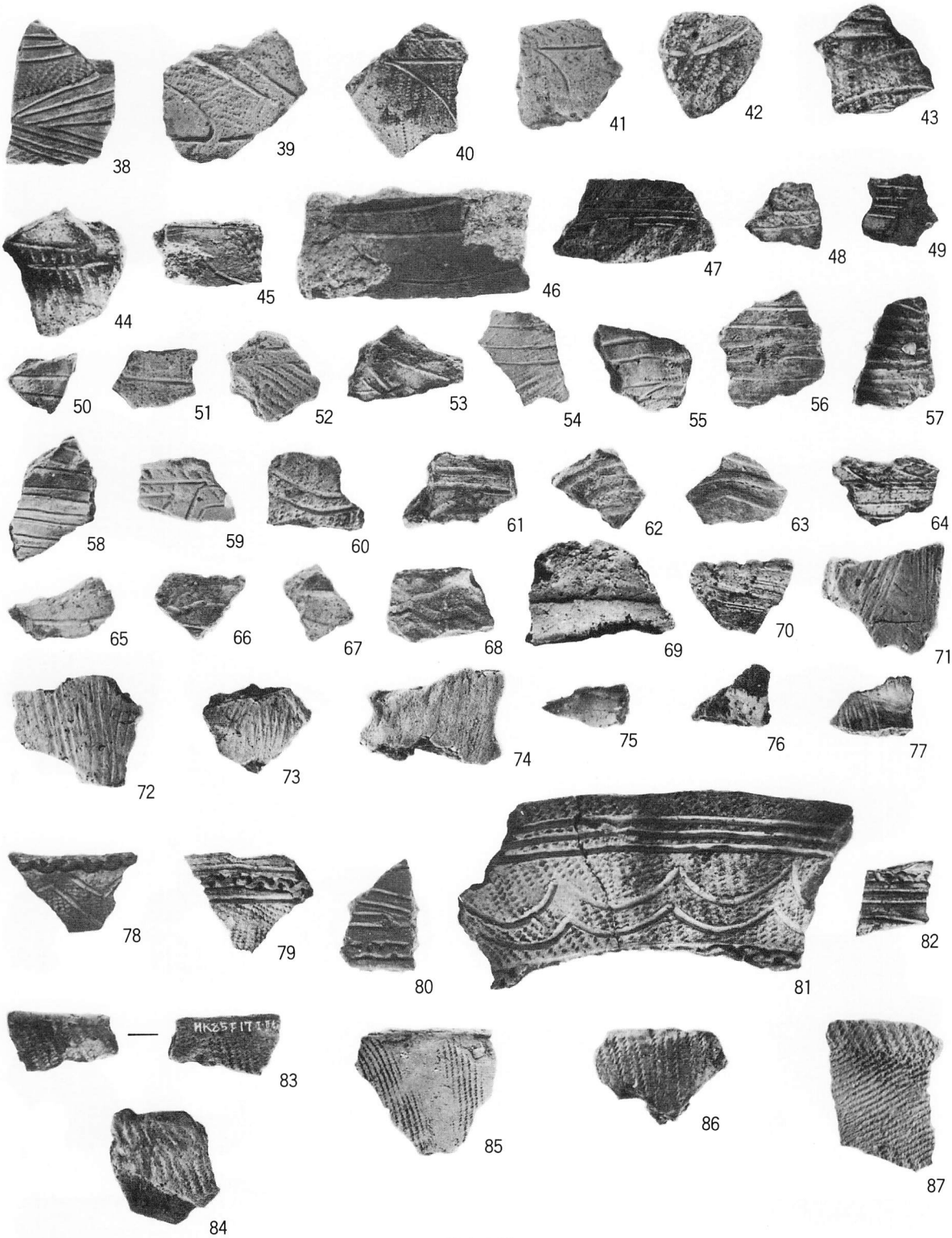


第Ⅵ群土器（粗製土器）
A　縄文土器



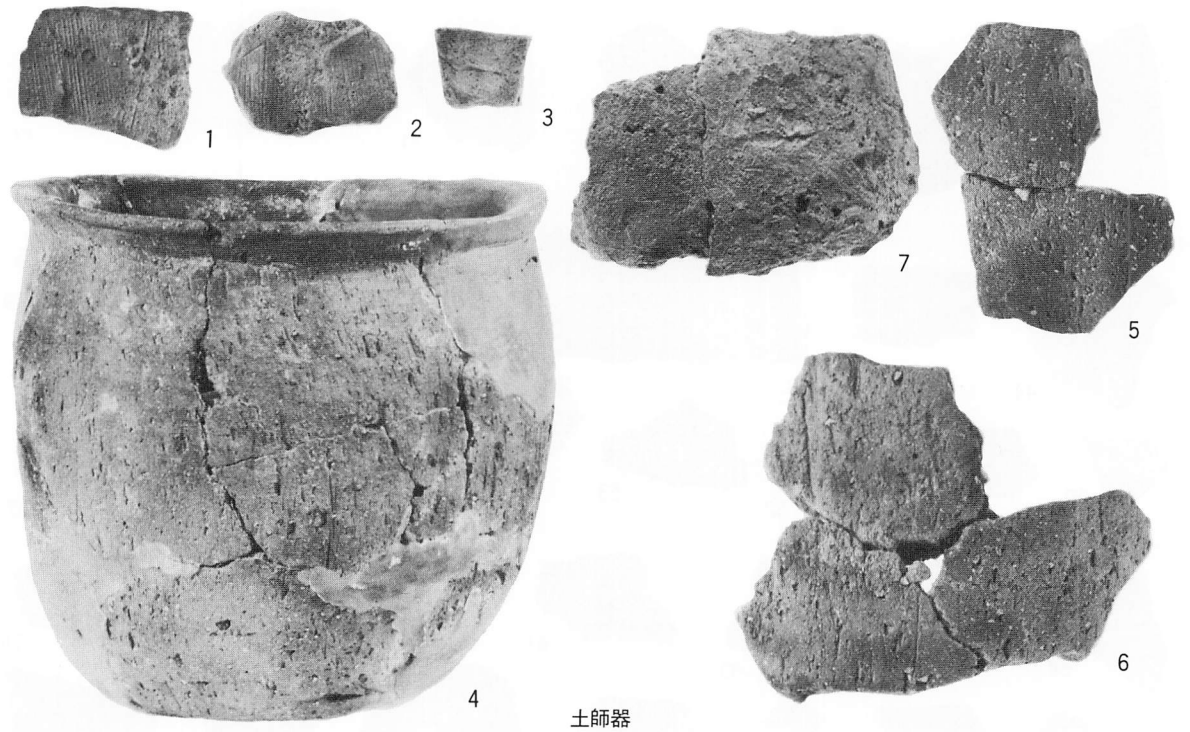
B　弥生土器

ＰＬ－25　遺構外の遺物（縄文土器－７・弥生土器－１）

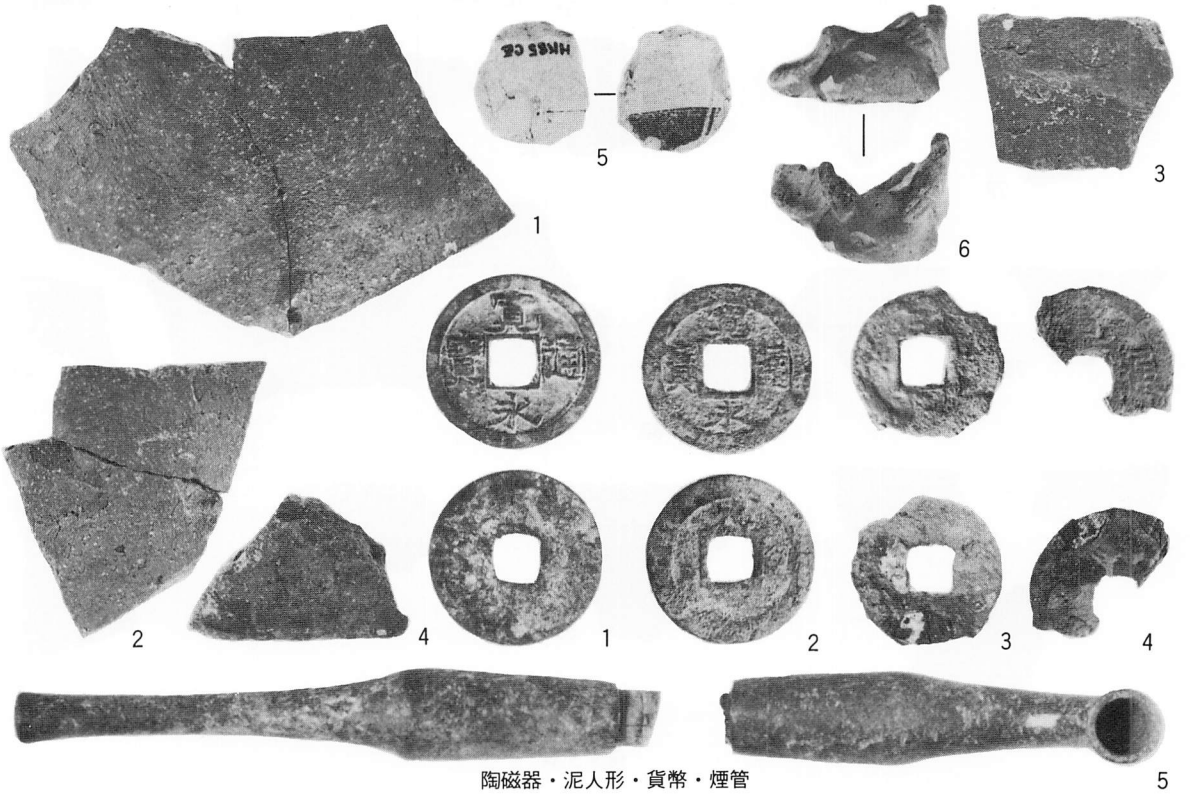


弥生土器

ＰＬ－26　遺構外の遺物（弥生土器－２）

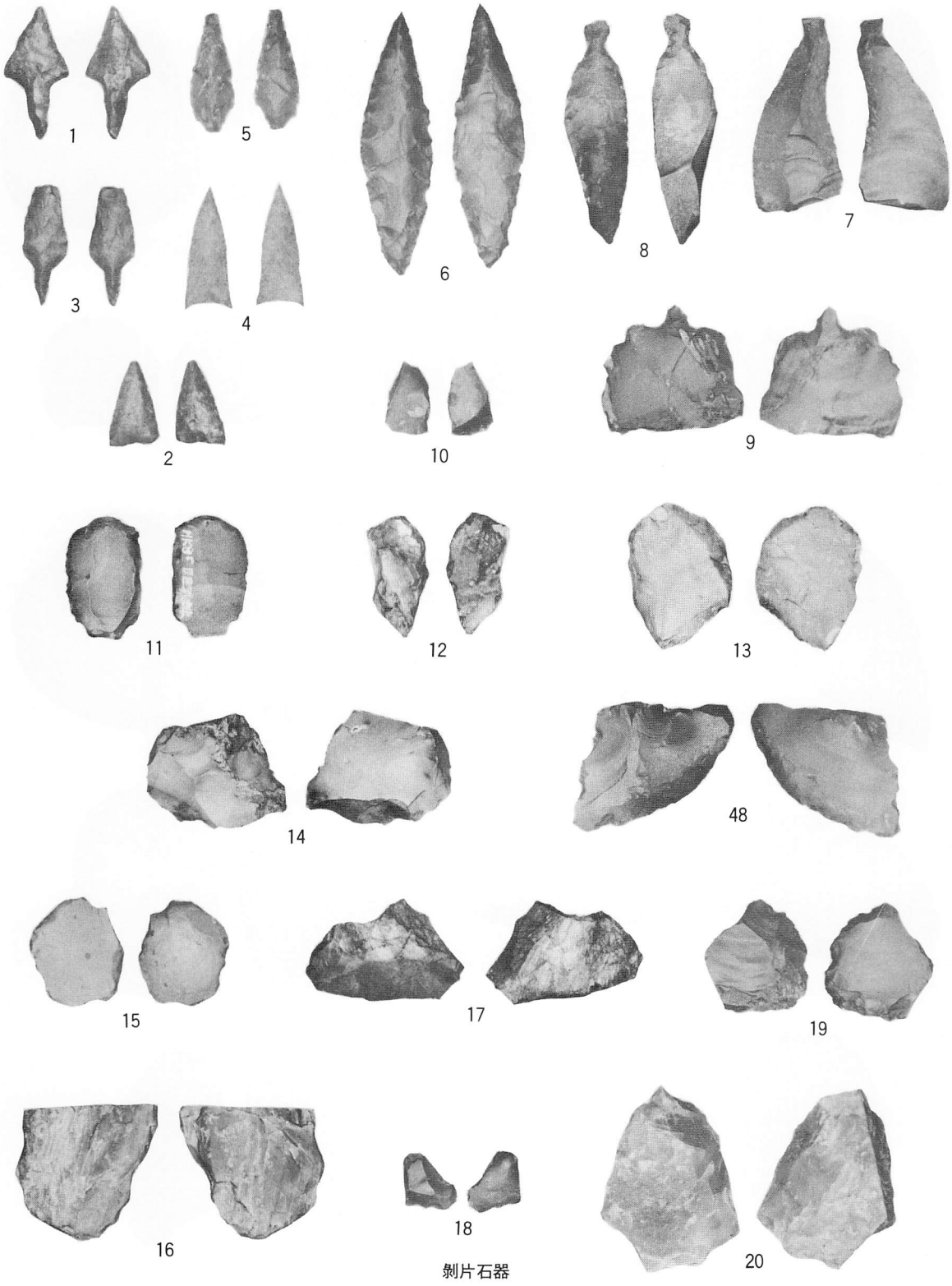


土師器

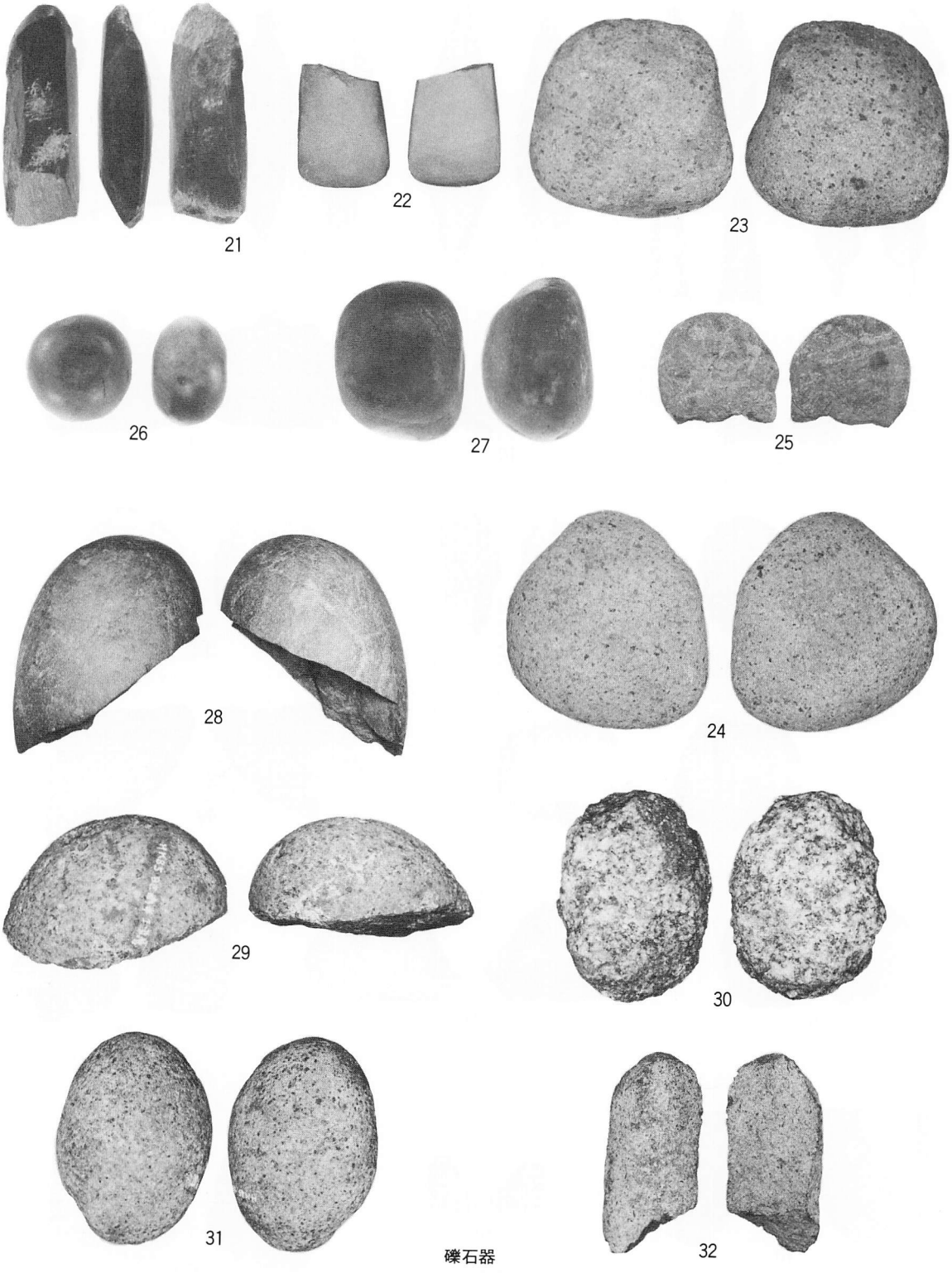


陶磁器・泥人形・貨幣・煙管

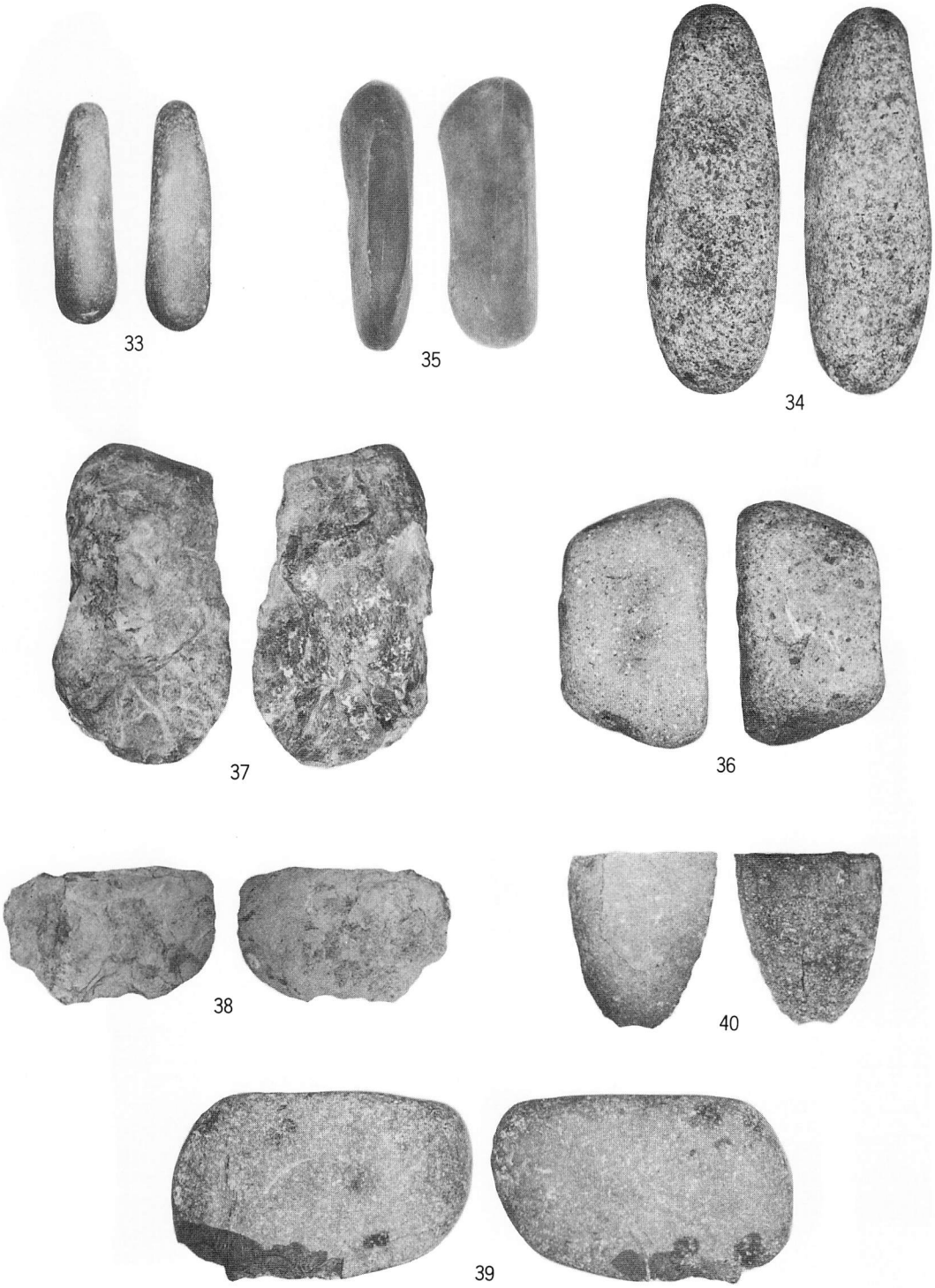
ＰＬ—27　遺構外の遺物（土師器・その他）



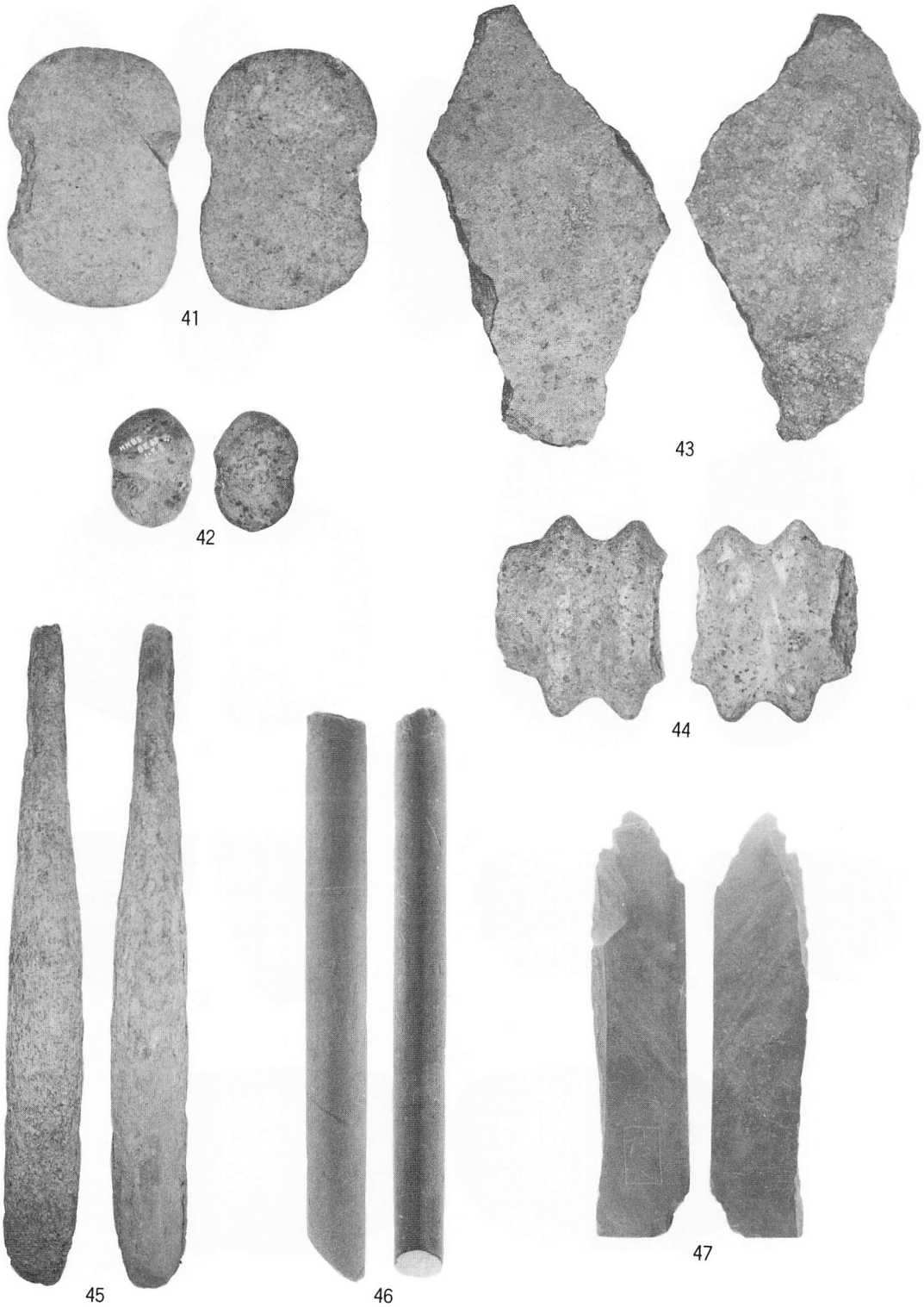
ＰＬ－28　遺構外の遺物（石器－１）



ＰＬ－29　遺構内・外の遺物（石器－２）



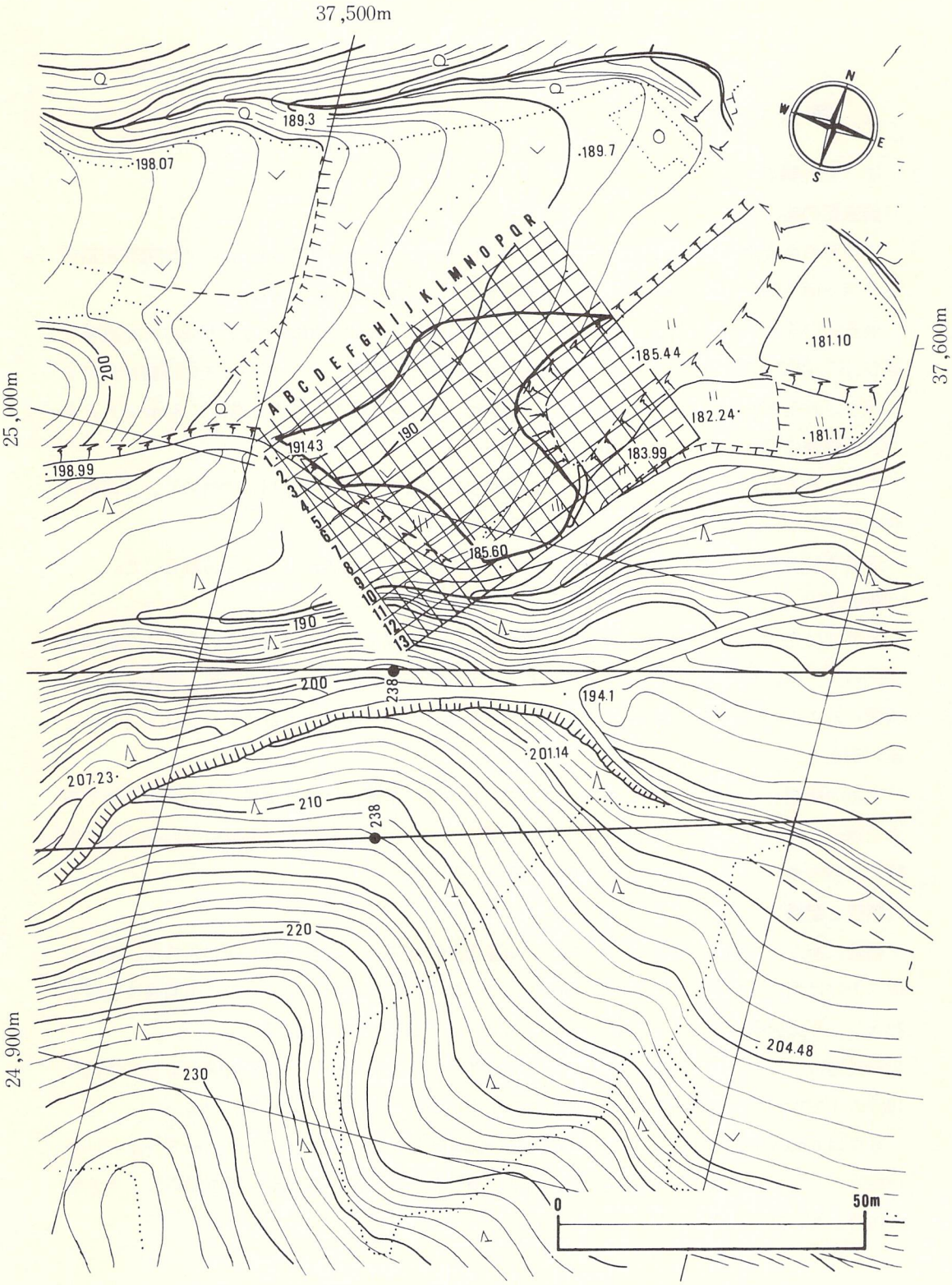
ＰＬ－30　遺構内・外の遺物（石器－３）



ＰＬ－31　遺構内・外の遺物（石器－４）

Ⅳ 竹 林 遺 跡

1．所　　在　　地　　二戸郡一戸町鳥越字竹林２－１ほか
2．委　　託　　者　　日本道路公団仙台建設局　一戸工事事務所
3．発掘調査期間　　昭和60年９月17日～９月27日
4．調査対象面積　　960m²
5．発掘調査面積　　960m²
6．遺跡番号・略号　　JE19—1177・TB—85
7．調査担当者　　長沼　彬・高橋与右ェ門
8．協　力　機　関　　一戸町教育委員会



第１図　周辺の地形とグリット配置図

1．調 査 の 方 法

(1) 野外調査

〔調査区の設定〕

本遺跡の調査範囲は、路線中心杭STA237＋80からSTA238＋40に対応する北側境界杭沿いの北西ー南東60m、北東ー南西43mの不整形をなし、面積は960m²である。

調査区の設定は、STA237＋80に対応する境界杭とSTA238＋20に対応する境界杭を直線で結び、STA237＋80から北東に14m寄った地点に基準点を設置し、この点から先の直線に直交する線を区画基準線とした。グリッドは3 m×3 mとし、基準線から北東と南西に3 mごとにまた、基準線に直交する南東に3 mごとに区画した。

グリッドの名称は、西の隅を基点として北東にA～R、南東に1～13まで命名し、この組み合わせによってA1・B1・C1‥‥と呼称した。

遺構名は、グリッド名と遺構の種別名を組み合わせてI 3住居跡、F 5住居跡とした。

〔粗掘り〕

粗掘りに先だって、調査範囲内の2箇所に北西から南東にかけて試掘溝を設定して予備調査を行い、土層の観察と遺構検出面までの深さ、旧地形等を把握した。その結果、斜面上位（北西側）から中位にかけては表土が薄く、畑地であることから耕作による削平を受けていることが判明した。

実際の粗掘りは、試掘の結果を参考にして、北東部の苗圃跡は削平が強いことから一括で表土を除去した。南東部の畑地は調査区別に、層位ごとに粗掘りをした。農道の一部を除去する際に重機を導入したが、他は全て手掘りによって行った。

〔精査と記録〕

精査にあたっては、4分法を基本としたが遺構の状況によって2分法も採り入れた。遺物の取り上げは埋土内出土のものは層位を確認して一括したが、床面出土のものは平面図に位置を記入し、写真撮影の後とりあげた。

実測図は、平面図・土層図・断面図とも縮尺20分の1を原則としたが、遺構によっては縮尺10分の1で行った。遺構配置図は縮尺20分の1を100分の1に縮尺して作製した。

写真は6cm×7cm版1台（モノクローム）、35mm版2台（モノクローム・カラースライド）を一組みとし、一次全景、二次全景、遺構細部、遺物の出土状況、遺跡全景等を撮影し、その他に随時必要に応じて撮影した。

⑵　室内整理と報告

堀切遺跡の整理と並行して行ったため、方法は堀切遺跡の手順と同様の方法によった。

報告も堀切遺跡のそれと同様である。

2．基　本　層　序

本遺跡は、既述したように畑地であるとともに、北西方向から南東方向に傾斜しており、表土が薄く、表土を除去すると地山が露出する場合が多い。調査範囲のほぼ中央に埋没谷が存在し、ここに黒色土が厚く堆積していたことから、この部分を本遺跡の基本層序とした。

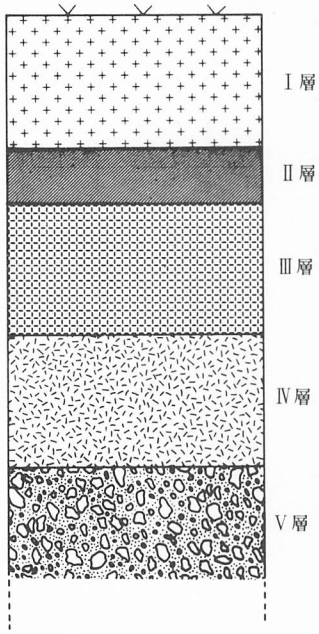
Ⅰ　層　10YR 2／3黒褐色　シルト　現在の表土で、畑地では耕作土となっている。薄い所で20cm、埋没谷で30cm位の層厚がある。遺物は包蔵されているが、本層内から検出された遺構はない。

Ⅱ　層　灰白色　降下火山灰　粗粒質で灰白色の火山灰であることから、十和田ａ降下火山灰に相当するであろう。埋没谷とＦ３住居跡内にのみ堆積している。埋没谷での埋積は比較的層厚が厚く15cm位ある。無遺物層である。

Ⅲ　層　10YR 3／4暗褐色　砂質シルト、中掫浮石粒が全体に混入し、他に黒褐色や黒色のブロックをも含む。埋没谷でのみ堆積が確認され、層厚は30cmほどである。埋没谷には多くの縄文土器が包含されている。

Ⅳ　層　10YR 3／3暗褐色　中掫浮石相当の浮石層　無遺物層で遺構は本層を掘り込んでいる。

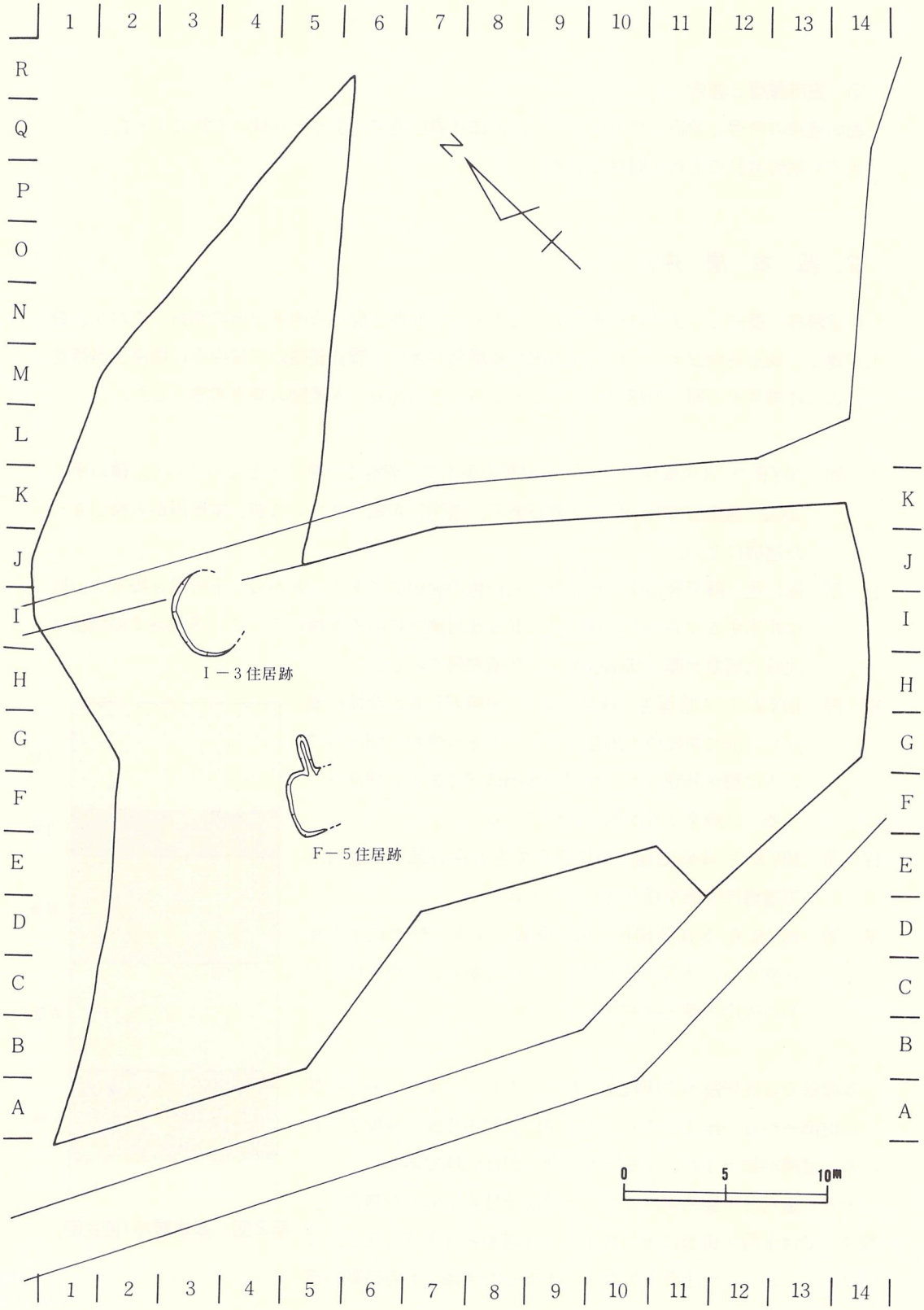
Ⅴ　層　10YR 6／8明黄褐色　火山灰質シルト　やや粒子の粗い軟らかい浮石が混入していることから、八戸火山灰相当の火山灰層と推定される。



第２図　基本層序（模式図）

本遺跡では住居跡が２棟検出されているが、いずれも表土の薄い畑地部分からの出土であるため、耕作土である表土を除去したのみで遺構が検出され、２棟ともその状況は同様である。

一方、遺物との関係をみると、畑地部分は表土にのみ包含し、埋没谷ではⅠ層・Ⅲ層に多く含まれ、Ⅳ層からは１点も出土していない。しかし、出土量も少なく、出土した土器にも各時期の破


1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14
R Q P O N M L K J I H G F E D C B A
N
I－3住居跡
F－5住居跡
0 5 10m

第3図　遺構配置図

片が混在する出土状況を示している。

3．検出遺構と出土遺物

検出された遺構は住居跡２棟のみであるが、埋没谷から遺物が多く出土したことから、この埋没谷についても遺構と同様な扱いをして記述することとする。

(1) 住居跡

２棟の中には縄文時代の住居跡と古代の住居跡が各１棟含まれるが、ここでは縄文時代・古代の順に一括して記述する。

1） Ｉ－３住居跡

〔遺　構〕　　（第４図，PL－３）

グリッドＩ・Ｊ２・３にまたがって位置し、他遺構との重複関係はない。

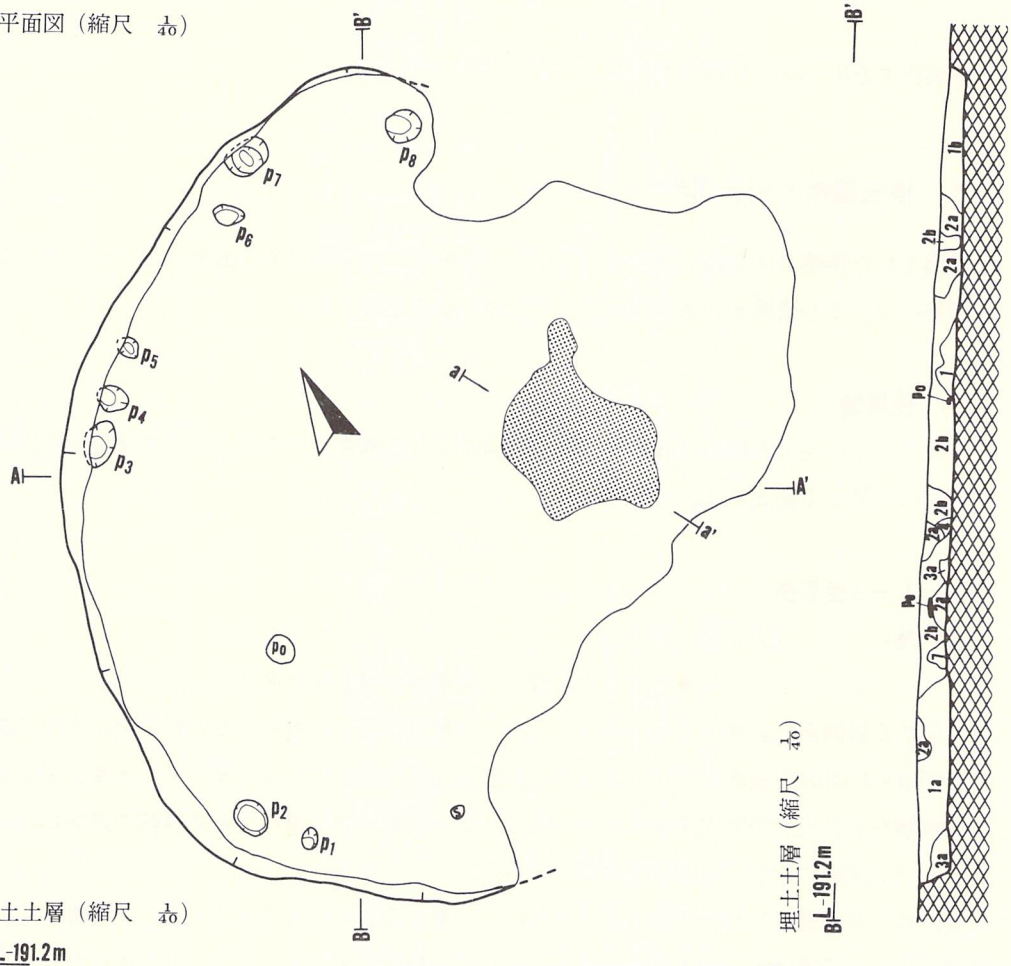
東面する緩斜面に立地するため斜面下位部分は削平によって遺存しないが、検出された部分は4.50m×4.00mの規模をもち、検出された壁が円弧を示すことから考えて、本来は径4.50m位の規模をもつ円形の竪穴住居跡であったと推定される。壁の遺存する北西部で最高16cmの壁高があり、床面に対して110度で外傾している。

床面は、北西壁寄りから中央までほぼ平坦で、東に寄るほど若干低くなる。北西寄りの一部は良くしまって硬いが、全体的には軟らかくむしろ軟弱な床といえよう。貼り床はない。壁際の床面からP_1（規模12cm×７cm，深さ８cm）、P_2（規模20cm×18cm，深さ７cm）、P_3（規模26cm×15cm，深さ12cm）、P_4（規模16cm×14cm，深さ10cm）、P_5（規模14cm×12cm，深さ７cm）、P_6（規模18cm×12cm，深さ13cm）、P_7（規模24cm×15cm，深さ15cm）、P_8（規模18cm×16cm，深さ12cm）のあまり深くない柱穴状小土坑が検出されている。その中でP_3～P_5・P_7は壁際から外方に向かって若干傾斜するように掘られている。おそらく壁柱穴を構成するであろう

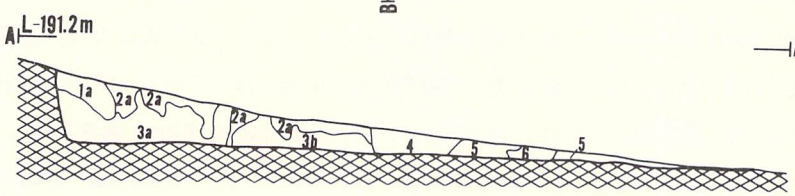
炉は、床面の中央部から約１ｍ東北東に寄って設置された地床炉で、焼土は90cm×60cmの不整形な広がりを示し、層厚は15cmである。断面の観察では、３層と５層が火熱を最も強く受け、さらに６層にまで及んでいる。４層は窪み状を示すが、炉石抜き取り痕である可能性も考えられる。

埋土は、黒褐色、褐色、暗褐色等を示すシルトが堆積し、いずれの層にも浮石を含むが3a層は特にその傾向が強く、砂質である。

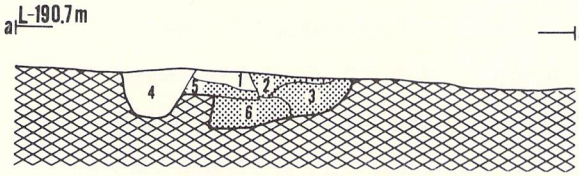
平面図（縮尺 $\frac{1}{40}$）



埋土土層（縮尺 $\frac{1}{40}$）



炉跡断面（縮尺 $\frac{1}{20}$）

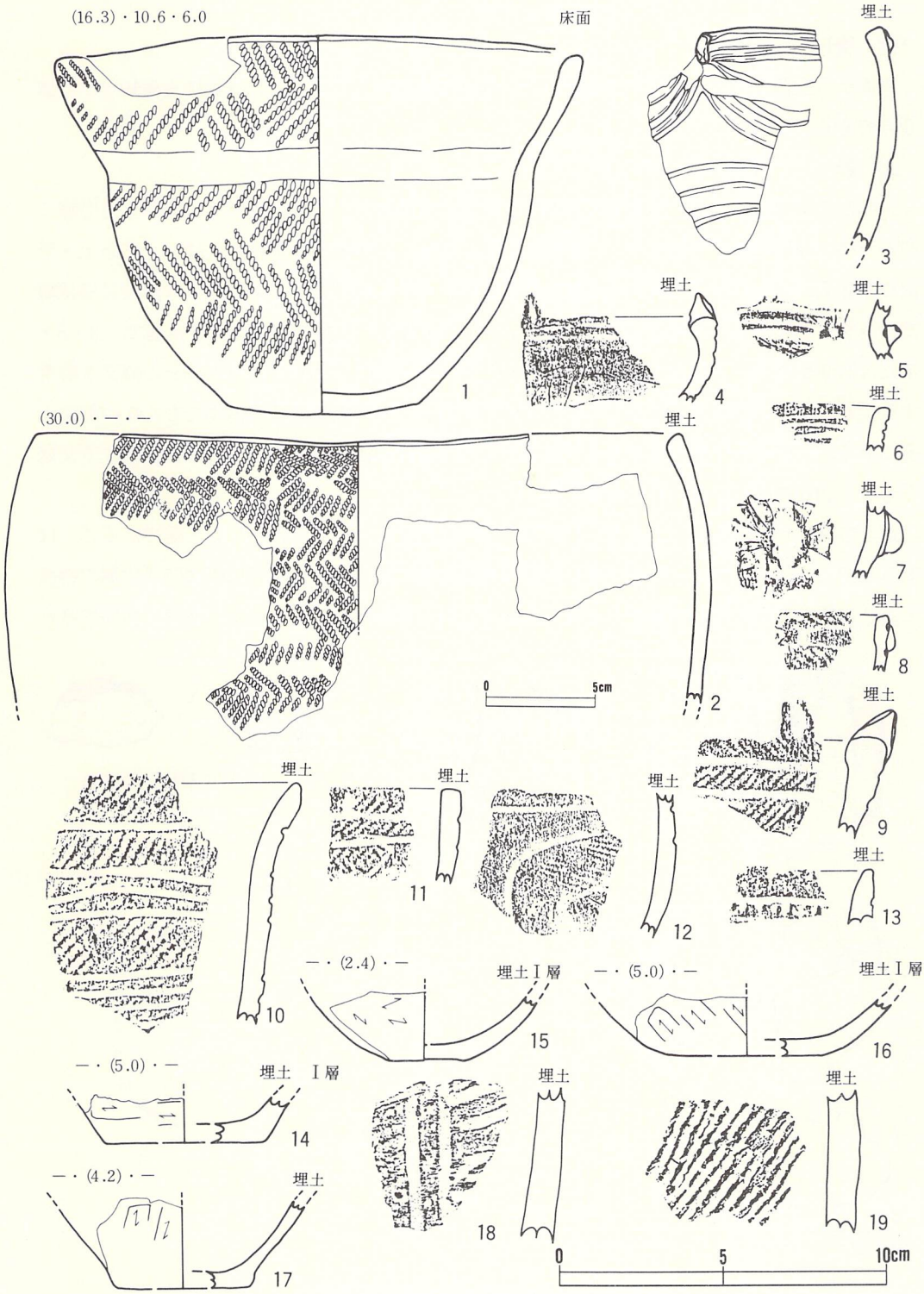


層位	色調	土性
1	10 YR 3/2 黒褐色	焼土の上に堆積する。シルト。
2	10 YR 3/2 黒褐色	焼土混じる。
3	5 YR 4/6 赤褐色	焼土
4	10 YR 3/2 黒褐色	くぼみ状で石の抜き取り跡
5	10 YR 4/6 赤褐色	焼土。
6	10 YR 4/6 褐色	焼土混じる。

層位	色調	土性
1a	10 YR 2/3 黒褐色	パミスを含む。
2a	10 YR 2/3 黒褐色	1層よりやや黒い。わずかに柔らかい。シルト。
3a	10 YR 3/2 黒褐色	中振浮石を含み、ざらざらする。シルト。
3b	10 YR 3/2 黒褐色	3a層よりやや黒い。シルト。
4	10 YR 3/2 黒褐色	パミス、炭化物を含む。シルト。
5	10 YR 3/2 黒褐色	4層より黒い。炭化物を含む。シルト。
6	10 YR 3/2～3/4 黒褐色～褐色	焼土をわずかに含む。シルト。
7	10 YR 3/4～2/3 暗褐色～黒褐色	

0　1m

第4図　I－3住居跡



第５図　Ⅰ－３住居跡出土遺物（土器）

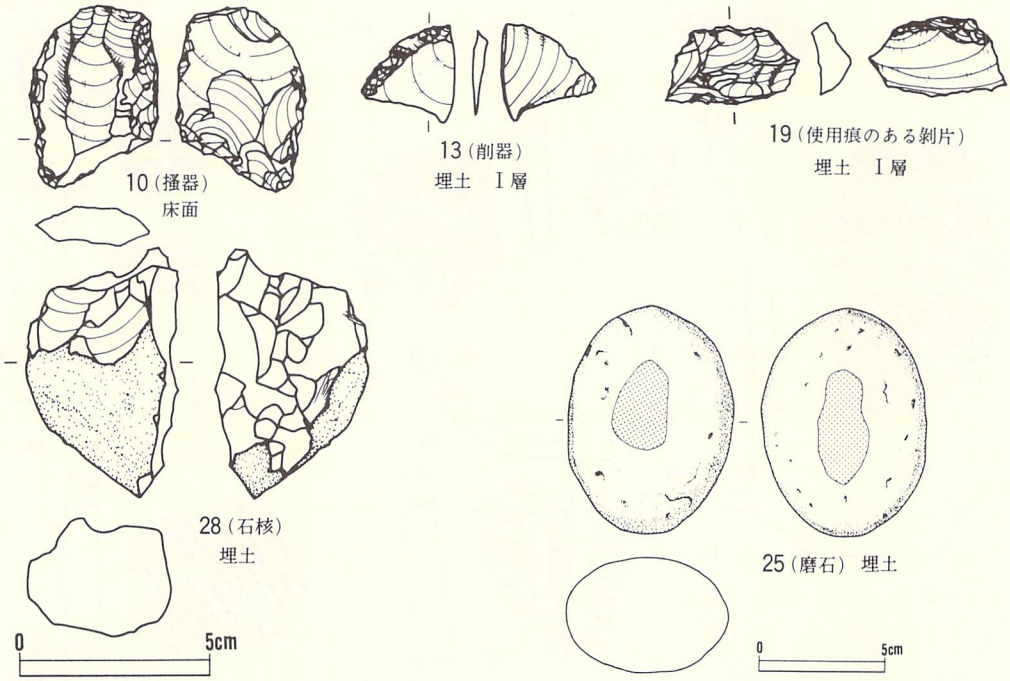
〔遺　物〕

床面から土器１点、石器１点が出土した。他は埋土内からの出土で、総数は土器19点、石器５点である。

土　器　　（第５図　PL－５）

床面から出土した１は、底部から外傾した体部が丸味をもって立ち上がり、体部上位で軽く凹んだ後口縁部が強く外反する。口縁部は平縁である。体部の凹み部は無文にし、その上・下位に原体LR・RLを交互に横回転させた羽状縄文を付す。器種は鉢である。２は体部に羽状縄文のみを付す粗製の大型深鉢である。３～７は無文の器面に沈線で文様を付す土器で、３・５・７には貼瘤がある。８～12は単節斜行縄文を付す器面を沈線で区画し、その部分の縄文を磨消する土器である。13は区画帯の中に刻目を付す。14～17は器面に文様や縄文をもたない無文土器であるが、底部～体部下位のみを残存することから詳細は不明である。18は沈線による文様をもち、19は撚糸文の施された土器である。

以上の特徴から考えて、１・３～13は縄文時代後期末葉に位置づけられる土器であることは明らかで、土器形式では十腰内Ⅳ式やⅤ式に相当するであろう。18・19は縄文時代中期の特徴であり、それも後半部分に属すると考えられる。14～17は明示しがたいが、前者に共伴すると



第６図　Ⅰ－３住居跡出土遺物（石器）

推定される。

石　器　　（第16図，PL 7～9）

掻器1点(10)、削器1点(13)、石核1点(28)、使用痕のある剝片1点(19)、磨石1点(25)の5点が出土している。10は縦形剝片の両側縁を裏面から片面剝離によって刃部とした掻器である。19は横長剝片の下縁部に使用痕を残す。13は薄形の小型剝片を使用し、その側縁を裏面からの剝離で刃部を作りだした削器である。28は石核であるが、あまり良好な剝片が得られなかったため途中放棄されたものであろう。25は扁平で楕円形を示す河川礫の両面を使用面としている。石材は奥羽山地新第三系中新統の珪質泥岩、凝灰質珪質泥岩、松脂岩と北上山地古世界産のチャート、角閃黒雲母花崗岩である。

〔遺構の時期〕

出土した土器がほとんど後期末葉であることと、床面直上から出土した土器もそれと同様であることから、縄文時代後期末葉に位置づけられるであろう。

2）F－5住居跡

〔遺　構〕　　（第7図，PL－4）

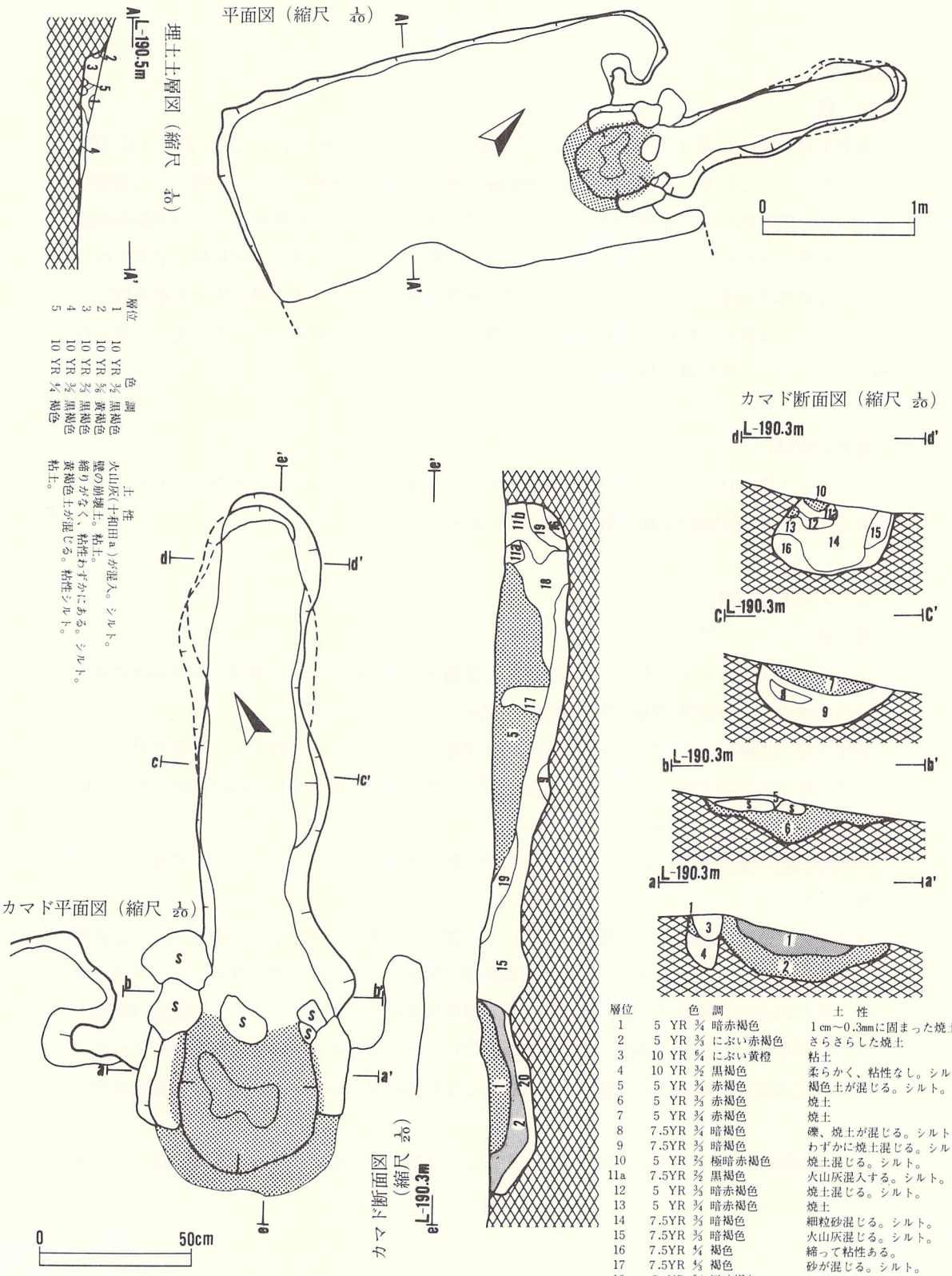
グリッドF・G5・6にまたがって位置し、他遺構との重複はない。東面する緩斜面に立地するため斜面下位の部分は削平や流失のため遺存しない。

検出された規模は南北4.52m東西1.56mで、遺存部分から考えて方形もしくは長方形の平面形を示す竪穴住居跡である。壁の遺存状態が悪く、検出された西壁は約10cmの壁高があり、床面に対して125度ほど外傾している。

床面は西側が若干低くなるもののほぼ平坦で、貼り床は認められない。また、壁溝・柱穴とも検出されていない。

カマドは北壁の北西隅寄りに設置されている。袖部は奥壁部に芯材として礫を入れ、淡黄褐色土を積み上げて構築している。燃焼部は最深部が床面より16cmほど掘り窪められ、火床は幅44cm、奥行60cm位の規模があり、層厚6cmほどの現地性焼土があった。また、燃焼部の底面上に天井部の崩壊した焼土が堆積していた。煙道は1.68mの長さがあり、北北東に延びている。底面は燃焼部奥壁部分が高く、煙出し部に向かって次第に下がっている。煙道は刳貫き式である。

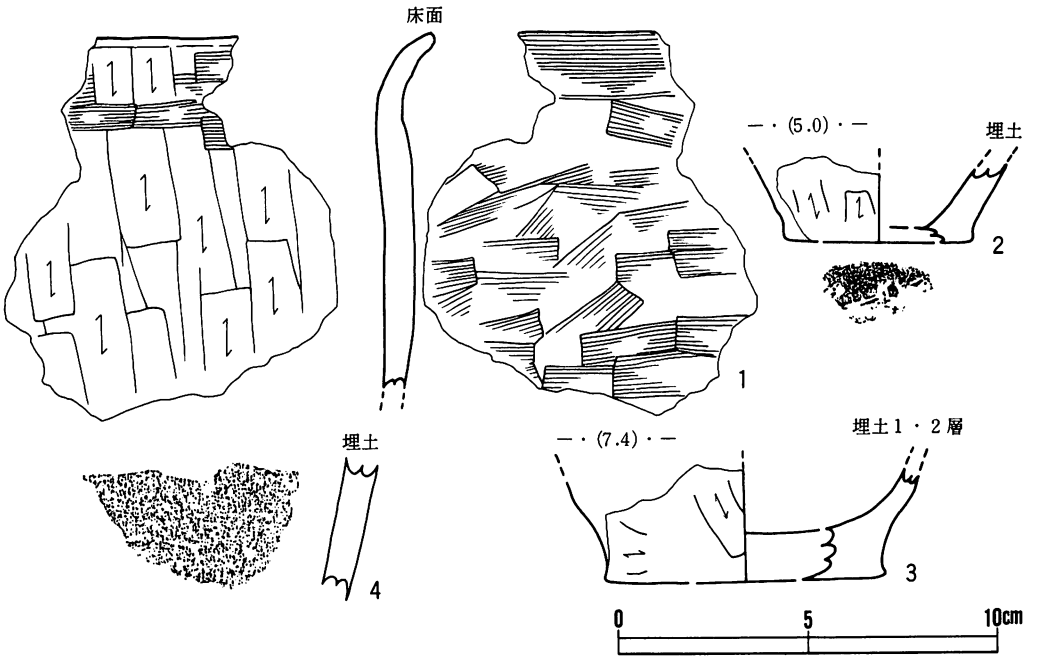
埋土は黒褐色と壁の崩壊による黄褐色土である。1層には火山灰（十和田a火山灰）が混入している。



層位	色調	土性
1	10 YR 3/2 黒褐色	火山灰(十和田a)が混入。シルト。
2	10 YR 5/6 黄褐色	壁の崩壊土。粘土。
3	10 YR 2/3 黒褐色	締りがなく、粘性わずかにある。シルト。
4	10 YR 3/2 黒褐色	黄褐色土が混じる。粘性シルト。
5	10 YR 4/4 褐色	粘土。

層位	色調	土性
1	5 YR 3/4 暗赤褐色	1cm～0.3mmに固まった焼土
2	5 YR 3/3 にぶい赤褐色	さらさらした焼土
3	10 YR 6/4 にぶい黄橙	粘土
4	10 YR 3/2 黒褐色	柔らかく、粘性なし。シルト。
5	5 YR 3/4 赤褐色	褐色土が混じる。シルト。
6	5 YR 3/3 赤褐色	焼土
7	5 YR 3/4 赤褐色	焼土
8	7.5YR 3/4 暗褐色	礫、焼土が混じる。シルト。
9	7.5YR 3/3 暗褐色	わずかに焼土混じる。シルト。
10	5 YR 2/3 極暗赤褐色	焼土混じる。シルト。
11a	7.5YR 2/2 黒褐色	火山灰混入する。シルト。
12	5 YR 3/3 暗赤褐色	焼土混じる。シルト。
13	5 YR 3/4 暗赤褐色	焼土
14	7.5YR 3/3 暗褐色	細粒砂混じる。シルト。
15	7.5YR 3/3 暗褐色	火山灰混じる。シルト。
16	7.5YR 4/4 褐色	締って粘性ある。
17	7.5YR 4/3 褐色	砂が混じる。シルト。
18	5 YR 2/3 極暗褐色	わずかに焼土含む。シルト。
19	5 YR 3/3 赤褐色	若干焼土含む。砂質シルト。
20	10 YR 4/6 褐色	若干焼土混じる。

第7図　F－5住居跡



第８図　Ｆ－５住居跡出土遺物

〔遺　物〕　　（第８図１～４，PL－５）

埋土内から土師器の甕が出土した。

いずれもロクロ不使用成形で、１は体部が縦方向の箆削り、口縁部は撫での調整痕をもつ。２・３は底部と体部下位を残す破片で、体部の器面調整は１と同様である。

以上の特徴から平安時代の土師器であることは確実である。

〔遺構の時期〕

平安時代に属する住居跡でろう。

３）Ｆ－２埋没谷

本埋没谷は自然の沢跡ではあるが、多数の土器片や土製品が出土したことにより、その状況について若干記述することとする。

北西部から遺跡西側に延びている尾根状丘陵地の北西側山麓から遺跡中央を横断し、八木沢と合流するものらしい。幅3.60m～4.40m、延長25m の規模があり、現状での最深部で0.52m の深さがあり斜面上位ほど浅くなる。

埋土は基本層序で詳述したが、大部分が黒色土系の土が堆積し、最下層には中掫浮石やその混土が堆積している。斜面下位部には上位に十和田ａ降下火山灰が堆積し、その下位に火山灰

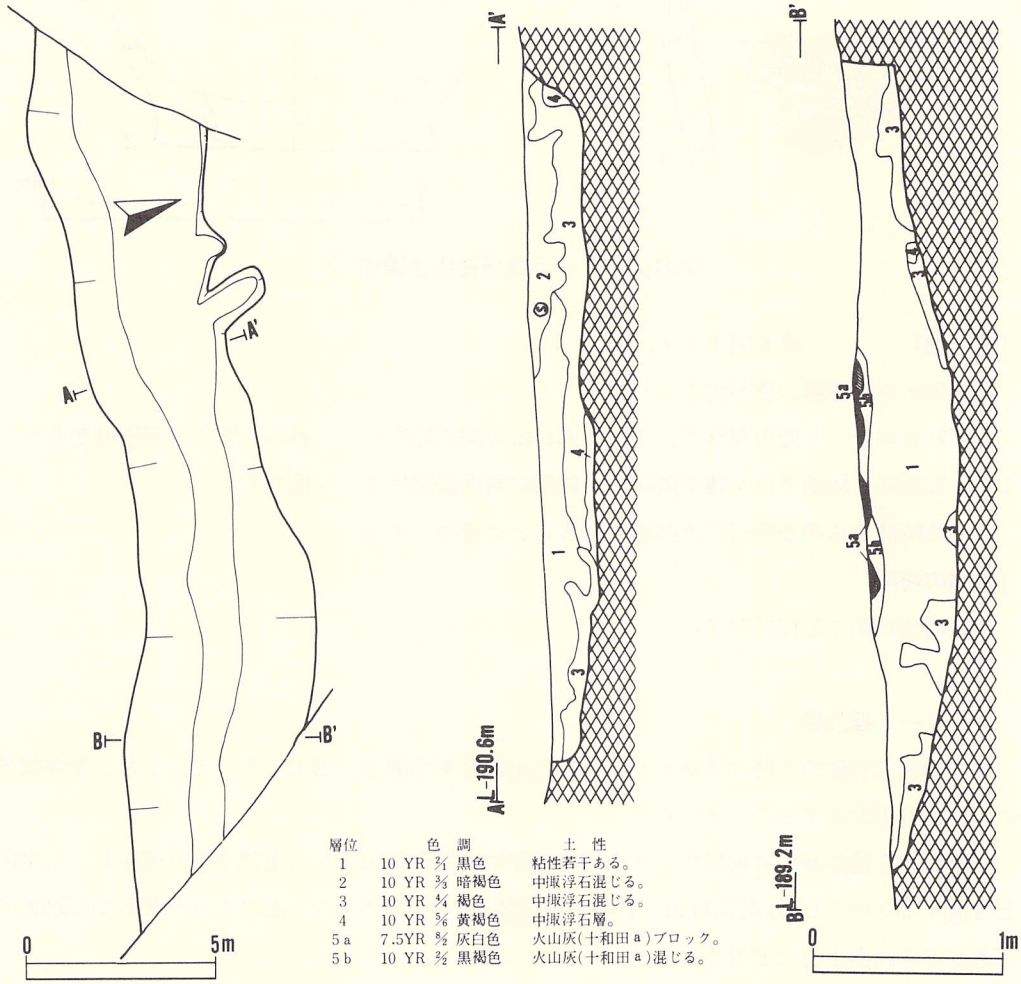
の混土がある。

〔遺　物〕

埋土上層からのみ出土している。遺物のほとんどは縄文土器で、若干の弥生土器が含まれる。縄文土器は大部分が後期に属し、中期が例外的に2点含まれている。遺物の詳細については、遺構外の遺物の項で詳述する。

〔時　期〕

出土した土器の大部分が縄文時代後期であることと、十和田a降下火山灰が堆積することから考えて、縄文時代後期にはまだ完全に埋没しておらず、窪み状であったことを示している。



層位	色調	土性
1	10 YR 3/1 黒色	粘性若干ある。
2	10 YR 3/3 暗褐色	中坂浮石混じる。
3	10 YR 4/4 褐色	中坂浮石混じる。
4	10 YR 5/6 黄褐色	中坂浮石層。
5a	7.5YR 8/2 灰白色	火山灰(十和田a)ブロック。
5b	10 YR 3/2 黒褐色	火山灰(十和田a)混じる。

第9図　F－2埋没谷

⑵ 遺構外の遺物

遺構外から出土した遺物には縄文土器、弥生土器、土製品、石器があるので、種類ごとに項を分けて記述することとする。

〔縄文土器〕　（第10～12図１～46，PL－５・６）

ほとんどの土器は埋没谷の埋土内から出土している。

１・２は中期に属し、１は沈線による文様をもち、２は単節斜行縄文を付す。３～11は縄文を付す器面を沈線で区画した後に縄文を磨消し、さらに貼瘤をもつ。後期末葉の特徴をもつ土器である。12・13は刻目帯と貼瘤をもつ。14・15は縄文を付す隆起帯で器面を区画する土器である。16～18は無文の器面に沈線による文様を付す。以上12～18も後期末葉の特徴である。

19～30は器面に文様をもたない無文土器や無文土器と思われる土器である。31～45は器面に縄文以外の文様をもたない一般的に粗製土器と呼ばれる土器である。体部の縄文には単節縄文と羽状縄文がある。

器種には壺（３・17)、台付鉢（28）以外は鉢か深鉢が多いと推定される。

〔弥生土器〕　（第12図49～51，PL－６）

埋没谷から３点出土している。49は体部中位が多少膨らむが器形が細長い感のある深鉢である。体部の器表に細い原体を使用したまばらな単節の斜行縄文を付し、最上位の縄文の上端には原体末端の折り返しが観察される。縄文施文部の上位には３条並行する連続した円弧文を付し、さらにその上位に２条並行して全周する列点文、さらに上位に交互刺突による崩れた波状浮線文をもつ。50・51は細い原体による撚糸文をもつ。

49のもつ特徴は天王山式土器に近い赤穴式土器に近似していることから、ほぼこれに近いと推定される。

〔土製品類〕　（第12図47・48，PL－６）

土製品としたのは土偶の２点である。47は脚部のみを遺存するが、48は体部下半～左脚を残す。47は全周する沈線のみで文様を付し、48は下腹部を軽く隆起させ刺突痕を付している。

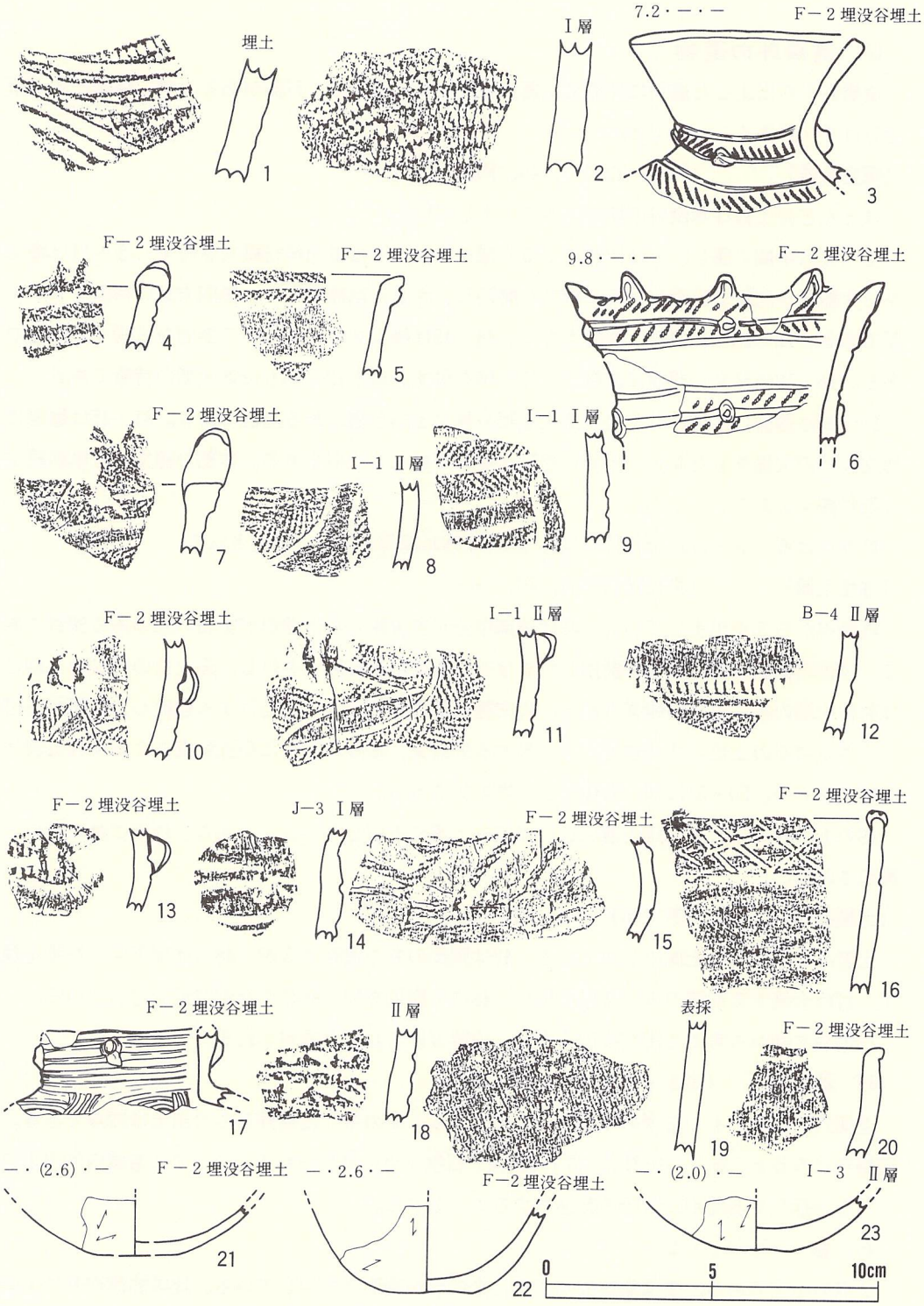
形態や文様から考えて縄文後期の末葉に位置づけられると推定される。

〔石　器〕　（第４・５図，PL－７～９）

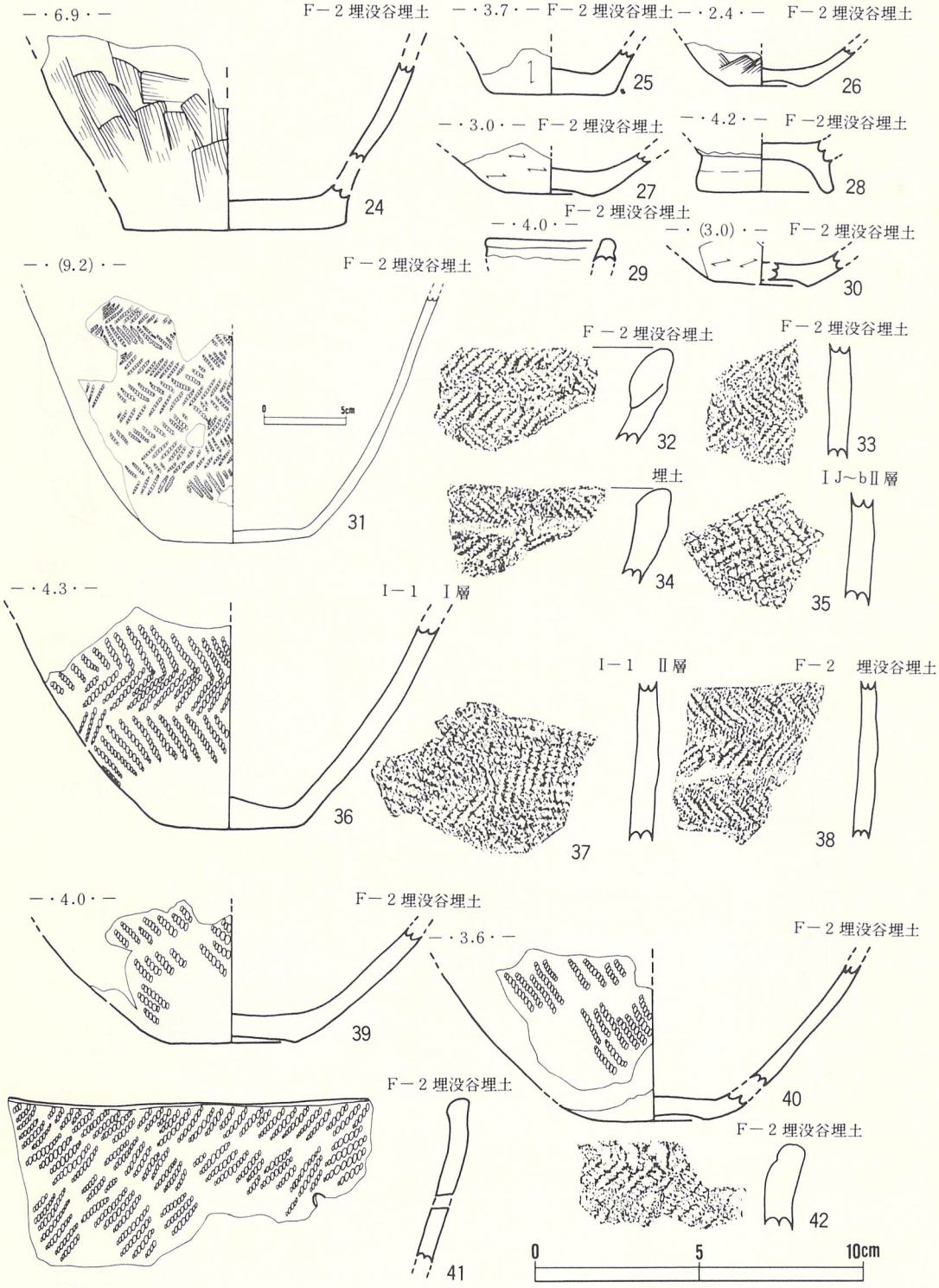
遺構内外出土のものを含めて28点の出土である。その中で遺構外からの出土は22点である。種類別にみると、剝片石器21点、礫石器6点、石核１点に分けられる。ここでは遺構内外出土のものを一括して器種別に若干の記述をすることとする。

石　鏃　（１・２）

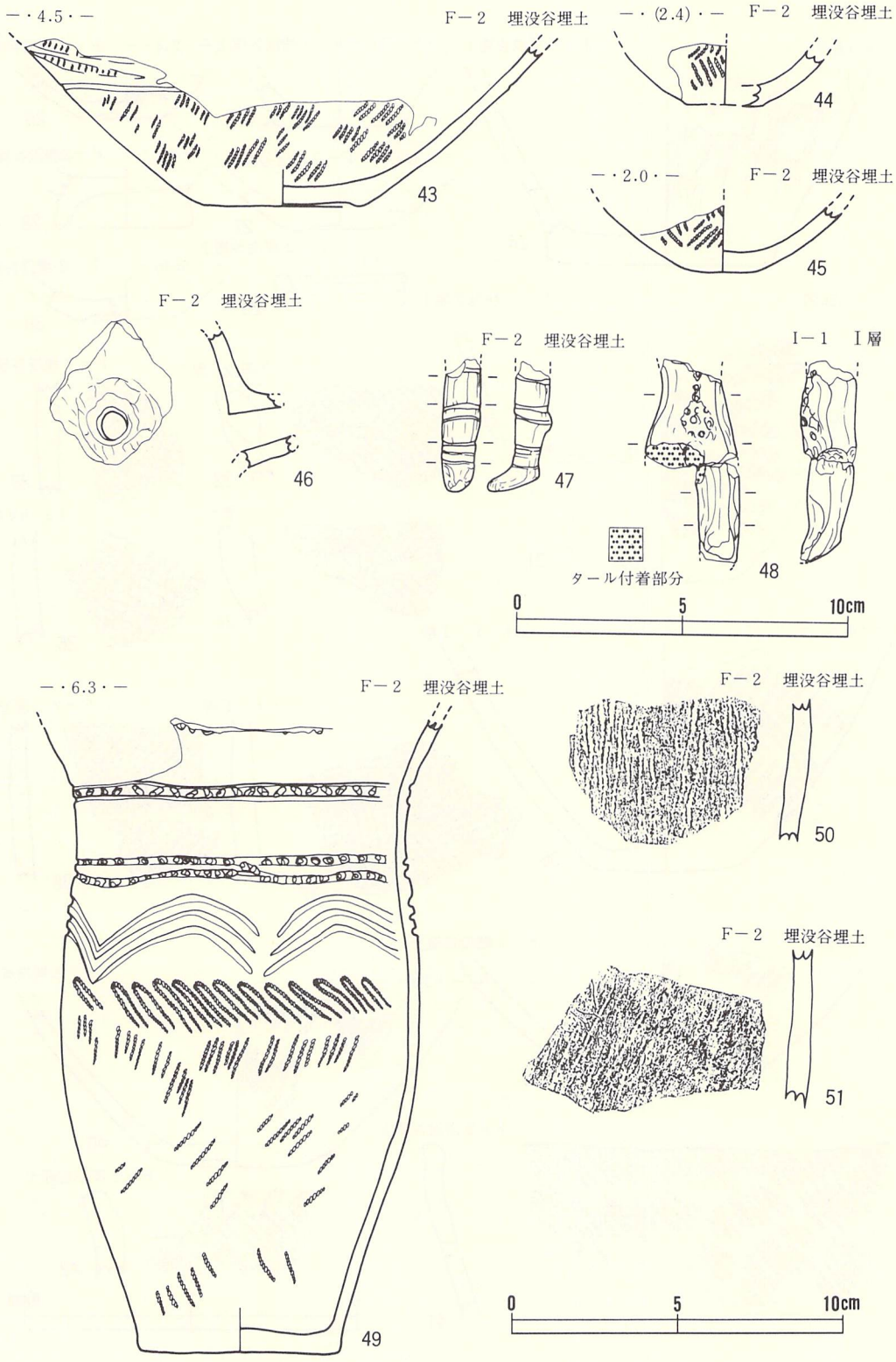
２点の出土である。１は無茎突基型で、全体形が菱形に近似している。比較的薄作りで尖端部は鈍角に作り出され、左右非対称形である。大きさは長さ1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm、重さ



第10図　遺構外の遺物（1）



第11図　遺構外の遺物（2）



第12図　遺構外の遺物（3）

1.4gである。2は茎部と先端部を欠失するが、やや細目に作られた有茎型である。ほぼ左右対称となる器形で、1同様薄作りである。大きさは長さ2.9cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.2gである。いずれも側縁部・茎部が表裏両面からの入念な剝離によって作られる。石材は2点とも北上山地古生界産のチャートである。

石　錐　　（3）

1点の出土で、細長い柳葉形に近い平面形をもつ。長さ3.7cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm、重さ1.3gの大きさである。断面が菱形に近く、側縁の剝離調整は規則的かつ細密である。尖端部に磨滅痕を残している。石材は北上山地古生界産のチャートである。

掻　器　　（4～12）

9点の出土である。いずれも側縁から下縁を使用刃部としている。ほとんど裏面から表面への片面剝離であるが、一部6・7・9・10に表面から裏面へ簡単な剝離を施す例もある。平面的な形状には縦長のもの4・5・8、ズングリムックリの6・7・9～12があり、9は長方形気味である。大きさをみると、最大の4が長さ9.1cm、幅3.7cm、厚さ1.1cm、重さ60gあり、最も小さい11が長さ1.8cm、幅1.2cm、厚さ0.2cm、重さ0.45gまでみられ、バラツキが大きい。石材は奥羽山地新第三系中心統産の珪質泥岩、流紋岩質極細粒凝灰岩、凝灰質珪質泥岩、北上山地古生界産のチャート、粘板岩が使用されている。

削　器　　（13・17）

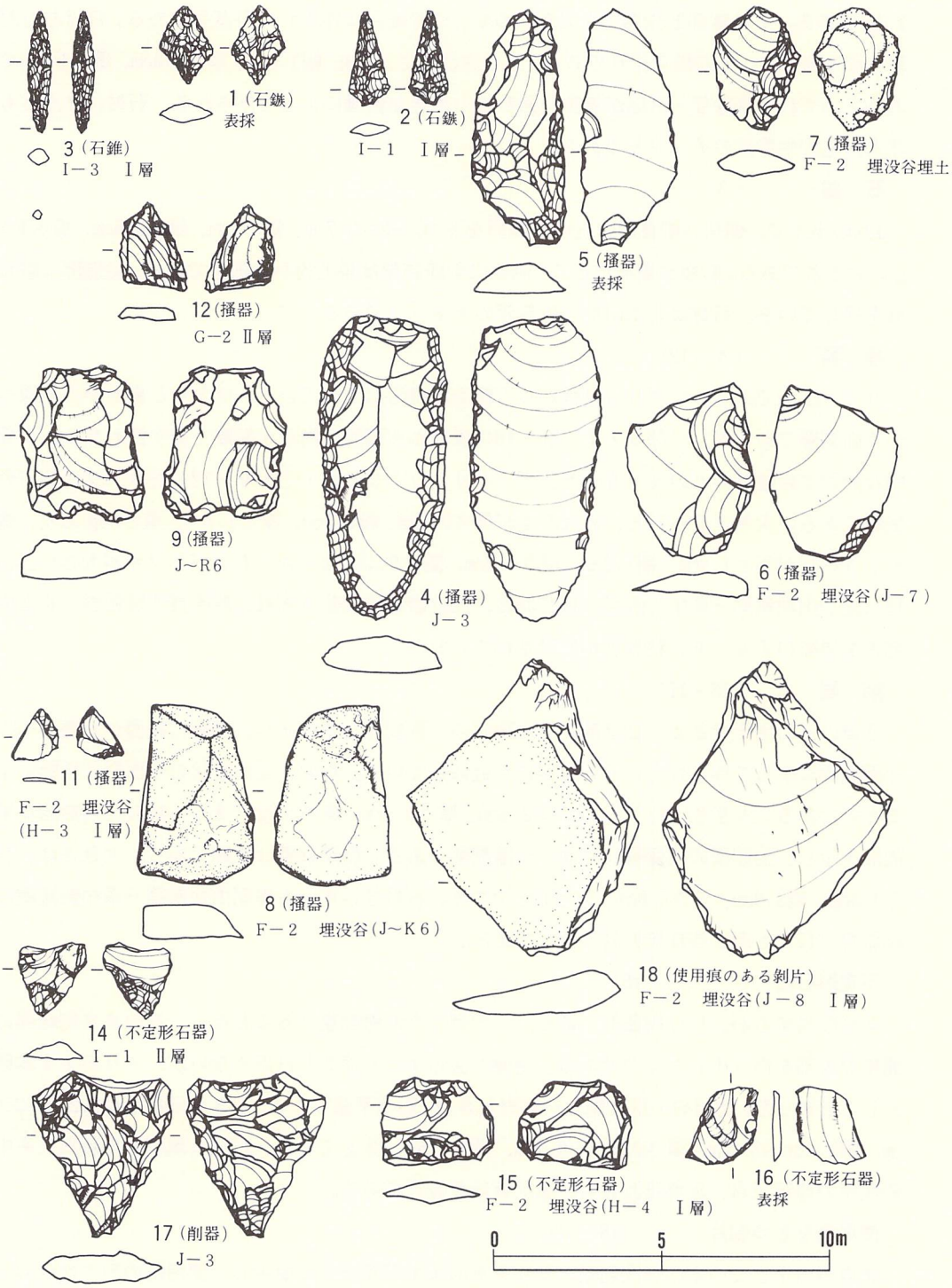
2点のみの出土である。13は薄い三角形状の小型剝片を素材とし、側縁に裏面から表面への片面剝離によって作られている。掻器にも近似している。なお、三角形状の平面形は折断によるものである。大きさは長さ2.2cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm、重さ2.0gである。17も三角形的な平面形を示し、尖端部の両側縁に片面の剝離調整がある。剝離調整は粗雑である。大きさは、長さ4.6cm、幅3.6cm、厚さ0.8cm、重さ19gである。石材はいずれも奥羽山地新第三系中新統産の松脂岩（17）と凝灰質珪質泥岩（13）である。

不定形石器　　（14～16）

3点該当するが、14は削器的である。一次剝片を形態調整することなく、そのまま側縁部に簡単な刃部を作り出したものである。定義が必らずしも適切とは思えないが、とりあえず本種として分類した。比較的小型の剝片が素材とされ、形は不整である。大きさは長さが2.2cm～2.6cm、幅2.0cm～3.3cm、厚さ0.3cm～0.4cm、重さ0.5g～2gであり、石材は奥羽山地新第三系中新統産の珪質泥岩、玻璃質流紋岩、凝灰質珪質泥岩である。

使用痕をもつ剝片　　（18～21）

4点が出土している。一次剝離の剝片をそのまま石器として使用し、使用時の刃こぼれのある剝片を本種とした。形状、大きさとも不揃いであり、18のように自然面をもつ場合もある。

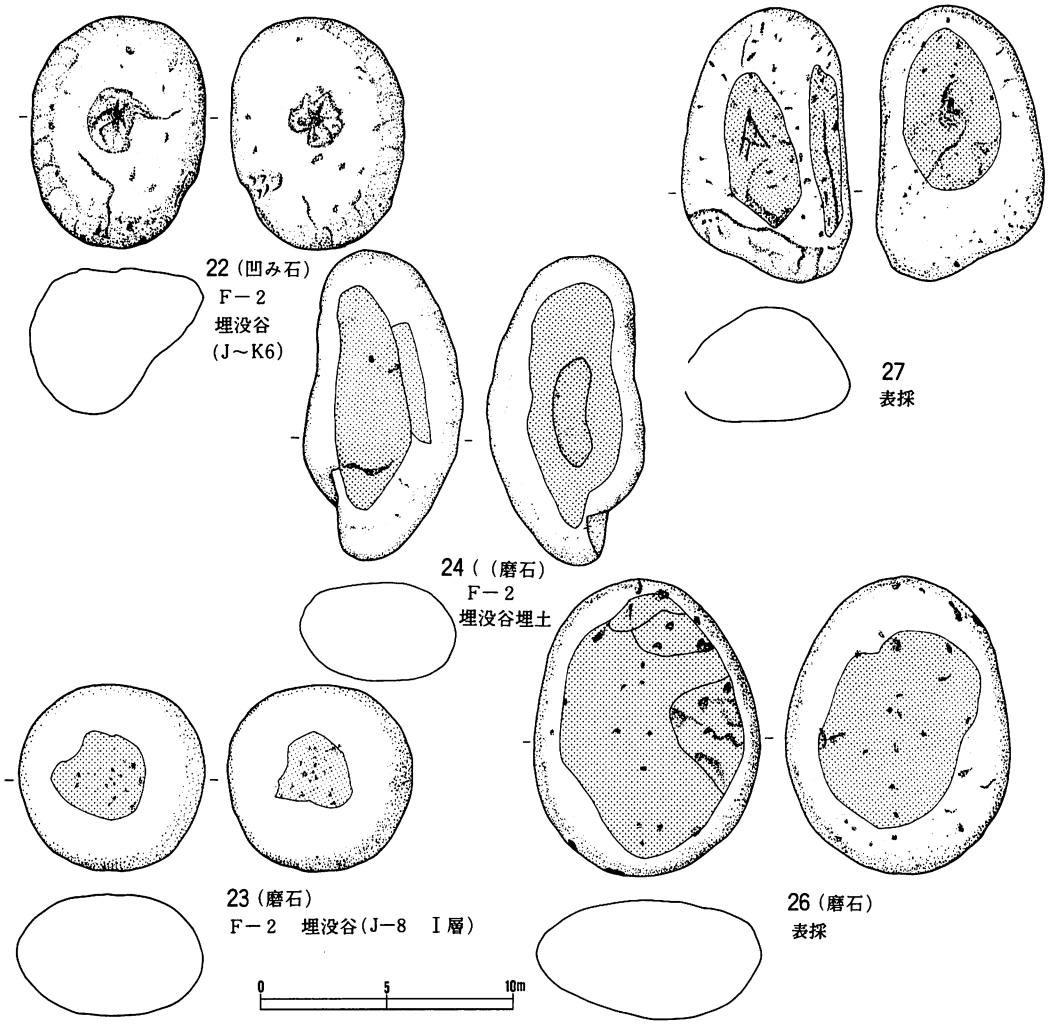


第13図　遺構外の遺物（4）

19は横長剝片の下縁に僅かな刃こぼれをもつ。大きさは、長さ3.3cm～8.9cm、幅2.9cm～6.7cm、厚さ0.9cm～1.3cm、重さ10g～100g で石材は奥羽山地新第三系中新統の凝灰質珪質泥岩、松脂岩と北上山地古生界産のチャートが使用されている。

凹み石　　(22)

1点の出土で、楕円形を示す河川礫の両面を凹み石として使用している。断面は不整である。大きさは長さ9.2cm、幅6.9cm、厚さ5.6cm、重さ465g、石材は奥羽山地新第三系中新統の両輝石安山岩である。



第14図　遺構外の遺物(5)

磨　石　　(23～27)

5点出土している。いずれも河川礫を素材とし、その両面に磨面をもち、一部（23・24・27）には凹みもある。形状には円形（23)、楕円形（25・26)、長円形（24・27）があり、断面形はいずれも扁平気味の楕円形である。大きさは不整で、長さが12.4cm～7.4cm、幅9cm～6.2cm、厚さ4.9cm～3.8cm、重さ840g～395gである。石材は、奥羽山地新第三系中新統産が輝石安山岩1点のみで、他は北上山地古生界産の輝石玢岩、角閃黒雲母花崗岩である。

石　核　　(28)

1点出土しているが、Ⅰ－3住居跡の項で詳述した。

石器類一覧表

No	遺構名 グリッド名	出土層位	器種	石質	石材産地	法量 全長	全幅	厚み	重さ
						cm	cm	cm	g
1	(表採)		石鏃	チャート	北上山地　古生界	1.9	1.8	0.5	1.4
2	(I－1)	Ⅰ層	〃	〃	〃	2.9	1.4	0.4	1.2
3	(I－3)	〃	石錐	〃	〃	3.7	0.8	A0.3 B0.5	1.3
4	(J－3)		掻器	珪質泥岩	奥羽山地　新第三系、中新統	9.1	3.7	1.1	60.0
5	(表採)		〃	チャート	北上山地　古生界	7.0	2.8	0.9	20.0
6	F－2埋没谷 (J－7)		〃	流紋岩質、極細粒凝灰岩	奥羽山地　新第三系、中新統	4.9	3.7	0.6	20.0
7	F－2埋没谷		〃	チャート	北上山地、古生界	3.7	2.4	0.8	10.0
8	J－K6		〃	粘板岩	〃	5.5	3.1	1.0	29.0
9	J－R6		〃	流紋岩質、極細粒凝灰岩	奥羽山地　新第三系、中新統	4.2	3.4	1.1	30.0
10	Ⅰ－3住	床面	〃	珪質泥岩	〃	4.3	3.1	0.9	21.0
11	H－3	Ⅰ層	〃	凝灰質珪質泥岩	〃	1.8	1.2	0.2	0.45
12	G－2	Ⅱ層	〃	チャート	北上山地、古生界	2.4	1.8	0.3	0.5
13	Ⅰ－3住	Ⅰ層床面	削器	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地　新第三系、中新統	2.2	2.3	0.3	2.0
14	Ⅰ－1	Ⅱ層	不定形石器	珪質泥岩	〃	2.2	2.0	0.3	0.5
15	H－4	Ⅰ層	〃	玻璃質流紋岩	〃	2.6	3.3	0.4	0.7
16	表採		〃	凝灰質珪質泥岩	〃	2.2	1.8	0.2	1.3
17	J－3		削器	松脂岩	奥羽山地、中新統	4.6	3.6	0.8	19.0
18	J－8	Ⅰ層	使用痕ある剝片	チャート	北上山地、古生界	8.9	6.7	1.3	100.0
19	Ⅰ－3住	Ⅰ層土面	〃	〃	〃	3.3	2.0	0.9	10.0
20	Ⅰ－2住E	Ⅰ層埋土	〃	凝灰質珪質泥岩	奥羽山地　新第三系、中新統	4.7	2.9	0.5	10.0
21	〃 W	埋土	〃	松脂岩	奥羽山地　中新統	3.8	4.0	1.1	10.0
22	J－K6	沢	凹石	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系、中新統	9.2	6.9	5.6	465.0
23	J－8	Ⅰ層	磨石	輝石玢岩	北上山地　古生界	7.4	7.4	4.9	395.0
24			〃	角閃黒雲母花崗岩	〃	12.4	6.2	3.8	500.0
25	Ⅰ－3住	床　No.2	〃	〃	〃	9.1	6.6	4.6	420.0
26	表採		磨石	角閃黒雲母花崗岩	北上山地、中生界	11.9	9.0	4.8	840.0
27	表採		〃	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系、中新統	10.7	6.6	4.5	490.0
28	Ⅰ－3住NW	埋土	石核	松脂岩	奥羽山地　中新統	5.3	3.9	2.7	60.0

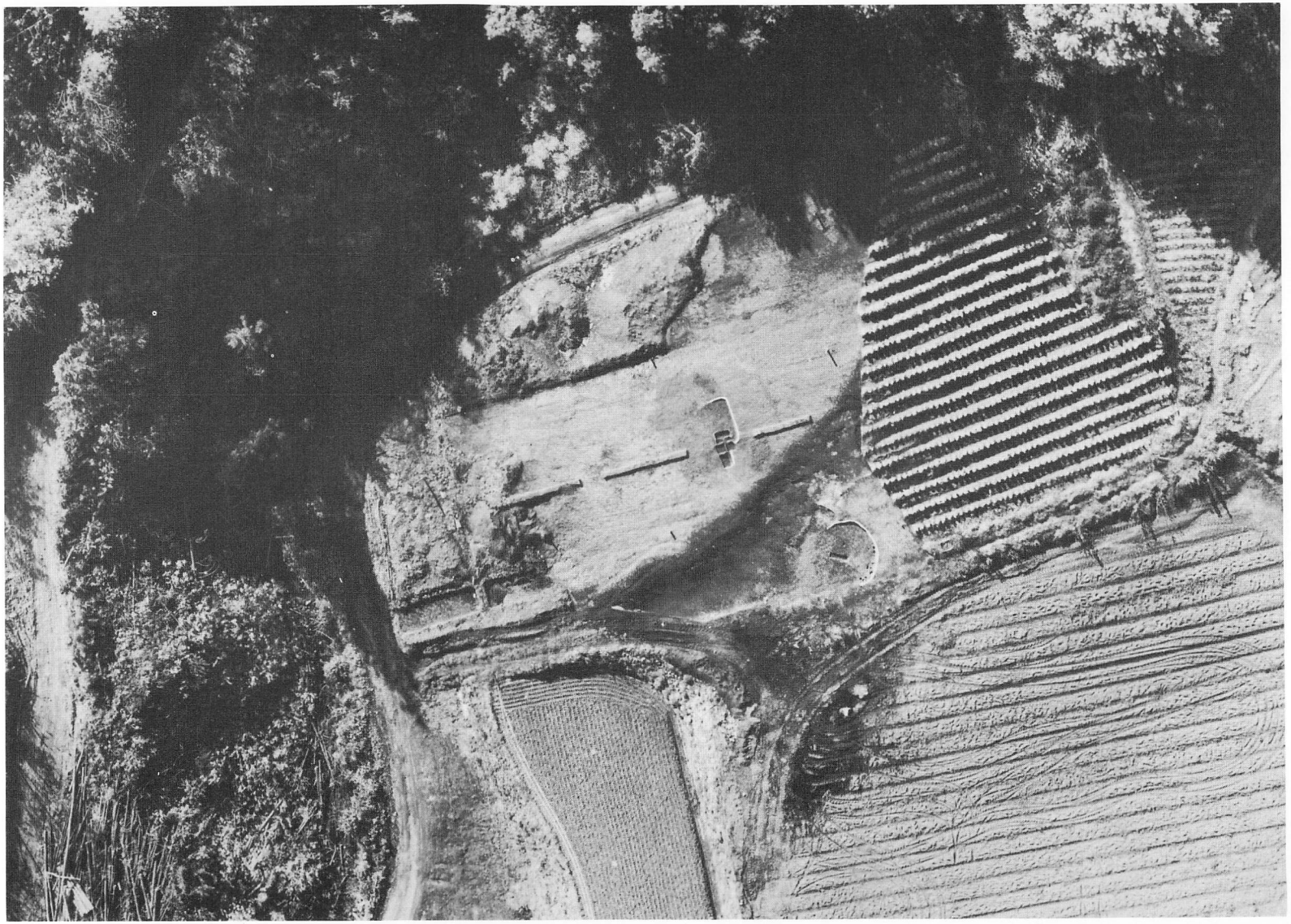
4．ま　と　め

発掘調査の結果、縄文時代後期末葉と平安時代に属する竪穴住居跡各１棟と、量は多くないがそれに伴う縄文土器と土師器、そして僅かの弥生土器が出土した。このことは、本遺跡はこれらの時代の集落としての性格をもつ遺跡であることが明らかとなった。また、遺構ではないが、縄文土器を包蔵する古い沢跡があり、古代には未だ窪地状であったことも判明した。

本遺跡から出土した縄文土器は中期と後期に限定され、弥生土器も終末のものだけであり、土師器も平安時代のものだけであることから、時代が断続する集落と推定される。さらにまた、これらの遺物が西方に広がる畑地に広く分布し、遺跡の範囲が隣接する調査範囲外に広がることが確実であり、むしろ、遺跡の中心部は範囲外の畑地部分と考えるのが妥当であろう。

以上のことから、八木沢の上流150m に位置する堀切遺跡の所属時期とは時期を異にしている。

写　真　図　版

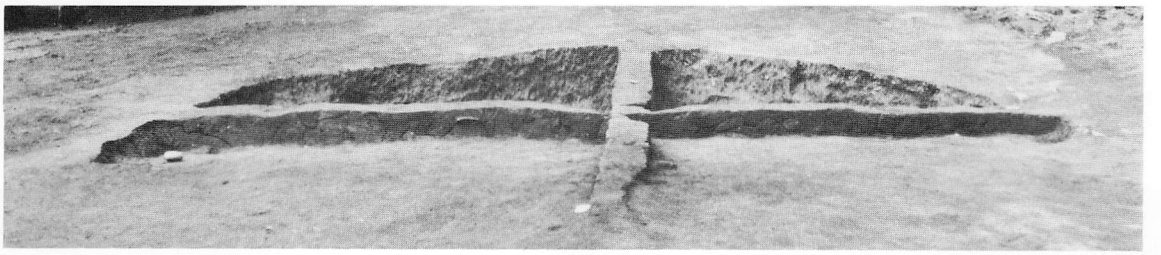


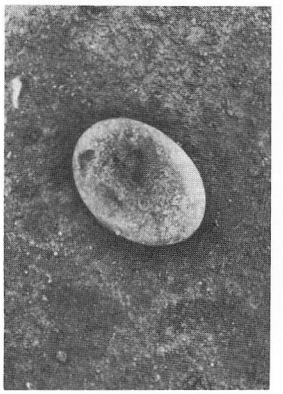
ＰＬ－１　調査後の全景（空中から）

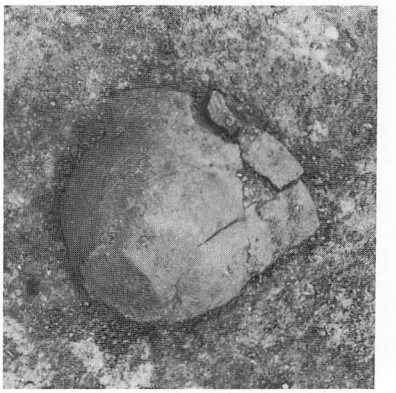
A　調査前の近景

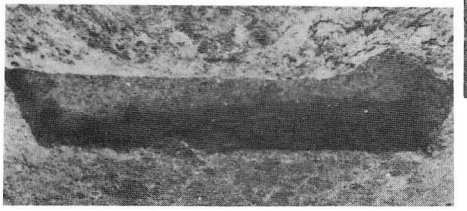
B　調査後の近景

ＰＬ－２　調査前・後の近景

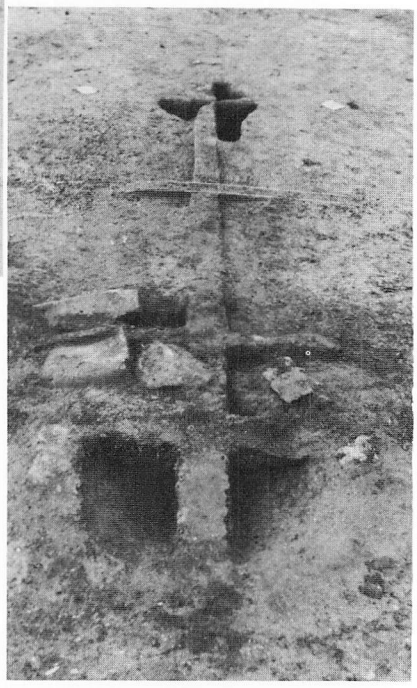




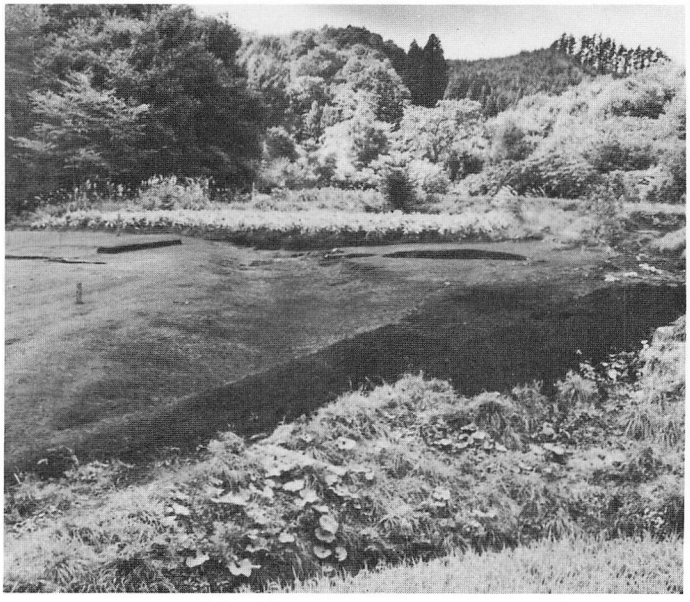


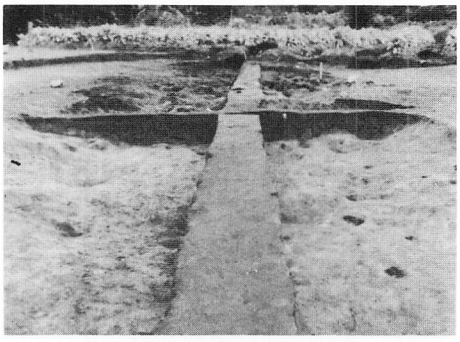


ＰＬ－３　Ｉ－３住居跡



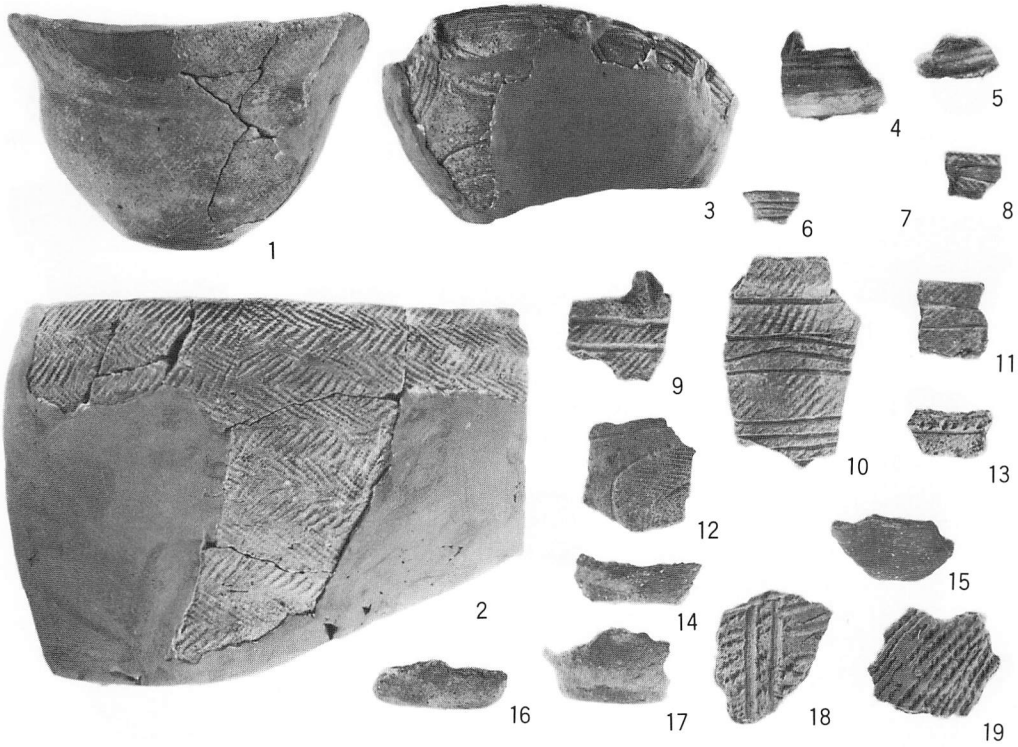
Ｆ－５住居跡



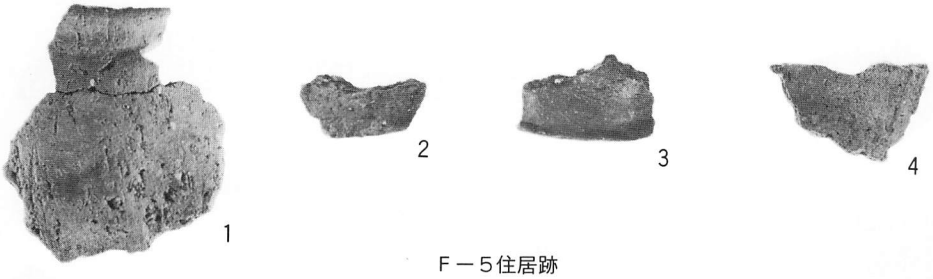


Ｆ－２埋没谷

ＰＬ－４　Ｆ－５住居跡とＦ－２埋没谷



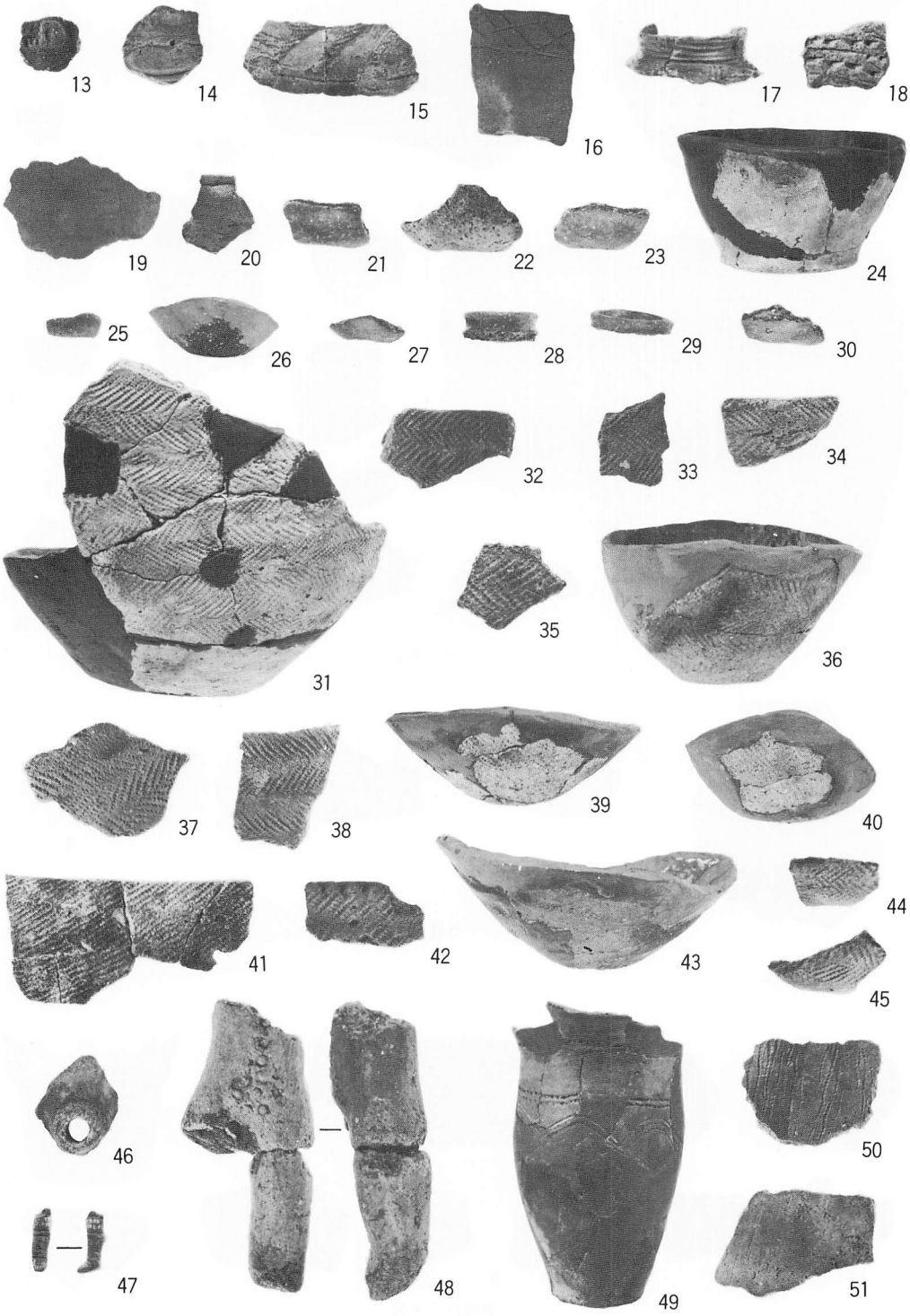
Ｉ－３住居跡



Ｆ－５住居跡

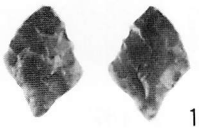
遺構外の土器

ＰＬ－５　出土遺物（土器－１）



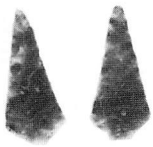
遺構外の土器・土製品

ＰＬ－６　出土遺物（土器－２・土製品）



1

表採（石鏃）

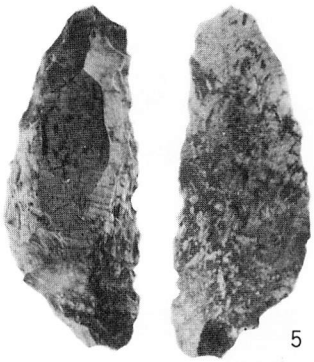


2

I—1・Ⅰ層（石鏃）

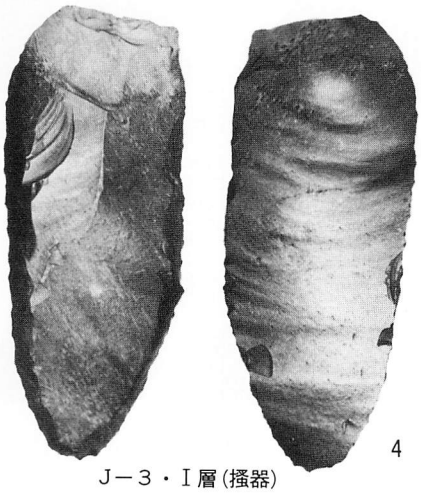
3

I—3・Ⅰ層（石鏃）



5

F—2埋没谷（掻器）

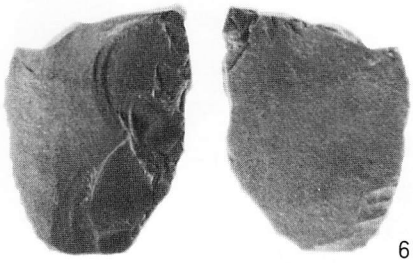


4

J—3・Ⅰ層（掻器）

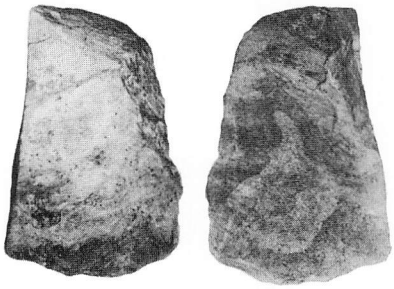
7

F—2埋没谷（掻器）



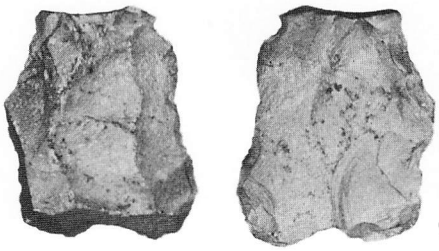
6

F—2埋没谷（掻器）



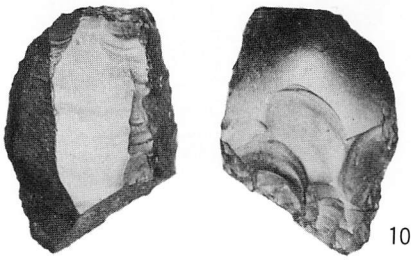
8

F—2埋没谷（掻器）



9

J—1～R6（掻器）



10

I—3住床面（掻器）

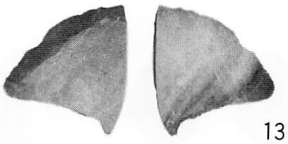
PL—7　出土遺物（石器—1）

11

F－２埋没谷（掻器）

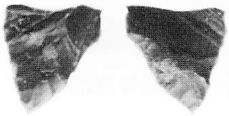
12

F－２埋没谷（掻器）



13

I－３・Ⅰ層（削器）



14

I－1・Ⅱ層（不定形石器）

15

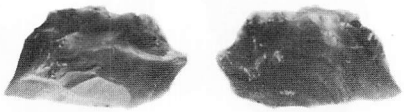
F－２埋没谷（不定形石器）

16

F－２埋没谷（不定形石器）

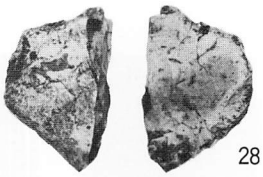
17

J－３（使用痕ある剝片）



19

I－３住埋土（使用痕ある剝片）



28

I－３住埋土（石核）

18

F－２埋没谷（使用痕ある剝片）

ＰＬ－８　出土遺物（石器－２）

22

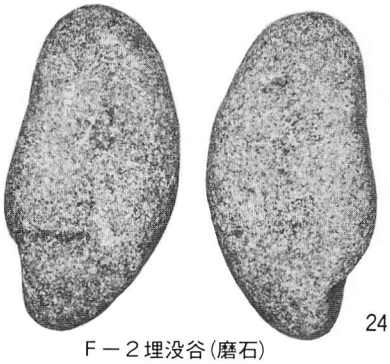
F－２埋没谷（凹み石）

23

F－２埋没谷（磨石）

25

I－３住床面（磨石）



24

F－２埋没谷（磨石）

26

表採（磨石）

27

表採（磨石）

ＰＬ－９　出土遺物（石器－３）

V. む　す　び

昭和60年度に東北縦貫自動車道建設に関連して発掘調査した堀切遺跡と竹林遺跡の、調査結果とその概要について記載した。所載の両遺跡は立地条件・面積的にも必らずしも好条件とは言えない馬淵川左岸の支流八木沢沿いに立地する遺跡であり、当一戸町内での調査例としても左岸部の調査は初めてであり、その結果には若干の期待と注目があった。調査の結果、堀切遺跡では縄文後・晩期、竹林遺跡は縄文後期と平安時代の集落を中心とする遺跡であることが明らかとなったが、両遺跡間には若干時間的なズレが見受けられ、完全な同時存在とは考えられない。出土した土器の所属時期をみると堀切遺跡の場合は縄文早期（前葉•後期）、中期（円筒式土器系前葉、大木式土器系中葉）、後期（前葉・中葉・後葉）、晩期（中葉）に属する縄文土器、他に弥生土器（前葉、後期、末葉）土師器（奈良・平安）等があり、遺構は縄文時代に属するものではあったが、遺跡としてみた場合には息の長い人間の生活跡をそこから読みとることができる。一方、竹林遺跡の場合は、調査範囲が小面積で縁辺部に位置するものの、縄文中期（円筒式土器・大木式土器の両特徴をもつ）、後期（末葉）、弥生時代は終末期、土師器は平安時代のみと、非常に限られた短期間の集落であるという特徴がある。この違いが何に起因するのかは定かにし難いが、少なくとも竹林遺跡の場合は集落立地としてはあまり好適地とみなされていなかったことは事実であろう。

いずれにしても、一戸町の馬淵川左岸に立地する遺跡の調査例として、貴重な資料を提供したことになり、今後に資するものが大であると考えられる。

最後に、本遺跡の発掘調査にあたり、日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、一戸町教育委員会の諸機関をはじめ、高田和徳氏からは多大なご援助とご指導をたまわった。ここに記し深甚なる感謝の意を表する。また、整理段階にあたっては、火山灰の分析を快諾して頂き、報告をご執筆頂いた奈良教育大学の三辻利一教授に対し、深く心からの感謝を申し上げたい。

また、夏期の暑い最中に現地調査に従事しご協力を頂いた沢内市郎氏をはじめとする地元一戸町の方々20余名、室内整理にあっては当センターの整理作業員４名の方々より多大のご協力を頂いた。併せて厚くお礼を申し上げる。

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	及川昌二
副所長	宮英一

［管理課］

課長	千葉久夫
課長補佐	阿部詔夫
主事	立花多加志
運転技士兼技能員	佐藤春男

［調査課］

課長	昆野靖		
主任文化財専門調査員	工藤利幸		
〃	高橋与右ェ門		
文化財専門調査員	菊池利和	文化財専門調査員	光井文行
〃	渡辺洋一	〃	玉川英喜
〃	田鎖寿夫	〃	石川長喜
〃	佐々木嘉直	〃	中川重紀
〃	平井進	〃	高橋義介
〃	中村良一	〃	酒井宗孝
〃	田村壮一		

［資料課］

課長	名須川溢男
主任文化財専門調査員	三浦謙一
文化財専門調査員	佐々木清文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第107集

堀切・竹林遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

印刷　昭和61年7月25日
発行　昭和61年7月30日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　岩手県紫波郡都南村大字下飯岡11—185
TEL　(0196) 38—9001
印　刷　山口北州印刷株式会社
〒020-01　盛岡市青山四丁目10—5
TEL　(0196) 41—0585

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1986